多賀城市文化財調査報告書第 138 集

多賀城市内の遺跡 2

－平成 29 年度ほか発掘調査報告書－

山 王 遺 跡
新 田 遺 跡
西 沢 遺 跡
市川橋遺跡
高 崎 遺 跡
大日北遺跡
志 引 遺 跡

平成 30 年 3 月

多賀城市教育委員会

序　文

多賀城市内には特別史跡多賀城跡附寺跡や、多くの埋蔵文化財包蔵地が所在し、それらは市域の約４分の１にも及んでおります。これら貴重な文化財を後世に伝えていくことは我々の重要な責務であり、当教育委員会としても開発事業との円滑な調整を図りつつ、国民共有の財産である埋蔵文化財を適切に保護し、活用に努めているところです。

本書は、平成２８年度と平成２９年度に国庫補助事業として実施した個人住宅建設等に伴う２８件の発掘調査成果を収録したものです。その中で、山王遺跡では、多賀城南面に広がる平安時代のまち並みの一角を調査して道路跡などを確認し、遺跡の南端に位置する調査では、宅地を細分するとみられる南北溝跡を発見し、まち並みの区割りの実態を知る成果となりました。また、志引遺跡では、本遺跡において初めて古代の竪穴住居跡を発見し、これまで不明だった遺跡の内容を知る手がかりを得ることができました。

いずれの調査も、規模としては大きなものではありませんが、これらひとつひとつの成果を積み重ねていくことが、当市の新たな歴史の解明につながるものと確信しております。

最後になりましたが、発掘調査に際し、御理解と御協力をいただきました地権者の皆様をはじめ関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

平成３０年３月

多賀城市教育委員会

教育長　小畑　幸彦

例　　言

1　本書は、国庫補助事業による平成28年度に実施した発掘調査５件と、平成29年度に実施した発掘調査23件の成果をまとめたものである。

2　遺構の名称は、各遺跡とも第１次調査からの通し番号である。

3　平成14年４月１日の測量法の改正に従い、本書では経緯度の基準を世界測地系で表示している。また、本書で報告している調査では、平成23年３月11日の東日本大震災以降に測量した座標を用いているが、震災以前の座標値と整合させるために、再測量の成果に基づき、震災以前に行った調査については東に約３ｍ、南に約１ｍの補正をかけている。なお、図版中の世界測地系数値における小数点以下を省略して表示しているが、有効数字は小数点以下３桁である。

4　挿図中の高さは、標高値を示している。

5　土色は、『新版標準土色帖』（小山・竹原：1996）を参考にした。

6　執筆担当は、下記のとおりである。図版作成等は各執筆担当者と遺物整理員が行った。また、遺物の写真撮影は村松稔・小原駿平・早坂優子が担当した。本書の編集は村松稔が行った。

Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ・Ⅻ・ⅩⅧ・ⅩⅨ：村松稔　　Ⅱ・Ⅶ・ⅩⅣ･ⅩⅤ：畠山未津留　　Ⅳ・Ⅵ・Ⅷ・ⅩⅢ：小原駿平　　ⅩⅥ・ⅩⅦ：石川俊英

7　附章の「市川橋遺跡第94次調査出土の漆紙文書」の一部については、東北大学大学院文学研究科日本史研究室助教の鈴木琢郎氏に執筆を依頼した。

8　調査に関する諸記録及び出土遺物は、すべて多賀城市教育委員会が保管している。

目　　次

Ⅰ　遺跡の地理的・歴史的環境…… 1
Ⅱ　山王遺跡第180次調査 …… 3
Ⅲ　山王遺跡第182次調査 …… 5
Ⅳ　山王遺跡第183 ～ 185・192次調査…… 8
Ⅴ　山王遺跡第187 ～ 191次調査 ……34
Ⅵ　山王遺跡第195次調査 ……79
Ⅶ　新田遺跡第117次調査 ……83
Ⅷ　新田遺跡第120次調査 ……90
Ⅸ　新田遺跡第121次調査 ……91
Ⅹ　西沢遺跡第28次調査……92
ⅩⅠ　西沢遺跡第29次調査……93
ⅩⅡ　西沢遺跡第32 ～ 34次調査 ……96
ⅩⅢ　市川橋遺跡第95次調査……98
ⅩⅣ　八幡館跡第８次調査…… 115
ⅩⅤ　高崎遺跡第110次調査 …… 116
ⅩⅥ　高崎遺跡第111次調査 …… 117
ⅩⅦ　高崎遺跡第112次調査 …… 118
ⅩⅧ　大日北遺跡第５次調査…… 121
ⅩⅨ　志引遺跡第６次調査…… 122
附章　市川橋遺跡第94次調査出土の漆紙文書…一

調　査　要　項

1　調 査 主 体　　多賀城市教育委員会　　教育長　小畑幸彦

2　調 査 担 当　　多賀城市埋蔵文化財調査センター　　所　長　板橋秀徳

3　調査担当者　　多賀城市埋蔵文化財調査センター

主幹　武田健市　副主幹　村松稔　研究員　石川俊英　熊谷満

技師　畠山未津留　小原駿平　調査員　茂泉光雄

4　調査協力者　　八島貴道　八島浩子　伊藤修　鈴木経子　内海康二　玉井裕章　玉井優衣

スモリ工業株式会社　株式会社Natuca　三浦学　本宿欣巳　本宿裕子

株式会社GOUKE　阿部昭太　株式会社みつば　宮川卓也　宮川萌　金森悠

金森亜弥　西村恒平　芳賀元気　芳賀薫　小野寺直哉　渡邉翔平　渡邉高子

赤間真人　海老名勇助　海老名香織　株式会社アーネストワン

5　調査従事者　　相沢義雄　赤間悟　渥美静香　阿部純一　阿部信夫　板橋仁志　石徹白和人

上村博　氏家雅夫　内田節子　小川勝彦　奥山妙子　小野寺浩　糟川良谷

門脇公貴　菊地清喜　工藤敦子　工藤正好　小林伸行　小松まり　小松美樹

斎光也　齋藤義治　佐々木正範　佐藤衛　佐藤みゆき　佐藤良雄　須田英敏

髙橋由美子　武田進　戸枝瑞恵　中込弘美　中島弘　濱田茂樹　平塚武慶

福原寛　藤田恵子　星芳子　幕田裕子　増子清治　松川謙二　山田理　山本耕文

横田律男　若生一彦　渡邊慶樹

6　整理従事者　　阿部麻衣子　内海美由紀　加藤京子　川名直子　佐藤ゆかり　滝野とし子

千葉都美　千葉貴久江　堀川紀子　宮城ひとみ　村上和惠

調査一覧

平成28年度

No.	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査担当者
1	市川橋遺跡第94次	城南二丁目５番13	平成28年10月27日～12月16日	26㎡	畠山
2	西沢遺跡第28次	市川字伊保石27番７	平成29年1月31日	４㎡	熊谷
3	西沢遺跡第29次	浮島字西沢90番地１他	平成29年１月30日～３月11日	370㎡	熊谷
4	山王遺跡第180次	南宮字町42番２、42番３	平成29年３月６日～３月25日	22㎡	村松 石川
5	新田遺跡第117次	新田字後11番13	平成29年２月28日～３月10日	30㎡	畠山

平成29年度

No.	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査担当者
6	山王遺跡第182次	山王字山王四区168番３	平成29年4月12日～4月19日	40㎡	村松
7	山王遺跡第183次	山王字山王一区11番９の一部	平成29年4月14日～5月17日	48㎡	小原
8	山王遺跡第184次	山王字山王一区11番14の一部	平成29年4月14日～5月17日	60㎡	小原
9	山王遺跡第185次	山王字山王一区11番２の一部	平成29年4月14日～5月17日	65㎡	小原
10	山王遺跡第187次	山王字山王四区89番８（区画№.９）	平成29年5月16日～8月4日	58㎡	村松
11	山王遺跡第188次	山王字山王四区89番７（区画№.10）	平成29年5月16日～8月4日	66㎡	村松
12	山王遺跡第189次	山王字山王四区89番６（区画№.11）	平成29年5月16日～8月4日	59㎡	村松
13	山王遺跡第190次	山王字山王四区89番５（区画№.12）	平成29年5月16日～8月4日	47㎡	村松
14	山王遺跡第191次	山王字山王四区89番４（区画№.13）	平成29年5月16日～8月4日	66㎡	村松
15	山王遺跡第192次	山王字山王一区11番15	平成29年5月12日～6月5日	68㎡	小原
16	山王遺跡第195次	山王字北寿福寺72番１の一部	平成29年12月11日～12月14日	52㎡	小原
17	市川橋遺跡第95次	市川字伏石地内	平成29年10月4日～11月21日	460㎡	小原
18	八幡館跡第８次	八幡二丁目225番１、225番５、226番４、661	平成29年6月13日～6月14日	210㎡	畠山
19	新田遺跡第120次	新田字堀西２０番１３	平成29年6月27日	73㎡	小原
20	新田遺跡第121次	新田字北155番３、156番２	平成29年10月12日～10月18日	66㎡	村松
21	高崎遺跡第110次	高崎一丁目53番、59番１、59番２、66番１	平成29年7月6日	9㎡	畠山
22	高崎遺跡第111次	留ヶ谷一丁目114番５	平成29年10月11日	12㎡	村松 石川
23	高崎遺跡第112次	高崎一丁目14番１	平成29年10月30日～11月6日	16㎡	村松 石川
24	大日北遺跡第５次	高橋四丁目１番１	平成29年8月7日	9㎡	村松
25	西沢遺跡第32次	浮島字沢前24番１の一部、26番１の一部、27番２の一部	平成29年9月1日	36㎡	村松
26	西沢遺跡第33次	浮島字沢前26番１、27番１の各一部	平成29年9月1日	9㎡	村松
27	西沢遺跡第34次	浮島字沢前26番１、27番１の各一部	平成29年9月1日	9㎡	村松
28	志引遺跡第６次	東田中二丁目410番３、410番４の一部	平成29年12月6日～12月20日	36㎡	村松

※番号は、第１図　調査地の位置に対応

凡　　例

1　本書で使用した遺構の略称は、次のとおりである。

ＳＡ：柱列跡　ＳＢ：掘立柱建物跡　　ＳＥ：井戸跡　　ＳＤ：溝跡　　ＳＫ：土壙

Ｐｉｔ：柱穴及び小穴　　ＳＸ：その他の遺構

2　奈良･平安時代の土器の分類記号は「市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ」（多賀城市教育委員会　2003）に従った。詳細は下記のとおりである。

（１）土師器坏

Ａ類：ロクロ調整を行わないもの

Ｂ類：ロクロ調整を行ったもの

ＢⅠ類：ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの

ＢⅡ類：ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの

ＢⅢ類：ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの

ＢⅣ類：ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの

ＢＶ類：ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

ＢⅠ・ＢⅡ類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをa、静止糸切りによるものをb、回転糸切り（糸切り）によるものをcとして細分する

（２）土師器甕

Ａ類：ロクロ調整を行わないもの

Ｂ類：ロクロ調整を行ったもの

（３）須恵器坏

Ⅰ類：ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの

Ⅱ類：ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの

Ⅲ類：ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの

Ⅳ類：ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの

Ⅴ類：ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

Ⅰ・Ⅱ類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをa、静止糸切りによるものをb、回転糸切り（糸切り）によるものをcとして細分する。

3　瓦の分類は「多賀城跡　政庁跡　図録編」（宮城県多賀城跡調査研究所　1980）、「多賀城跡　政庁跡　本文編」（宮城県多賀城跡調査研究所　1982）の分類基準に従った。

4　山王遺跡第189次調査で出土した井戸側材に転用した木材については、「木器集成図録　近畿古代編」（奈良国立文化財研究所　資料第27冊　1985）に基づき分類した。

5　本文中の「灰白色火山灰」の年代については、伐採年代が907年とされた秋田県払田柵跡外郭線Ｃ期存続中に降灰し、承平４年（934年）閏正月15日に焼失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907 ～ 934年の間とする考え（宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1997』1998）と、『扶桑略記』延喜15年（915年）７月13日条にある「出羽国言上雨灰高二寸諸郷桑枯損之由」の記事に結びつけ915年とする考えがある（町田洋「火山灰とテフラ」『日本第四紀地図』1987、阿子島功・壇原徹「東北地方、10Ｃ頃の降下火山灰について」『中山久夫教授退官記念地質学論文集』1991）。当市教育委員会では考古学的な見解を重視し、前者の年代観に従っている。

Ⅰ　遺跡の地理的・歴史的環境

多賀城市の地形は、中央部を北西から南東方向に貫流する砂押川を境に、東側の丘陵部と西側の沖積地に二分される。丘陵部は、松島・塩釜方面から延びる標高40～70mの低丘陵であり、南西に向かって枝状に派生している。沖積地と接する付近では、谷状の地形を形成しており、緩やかではあるが起伏に富んだ様相をみせる。沖積地は、仙台平野の北東部に相当する。仙台市岩切方面から東に向かう県道泉・塩釜線沿いには、標高５～６ｍの微高地が延びており、その北側には低湿地が広がっている。一方、南側には大小の微高地や低湿地、旧河道などがあり、海岸に近い場所では浜堤列も確認できる。

市内には、40を超える遺跡が所在している。西側の沖積地から丘陵部の西端にかけては、新田・山王・市川橋・高崎・西沢遺跡など市内でも有数の規模をもつ遺跡が隣接して分布している。これらの遺跡で発見された遺構や遺物には、陸奥国府が置かれた多賀城と密接に関わるものが多く認められ、この時期に限ってみれば一連の遺跡群と捉えることができる。一方、南東部には海岸線沿いの浜堤上に八幡沖遺跡、浜堤から丘陵にかけては大代貝塚や大代横穴墓群、柏木遺跡などが所在している。

新田遺跡は、標高５～６ｍの微高地に立地し、その範囲は東西約0.8㎞、南北約1.6㎞である。縄文時代から中世にかけての遺跡として知られているが、特に中世では大小の溝で区画されて屋敷跡が多数発見されている。このうち、寿福寺地区では12世紀後半から16世紀にかけて連続して屋敷群が形成されていたことが明らかとなり、出土遺物から上級武士の屋敷と考えられている。

市川橋遺跡は、標高２～３ｍの沖積地に立地し、その範囲は東西約1.4㎞、南北約1.6㎞である。多賀城跡南面の広い範囲を占めており、後述する山王遺跡と同様に古代の方格地割に基づくまち並みが形成されている。

山王遺跡は、標高３～４ｍの微高地に立地し、その範囲は東西約２㎞、南北約１㎞である。これまで弥生時代中期頃の水田跡や古墳時代中期～後期の集落跡、古代の方格地割、中世の屋敷跡などが発見されている。このうち、古代の方格地割は南北大路と東西大路の二つの幹線道路を基準とし、東西・南北の直線道路によっておよそ１町四方の区画を造成したものである。これによって形成されたまち並みからは、上級役人の邸宅や中・下級役人の住まいである建物跡や井戸跡などが多数発見されている。

高崎遺跡は、低丘陵の西端部に立地し、その範囲は東西約1.3㎞、南北約１㎞である。これまで、古墳時代から近世までの遺構・遺物が発見されている。古代では、多賀城廃寺跡の西側で約60軒の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、井戸跡などが発見されている。また、井戸尻地区では大量の灯明皿が一括廃棄された状況で発見され、周辺で万灯会のような仏教儀式が執り行われていたと考えられている。

八幡館跡は、標高６～13mの低丘陵に位置し、その範囲は東西約300m、南北約250mである。これまでの調査では、奈良・平安時代の竪穴住居跡、中世城館に伴う空堀や溝跡等を発見している。

大日北遺跡は、標高３ｍ前後の微高地に位置し、その範囲は東西約200m、南北約300mである。第１次調査では、近世墓を70基発見したほか、加瀬用排水路３号整備事業に伴い遺跡の北東側を調査したところ、古代の小溝群のほか９世紀代の土器埋設遺構を発見している。

志引遺跡は、標高20mほどの低丘陵の西端部に立地し、その範囲は東西、南北とも約100mである。古代の遺物が散布するほか、土壇状の高まりに三重塔を線刻した板碑が建てられている。

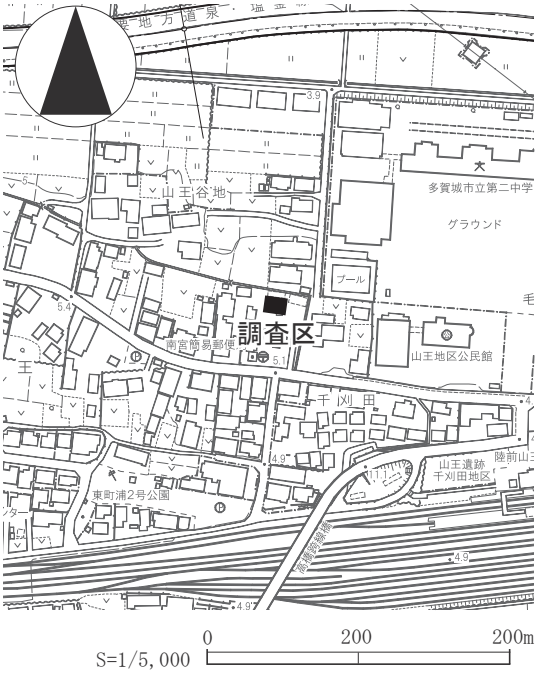
1：市川橋遺跡第94次調査　2：西沢遺跡第28次調査　3：西沢遺跡第29次調査　4：山王遺跡第180次調査
5：新田遺跡第117次調査　6：山王遺跡第182次調査　7：山王遺跡第183次調査　8：山王遺跡第184次調査
9：山王遺跡第185次調査　10：山王遺跡第187次調査　11：山王遺跡第188次調査　12：山王遺跡第189次調査
13：山王遺跡第190次調査　14：山王遺跡第191次調査　15：山王遺跡第192次調査　16：山王遺跡第195次調査
17：市川橋遺跡第95次調査　18：八幡館跡第8次調査　19：新田遺跡第120次次調査　20：新田遺跡第121次調査
21：高崎遺跡第110次調査　22：高崎遺跡第111次調査　23：高崎遺跡第112次調査　24：大日北遺跡第5次調査
25：西沢遺跡第32次調査　26：西沢遺跡第33次調査　27：西沢遺跡第34次調査　28：志引遺跡第6次調査

第１図　調査地点の位置

Ⅱ　山王遺跡第180次調査

１　調査に至る経緯と経過

本件は、南宮字町地内における共同住宅新築工事に伴う確認調査である。平成28年11月10日に、地権者より山王遺跡の北西部に位置する当該地での共同住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、住宅基礎部分に直径60 ～ 80㎝、深さ８ｍのパイルを計34本設置することから、遺跡への影響が懸念された。このため、基礎工法について盛土内で収まる工法への変更を協議したが、パイル工法以外方法では建物を支えるための地耐力が十分に得られないとの理由により、当初計画の基礎工法で施工するとの結論に至ったことから、宮城県文化財保護課の指示により確認調査を実施することで、あらかじめ遺構の密度を把握し、本発掘調査を行う際の資料を得ることとなった。。平成29年２月24日に地権者より調査に関する依頼書及び承諾書の提出を受け、３月６日より現地調査を開始した。



第１図　調査区位置図

はじめに重機による表土掘削を終了後、翌７日より遺構の発見作業に入った。調査区の南半部分には現代の撹乱が深く及んでおり、重機で除去できなかった撹乱部分については人力で行った。その結果、現地表から深さ約1.4ｍのⅢ層上面で複数の土壙とピットを発見した。３月16日に測量基準点の設置を行い、翌17日より図面作成を開始した。３月21日に調査区北壁の一部を掘り下げ、下層の状況を確認するとともに、断面図の作成を行った。３月23日に全景写真の撮影を行い、３月25日の撤収作業をもって確認調査の一切を終了した（註）。

２　調査成果

（１）層序

今回の調査では、現在の表土以下４層の堆積を確認した。

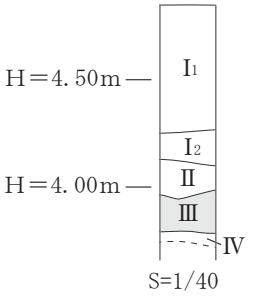
Ⅰ１層：現代の盛土層で、厚さは90㎝である。

Ⅰ２層：旧表土で、厚さ40㎝である。全体に微量の炭化物を含む堆積層である。

Ⅱ　層：ほぼ均質の暗褐色土で、厚さ20 ～ 40㎝である。古代の土器片を含む。

Ⅲ　層：黄褐色の均質な細砂土で､厚さ10 ～ 30㎝である。粘質土の部分もある。
　　本地区周辺部の基盤層で、本調査の遺構検出面である。

Ⅳ　層：黄灰色粘質土で、厚さは８㎝前後である。平坦で乱れがない。



第２図　土層柱状図

（２）発見した遺構

今回の調査では、Ⅲ層上面で土壙とピットを発見した。

〔Ⅲ層上面発見遺構〕

土壙群（第３・４図）

今回の調査では複数の土壙を確認している。規模は長軸で１ｍ前後、短軸

（註）本発掘調査は第181次調査として多賀城市文化財調査報告書第139集に収録している。

で60㎝前後の不整長方形、または同規模の不整楕円形のものがほとんどである。埋土もほぼ同様で、にぶい黄褐色の細砂で、灰色の細砂を混入するため色調は斑状を呈している。

遺構発見状況（西から）

３　まとめ

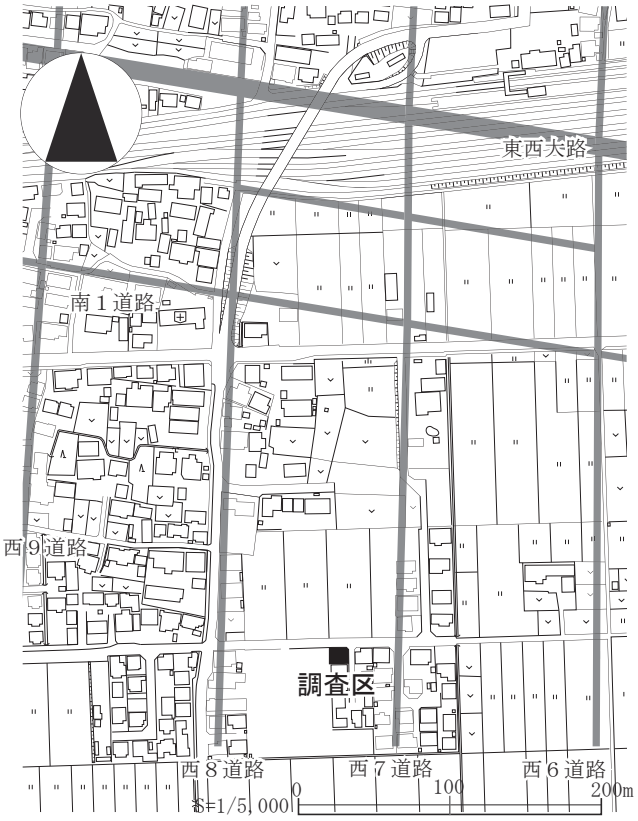
今回の調査では、基盤層となるⅢ層でピットと土壙を発見した。しかし現代の削平により、遺構の残存状況が極めて悪い。発見された遺構も、本来であればⅡ層で発見されるべき遺構も含まれている可能性がある。また、出土資料を伴わないため正確な遺構年代の特定はできないが、上面で古代の遺構検出面となる基盤層（Ⅲ層）で遺構を発見していることや、東側隣接地の第100次調査では本調査のⅡ層に対応する基盤層直上のⅣ層で灰白色火山灰粒を含む遺構が発見されていることから、今回発見された遺構の年代は、概ね古代の範疇に入るものと推察される。

第３図　Ⅲ層上面検出遺構平面図

Ⅲ　山王遺跡第182次調査

１　調査に至る経緯と経過

本件は、山王字山王四区地内における建売住宅建設に伴う確認調査である。平成29年３月７日、地権者より当該事業と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、住宅の基礎工事の際に、直径50㎝、長さ2.0ｍの杭状改良を33本打ち込むものであった。当該地の北側隣接地では、平成26年度に宅地造成計画伴い道路及び擁壁基礎部分の発掘調査（第142次調査）を実施している。その結果、現地表から1.3ｍ下で平安時代の道路跡をはじめ多くの遺構や遺物を発見していることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。



第１図　調査区位置図

このため、工法変更による遺跡を保存する協議を行ったが、提出された基礎工法以外では十分な地盤強度を得られないとのことから、宮城県文化財保護課の指示により当該地の遺跡の状況を確認するための確認調査を実施することとなった。４月４日、地権者から発掘調査に関する依頼書と承諾書の提出を受け、４月12日より現地調査を開始した。

はじめに、重機による住宅建築部分の表土の除去から取りかかったところ、現地表から約1.2ｍ下で、ＳＤ2462などの古代の遺構を発見した。重機による掘削と並行して安全柵の設置を行った。13日には作業員を動員し、遺構発見作業を行うとともに、発見した溝跡などの深さを探るために調査区の西側を深く掘り下げた。あわせて下層での遺構の有無を確認するため南側で深堀りを行ったところ、Ⅳ層の下で黒色粘土は確認したものの、畦畔などの遺構は確認できなかった。19日には写真撮影を行い、確認調査を終了した（註）。

２　調査成果

（１）層序

今回の調査で確認した層序は、以下のとおりである。（第３図）

Ⅰ層：現代の盛土（Ⅰ1層）と水田耕作土（Ⅰ2層）である。厚さはⅠ1層が約0.９～1.2ｍ、Ⅰ2層が12～18㎝である。

Ⅱ層：すべての遺構を覆っており、灰白色火山灰を部分的に含む黒色粘質土で厚さは９～14㎝である。

Ⅲ層：すべての古代の遺構を覆っており、ＳＤ2642の最上層となっている。灰白色火山灰と灰黄色砂を含む黄灰色粘質土で厚さは９～27㎝である。

Ⅳ層：古代の基盤層である。黄褐色粘土と黒褐色・オリーブ褐色砂の互層で厚さは27～58㎝である。

（註）本発掘調査は第186次調査として多賀城市文化財調査報告書第139集に収録している。

Ⅴ層：黄褐色粘質土と黄灰色粘質土が１～２㎝ずつ互層に堆積し、厚さは５～６㎝である。後述する古墳時代の水田層（Ⅶ層）が廃絶した後に堆積した自然堆積層とみられる。

Ⅵ層：古墳時代前期の水田耕作土層とみられる。黒色粘土で厚さは７～21㎝である。

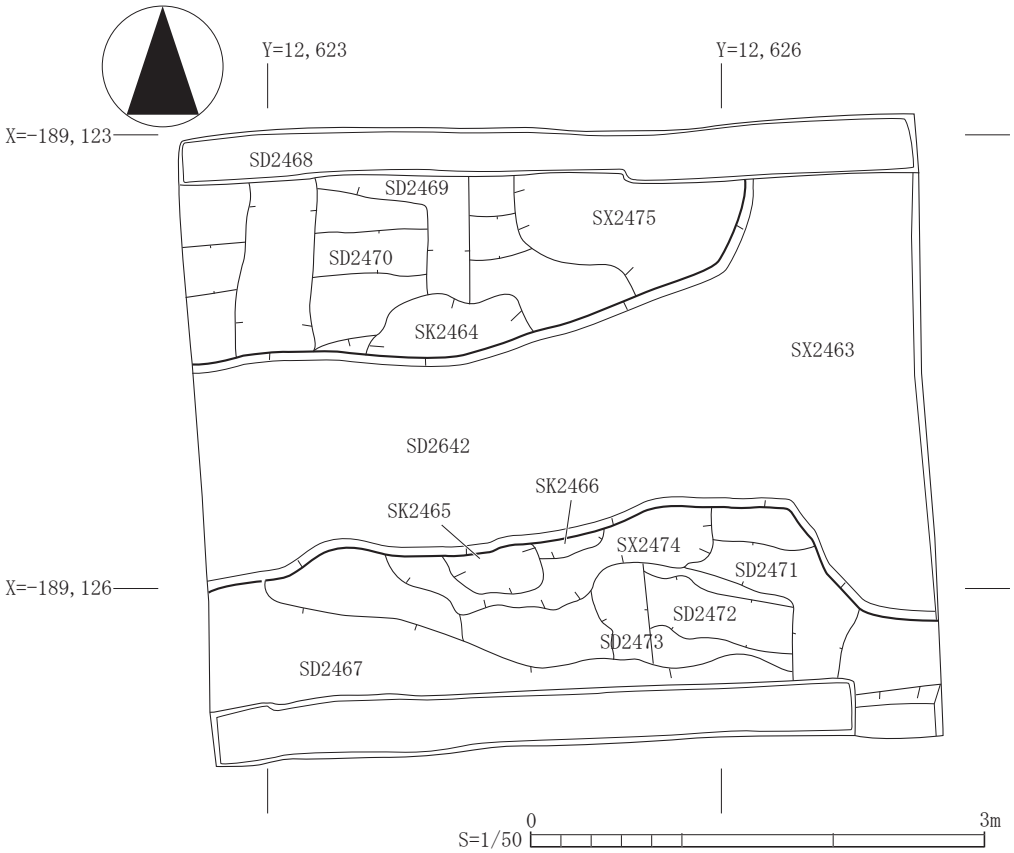
Ⅶ層：黄褐色砂である。

（２）発見した主な遺構と遺物（第２図）

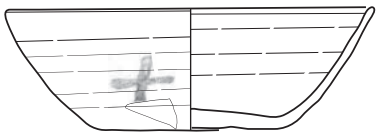
Ⅳ層上面で東西方向ＳＤ2462とそれに接続するＳＸ2463を発見したほか、土壙や多数の小溝跡を確認した。重複関係からＳＤ2462・ＳＸ2463が最も新しい。これらより古い小溝群は東西方向のものと南北方向のものがあり、南北方向のものが新しい。また調査区南側で発見したＳＤ2467の埋土中には灰白色火山灰を斑状に含んでいる。ＳＤ2462の規模は幅1.5m、ＳＸ2463は東西1.3m以上、南北3.5m以上である。遺物はＳＤ2462・ＳＸ2463から土師器坏（ＢＶ類）・甕（Ｂ類）、須恵器坏（Ｖ類）、須恵系土器坏が出土している。

３　まとめ

多賀城南面にひろがる方格地割のうち西７道路西側隣接地を調査し、灰白色火山灰降下後のの10世紀前葉以降につくられたＳＤ2462とそれと接続するＳＸ2463を発見したほか、土壙や小溝群を確認した。



第２図　遺構平面図

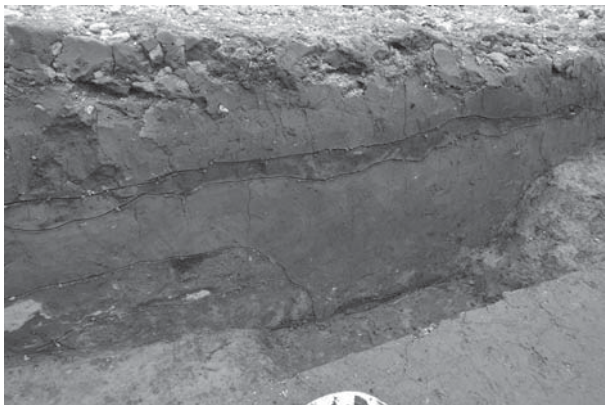


S=1/3 0 10cm （単位：cm）

番号	種類	遺構層位	特徴		口径残存率	底径残存率	器高	登録番号	備考
			外面	内面					
1	須恵器坏	1層	ロクロナデ 底部：回転糸切り、墨書「十」	ロクロナデ	(14.5) 15/24	6.8 24/24	4.8	R1	BV類

第３図　ＳＤ2642溝跡　出土遺物

遺構発見状況（西から）



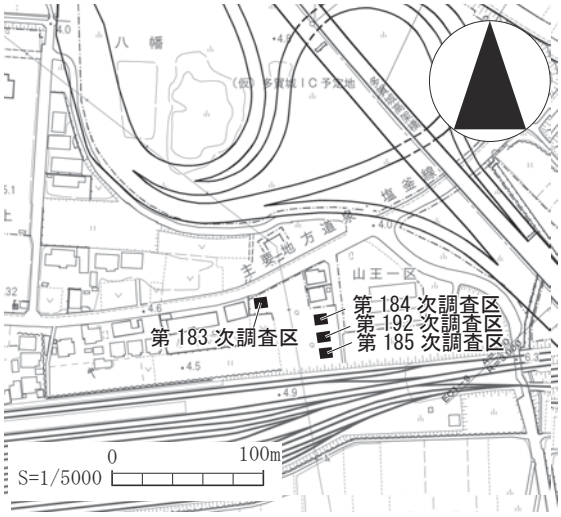
ＳＤ2642溝跡断面（南東から）

ＳＤ2642溝跡　須恵器坏（R1）

Ⅳ　山王遺跡第183 ～ 185・192次調査

１　調査に至る経緯と経過

本件は、山王字山王一区地内における４件の個人住宅新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。平成29年２月７日から３月３日にかけて、近接する３区画（第183 ～ 185次調査区）の各地権者から、その後４月26日に１区画（第192次調査区）の地権者から当該区における個人住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、住宅の基礎工事の際に直径60㎝、深さ6.5ｍの柱状改良を30 ～ 38本施すことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、工法変更によって遺跡を保存できないか協議を行ったが、提出された以外の工法では十分な地盤強度を得られないとのことから、宮城県文化財保護課の指示に基づき本発掘調査を実施することとなった。



第１図　調査区位置図

次数	調査年度	報告書
19次	平成４年度	市第19集
162次	平成28年度	未報告（復興）
183次	平成29年度	本書
184次	平成29年度	本書
185次	平成29年度	本書
192次	平成29年度	本書

表１　山王一区発掘調査一覧

重機による盛土・表土の除去については、第183次調査、第184次調査、第185次調査の順に行った。４月13日より掘削を開始し、同14日に完了した。

第１面の調査では、183次調査で複雑に重複する掘立柱建物跡、184次調査で調査区を東から北へ湾曲する溝跡、185次調査で小溝群・掘立柱建物跡を確認し、各調査区で密度高く遺構が分布している様子が確認された。このため、作業員を動員して３区画並行で遺構の精査・掘り下げを行った。

最南の第185次調査区において、Ⅲ層の掘削を行ったところ、上面でＳＸ2480を検出したⅢ層中よりSX2245河川跡が確認された。古代の遺構検出面の下層にそれ以前の遺構が存在する可能性が高くなったことから、調査期間の変更を余儀なくされた。調査に当たって各調査区で部分的に深く掘り下げ、下層遺構の有無を確認したところ、第185次調査区以外では下層遺構は発見できなかった。５月20日には第184・185次調査区の埋め戻しを行った。

第192次調査は過去の調査成果から、北１道路の推定位置にあたり、そのうち北側の道路側溝を発見するものと予想され、調査に時間を要することから、調査員を３名に増員し調査を実施した。Ⅲ層上面における平面及び断面図の作成及び写真撮影を行った後、Ⅲ層下層の調査を行ったが、第185次調査で発見したような下層での遺構は確認されなかった。その後６月５日に第183・192次調査区の埋め戻しを行い、現地調査の一切を終了した。

２　調査成果

(1) 層序

Ⅰ　層：現代の盛土層で、厚さは40 ～ 50㎝である。

Ⅱ　層：旧耕作土。褐灰色土で、厚さは６～ 18㎝である。

Ⅲ１層：にぶい黄橙色土で、厚さは 50 ～ 70cm である。この上面は古代の遺構検出面となっている。
Ⅲ２層：オリーブ灰細砂で、厚さは 20 ～ 30cm である。
Ⅳ　層：暗緑灰粗砂で、厚さは 30 ～ 35cm である。この上面でＳＸ 2245 を発見している。

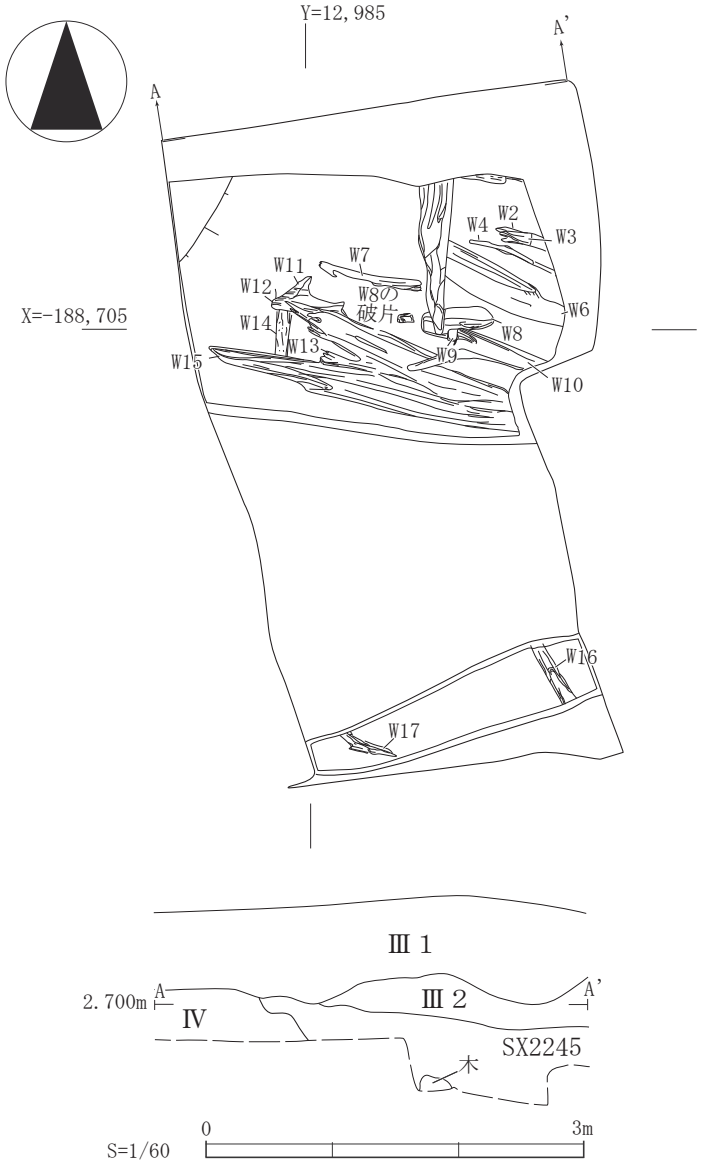
(2) 発見した遺構と遺物

〔Ⅳ層上面発見遺構〕

ＳＸ 2245 河川跡（第２図）

【位置】第 185 次調査区中央で発見した。流木や加工された木材が多数出土しており、調査区東西壁、北壁にのびているが、北側に隣接する第 192 次調査では確認できなかった。

【規模】詳細は不明であるが、調査区北西端で南西方向に延びる落ちを確認しており、東西３ｍ以上の規模である。



第２図　Ⅳ層上面検出遺構　平面図・断面図

【埋土】暗緑灰色の砂である。直径５㎜程度の粗砂を含む。
【遺物】未加工の自然木（Ｗ２、Ｗ10、Ｗ11、Ｗ13）のほか加工痕が認められる木材を確認している。Ｗ５は鐇等の工具による加工痕跡を明瞭に残しており、Ｗ15は北側の端部を人為的に切断している。

〔Ⅲ層上面発見遺構〕

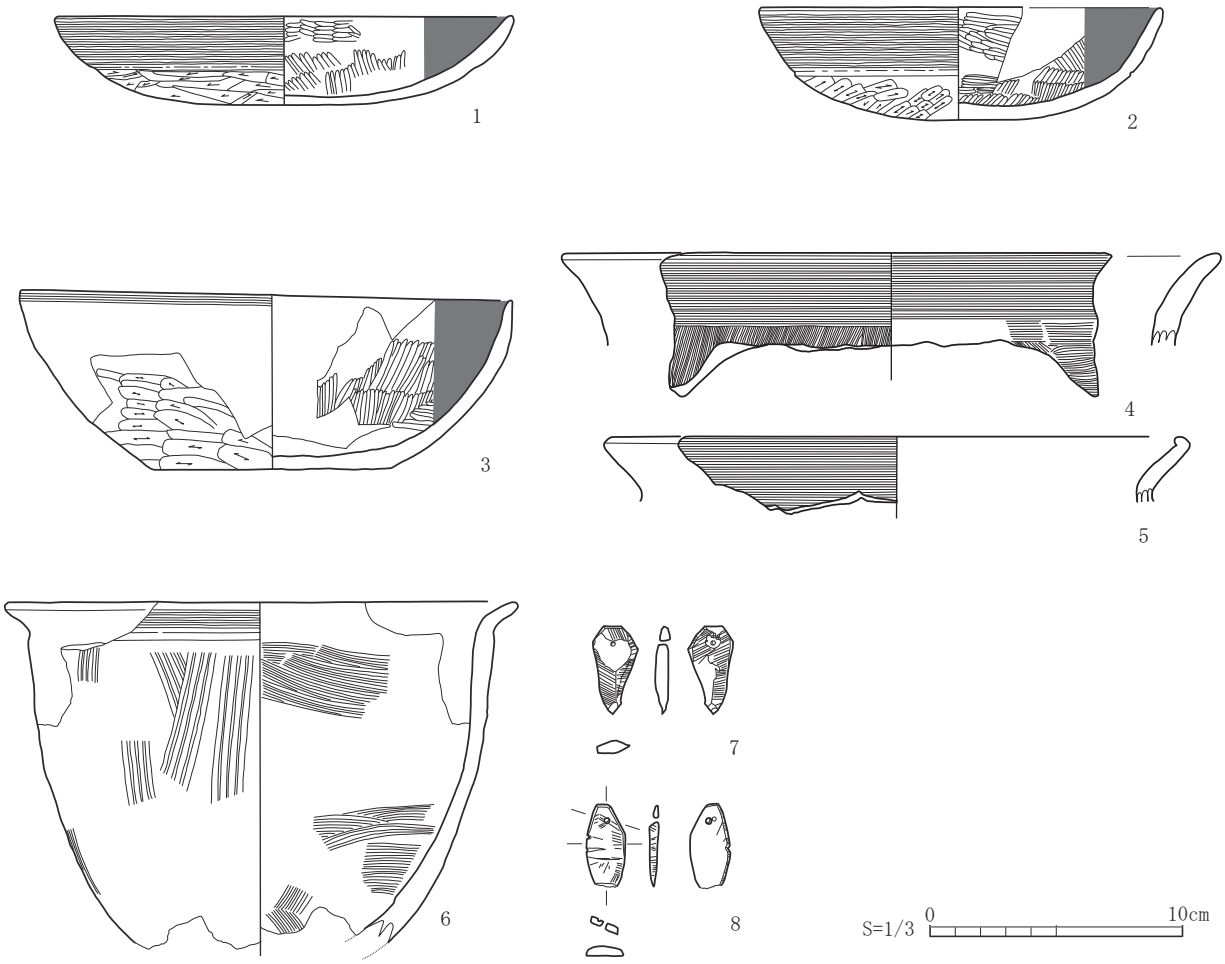
ＳＤ2241 溝跡（第４図）
【位置】第184次調査区の北半部で確認した溝跡である。
【重複】中央部で土壙と重複しており、これより新しい。
【方向・規模】東壁から西にのび、調査区内で大きく北に湾曲する。幅約1.8ｍ、検出面からの深さは約49cmである。
【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面は概ね平坦である。
【埋土】埋土は３層に分けられる。１層は黒褐色粘質土であり、締まっている。２層は褐灰色土であり、微量の酸化鉄を含んでおり、あまり締まっていない。３層は黄褐色土を斑状に含む黒色粘質土であり、締まっている。
【遺物】３層から土師器（Ａ類）が出土している（第３図）。

ＳＸ2480 道路跡（第５・６図）
【位置】第185次調査区と第192次調査区で発見した東西方向の道路跡である。位置や方向及び規模などから、多賀城南面に施工された道路網のうち、北１道路に相当する。今回の調査では、第192次調査区の南側でＳＤ2481北側溝を、第185次調査区の北端ではＳＤ2482南側溝を確認した。東西ともに調査区の外に伸びている。
【変遷】北側溝の埋土の検討から５時期の変遷（Ａ→Ｅ期）があることを確認した。
【道路幅】南側溝についてはごく一部のみの検出ではあるが、最も新しい時期であるＥ期について、周辺の調査成果を援用して測ると側溝心々間は約5.4ｍである。
【路面】第185次調査区と第192次調査区の間が路面となっている。大部分が調査区外となっており、第185次調査区の南西角部分が路面に該当するが、現代の耕作などによる削平で路面堆積層は失われているとみられる。
【重複】整地Ａと重複しており、これより新しい。

ＳＤ2481 北側溝（第５図）
Ａ期：北側溝で最も古い時期にあたる。
【規模】残存している部分で確認した規模は、上幅約1.48ｍ、深さ約60cmである。
【壁・底面】底面はおよそ平坦で、壁は斜めに立ち上がる。底面の標高は調査区の東西で比べると、差はほとんどない。
【埋土】黄灰色土であり、粘性が強い。

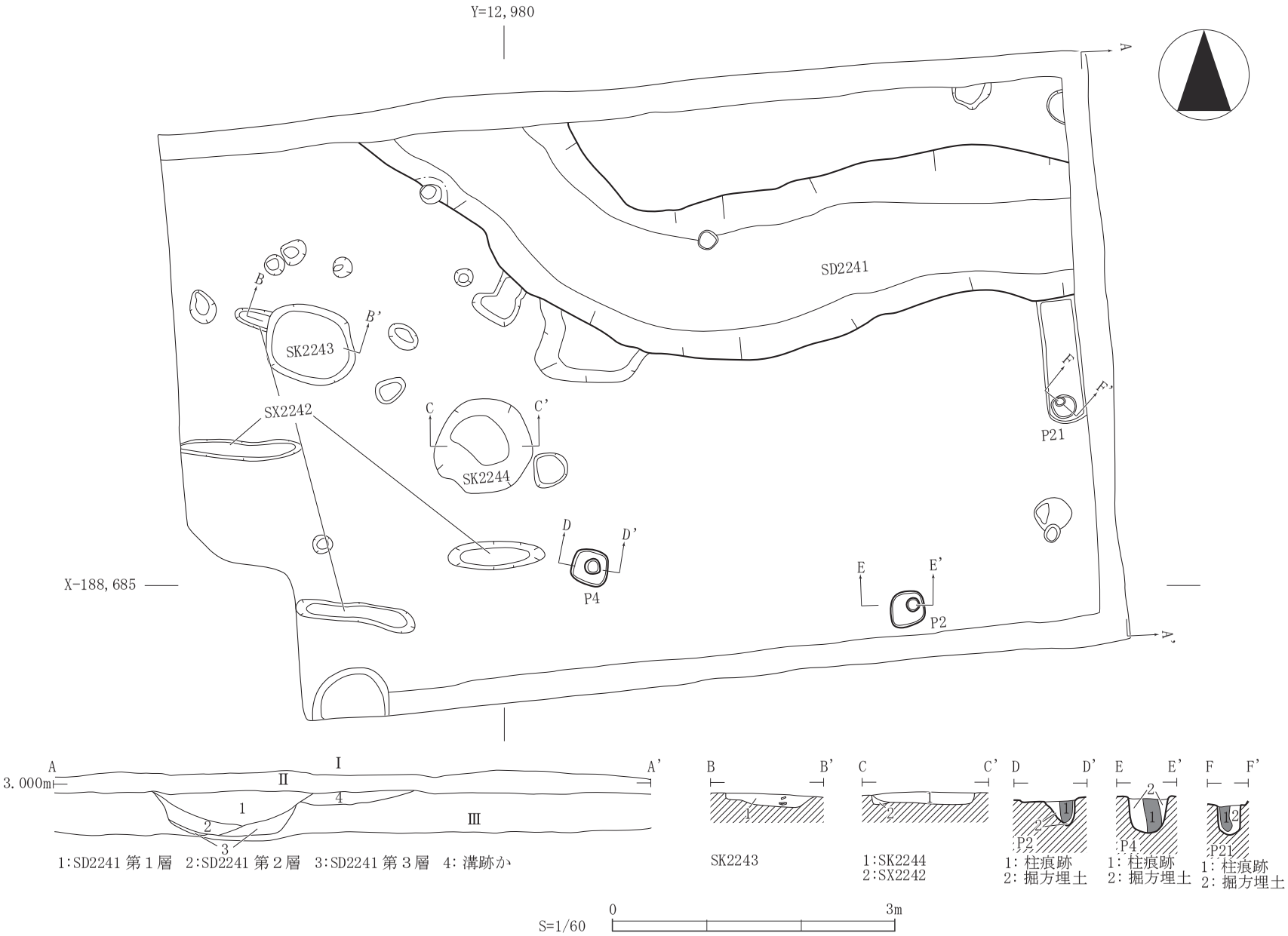
道路	側溝	地区	報告書
SX670	北側溝SD671	山王一区	市19集
	南側溝SD672		
SX4013	北側溝	多賀前	県167集
	南側溝		
SX4012	北側溝		
	南側溝		
SX1665	北側溝SD1666	城南	市75集
	南側溝SD1701		

表２　北１道路検出例一覧



番号	種類	遺構層位	特徴		口径残存率	底径残存率	器高	登録番号	備考
1	土師器坏	SD2241 3層	口縁部ナデ、底部ケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	(18.0) 6/24	(6.2) 14/24	3.5	R8	
2	土師器坏	SD2241 3層	口縁部ナデ、底部ケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	(16.0) 16/24	5.0	4.5	R7	
3	土師器埦	SD2241 3層	口縁部ナデ、底部ケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	(19.2) 7/24	9.6	6.9	R5	
4	土師器甕	SD2241	口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	ヨコナデ、ヘラナデ	(26.0) 4.5/24	—	—	R2	
5	土師器甕	SD2241	口縁部ヨコナデ		(22.2) 5/24	—	—	R3	
6	土師器鉢	SD2241 3層	口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	ヨコナデ、ヘラナデ	(20.0) 3.5/24	—	—	R6	
					最大長	最大幅	最大厚		
7	石製模造品	LⅡ	擦痕有り	—	3.5	1.8	4.5	R9	
8	石製模造品	LⅡ	擦痕有り	—	3.3	1.5	3.5	R10	

第３図　第 184 次調査出土遺物

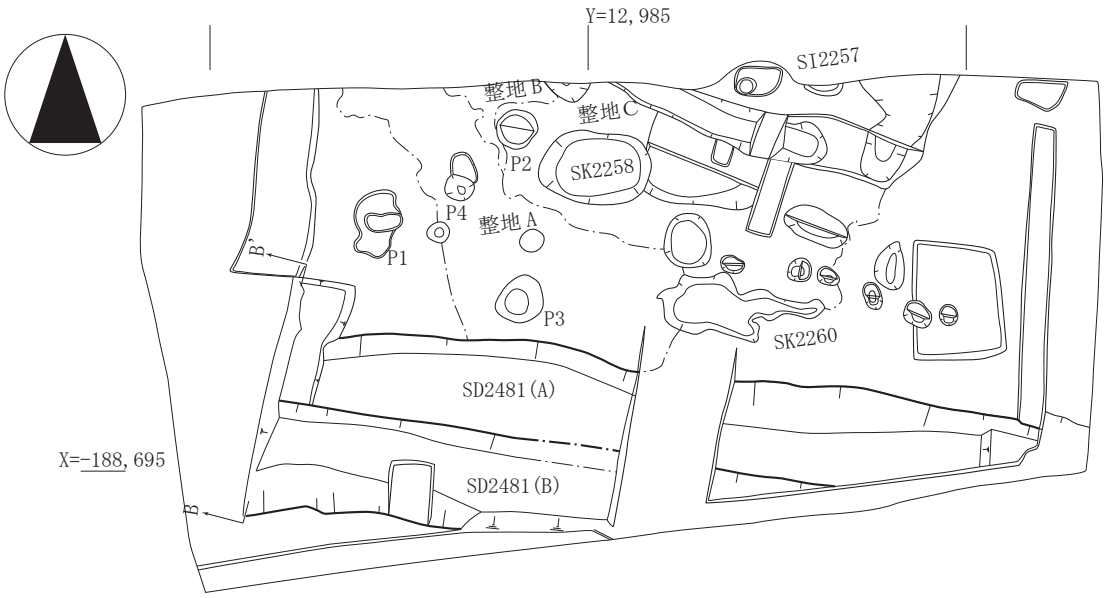


第４図　第 184 次調査Ⅲ層上面検出遺構平面図・断面図

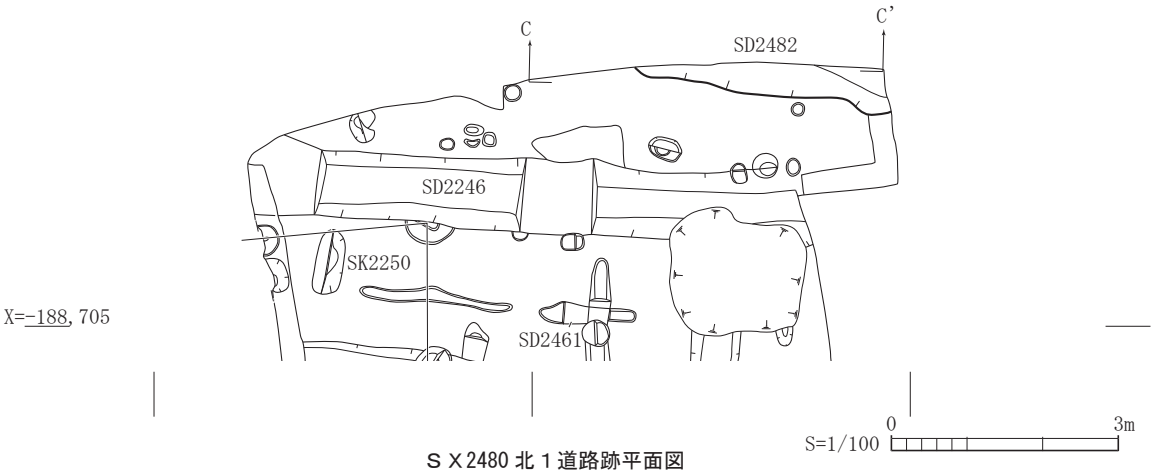
直径３～４㎝程度の黄褐色土を斑状に含み、人為的に埋め戻されている。
【遺物】遺物は出土していない。
Ｂ期：Ａ期と比べて位置を約 1.4 m南に移して構築されている。
【規模】残存している部分で確認した規模は、上幅約 98 ㎝、深さ約 58 ㎝である。
【壁・底面】底面はおよそ平坦で、壁は斜めに立ち上がる。底面の標高は調査区の東西で比べると、差はほとんどない。
【埋土】黄灰色土であり、砂質が強く、人為的に埋め戻されている。
【遺物】遺物は出土していない。
Ｃ期：Ｂ期とほぼ同一の位置で構築されている。
【規模】残存している部分で確認した規模は、上幅約 1.51 m、深さ約 74 ㎝である。
【壁・底面】底面はおよそ平坦で、壁は斜めに立ち上がる。底面の標高は調査区の東西で比べると、差はほとんどない。
【埋土】４～６層の３層を確認した。４層は灰白色火山灰１次堆積層である。５層は黒褐色土であり、粘性が強く、微量の砂粒を含む。６層は黒褐色土であり、黄褐色土を斑状に含む。いずれも自然堆積である。
【遺物】須恵器坏・甕、土師器坏Ｂ類、丸瓦、馬歯が出土している。
Ｄ期：調査区西側の断面でのみ確認した。Ａ期と比べてほぼ同位置、Ｃ期と比べて位置を北に 74㎝ 移して構築されている。
【規模】残存している部分で確認した規模は、上幅約 1.71 m、深さ約 50 ㎝である。
【壁・底面】底面はおよそ平坦で、壁は斜めに立ち上がる。底面の標高は調査区の東西で比べると、差はほとんどない。
【埋土】褐灰色土であり、よく締まっている。直径１㎝程度の黄褐色土を斑状に含む。
【遺物】遺物は出土していない。
Ｅ期：調査区西側の断面でのみ確認した。Ｄ期と比べて位置を南に約 48㎝ 移して構築されている。
【規模】残存している部分で確認した規模は、上幅約 1.48 m、深さ約 33 ㎝である。
【壁・底面】底面はおよそ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。底面の標高は調査区の東西で比べると、差はほとんどない。
【埋土】１～２層の２層を確認した。１層は粘性の有る黒色シルトであり、微量の炭化物・焼土を含む自然堆積層である。２層は締まりの弱い黒色シルトである。２次堆積した灰白色火山灰粒を少量含む自然堆積層である。
【遺物】須恵系土器高台付坏、須恵器坏・甕、平瓦が出土している。

ＳＤ 2482 南側溝（第５・６図）

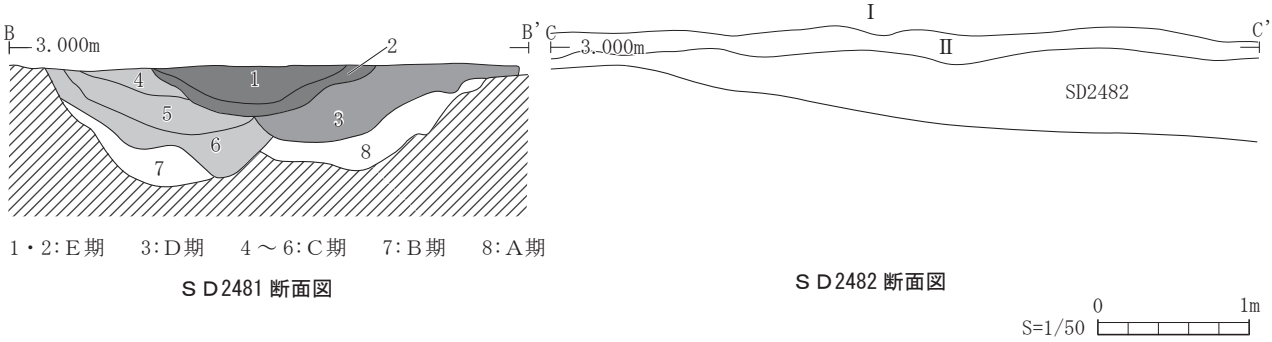
第 185 次調査区の北端で発見したが、ほとんどが調査区の外へ延びているため、１時期分のみの検出となった。発見した南側溝が北側溝のＡ～Ｅ期のどの時期に該当するかは不明であるが、後述する埋土がＥ期と異なることから、Ｅ期には該当しないと推測される。
【規模】残存している部分で確認した規模は、上幅約 30 ㎝、深さ約 54 ㎝である。
【壁・底面】底面はおよそ平坦で、壁は斜めに立ち上がる。底面の標高は調査区の東西で比べると、差はほとんどない。
【埋土】褐灰色シルトである。
【遺物】遺物は出土していない。



SX2480 北１道路跡



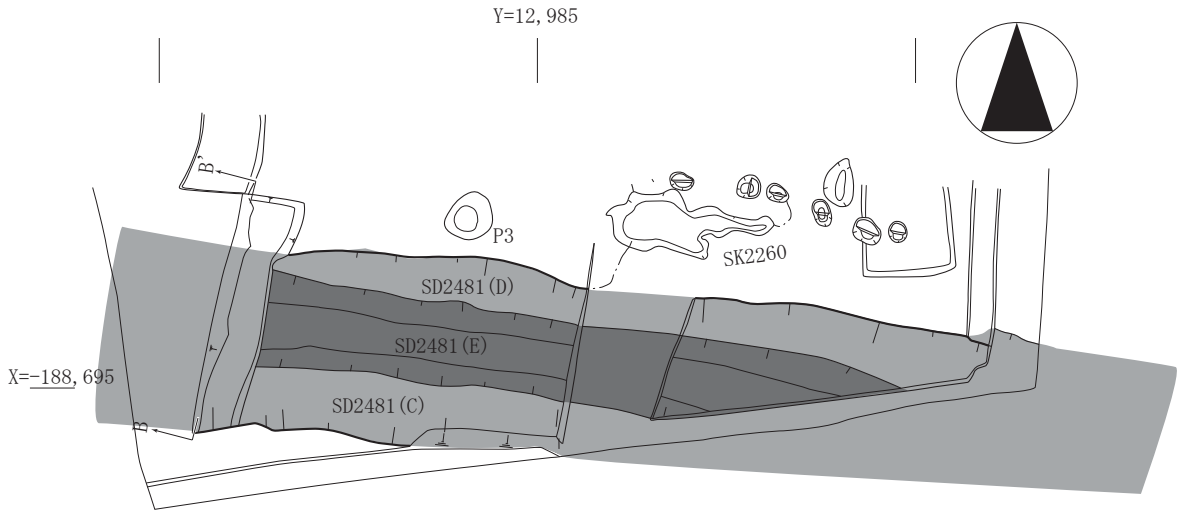
ＳＸ2480 北１道路跡平面図



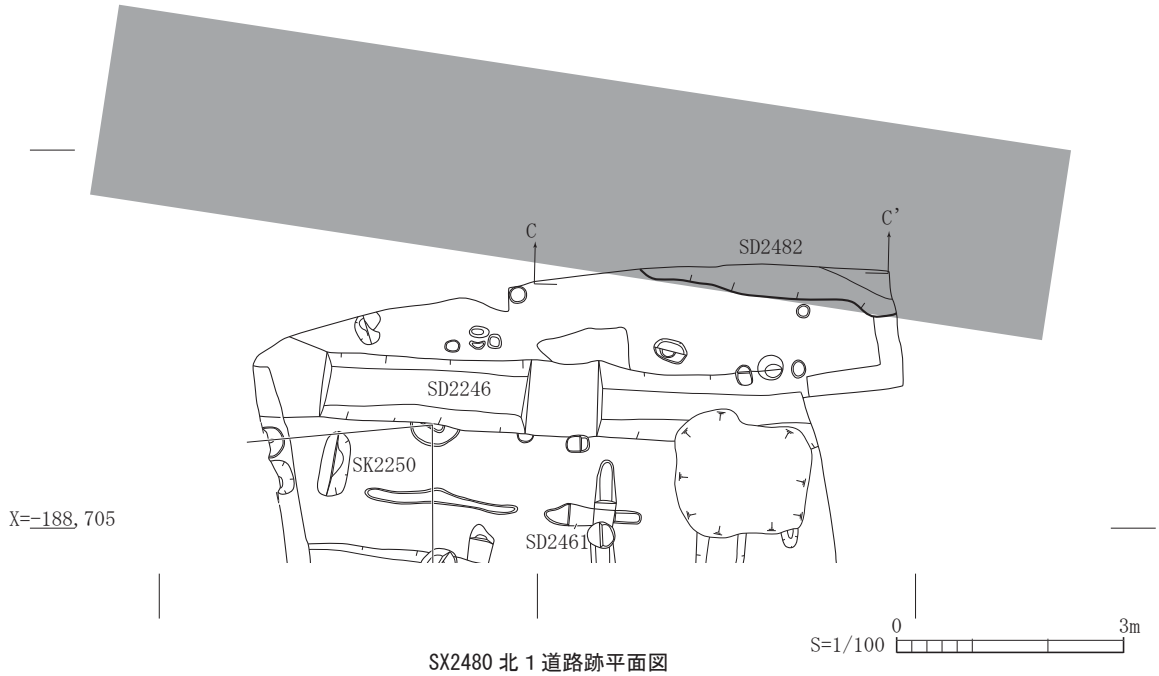
ＳＤ2481 断面図

ＳＤ2482 断面図

第５図　ＳＸ2480 北１道路跡　平面図・断面図

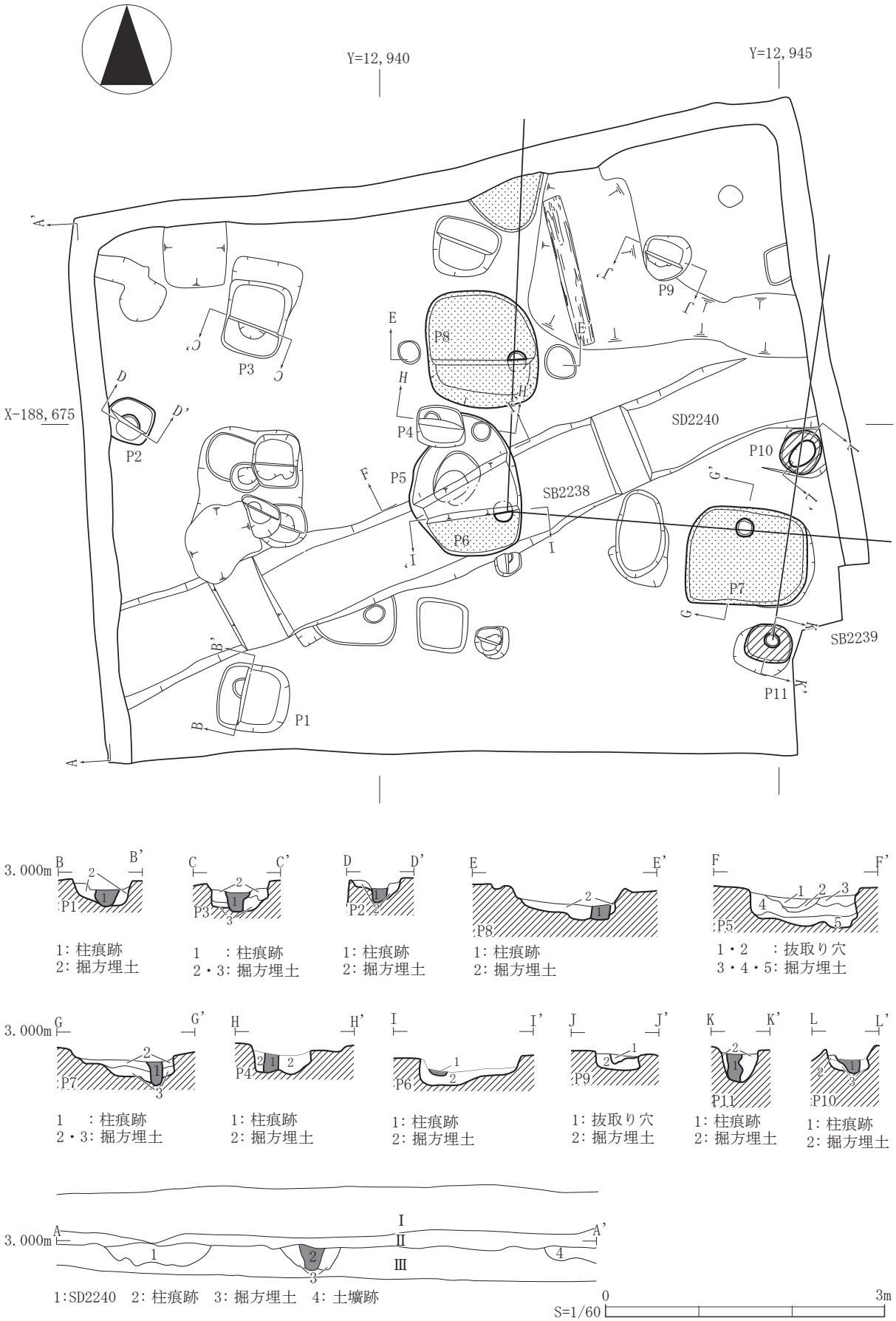


SX2480 北１道路跡



SX2480 北１道路跡平面図

第６図　ＳＸ2480 北１道路跡　平面図・断面図



第７図　第183次調査Ⅲ層上面検出遺構　平面図・断面図

ＳＢ 2238 掘立柱建物跡（第７図）

【位置】第 183 次調査区の東半部で発見した掘立柱建物跡である。

【桁行・梁行】柱穴４基より推定したものであり、南西隅柱から西側柱列及び南側柱列を確認したものと考えられる。南北２間以上、東西２間以上である。

【柱痕跡・抜取り穴の有無】柱穴３基（Ｐ６・Ｐ７・Ｐ８）で柱痕跡を確認した。

【重複】ＳＤ 2240 と重複しており、これより古い。

【方向･規模】西側柱列で測ると北で東に２度５分偏している。西側柱の柱間は、P6 と P8 で 1.61m である。

【掘方】平面形は方形であり、規模はＰ７で長辺約 1.2 ｍ、短辺約 1.07 ｍ、深さ約 18cm、Ｐ８で長辺約 1.25 ｍ、短辺約 1.18 ｍ、深さ約 16cm である。埋土は２層に分けられ、１層が灰黄褐色砂であり、にぶい黄橙色土を斑状に含む。２層は褐灰色粘質土であり、斑状のにぶい黄橙色土多量に含む。

【遺物】Ｐ６から両面黒色処理が施された土師器片（Ｂ類）が出土している。

ＳＢ 2239 掘立柱建物跡（第７図）

【位置】第 183 次調査区南東隅で発見した掘立柱建物跡である。

【桁行・梁行】柱穴２基より推定したものであり、南西隅柱から西側柱列１間分を確認したと考えられる。南北２間以上東西１間以上である。

【柱痕跡・抜取り穴の有無】柱穴１基（Ｐ 11）で柱痕跡を確認した。

【方向・規模】西側柱列で測ると北で東に約８度偏している。柱間は約 1.9 ｍである。

【掘方】平面は楕円形であり、規模はＰ 11 で長辺約 49cm、短辺約 41cm、深さは約 29cm である。埋土は灰黄褐色砂であり、にぶい黄橙色土を斑状に含む。

【遺物】出土していない。

ＳＢ 2251 掘立柱建物跡（第８・10 図）

【位置】第 185 次調査区南東部で確認した掘立柱建物跡である。

【重複】溝跡と重複するが、柱穴と直接重複していないため新旧関係は不明である。

【桁行・梁行】柱穴３基から推定したものであり、東西１間以上、南北２間以上である。

【柱痕跡・抜取り穴の有無】３基全てで柱痕跡を確認している（Ｐ１・Ｐ５・Ｐ６）。

【方向・規模】西側柱列で測ると北で東に８度９分偏する。柱間は 2.34 ｍである。

【掘方】平面形状は方形である。Ｐ１で長辺約 38cm、短辺約 35cm、深さ約 15cm である。Ｐ５で長辺 51cm、短辺約 48cm、深さ約 23cm である。Ｐ６で長辺約 41cm、短辺約 36cm、深さ約 40cm である。

【遺物】出土していない。

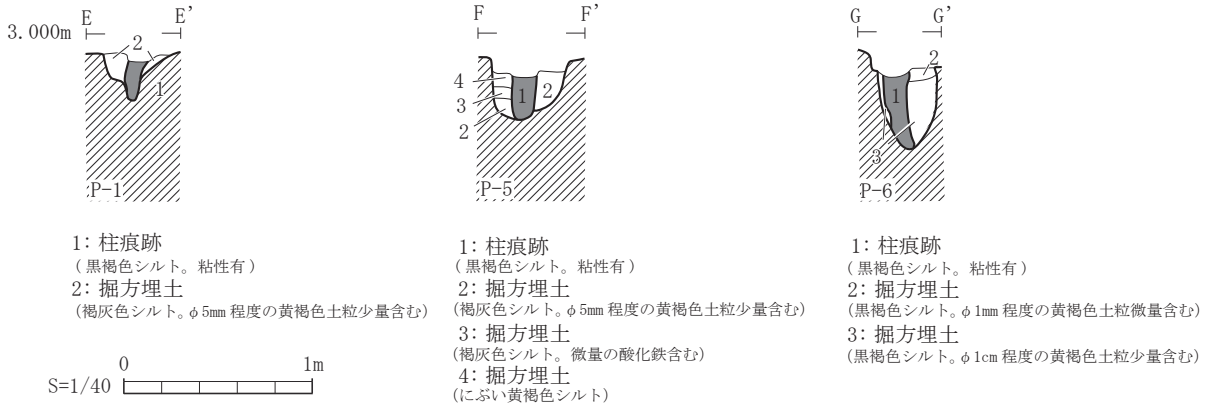
ＳＢ 2303 掘立柱建物跡（第９・10 図）

【位置】第 185 次調査区北西部で確認した掘立柱建物跡である。

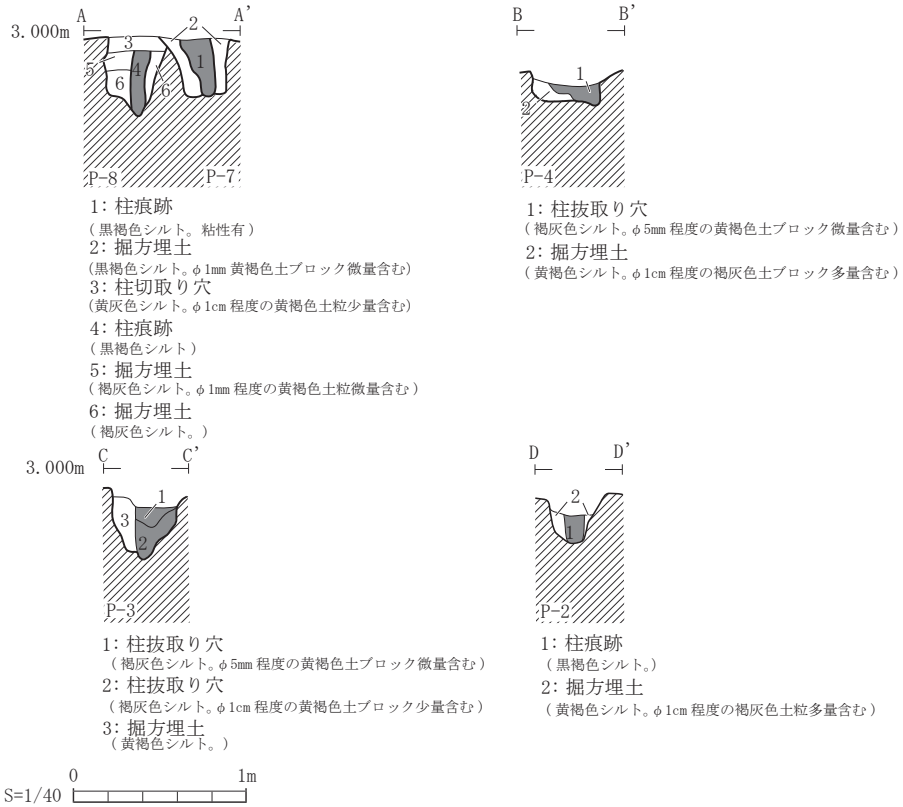
【重複】ＳＤ 2246 及びＳＸ 2247･2248 と重複しており、ＳＸ 2247･2248 より新しく、ＳＤ 2246 より古い。

【桁行・梁行】柱穴４基から推定したものであり、東西１間以上南北２間である。

【柱痕跡・抜取り穴の有無】柱穴２基（Ｐ２・Ｐ７）で柱痕跡を、残り２基（Ｐ３・Ｐ４）で抜取り穴をそれぞれ確認している。



第８図　ＳＢ2251 掘立柱建物跡柱穴断面図



第９図　ＳＢ2303 掘立柱建物跡柱穴断面図

【方向・規模】北側柱列で南に約６度偏する。東側柱の柱間は、北から約 1.95 m、約 1.97 mである。北側柱で約 2.16 cm である。

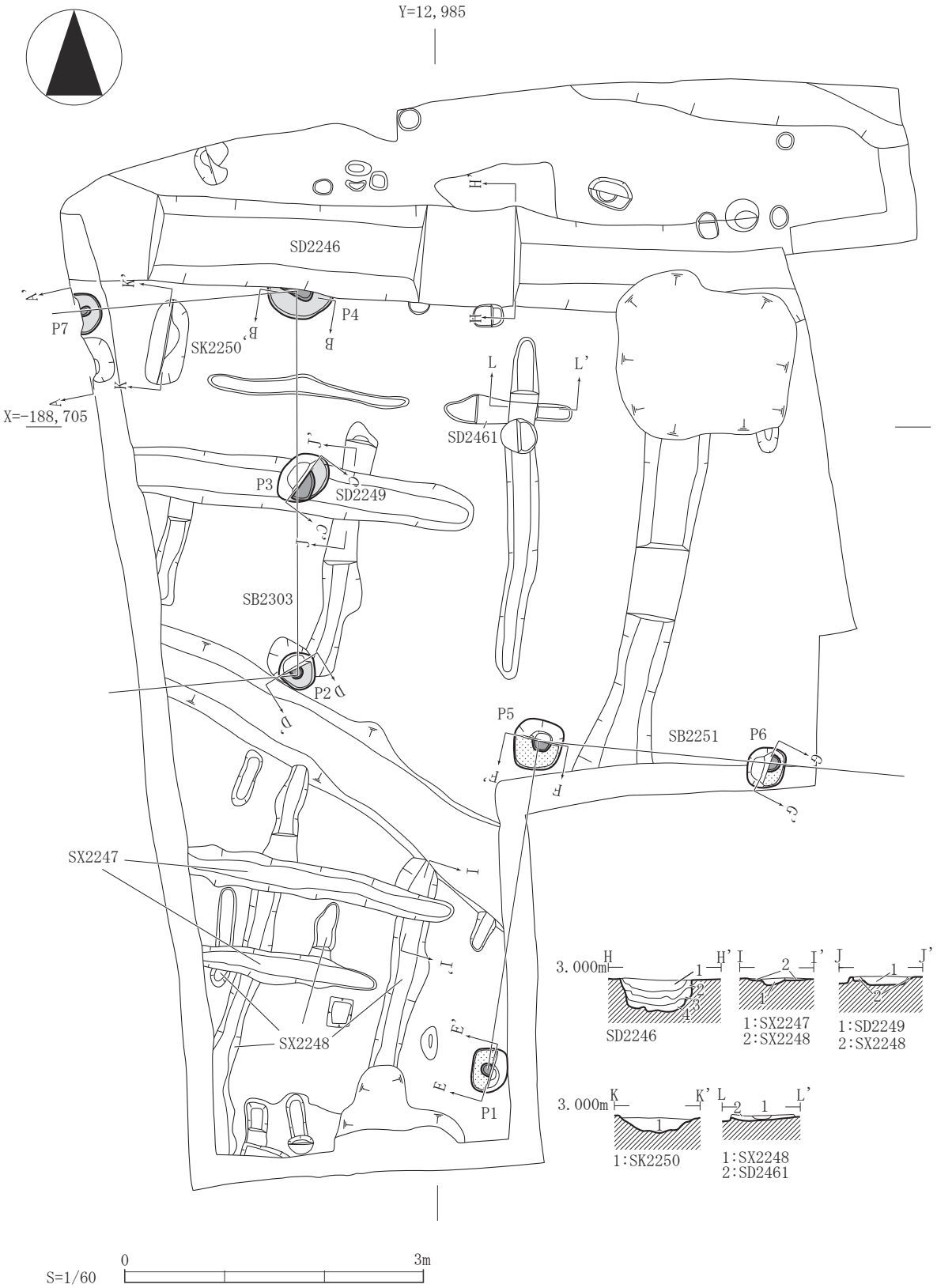
【掘方】平面は円形であり、Ｐ２で深さ約 13cm、直径約 38cm である。

【遺物】出土していない。

ＳＩ 2257 竪穴住居跡（第 11・12 図）

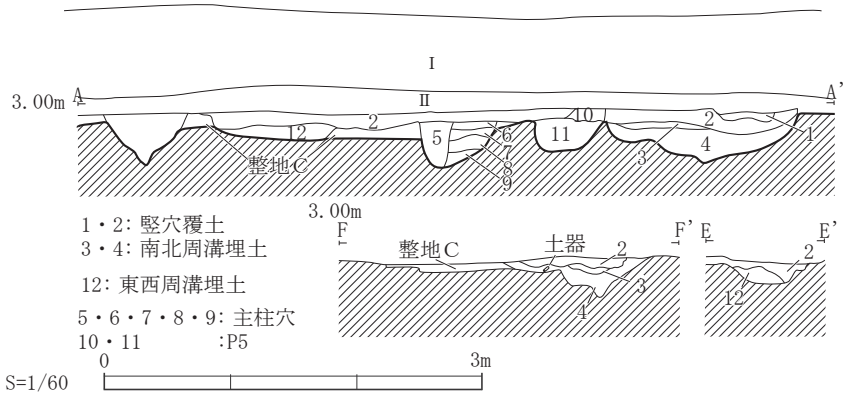
【位置】第 192 次調査区北壁付近で確認した。

【残存状況】一部分のみの検出であり、住居の全容は不明であるが、周溝埋土は比較的残存している。



第 10 図　第 185 次調査Ⅲ層上面検出遺構　平面図・断面図

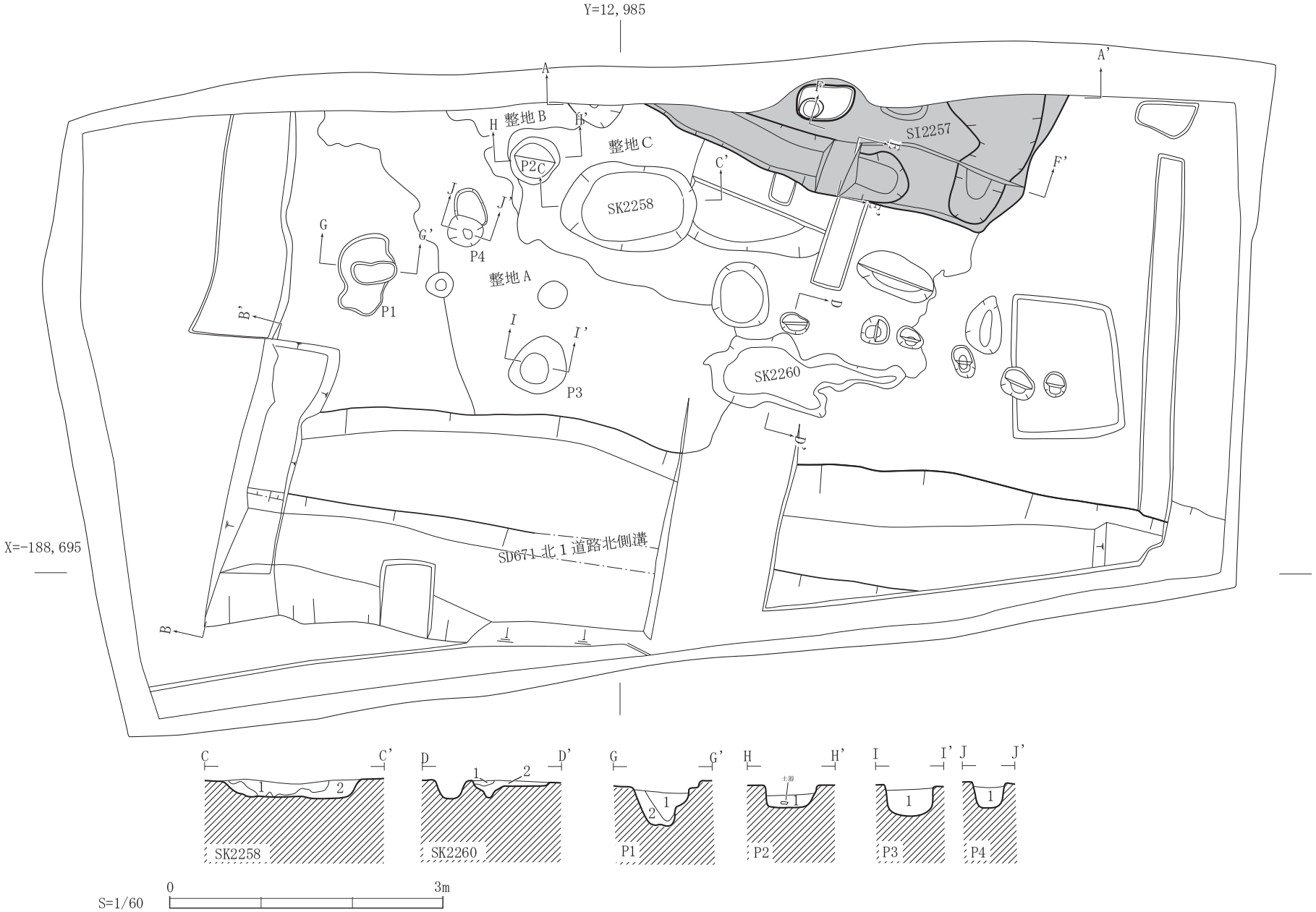
【重複】整地層を壊して構築されており、これより新しい。
【平面形･方向】一部分のみの検出であり､住居の全容は不明であるが､発見出来た南辺のみで方向を測ると、西で北に約 20 度偏している。カマドなどは確認できていない。
【規模】南辺が 3.7m 以上である。
【遺物】周溝内から土師器小型甕Ｂ類、須恵系土器坏、土師器坏ＢＶ類、砥石、刀子が出土している（第 13・14 図）
【埋土】５層の堆積を確認できた（１・２・３・４・12)。１層は締まり・粘性共に弱い黒色土であり、炭化物を多量に含む。２層は締まりが強く粘性を有する褐灰色土である。３層は締まりの強い黒褐色土である。４層は締まりの強い褐灰色土であり、斑状の黄褐色土及び焼土を含む。12 層は粘性・締まり共に弱い黒褐色土であり、斑状の黄褐色土を少量含む。



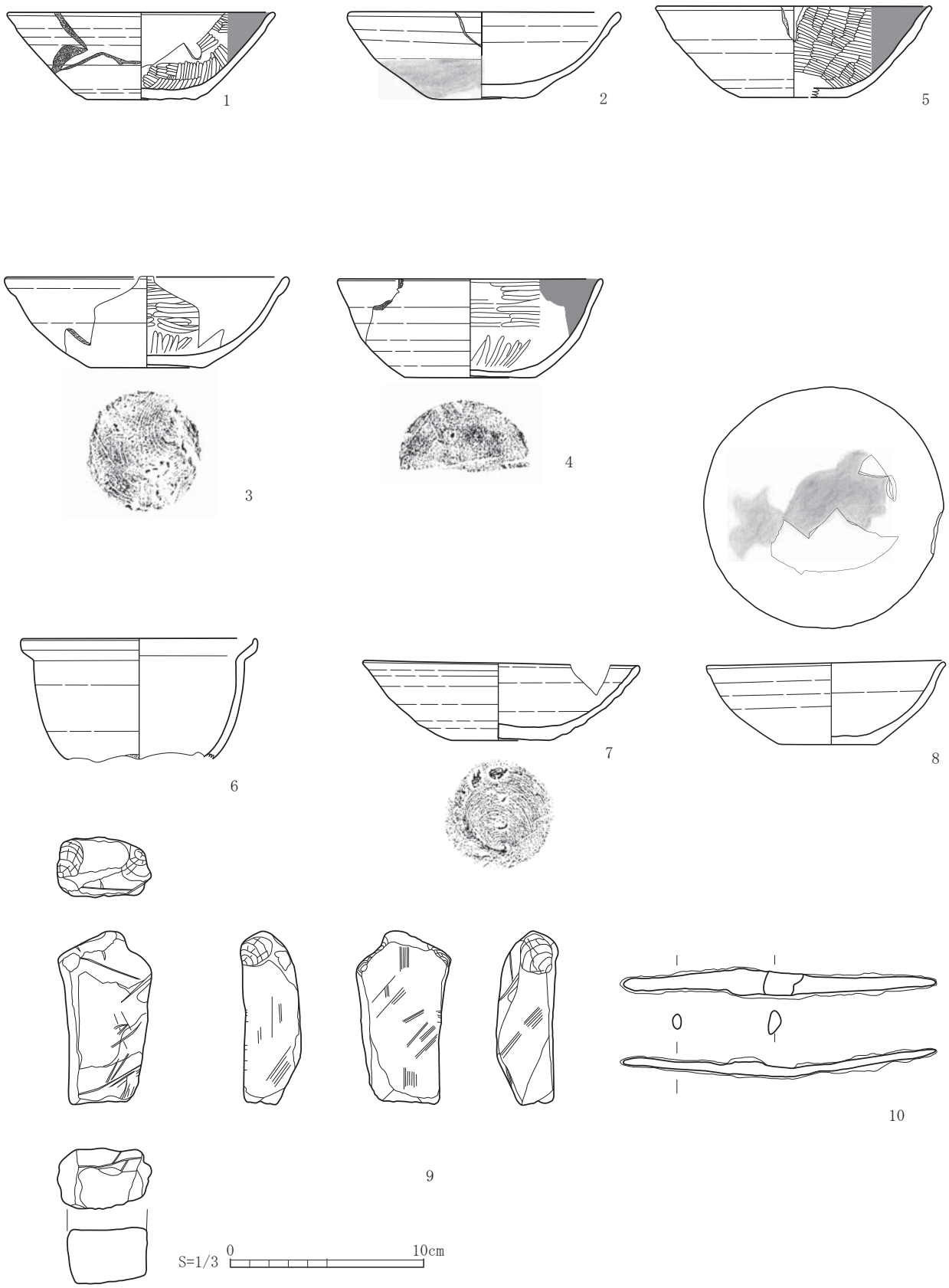
第 11 図　ＳＩ 2257 断面図

ＳＤ 2240 溝跡（第７図）
【位置】第 183 次調査区中央やや南よりで発見した。
【重複】ＳＢ 2238 と重複しており、これより新しい。また調査区南西でピットと重複しており、これより古い。
【方向】東で北に約 22 度偏している。
【規模】幅約 86cm である。検出面からの深さは約 10cm である。
【遺物】出土していない。

ＳＸ 2242 小溝跡（第４図）
【位置】第 184 次調査区西半部で確認した小溝跡である。
【方向】西で北に約２度偏している。
【重複】ＳＫ 2243 と重複しており、これより古い。
【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。
【埋土】埋土は黄灰色土である。
【遺物】出土していない。



第12図　第192次調査Ⅲ層上面検出遺構　平面図・断面図



第 13 図　第 192 次調査出土遺物実測図

番号	種類	遺構 層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	登録 番号	備考
			外面	内面					
1	土師器 坏	Ⅱ層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ ヘラミガキ→黒色処理	(13.4) 3/24	5.2	4.5	R4	BV類
2	須恵系土器 坏	SI2257 ３層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	(13.9) 19/24	5.4 24/24	44.75	R5	
3	土師器 坏	SI2257 ２層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ヘラミガキ→黒色処理	(14.6) 0.5/24	6.2 24/24	4.75	R6	BV類
4	土師器 坏	Ⅱ層	ロクロナデ 底部：手持ちヘラケズリ切り離し不明	ヘラミガキ→黒色処理	(13.6) 3/24	(6.8) 13/24	5.1	R9	BⅡ類
5	土師器 坏	SI2257	ロクロナデ、ナデ 底部：回転糸切り	ヘラミガキ→黒色処理	(14.2) 10/24	(5.2) 11/24	4.8	R11	BV類
6	土師器 甕	SI2257 １層	ロクロナデ	ロクロナデ	(12.0) 10.5/24	—	—	R3	B類
7	須恵系土器 坏	SI2257 ３層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	(14.3) 13/24	5.6	4.0	R17	
8	須恵系土器	SI2257 ３層	ロクロナデ 底部：摩耗により不明	ロクロナデ、油煙	(13.7) 23/24	5.8	4.7	R1	
					最大長	最大幅	最大厚		
9	砥石	SI2257 ３層			9.0	4.15	2.85	R13	
10	刀子	SI2257 ３層			16.4	1.6	1.0	R10	

第 14 図　第 192 次調査出土遺物観察表

ＳＤ 2246 溝跡（第９図）

【位置】第 185 次調査区北端部で確認した東西方向の溝跡である。第 19 次調査で確認したＳＤ 676 の延長の可能性がある。

【方向】北で西に約４度偏している。

【重複】ＳＢ 2303 と重複しており、これより新しい。

【規模】調査区内で約 7.2 ｍの長さを検出した。上幅約 46 ㎝、検出面からの深さは約 38 ㎝である。

【壁・底面】底面はやや起伏があり、壁は急角度で立ち上がる。

【埋土】埋土は４層に分けられる。１層は灰黄褐色土で、直径１㎜未満の黄褐色土粒を微量含む。２層は褐灰色土で、直径５㎜程度の黄褐色土粒を少量含む。３層は褐灰色土であり、直径１㎝程度の黄褐色土粒を少量含む。４層は黒褐色土で、粘性が強い。黄褐色土・酸化鉄・褐灰色土が斑状に堆積する。

【遺物】土師器小片が出土している。

ＳＤ 2249 溝跡（第 10 図）

【位置】第 185 次調査区北西部で確認した溝跡である。

【重複】ＳＸ 2248・ＳＢ 2303 と重複しており、ＳＸ 2248 より新しく、ＳＢ 2303 より古い。

【規模】長さ 3.8 ｍ以上、上幅は約 70 ㎝、検出面からの深さは約 12 ㎝である。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

【埋土】埋土は黒褐色土であり、直径５㎜ 程度の斑状の黄褐色土を微量含む。

【遺物】遺物は出土していない。

ＳＸ 2247 小溝跡（第 10 図）

【位置】第 185 次調査区西半部を中心に確認した東西方向の小溝跡である。

【重複】ＳＤ 2249・ＳＸ 2248 と重複しており、ＳＸ 2248 より新しく、ＳＤ 2249 より古い。
【規模】上幅は約 16 ～ 36 ㎝、検出面からの深さは約６㎝である。
【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。
【埋土】単層の褐灰色土である。
【遺物】遺物は出土していない。

ＳＸ 2248 小溝跡（第 10 図）
【位置】第 185 次調査区南西部を中心に確認した南北方向の小溝跡である。
【重複】ＳＸ 2247・ＳＢ 2303 と重複しており、これらより古い。
【規模】上幅は約 17 ～ 39㎝、検出面からの深さは約２㎝である。
【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。
【埋土】単層の褐灰色土である。
【遺物】遺物は出土していない。

ＳＫ 2243 土壙（第４図）
【位置】第 184 次調査区北西部で確認した土壙である。
【重複】ＳＸ 2242 小溝群と重複しており、これより新しい。
【平面形･規模】平面は楕円形であり､長軸約 99㎝､短軸約 81 ㎝である。検出面からの深さは約 13 ㎝である。
【壁･底面】西側の壁は緩やかに立ち上がり､東側の壁はやや急角度である。底面は起伏がなく平坦である。
【埋土】埋土は単層の黒褐色土であり、粘性は弱く、締まっている。直径５㎜程度の斑状の黄褐色土と炭化物及び焼土を少量含む。後述するＳＫ 2243 と近似している。
【遺物】土師器（Ｂ類）が出土している。

ＳＫ 2244 土壙（第４図）
【位置】第 184 次調査区中央やや西寄りで確認した土壙である。
【重複】重複している遺構は無い。
【平面形･規模】平面は楕円形であり､長軸約１ｍ､短軸約 99 ㎝である。検出面からの深さは約 12 ㎝である。
【壁・底面】西側の壁は段を有して急角度で立ち上がり、東側の壁は緩やかに立ち上がる。底面は西側でやや起伏があるほかは、概ね平坦である。
【埋土】単層の黒褐色土であり、粘性は弱く、締まっている。直径５㎜程度の斑状の黄褐色土及び炭化物と焼土を少量含む。
【遺物】須恵系土器、土師器坏（Ｂ類）が出土している。

ＳＫ 2258 土壙（第 12 図）
【位置】第 192 次調査区北西部分で確認した土壙である。
【重複】SK2259 と重複しており、これより新しい。
【平面形】東西に長い楕円形である。
【規模】長軸約 1.49 ｍ、短軸約 95㎝、検出面からの深さは約 19㎝である。
【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

【埋土】埋土は２層に分けられる。１層は黒色土であり、焼土及び炭化物を多量に含む。２層は褐灰色土であり、地山由来の黄褐色土を斑状に含む。
【遺物】遺物は出土していない。

ＳＫ 2250 土壙（第 10 図）
【位置】第 185 次調査区北西部で確認した土壙である。
【重複】ＳＢ 2303 と重複するが、柱穴との重複が無いため新旧関係は不明である。
【平面形・規模】平面は南北に長い楕円形である。長軸約 80 ㎝、短軸約 36 ㎝である。検出面からの深さは約 14 ㎝である。
【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がる。底面は中央でやや起伏があるが、概ね平坦である。
【埋土】埋土は褐灰色土であり、直径５㎜～１㎝程度の黄褐色土粒を少量含む。
【遺物】出土していない。

３　まとめ

(1) Ⅳ層上面遺構について（第２図）

第 185 次調査区において加工木･自然木の集中するＳＸ 2245 河川跡を発見した。砂質の河川堆積によって覆われている。同様の自然遺構として、本調査区東側で宮城県が実施した山王遺跡多賀前において、北１道路下層で木材集中が認められる河川跡ＳＤ 4060 が確認されている（宮城県教育委員会 1995）。今回確認したＳＸ 2245 については調査方法の制約上部分的な検出に留まっており、全容は不明であるが、臍穴や打ち込み等の痕跡が認められないことから、堰等の人為的な木組遺構というよりは、流水作用によって木製部材が積み重なったものと考えておきたい。第 19 次調査及び第 162 次調査においてⅢ層上面で古墳時代中期の竪穴住居を確認していることから、ＳＸ 2245 はおよそ５世紀以前の河川跡と考えられる。

(2) Ⅲ層上面遺構について（第 16 図）

山王一区で確認された遺構は、古墳時代中期、奈良時代（８世紀代）、平安時代（９～ 10 世紀）のものに大別することができる。ここでは、これらをそれぞれⅠ期・Ⅱ期・Ⅲ期と呼称する。

Ⅰ期（古墳時代中期）

堆積層中からは、古墳時代中期に盛行する剣形石製模造品や有孔円板等が出土している。隣接する第 19 次調査や第 162 次調査では同時期の竪穴住居跡ＳＩ 678・ＳＩ 2302 を確認しており、付近には該期の集落が広がっていたようである。

Ⅱ期（奈良時代）

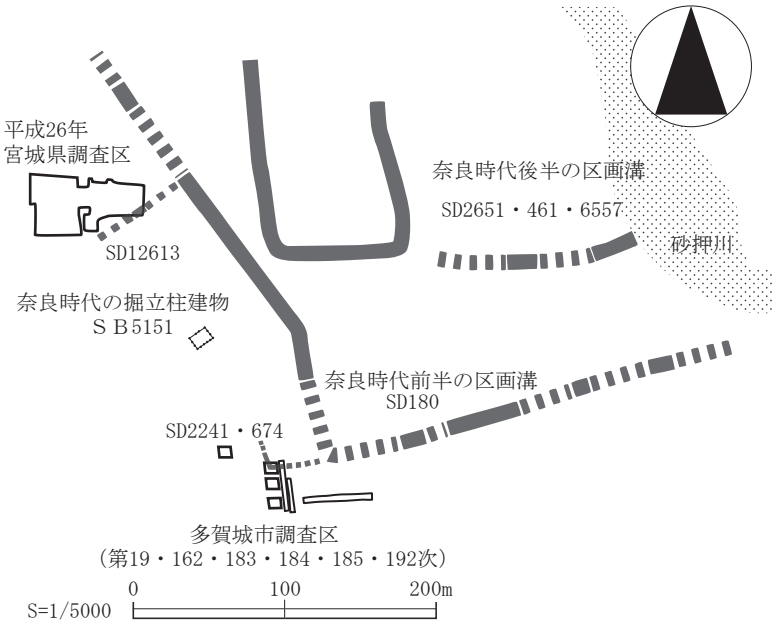
山王遺跡第 184 次調査で発見したＳＤ 2241 溝跡からは、有段の退化した丸底坏、外面ケズリ調整の埦等が出土している。その他土師器片についてもＡ類のみで構成されることから、奈良時代の区画溝と考えられる。

近接地では、第 19 次調査において、土師器Ａ類のみが出土するＳＤ 674 が確認されている（多賀城市教育委員会 1993）。ＳＤ 674 とＳＤ 2241 は一連の溝跡と考えられ、概ね８世紀中頃～後半の時期が与えられる。山王遺跡八幡地区では、８世紀中頃の漆紙文書が出土した奈良時代区画溝ＳＤ 180 を発見している（多賀城市教育委員会 1992）。今回発見したＳＤ 2241 は、ＳＤ 180 の延長に位置するものの、幅・深さともに小規模であり、調査区中央部で北西に向かって大きく湾曲する。

近年県調査区においても、同様の溝跡ＳＤ 12613 が確認されており、ＳＤ 180 と直行する奈良時代区画

溝と考えられている。ＳＤ 12613 は、県調査区南西方向に延びることから、市調査区（八幡地区・Ａ区）で発見した大型掘立柱建物跡ＳＢ 5151 を包摂するような奈良時代の区画が、ＳＤ 180 の西側に存在する可能性が指摘されている（宮城県教育委員会 2015）。今回発見したＳＤ 2241 についても、同様にＳＤ 180 から分岐して奈良時代集落を画する小区画溝とみられる（第 15 図）。

また、奈良時代区画溝ＳＤ 2241・674 と同時期の建物跡として、第 19 次調査で確認した掘立柱建物跡ＳＢ 681 が挙げられる。掘立柱建物跡ＳＢ 681 は、北で西に大きく傾く建築方位を持ち、区画溝を意識して構築された可能性が高い。



第15図　奈良時代における山王遺跡

第 185 次調査で発見したＳＸ 2247・ＳＸ 2248 小溝群については、出土遺物や遺構の重複から直接的に時期を確定することは出来なかったが、一連と思われる東西・南北の小溝群を発見した第 19 次調査及び第 162 次調査では、平安時代の掘立柱建物跡ＳＢ 682・ＳＢ 2301 によって、東西方向の溝跡が破壊されていることから、およそ平安時代以前の小溝群と考えられる。

Ⅲ期（平安時代）

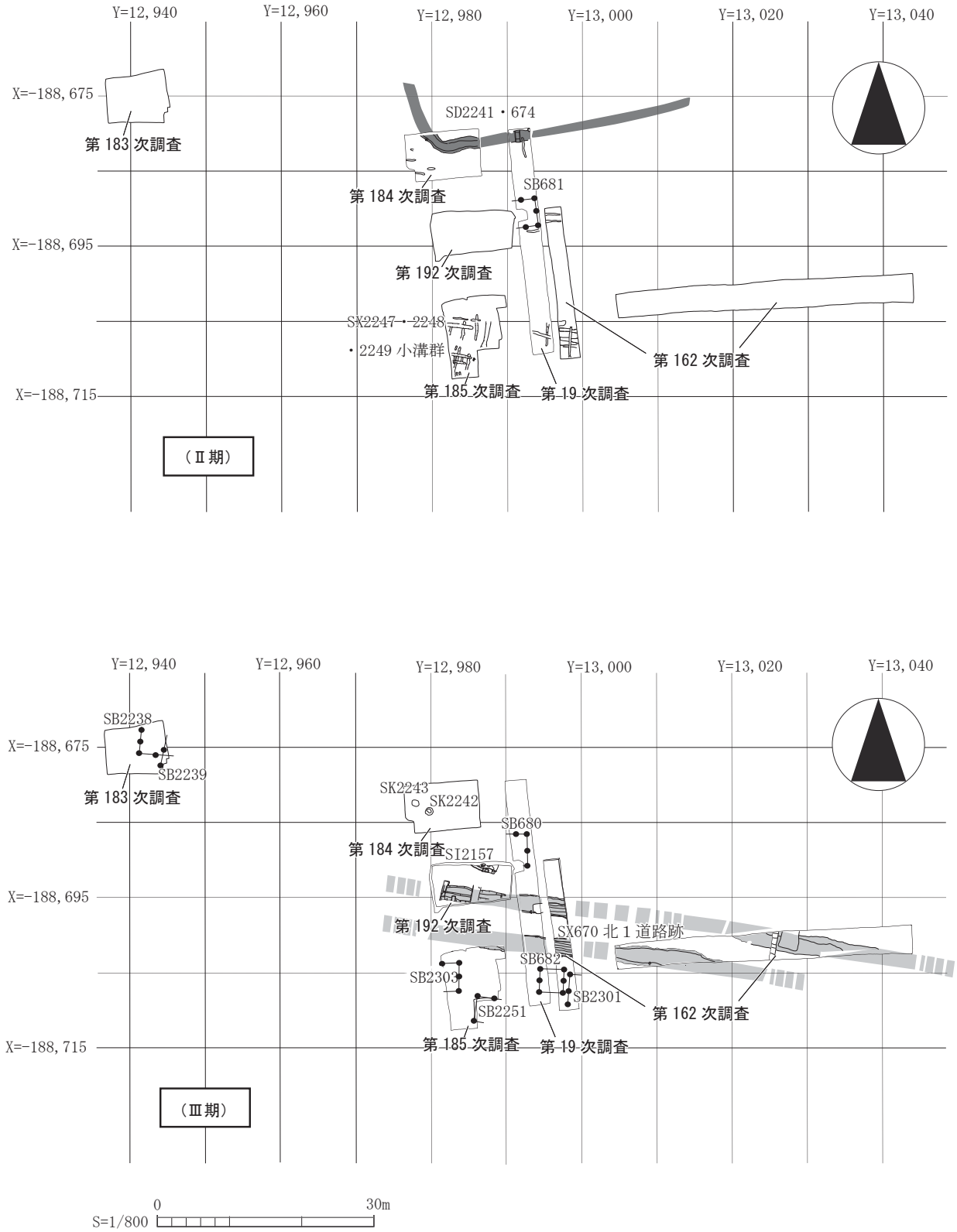
山王遺跡第 19 次調査、同 162 次調査で確認したＳＸ 2480 北１道路について、ほぼ推定線上の第 192 次調査で北側溝ＳＤ 671 を、185 次調査で南側溝ＳＤ 672 をそれぞれ発見している。南側溝についてはごく一部の検出であり、全容は不明であるが、北側溝については概ねその変遷が捉えられた。大きくＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅの５時期に大別され、Ａ・Ｂ期は人為的に埋め戻されている。年代の上限を確定し得る遺物は出土しておらず、現段階では従来通り９世紀前葉頃に構築されたものと考えておきたい。

Ｃ期側溝最上層は灰白色火山灰によって覆われるが、その後も２度の作り替えが行われている（Ｄ・Ｅ期）ことから、10 世紀前葉以降も一定程度の期間道路として機能したことは確実である。

一方、西５道路推定線上に位置する第 183 次調査区では、道路側溝跡に類する掘り込みや路面整地・路面堆積層等は確認できなかった。また、Ⅲ層上面で複雑に重複する掘立柱建物跡を複数確認し、ピット掘方内から両黒土師器片が出土している。道路機能時の路面上において、こうした掘立柱建物が構築されることは考え難く、該区における西５道路は、推定線に対して東西いずれかにやや逸れていたことが推察される。

その他平安時代の遺構として、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土壙等を発見している。これらは多賀城南面に広がる方格地割のうち北２西５区及び北１西５区に立地する遺構群である（SB2238・SB2239 についは未確定）。

竪穴住居跡ＳＩ 2257 床面及び周溝からは底部内面に放射状ミガキを施した内黒土師器坏ＢＶ類及び須恵系土器坏が出土しており、およそ９世紀末から 10 世紀前葉頃の住居跡と考えられる。北２西５区を形



第 16 図　古代の遺構変遷模式図

成する北１道路ＳＸ 2480、北２道路ＳＸ 300、西４道路ＳＸ 5500・5628、西５道路ＳＸ 5150 は、灰白色火山灰降下後にそれぞれ少なくとも１度の改修を受けていることから、10 世紀前葉以降まで区画として機能していたことが分かっている（宮城県教育委員会 1997）。区画内における同時期の遺構として、山王遺跡第 10 次調査ＳＩ 5105 貼床内から須恵系土器片が出土しているほか、区画のほぼ中央で掘方埋土に灰白色火山灰を含むＳＥ 5056 を確認している（多賀城市教育委員会 1991）。

周辺遺跡における該期の竪穴住居は、多賀城跡第 23 次調査ＳＩ 734（多賀城跡調査研究所 1975）、高崎遺跡第 22 次調査ＳＩ 1384（多賀城市教育委員会 1998）などが認められるが、方格地割内においては僅少であり、北２西５区の空間利用を考える上で重要な遺構と言える。

参考文献

宮城県教育委員会 2015「山王遺跡八幡地区」『第 41 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』2015

多賀城市教育委員会 1991『山王遺跡―第 10 次発掘調概報（仙塩道路建設に伴う八幡地区調査）―』多賀城市文化財調査報告書第 27 集

多賀城市教育委員会 1992『山王遺跡―第 12 次調査概報（仙塩道路建設に伴う八幡地区調査）―』多賀城市文化財調査報告書第 30 集

多賀城市教育委員会 1993「Ⅳ　山王遺跡第 19 次調査」『山王遺跡ほか―発掘調査報告書―』多賀城市文化財調査報告書第 34 集 , pp. 19-28

多賀城市教育委員会 1998『高崎遺跡―第 22 次調査報告書―』多賀城市文化財調査報告書第 52 集

宮城県教育委員会 1995『山王遺跡Ⅱ―多賀前地区遺構編―』宮城県文化財調査報告書第 167 集

宮城県教育委員会 1996『山王遺跡Ⅳ―多賀前地区考察編―』宮城県文化財調査報告書第 171 集

宮城県教育委員会 1997『山王遺跡Ⅴ』宮城県文化財調査報告書第 174 集

宮城県多賀城跡調査研究所 1995『多賀城跡調査研究所年報 1974』

第 183 次調査　遺構発見状況　西から

第 183 次調査　遺構完掘状況　西から

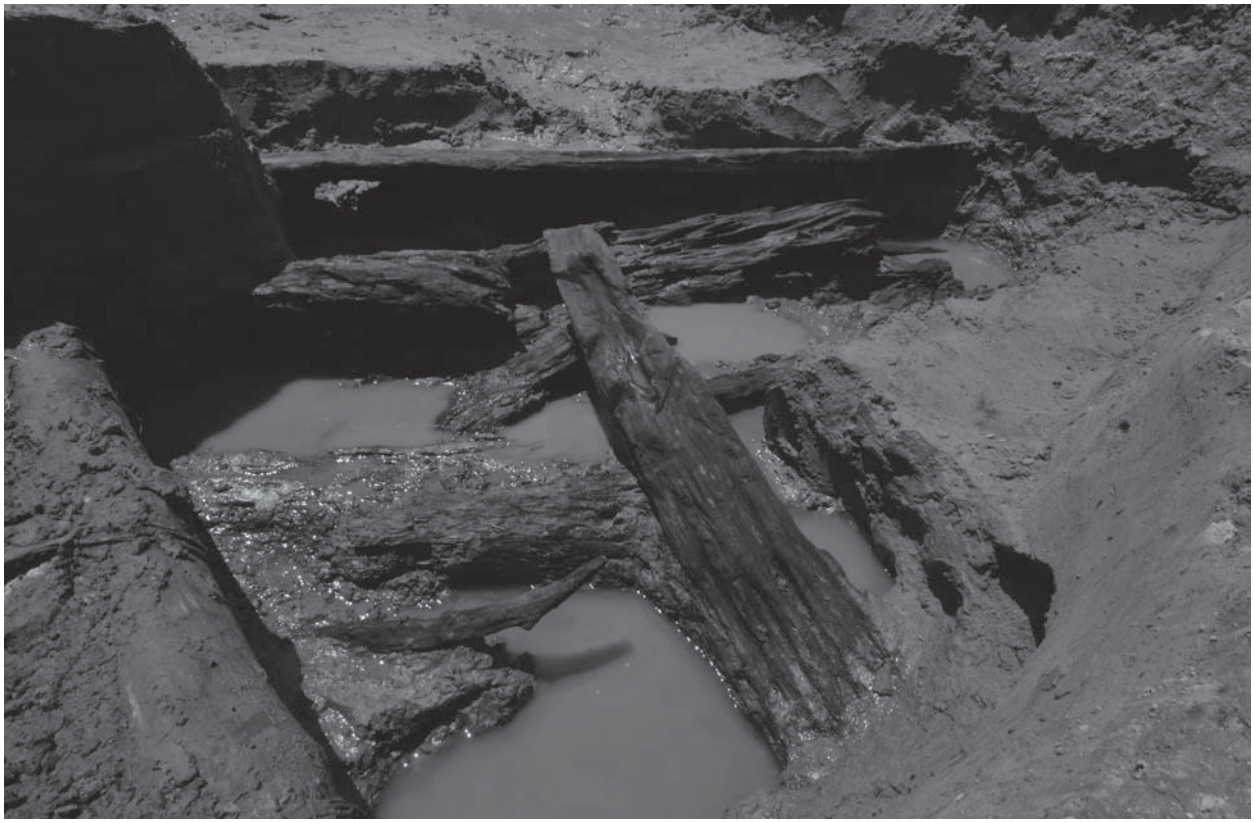
写真図版 1

第 184 次調査　遺構発見状況　西から

第 184 次調査　遺構完掘状況　東から

写真図版２

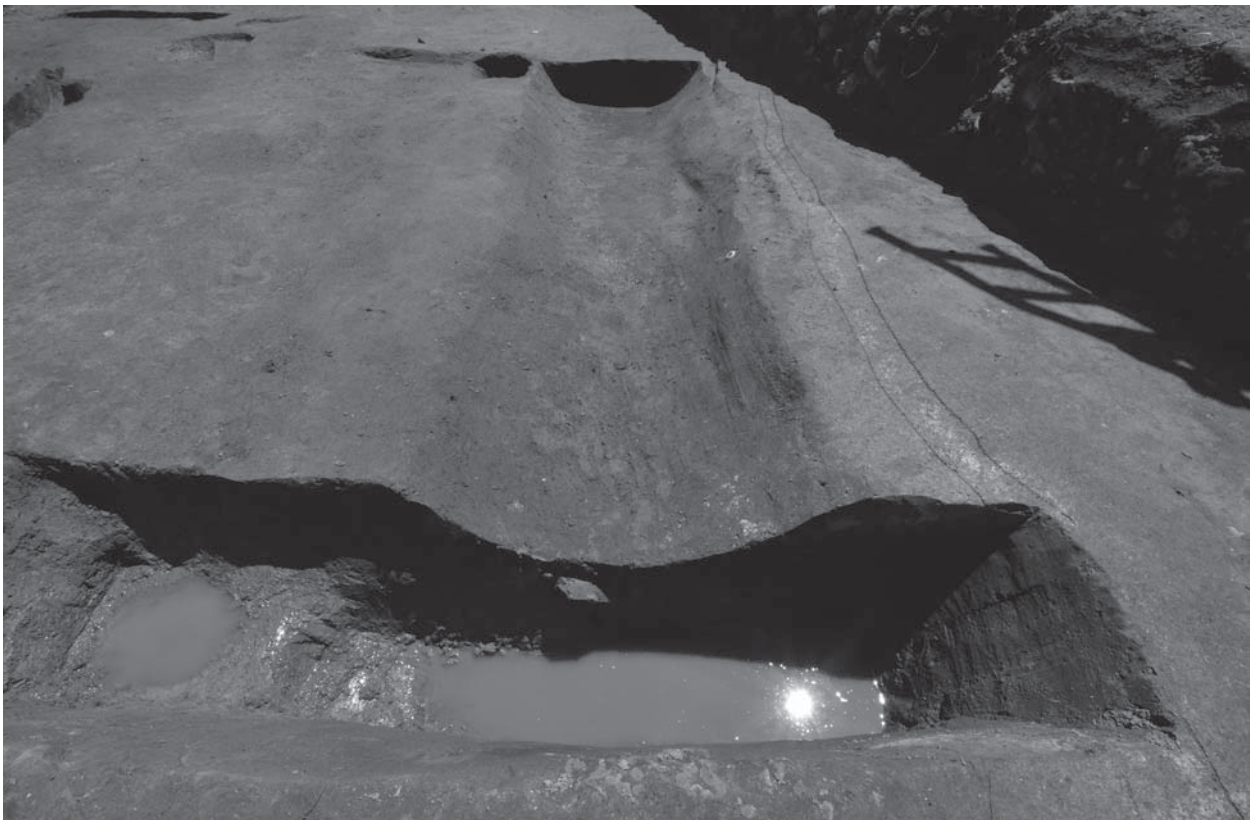
第 185 次調査　遺構発見状況



第 185 次調査　ＳＸ 2245 木材集中部分　北から

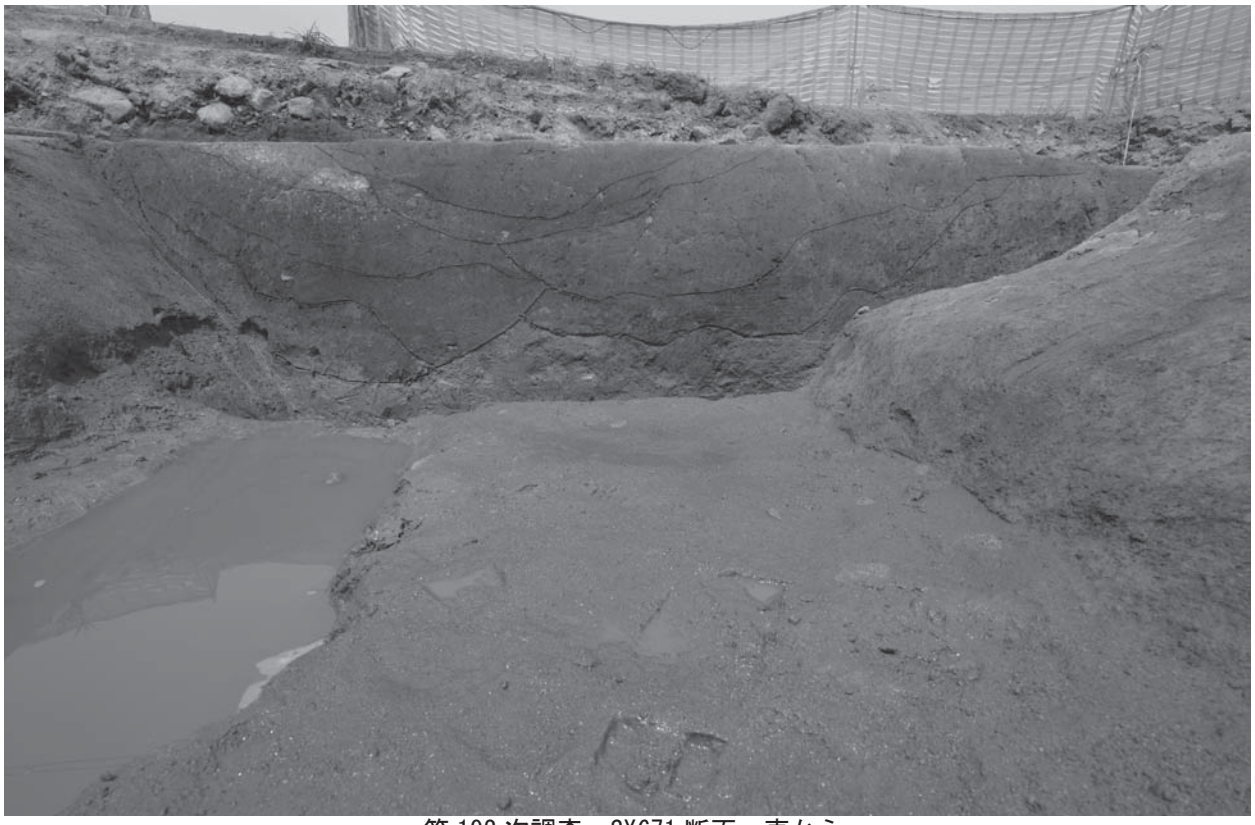
写真図版３

第 192 次調査　遺構完掘状況　東から



第 192 次調査　SX671 Ａ期掘り上げ状況　西から

写真図版４



第 192 次調査　SX671 断面　東から

第 192 次調査　SI2257 発見状況　北から

写真図版５

Ⅴ　山王遺跡第187 ～ 191次調査

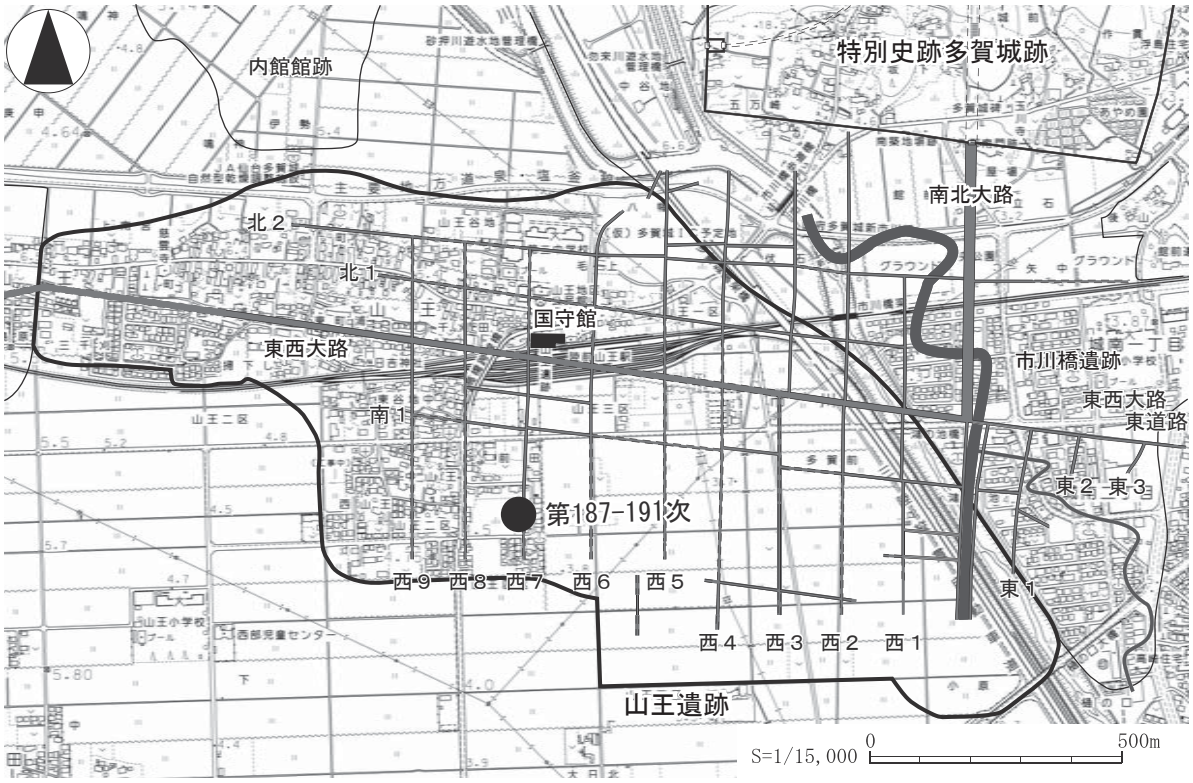
１　調査に至る経緯と経過

本件は、山王字山王四区地内の同一宅地分譲区画内における５件分の個人住宅建設に伴う本発掘調査である。平成29年４月７日に、各地権者より当該地における個人住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、住宅の基礎工事の際に、直径60㎝、長さ7.0ｍのソイルセメントパイルを19 ～ 22本施すものであった。当該地では、平成26年度に宅地造成計画に基づき、道路及び擁壁基礎部分の発掘調査（第142次調査）を実施しており、現地表から1.3ｍ下で平安時代の道路跡をはじめ多くの遺構や遺物を発見していることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、工法変更によって遺跡を保存する協議を行ったが、提出された基礎工法以外では十分な地盤強度を得られないことから、本発掘調査を実施することになった。

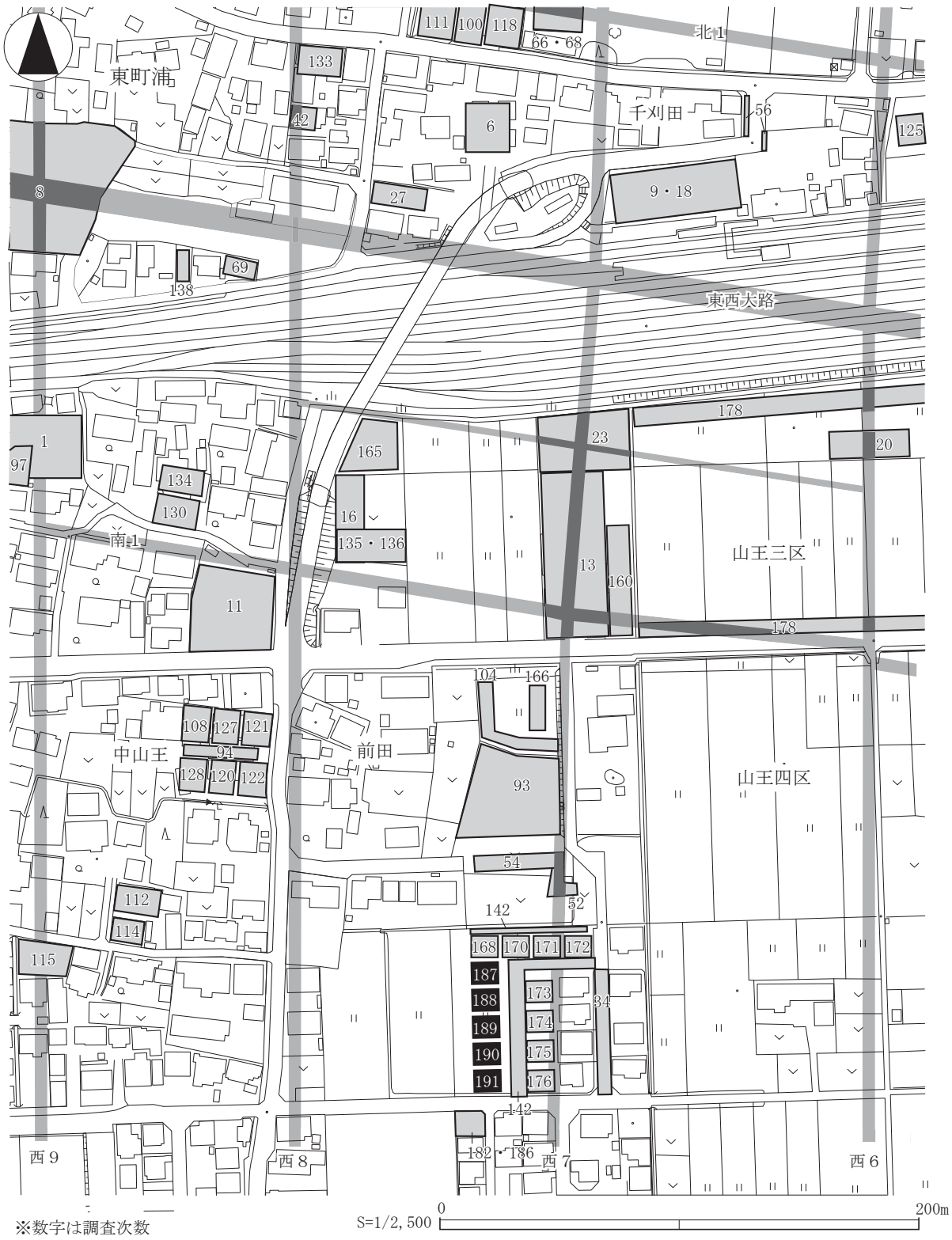
調査は、掘削土置き場を近接地に確保し、５件の調査を同時に行った。調査の主な経過は以下のとおりである。

５月16日に重機による掘削を開始し、現代の盛土（Ⅰ1層）及び現代の水田耕作土（Ⅰ2層）とあわせて、調査期間の短縮を図るためⅡ・Ⅲ層とほとんどのⅣ層を除去し、多くの遺構をⅤ層上面で発見した。17日に、第188次調査区の掘削中にⅣ層上面でＳＸ2312土器埋設遺構があることを確認し、この箇所だけ掘削を

第188次調査区　作業風景



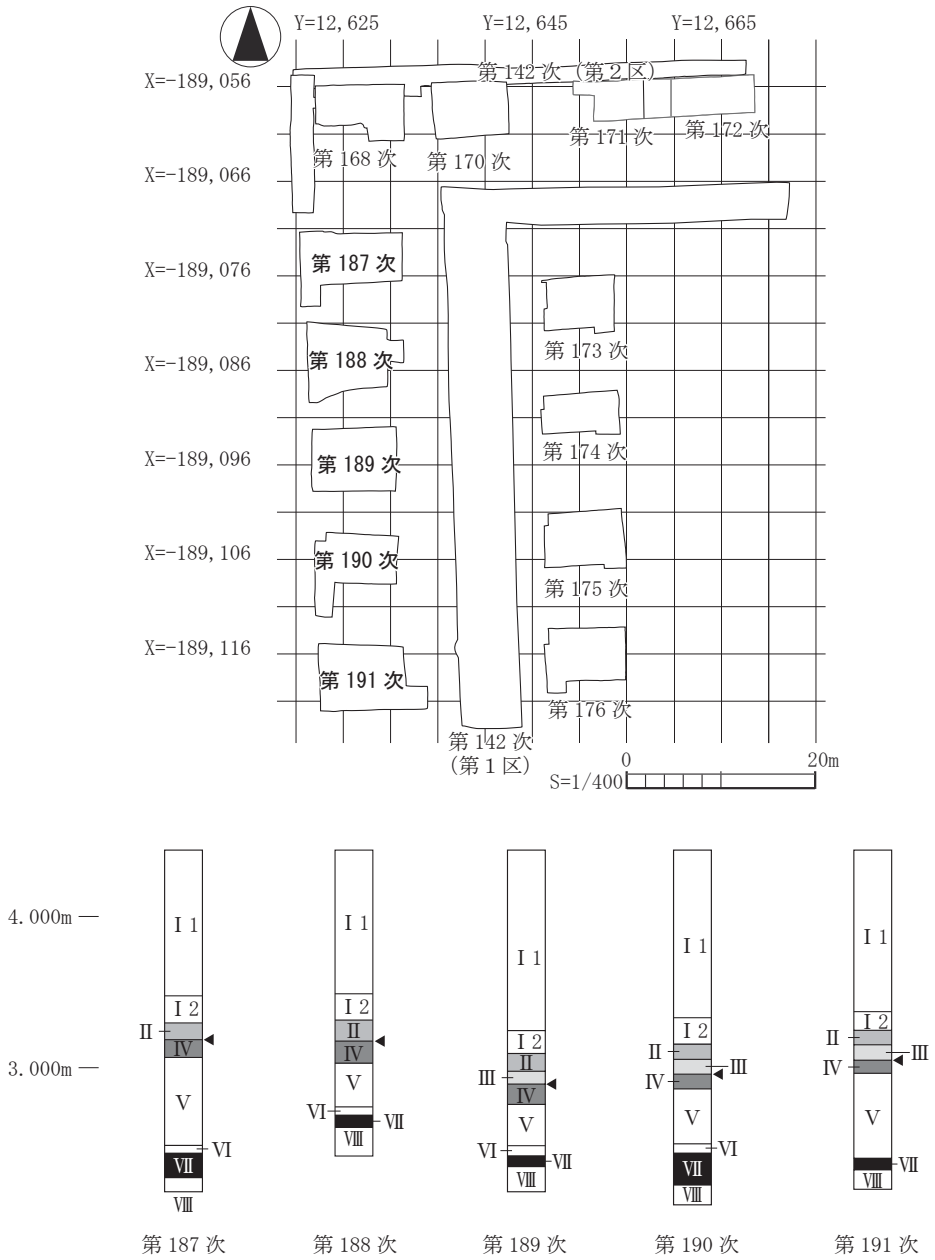
第１図　方格地割と調査区の位置



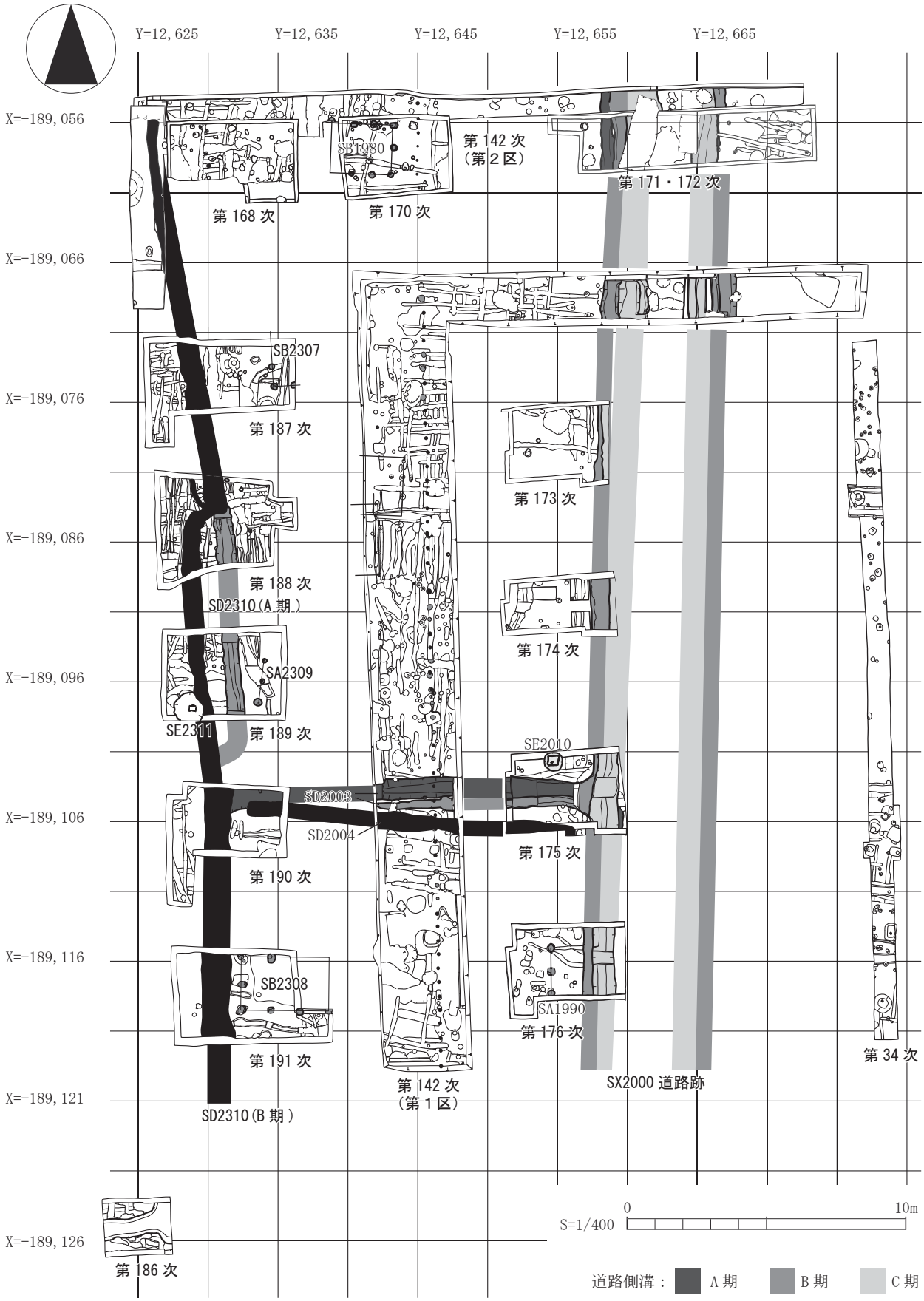
第２図　第187-191次調査区と周辺の調査区

Ⅳ層上面でとめた。

18日より作業員を動員し、調査に必要な器材の搬入とフェンス等の安全設備の設置を行った。24日に重機による掘削を完了し、遺構発見作業を行ったところ、ＳＤ2310溝跡のほか多数の遺構を発見した。発見作業を進める中でＳＤ2310溝跡は、２時期の変遷があり、さらに第188～189次調査区では新しい時期に流路を2.4～2.6m西に移動していることがわかった。６月19日に遺構発見作業完了し、翌20日に空中写真を撮影した。以降、各調査区でＳＤ2310溝跡の平面と断面を詳細に検討するとともに、随時記録作成を行いながら埋土を掘り下げた。７月12日に各調査区の完掘状況の写真撮影を行った。14日には調査区の一部をⅧ層上面まで掘り下げ、水田跡に伴う畦畔の発見作業を行ったが、確認できなかった。31日にすべての調査区の調査を終了するとともに、重機によって埋め戻しを開始し、８月４日にすべての調査区の埋戻しが完了した。



第３図　調査区配置図と層序模式図



第４図　第 187 ～ 191 次調査区と周辺の遺構平面図

２　調査成果

（１）層序

今回の調査で確認した層序は、以下のとおりである。（第３図）

Ⅰ層：現代の盛土（Ⅰ1層）と水田耕作土（Ⅰ2層）である。厚さはⅠ1層が約0.９～1.２m、Ⅰ2層が12～18cmである。

Ⅱ層：すべての調査区で確認している。すべての遺構を覆っており、灰白色火山灰を部分的に含む黒色粘質土で厚さは９～14cmである。

Ⅲ層：第189～191次調査区で確認した。すべての古代の遺構を覆っており、特にＳＤ2310（Ｂ）溝跡上面やＳＤ2330（Ｂ）溝跡上面の窪んだところに厚く堆積している。灰白色火山灰と灰黄色砂を含む黄灰色粘質土で厚さは９～27cmである。

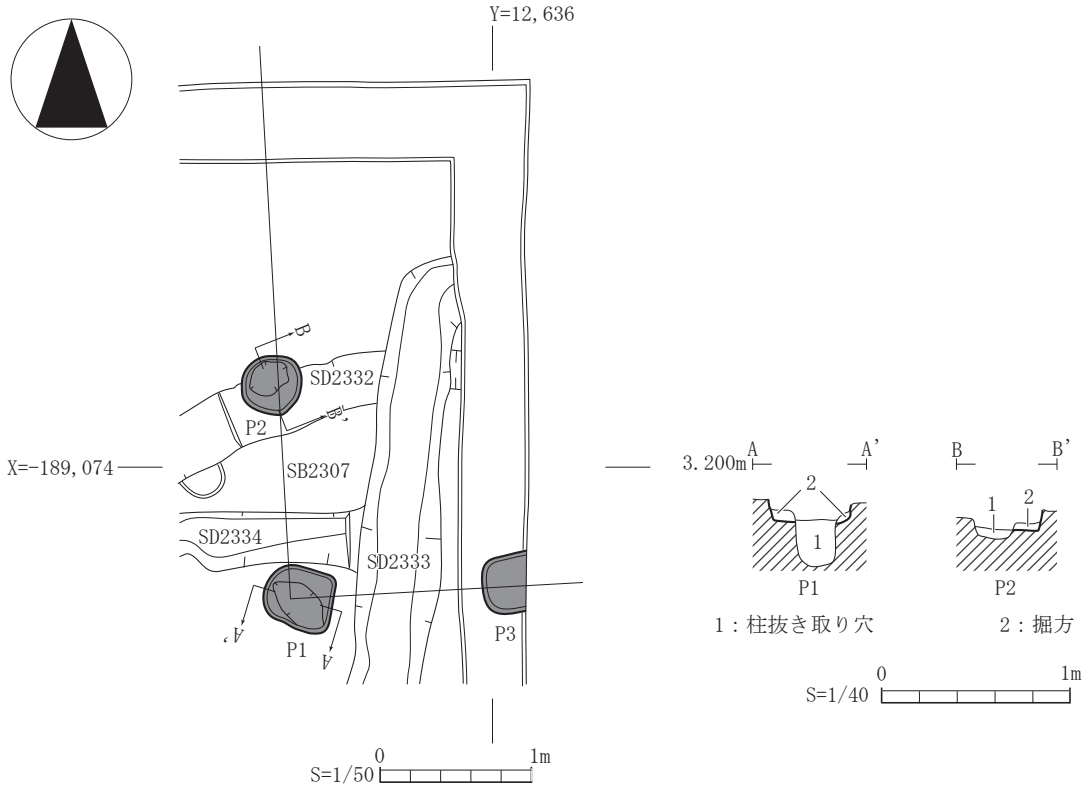
Ⅳ層：すべての調査区で確認した。この上面では、ＳＤ2310溝跡をはじめ古代の遺構の検出面となっている。暗褐色粘土で厚さは９～15cmである。

Ⅴ層：すべての調査区で確認した。古代の基盤層である。黄褐色粘土と黒褐色・オリーブ褐色砂の互層で厚さは27～58cmである。

Ⅵ層：第191次調査区を除くすべての調査区で確認した。黄褐色粘質土と黄灰色粘質土が１～２cmずつ互層に堆積し、厚さは５～６cmである。後述する古墳時代の水田層（Ⅶ層）が廃絶した後に堆積した自然堆積層とみられる。

Ⅶ層:すべての調査区で確認した。古墳時代前期の水田耕作土層である。黒色粘土で厚さは７～21cmである。

Ⅷ層：すべての調査区で確認した。黄褐色砂である。



第５図　ＳＢ2307 掘立柱建物跡　平面図・断面図

（２）発見遺構と遺物

〔Ｖ層上面発見遺構〕

ＳＢ2307掘立柱建物跡（第５図）

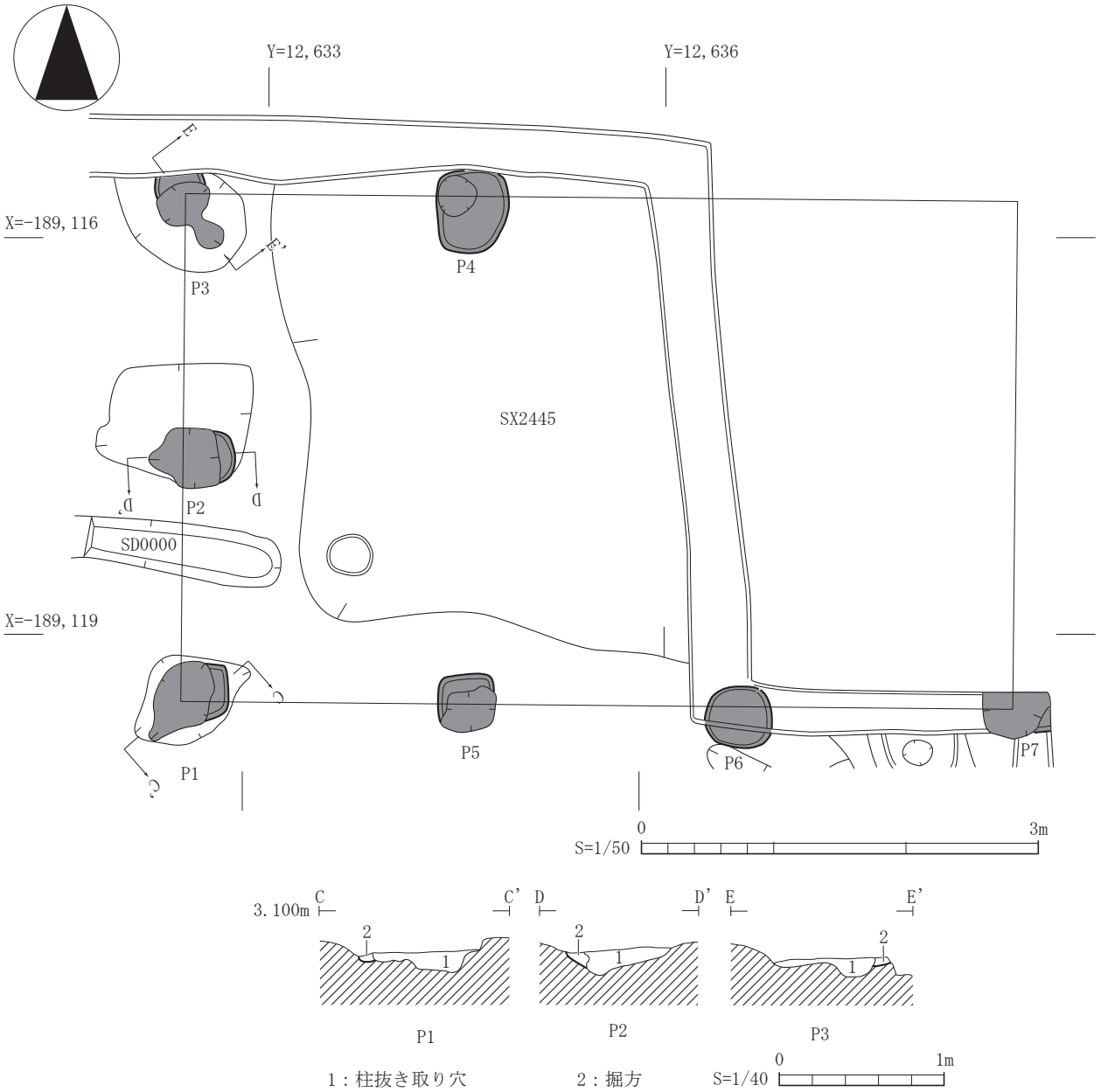
【位置】第187次調査区東側で発見した。

【規模】調査区の北と東にのびているため全容は不明である。Ｐ２の北側でもう１基の柱穴が存在すると推定されるが、調査区の排水溝に壊され、発見できなかった。南北２間以上、東西２間以上の建物と推測される。

【柱痕跡・柱抜き取り穴の有無】柱穴は３基（Ｐ１～３）発見し、そのすべてで柱抜き取り穴を確認した。。

【重複】ＳＤ2332と重複しており、これより新しい。

【方向・規模】方向は西側柱列で計ると北で西に約３度偏している。建物の規模は、西側柱列で3.1m以上、



第６図　ＳＢ2308 掘立柱建物跡　平面図・断面図

柱間は北から約1.6m、約1.5mである。

【掘方】平面形は方形もしくは円形であり、規模はＰ１で一辺38cm、深さ11cm、Ｐ２で直径39cm、深さ11cmである。埋土は、黒褐色粘質土にＶ層に起因する土を斑状に多く含む。

【柱抜き取り穴】埋土は、いずれも黒褐色粘質土にＶ層に起因する土を斑状に少量含む。

【遺物】出土していない。

ＳＢ2308掘立柱建物跡（第６図）

【位置】第191次調査区北東側で発見した。

【桁行・梁行】桁行３間、梁行２間の建物跡と推定される。

【柱痕跡･柱抜き取り穴の有無】柱穴は７基（Ｐ１～７）発見しており、そのすべてで柱抜き取り穴を確認した。

【重複】ＳＸ2445と重複しており、これより古い。

【方向・規模】方向は西側柱列で計るとほぼ真北を示している。建物の規模は、西側柱列で約3.9m、柱間は北から約２m、約1.9mである。

【掘方】平面形は方形もしくは円形であり、規模はＰ１で一辺36cm、深さ15cm、Ｐ２で直径41cm、深さ14cmである。埋土は暗オリーブ褐色土にＶ層に起因する土を斑状に多く含む。

【柱抜き取り穴】埋土はいずれも暗褐色土である。

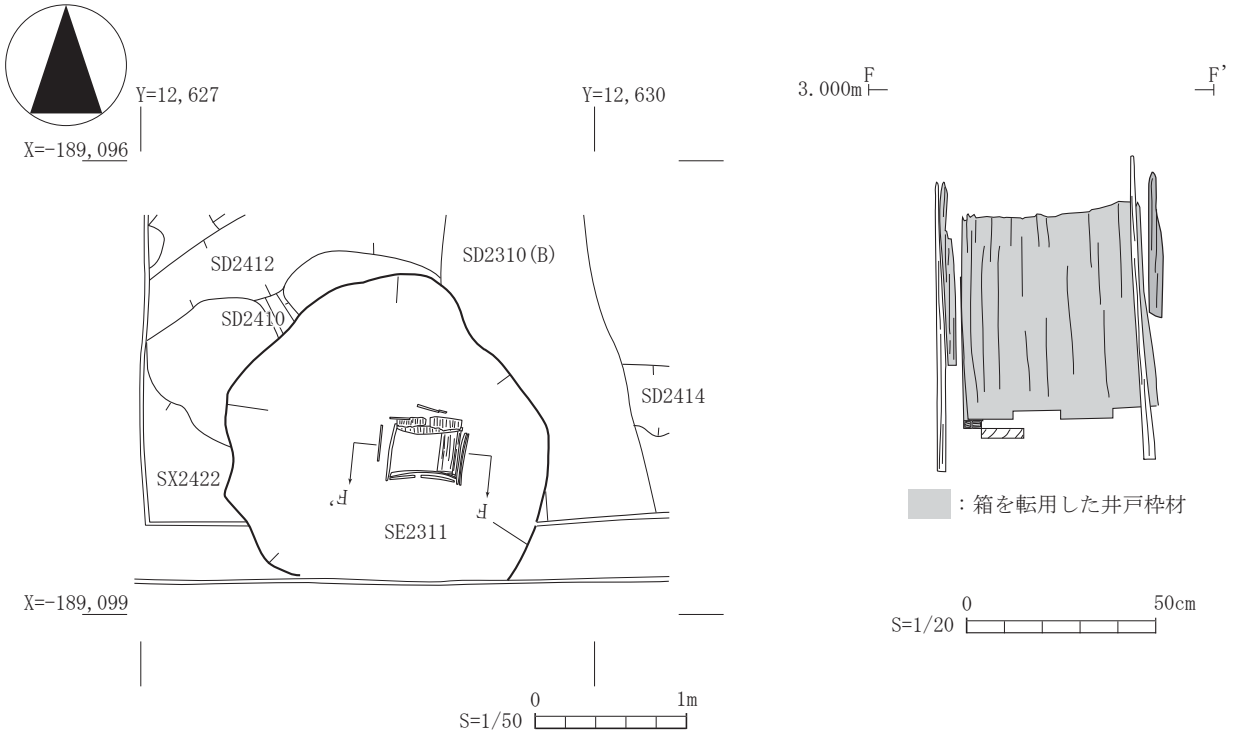
【遺物】出土していない。

ＳＥ2311井戸跡（第７図）

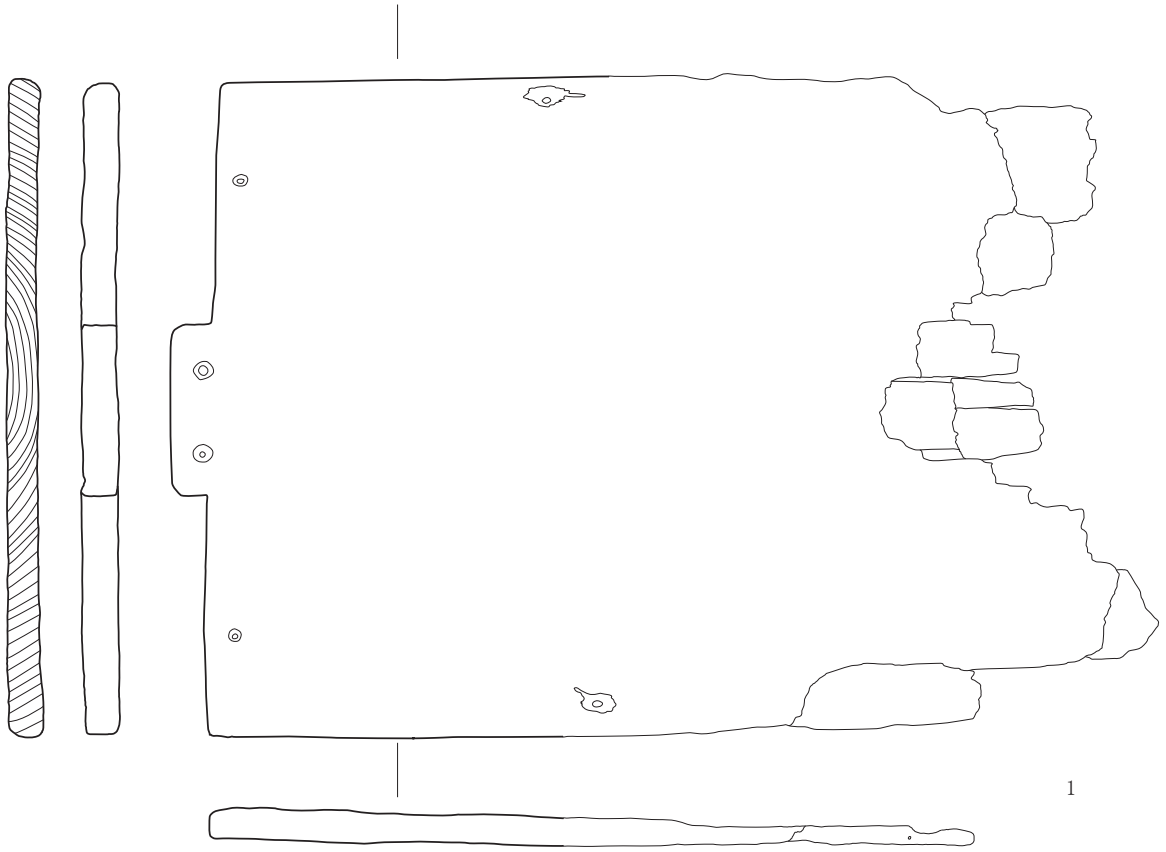
【位置】第189次調査区の南西側で発見した。

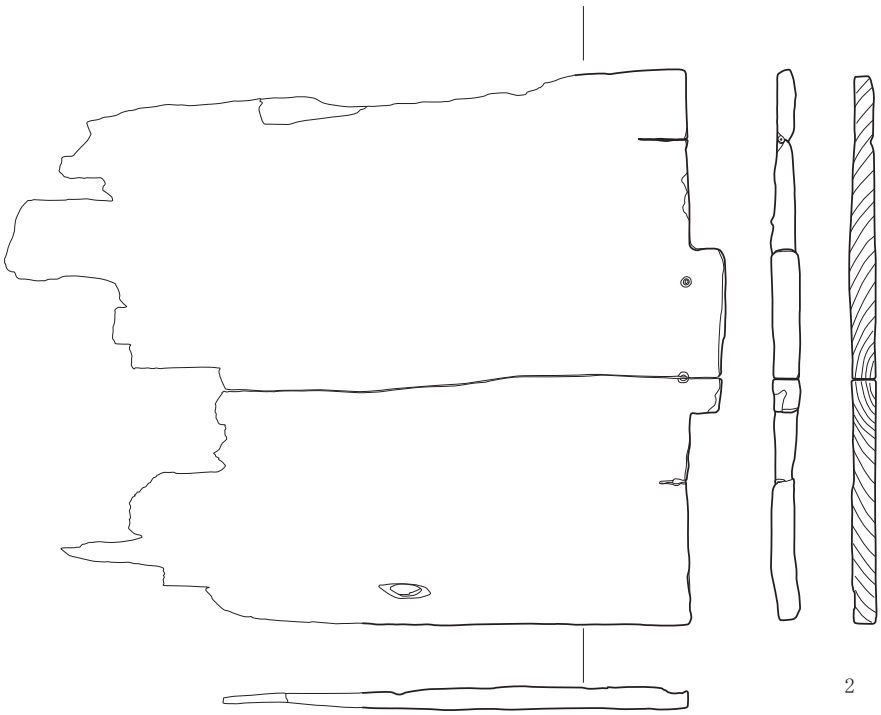
【重複】ＳＤ2410、ＳＸ2422と重複しており、それより新しい。

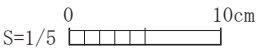
【井戸側】井戸側は掘方のやや東寄りで確認した。井戸側の構造は、支柱を用いずに、北辺と南辺の側板



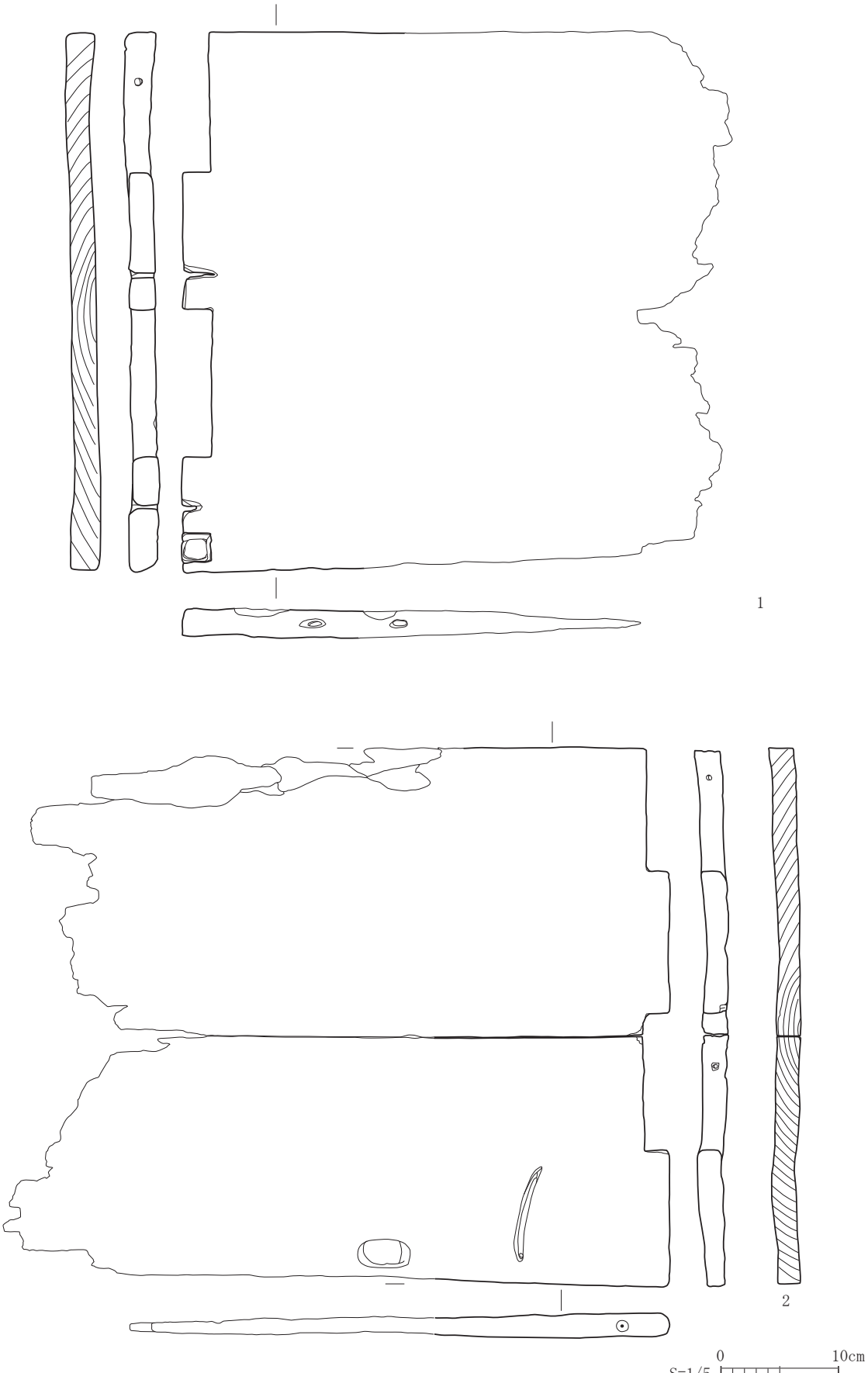
第７図　ＳＥ2311 井戸跡　平面図・立面図



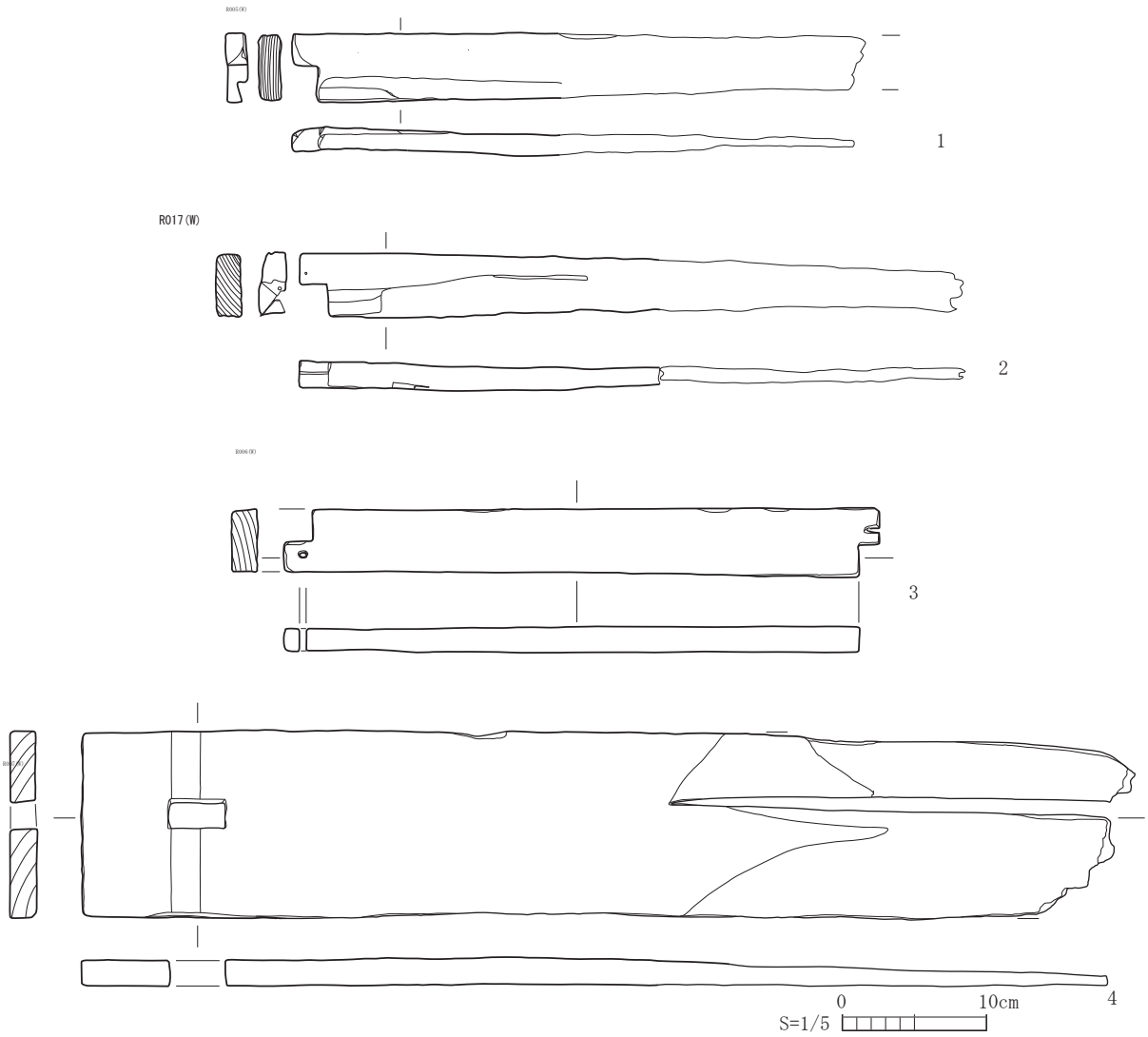




第８図　ＳＥ2311 井戸跡　出土木製品（１）



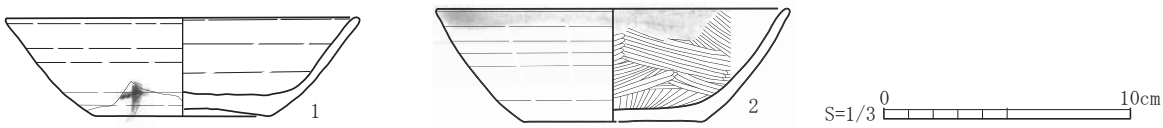
第９図　ＳＥ2311 井戸跡　出土木製品（２）



第 10 図　ＳＥ2311 井戸跡　出土木製品（３）　（単位：cm）

図版番号	番号	種類	法量	木取り	備考	登録番号
8	1	箱	最大長63.1cm　最大幅43.5cm　最大厚2.3cm	板目		W1
	2	箱	最大長47.5cm　最大幅35.7cm　最大厚1.7cm	板目		W4
9	1	箱	最大長46.0cm　最大幅46.1cm　最大厚2.5cm	板目		W2
	2	箱	最大長56.7cm　最大幅45.8cm　最大厚2.0cm	板目		W3
10	1	箱	最大長79.8cm　最大幅4.8cm　最大厚1.5cm	板目	蓋か	W5
	2	箱	最大長46.0cm　最大幅4.5cm　最大厚1.8cm	板目	蓋か	W17
	3	箱	最大長42.3cm　最大幅4.4cm　最大厚1.8cm	板目	蓋か	W6
	4	不明製品	最大長73.2cm　最大幅13.0cm　最大厚1.9cm	板目		W7

第８～10 図　ＳＥ2311 井戸跡　出土木製品　観察表



（単位：cm）

番号	種類	層位	特徴		口径残存率	底径残存率	器高	写真図版	登録番号	備考
			外面	内面						
1	須恵器坏	掘方	ロクロナデ、墨書 底部：回転糸切り	ロクロナデ	(14.2) 7/24	7.2 24/24	4.0		R4	Ⅴ類
2	土師器坏	1層	ロクロナデ、油煙 底部：回転糸切り	ロクロナデ、油煙 ミガキ→黒色処理	(14.2) 8/24	(7.4) 10/24	4.6		R13	BⅤ類

第11図　ＳＥ2311井戸跡　出土遺物

を東辺と西辺の側板のやや内側に組んだ状態で、東側と西側の土圧で押さえ込む構造となっている。井戸枠の平面形は東西方向に長い長方形で、南側の井戸枠でみると一辺48cm、西側の井戸枠でみると一辺38cmである。一部の縦板には、箱の部材とみられる板材を転用している。

【規模】検出面から井戸の底面までの深さは約85cmである。

【埋土】井戸枠内の埋土は黒褐色粘土、掘方埋土は黄灰色粘質土にⅤ層に起因する土を斑状に多く含む。

【遺物】井戸枠内から土師器坏（ＢⅤ類）（第11図２）・甕、丸瓦が、掘方埋土から須恵器坏（Ⅲ・Ⅴ類）（第11図１）・甕が出土している。井戸枠への転用材として、箱の部材（第８・９図、第10図１～３）及び不明製品（第10図４）が出土している。

ＳＤ2332溝跡（第12・25図）

【位置・形態】第187次調査区の東側で発見した東西方向から南北方向に屈曲する溝跡である。

【重複】ＳＢ2307、ＳＤ2333、ＳＫ2318、ＳＸ2361と重複しており、これらより古い。

【方向・規模】方向は、南北方向で北で東に約５度、東西方向で東で北に約２度にそれぞれ偏している。規模は、長さ5.7m以上、上幅31～78cm、深さ32cmである。

【埋土】１層確認し、Ⅴ層に起因する土を斑状に含む灰黄色粘質土である。

【遺物】土師器甕（Ｂ類）が出土している。

ＳＤ2333溝跡（第12・25図）

【位置・形態】第187次調査区の東側で発見した南北方向の溝跡で、北端で東側に屈曲する様子がうかがえる。

【重複】ＳＤ2332・2334、ＳＫ2318と重複しており、それらより新しい。

【方向・規模】方向は、北で東に約７度偏している。規模は、長さ5.5m以上、上幅56～78cm、深さ33cmである。

【埋土】１層確認し、Ⅴ層に起因する土を斑状に少量含む黄灰色粘質土である。

【遺物】土師器坏（ＢⅤ類）・甕（Ｂ類）、須恵器甕が出土している。

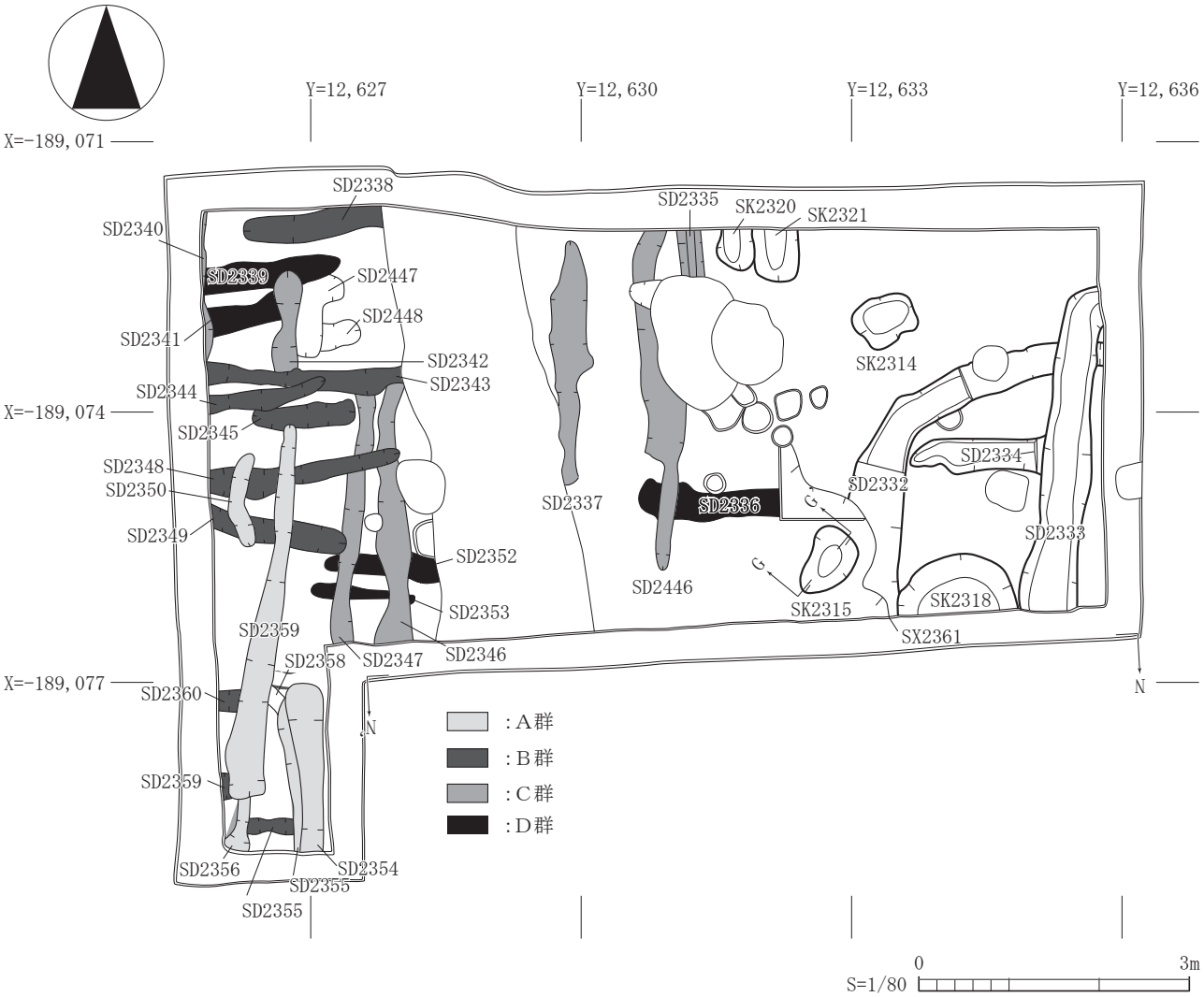
ＳＤ2334溝跡（第12図）

【位置・形態】第187次調査区の東側で発見した東西方向の溝跡である。

【重複】ＳＤ2332・2333と重複しており、それらより古い。

【方向・規模】方向は、東で南に約１度に偏している。規模は、長さ1.8m以上、上幅42～47cmである。

【遺物】出土していない。



第 12 図　第 187 次調査区　Ⅴ層上面検出遺構平面図

ＳＤ2424溝跡（第14図）

【位置・形態】第189次調査区の東側で発見した南北方向の溝跡である。

【重複】重複している遺構は無い。

【方向・規模】方向は、北で西に約12度に偏している。規模は、長さ2.4m以上、上幅95㎝である。

【埋土】１層確認し、Ⅴ層に起因する土を斑状に多量に含む黒褐色粘質土である。

【遺物】出土していない。

ＳＤ2425溝跡（第14・25図）

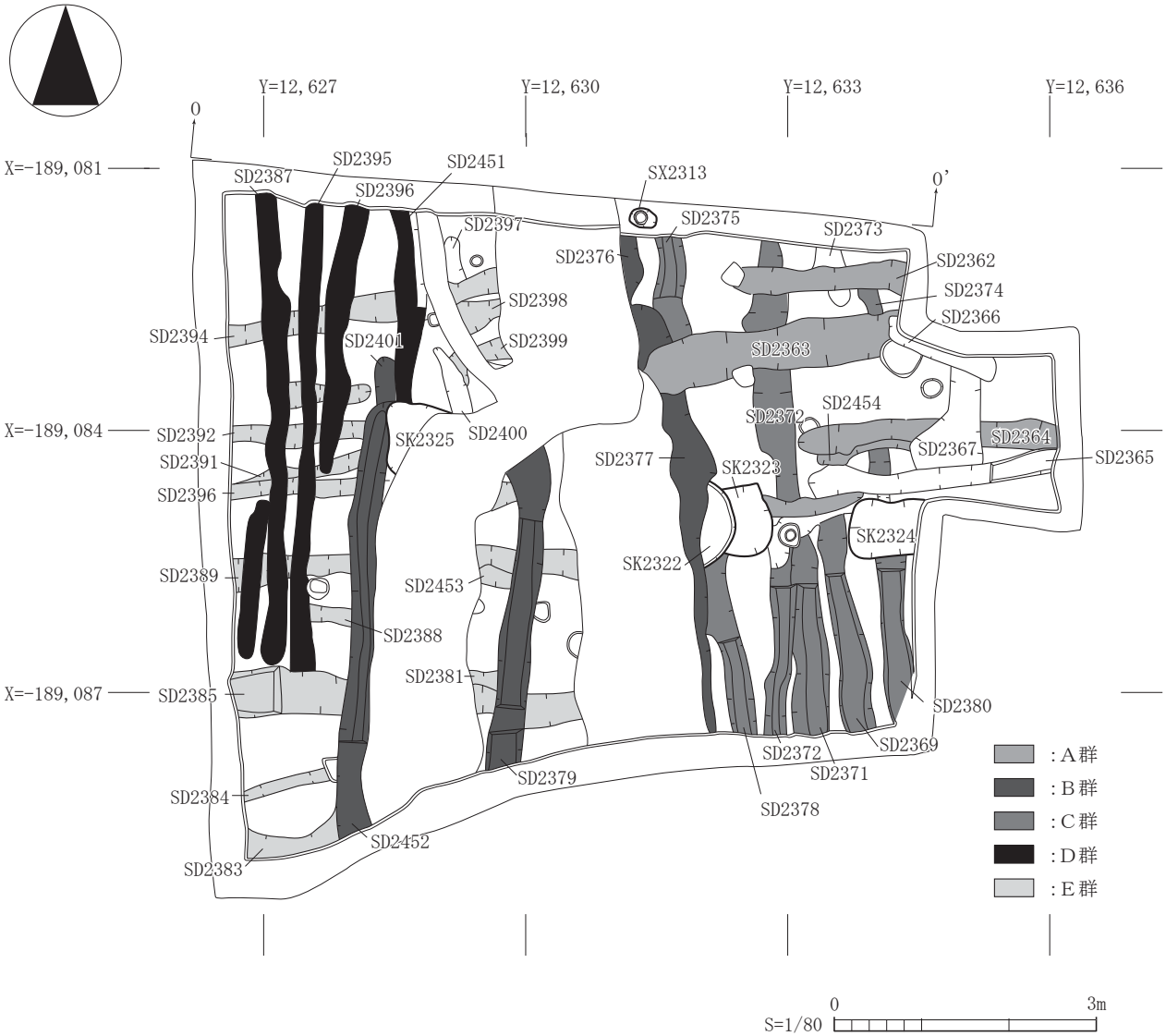
【位置・形態】第189次調査区の東側で発見した南北方向の溝跡である。

【重複】重複している遺構は無い。

【方向・規模】方向は、ほぼ真北を示している。規模は、長さ1.6m以上、上幅30 ～ 38㎝である。

【埋土】１層確認し、Ⅴ層に起因する土を斑状に多量に含む黄灰色粘質土である。

【遺物】出土していない。



第 13 図　第 188 次調査区検出　溝跡・土壙・土器埋設遺構

ＳＤ2412溝跡（第14図）

【位置・形態】第189次調査区の南西側で発見した東西方向の溝跡である。

【重複】ＳＤ2410と重複しており、これより新しい。

【方向・規模】方向は、西側は東で約30北に偏しており、東側は真東を示している。規模は、長さ2.1m以上、上幅32 ～ 56㎝である。

【遺物】出土していない。

ＳＤ2426溝跡（第15図）

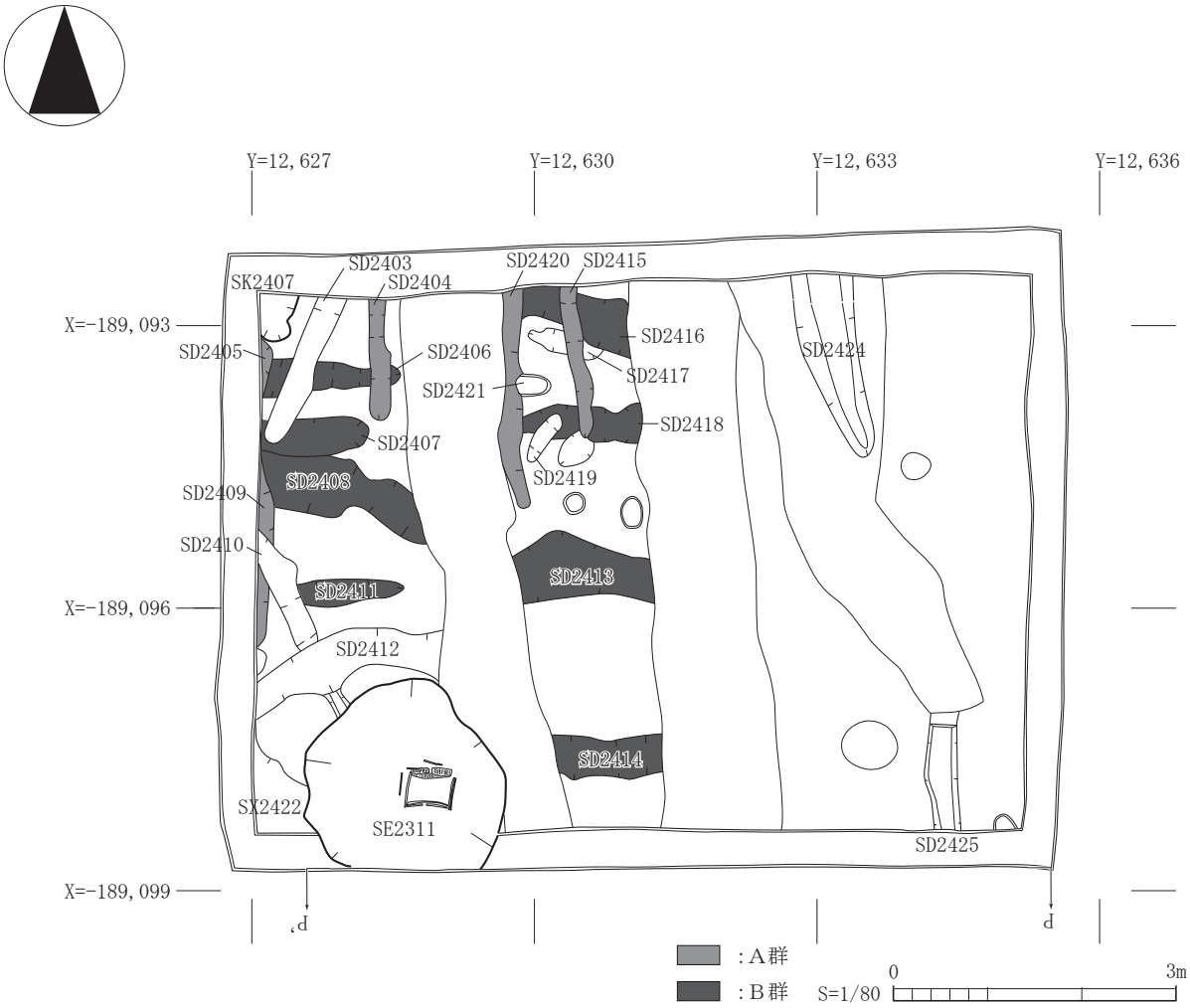
【位置・形態】第190次調査区の東側で発見した南北方向の溝跡である。

【重複】ＳＤ2426と重複しており、これより古い。

【方向・規模】方向は、ほぼ真北を示している。規模は、長さ1.6m以上、上幅30 ～ 38㎝である。

【埋土】１層確認し、Ｖ層に起因する土を斑状に多量に含む黄灰色粘質土である。

【遺物】土師器甕、須恵器甕が出土している。



第 14 図　第 189 次調査区　Ⅴ層上面検出　溝跡・土壙・井戸跡

ＳＤ2438溝跡（第16図）

【位置・形態】第191次調査区の南側で発見した東西方向の溝跡で、調査区東側で南北方向の溝跡と接続している。

【重複】ＳＤ2439・2441・2444、ＳＫ2449と重複しており、ＳＤ2439より新しく、ＳＤ2441・2444、ＳＫ2449より古い。

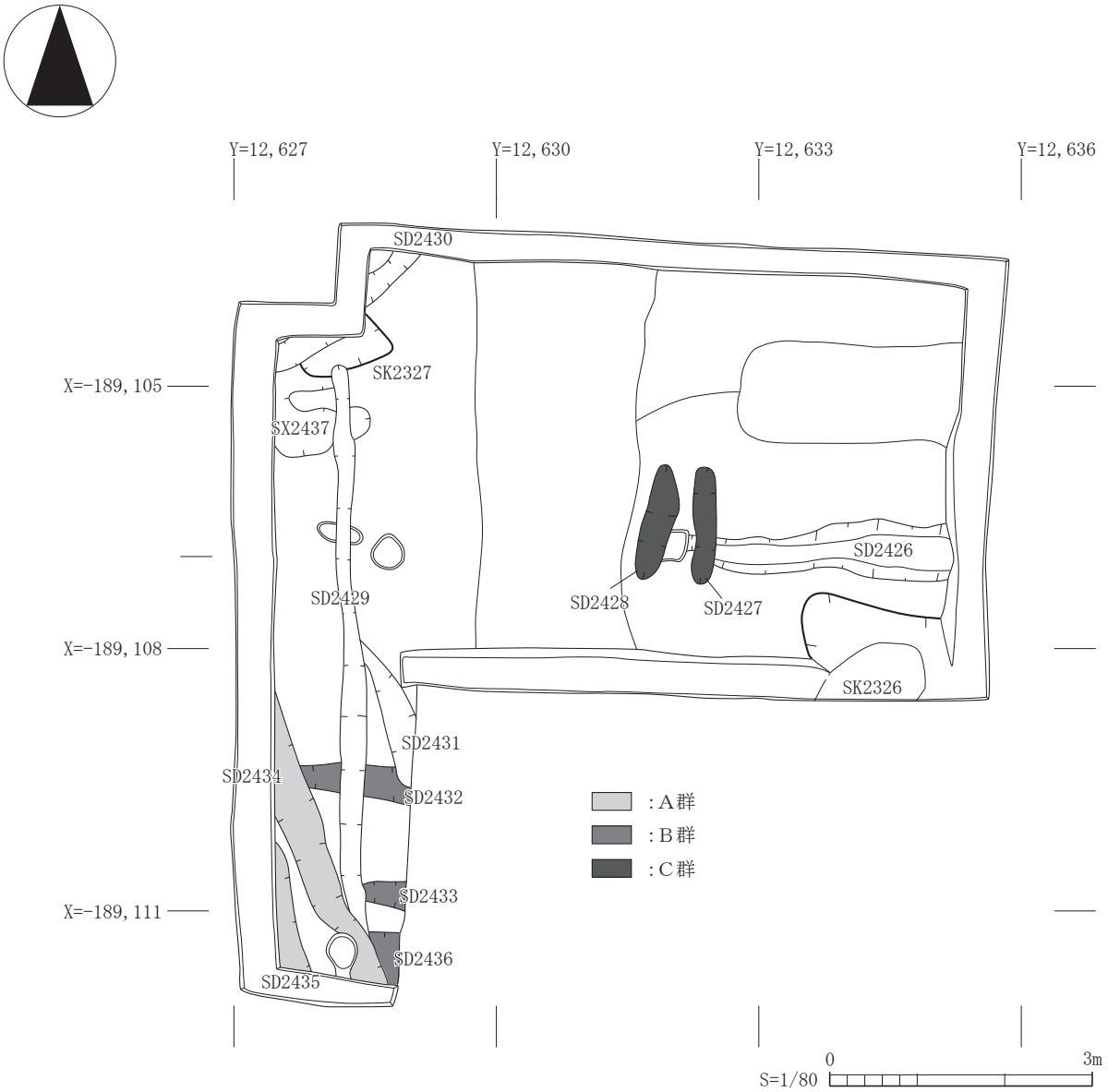
【方向・規模】方向は、東西方向のもので東で南に５度偏している。規模は、東西方向で長さ6.2m以上、上幅32 ～ 62cmである。

【遺物】出土していない。

第187次調査区発見小溝群跡（第12図）

【位置】調査区の西半分で確認した。

【方向・変遷】小溝跡の方向と重複関係から新しい順にＡ群のＳＤ2350・2354 ～ 2356・2359とＢ群のＳＤ2338・2343 ～ 2345・2348・2349・2355・2359・2360、Ｃ群のＳＤ2335・2337・2340・2342・2346・2347・2446、Ｄ群のＳＤ2336・2339・2341・2346・2347・2352・2353に分けられる。方向はＡ群が南北方向、Ｂ群が東西方向、Ｃ群が南北方向、Ｄ群が東西方向である。



第 15 図　第 190 次調査区　Ⅴ層上面検出遺構平面図

【重複】ＳＸ2361と重複しており、それより古い。

【規模】ＳＤ2359でみると、長さ5.2m、上幅15 ～ 52cmである。

【埋土】Ⅴ層に起因する土を斑状に含む黄灰色粘質土である。

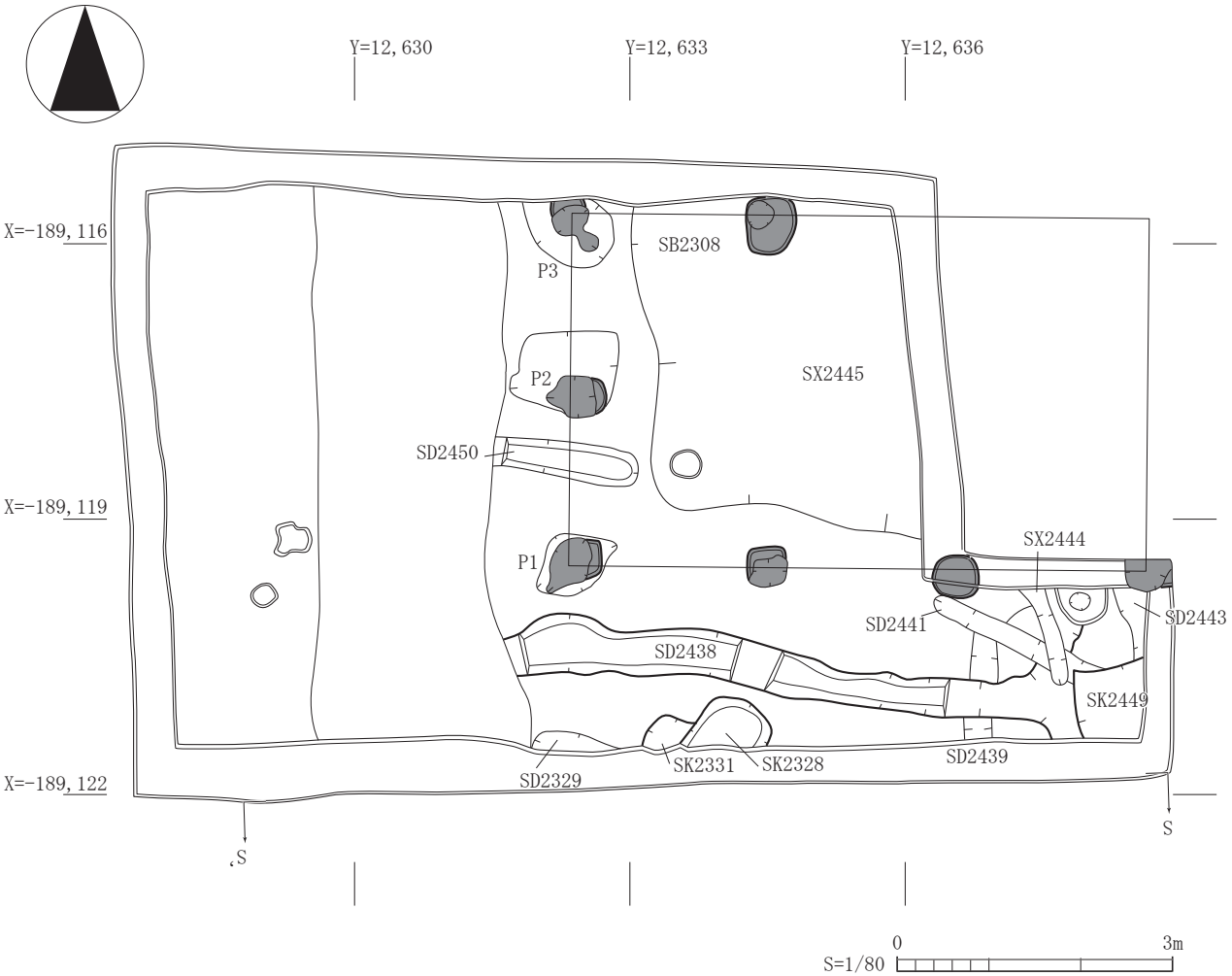
【遺物】Ｂ群から土師器坏（Ｂ類）・甕（Ｂ類）が出土している。

第188次調査区発見小溝群跡（第13図）

【位置】調査区の全域で確認した。

【方向・変遷】小溝跡の方向と重複関係から新しい順にＡ群のＳＤ2362 ～ 2364・2454、Ｂ群のＳＤ2376・2377・2379・2452、Ｃ群のＳＤ2371 ～ 2373・2375・2378・2380、Ｄ群のＳＤ2387・2389・2395・2396・2451、Ｅ群のＳＤ2381・2383・2384・2388・2389・2391・2392・2394・2396に分けられる。方向はＡ群が南北方向、Ｂ群が東西方向、Ｃ群が南北方向、Ｄ群が南北方向、Ｅ群が東西方向である。

【重複】ＳＫ2322 ～ 2325と重複しており、ＳＫ2324・2325より古く、ＳＫ2322・2323はＡ群より新しく、



第 16 図　第 191 次調査区　Ⅴ層上面検出遺構平面図

Ｂ群より古い。

【規模】ＳＤ2395でみると、長さ5.7m以上、上幅12 ～ 29cmである。

【埋土】Ⅴ層に起因する土を斑状に含む黒褐色粘質土である。

【遺物】Ａ群から丸瓦が、Ｃ群から須恵器坏が出土している。

第189次調査区発見小溝群跡（第14図）

【位置】調査区の西側で確認した。

【方向・変遷】小溝跡の方向と重複関係から新しい順にＡ群のＳＤ2404・2405・2409・2410・2415・2420、Ｂ群のＳＤ2406 ～ 2408・2411・2413・2414・2416・2418に分けられる。方向はＡ群が南北方向、Ｂ群が東西方向である。

【重複】ＳＤ2403・2410・2417・2419と重複しており、ＳＤ2403・2410・2419より古く、ＳＤ2417より新しい。

【規模】ＳＤ2320でみると、長さ2.3m以上、上幅15 ～ 28cmである。

【遺物】出土していない。

第190次調査区発見小溝群跡（第15図）

【位置】調査区の中央と西側で確認した。

【方向・変遷】小溝跡の方向と重複関係から新しい順にＡ群のＳＤ2434・2435、Ｂ群のＳＤ2432・2433・2436、重複関係が不明なものとしてＣ群のＳＤ2427・2428に分けられる。方向はＡ群が南北方向、Ｂ群が東西方向、Ｃ群が南北方向である。

【重複】ＳＤ2426・2429・2431と重複しており、ＳＤ2429はＡ群より古く、Ｂ群より新しい。ＳＤ2431はＢ群より新しい。ＳＤ2426はＣ群より新しい。

【規模】ＳＤ2434でみると、長さ3.7m以上、上幅26 ～ 49cmである。

【遺物】Ａ群から土師器坏（Ｂ類）・甕（Ｂ類）が、Ｃ群から土師器坏（Ｂ類）が出土している。。

ＳＫ2314土壙（第12図）

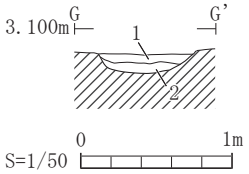
【位置】第187次調査区の北東側で発見した。

【重　複】他の遺構との重複は無い。

【平面形・規模】平面形は不整形で、規模は東西66cm、南北52cmである。

【遺物】土師器甕（Ｂ類）が出土している。

ＳＫ2315土壙（第12・17図）



第 17 図　ＳＫ2315 土壙　断面図

【位置】第187次調査区の南側で発見した。

【重複】ＳＸ2361と重複しており、これより古い。

【平面形・規模】平面形は楕円形で、規模は長軸80cm、短軸54cm、深さ16cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

【埋土】２層確認した。１層はⅤ層に起因する土を斑状に含む黒褐色粘質土で、２層は黒褐色粘質土である。

【遺物】出土していない。

ＳＫ2318土壙（第12図）

【位置】第187次調査区の南東側で発見した。

【重複】ＳＤ2332・2333と重複しており、ＳＤ2332より新しく、ＳＤ2333より古い。ＳＤ2333との重複は不明である。

【平面形・規模】平面形はほぼ円形で、規模は直径90cm、深さ17cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

【埋土】２層確認した。１層は砂を多く含む黒褐色土で、２層は黒褐色砂である。

【遺物】土師器坏（ＢⅤ類）・甕（Ａ類）、須恵器坏（Ⅲ類）・甕が出土している。

ＳＫ2320土壙（第12図）

【位置】第187次調査区の北側で発見した。

【重複】ＳＫ2321と重複しており、それより新しい。

【平面形・規模】平面形はほぼ楕円形で、規模は長軸47cm以上、短軸41cm、深さ11cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

【埋土】１層確認し、Ⅴ層に起因する土を斑状に含む黒褐色粘質土土である。

【遺物】出土していない。

ＳＫ2321土壙（第12図）

【位置】第187次調査区の北側で発見した。

【重複】ＳＫ2320と重複しており、それより古い。

【平面形・規模】平面形はほぼ楕円形で、規模は長軸58cm以上、短軸50cm、深さ７cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

【埋土】１層確認し、Ｖ層に起因する土を斑状に多量に含む黒褐色粘質土である。

【遺物】出土していない。

ＳＫ2322土壙（第13図）

【位置】第188次調査区の中央で発見した。

【重複】小溝跡であるＳＤ2377・ＳＤ2378、ＳＫ2323と重複しており、ＳＤ2378とＳＫ2323より新しく、ＳＤ2377より古い。

【平面形・規模】平面形は円形で、規模は直径98cmである。

【遺物】出土していない。

ＳＫ2323土壙（第13図）

【位置】第188次調査区の中央で発見した。

【重複】ＳＫ2322及び小溝群と重複しており、小溝群より新しく、ＳＫ2322より古い。

【平面形・規模】平面形は不整形で、規模は南北80cmである。

【遺物】出土していない。

ＳＫ2324土壙（第13図）

【位置】第188次調査区の東側で発見した。

【重複】小溝群と重複しており、これらより新しい。

【平面形・規模】平面形は長方形で、短辺66cm、長編72cm以上である。

【遺物】出土していない。

ＳＫ2407土壙（第14図）

【位置】第189次調査区の北西隅で発見した。

【重複】重複している遺構はない。

【平面形・規模】平面形は不整形で、南北50cm以上、東西40cm以上である。

【遺物】出土していない。

ＳＫ2326土壙（第15図）

【位置】第190次調査区の南東隅で発見した。

【重複】重複している遺構は無い。

【平面形・規模】平面形は不整形で、南北1.2m以上cm、東西1.7m以上である。

【遺物】土師器甕（Ｂ類）、須恵器坏（Ⅲ類）・甕が出土している。

ＳＫ2327土壙（第15図）

【位置】第190次調査区の北西隅で発見した。

【重複】ＳＤ2429・2430、ＳＸ2437と重複しており、ＳＸ2437より新しく、SD2429・2430より古い。

【平面形・規模】平面形は不整形で、南北1.2m以上cm、東西1.7m以上である。

【遺物】出土していない。

ＳＫ2328土壙（第16図）

【位置】第191次調査区の東側で発見した。

【重複】ＳＫ2331と重複しており、これより新しい。

【平面形・規模】平面形は方形と推測され、一辺70cm以上である。

【遺物】出土していない。

ＳＫ2331土壙（第16図）

【位置】第191次調査区の東側で発見した。

【重複】ＳＫ2328と重複しており、これより古い。

【平面形・規模】ＳＫ2328に壊され、また調査区外へのびていることから、平面形は不明である。南北36cm以上、東西51cm以上である。

【遺物】出土していない。

ＳＫ2449土壙（第16図）

【位置】第191次調査区の東側で発見した。

【重複】ＳＤ2438・2441・2443と重複しており、これらより新しい。

【平面形・規模】平面形は方形と推測され、一辺77cm以上である。

【遺物】出土していない。

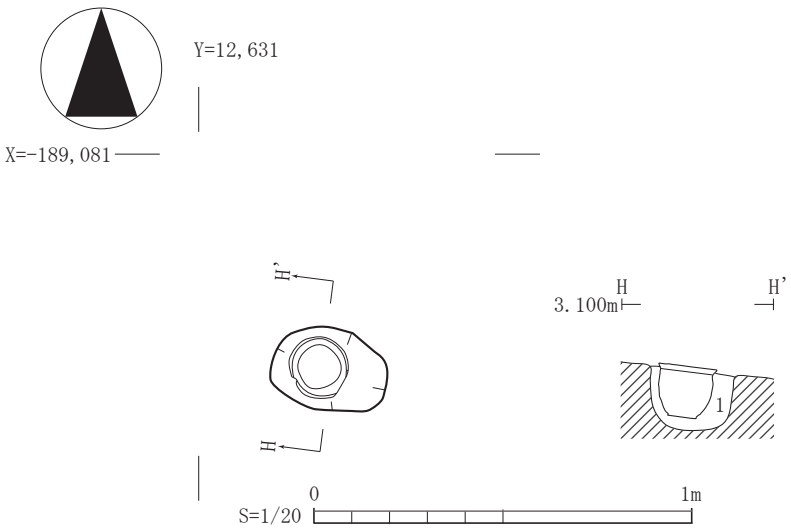
ＳＸ2313土器埋設遺構（第13・18図）

【位置】第188次調査区の北側で発見した。土師器甕を掘方に正位で埋設した土器埋設遺構である。

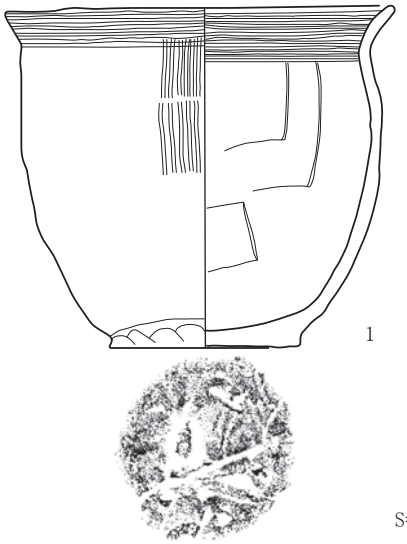
【重複】重複している遺構はない。

【掘方】平面形は楕円形であり、規模は長軸30cm、短軸22cm、深さ17cmである。埋土はＶ層に起因する土を斑状に含む黒褐色粘質土である。

【遺物】土師器甕（Ａ類）（第19図１）が出土している。



第18図　ＳＸ2313土器埋設遺構　平面図・断面図



番号	種類	特徴		口径残存率	底径残存率	器高	写真図版	登録番号	備考
		外面	内面						
1	土師器甕	ハケメ→ナデ 底部：木葉痕	ヘラナデ→ヨコナデ	(15.4) 21/24	7.6 24/24	12.4	12-4	R1	A類

第19図　ＳＸ2313土器埋設遺構　出土遺物

ＳＸ2445（第16図）

【位置】第191次調査区の北東側で発見した浅い落ち込みである。

【重複】ＳＢ2308と重複しており、これより新しい。

【平面形・規模】調査区外に延びているが方形と推測される。規模は南北4.0ｍ以上、東西3.2ｍ以上である。

【遺物】出土していない。

〔Ⅳ層上面発見遺構〕

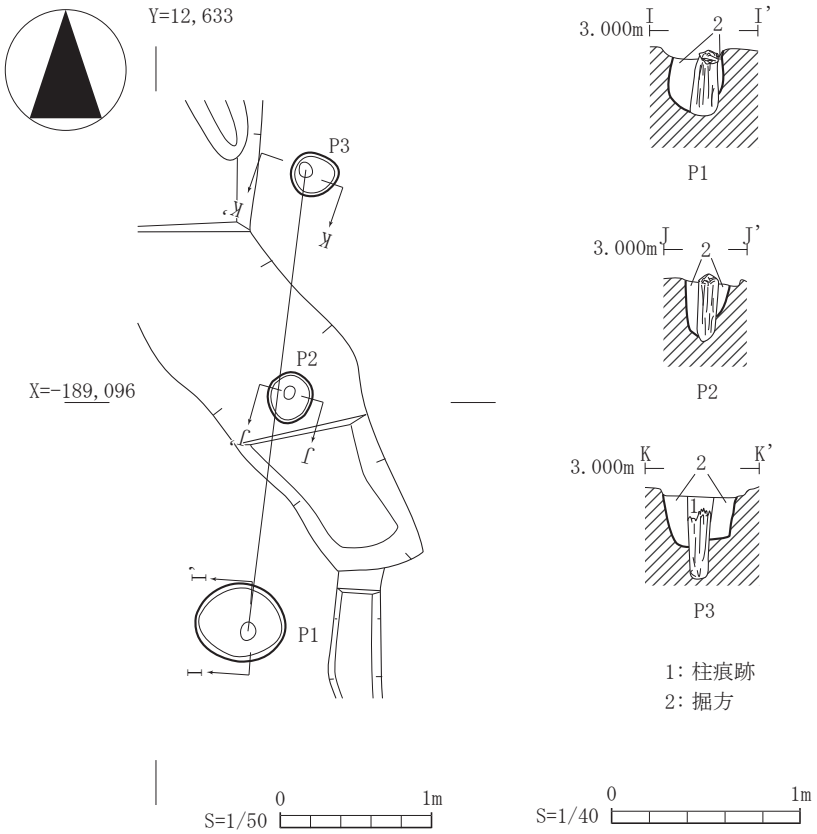
ＳＡ2309柱列跡（第20図）

【位置】第189次調査の東側で発見した。

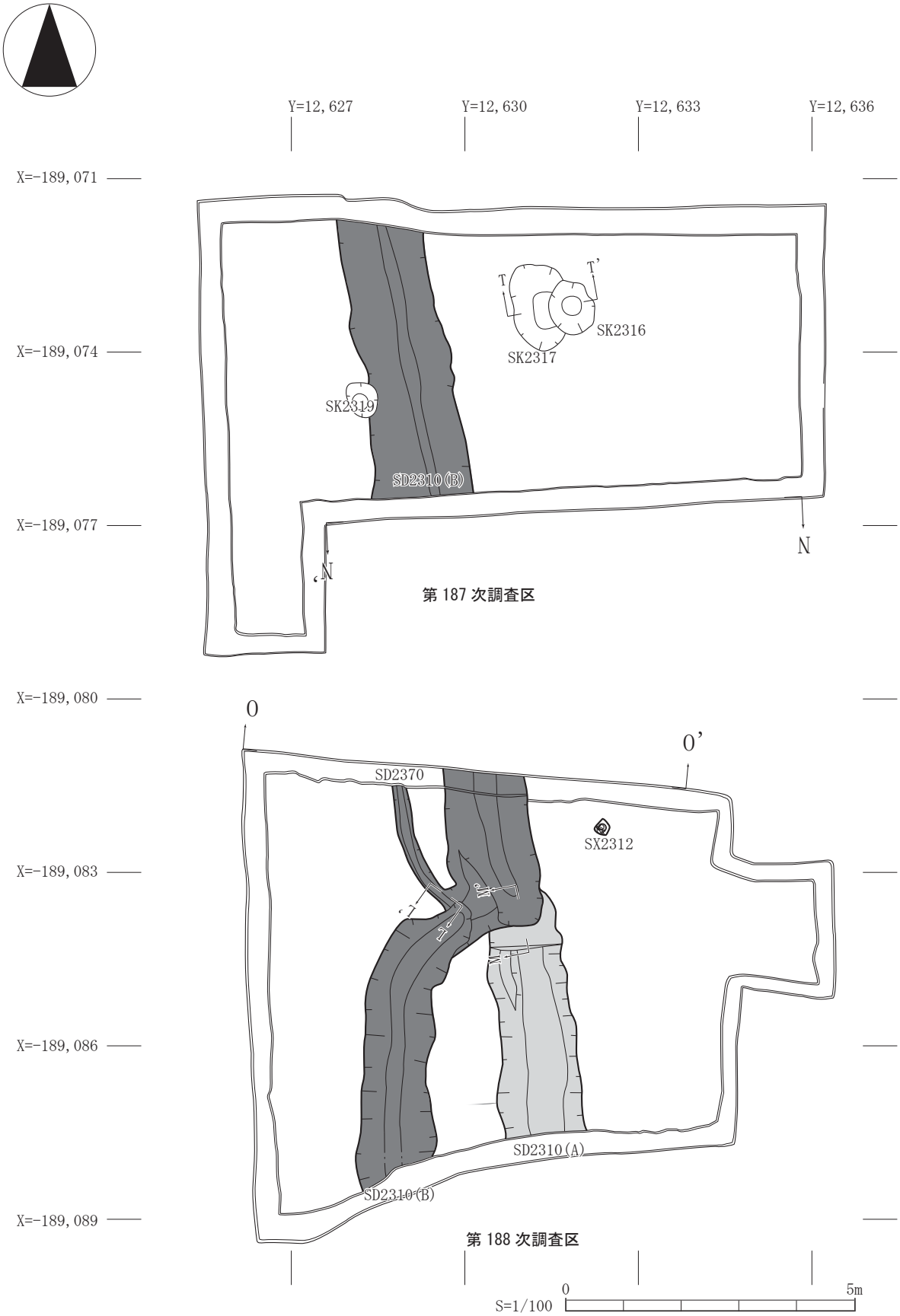
【柱間】２間分確認した。さらに第189次調査区の範囲を超えて南に延びる可能性もある。

【柱痕跡・柱抜き取り穴の有無】柱穴は３基（Ｐ１～３）を発見しており、そのすべてで柱材を確認した。

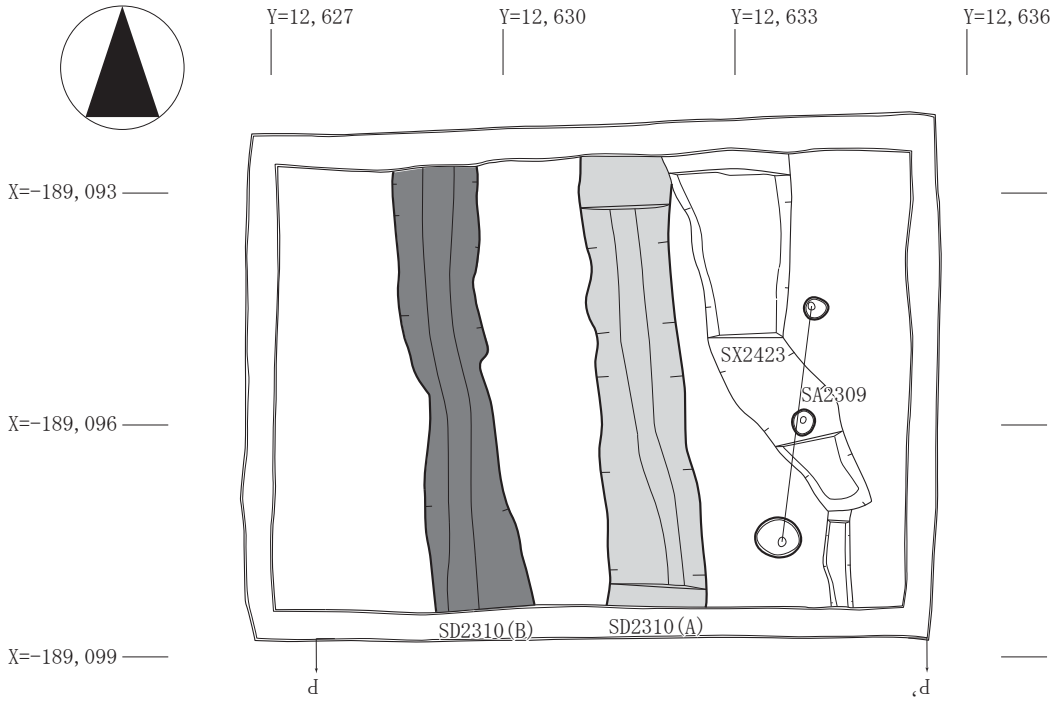
【重複】ＳＸ2423と重複してお



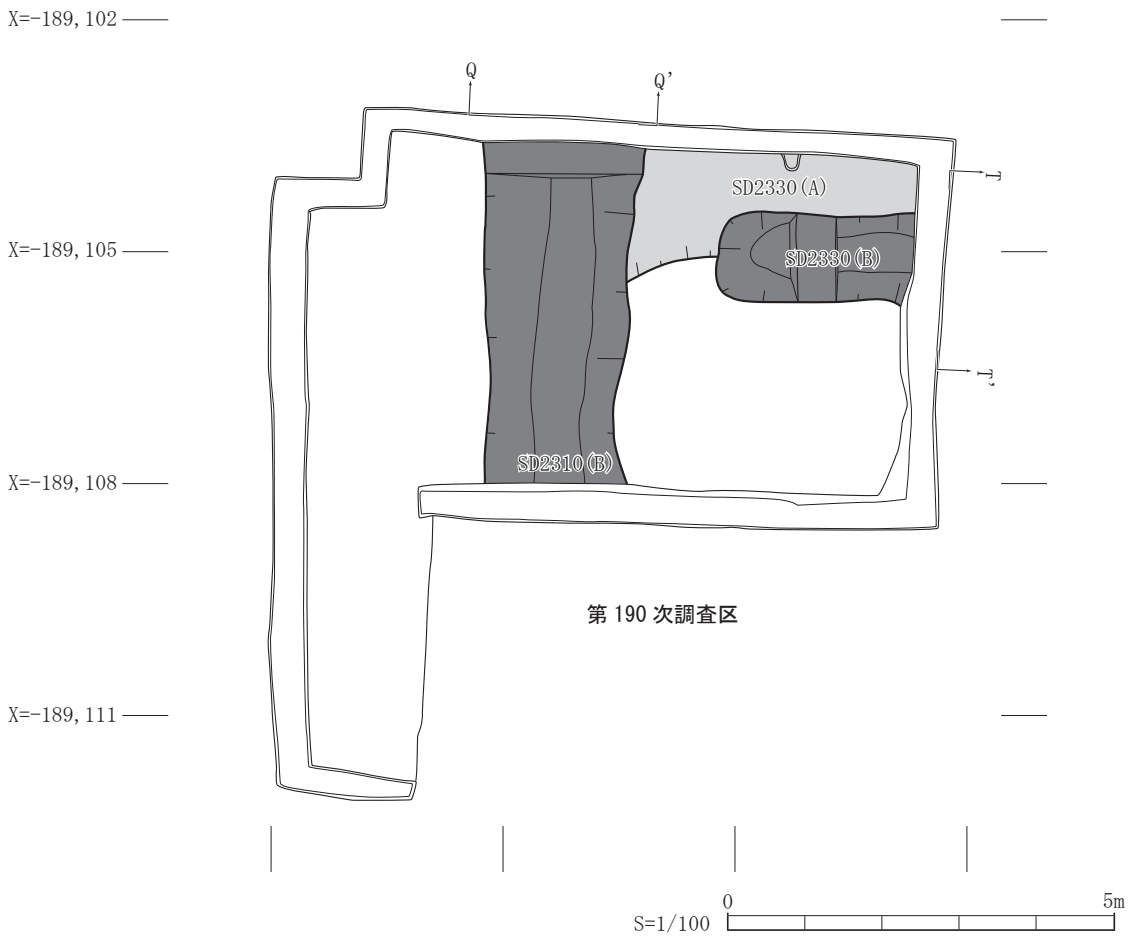
第20図　ＳＡ2309柱列跡　平面図・断面図



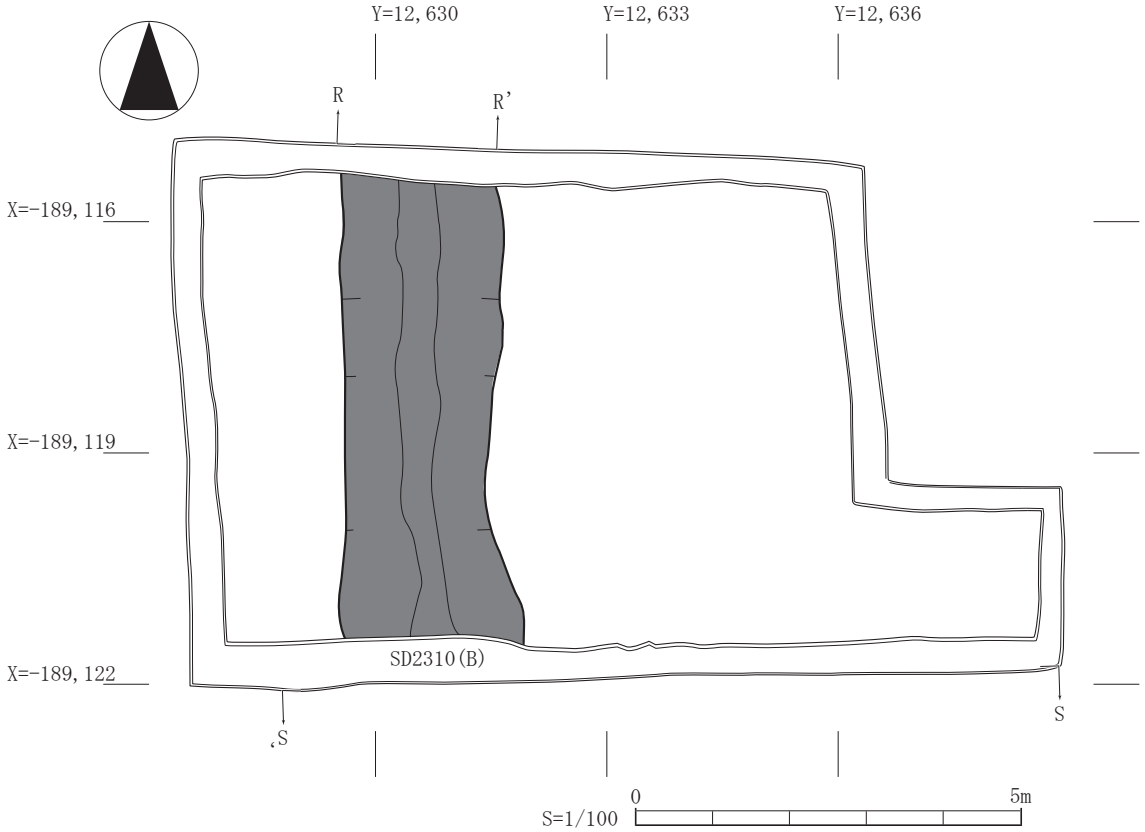
第 21 図　ＳＤ2310 溝跡（第 187・188 次調査区）　平面図



第 189 次調査区



第 190 次調査区



第 23 図　ＳＤ2310 溝跡（第 191 次調査区）　平面図

り、これより新しい。

【方向･規模】方向は北で東に７度偏している。柱列の規模は、1.54mあり、柱間は北から73㎝、81㎝である。

【掘方】平面形は円形である。埋土はＶ層に起因する土を斑状に含む黒色粘質土である。

【遺物】出土していない。

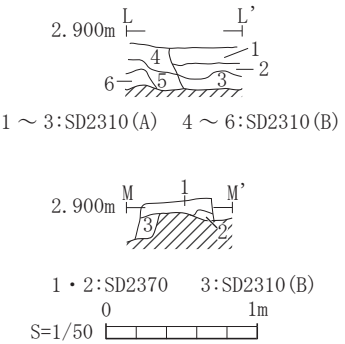
ＳＤ2310溝跡（第21 ～ 25図）

【位置】すべての調査区で発見した南北方向の溝跡である。

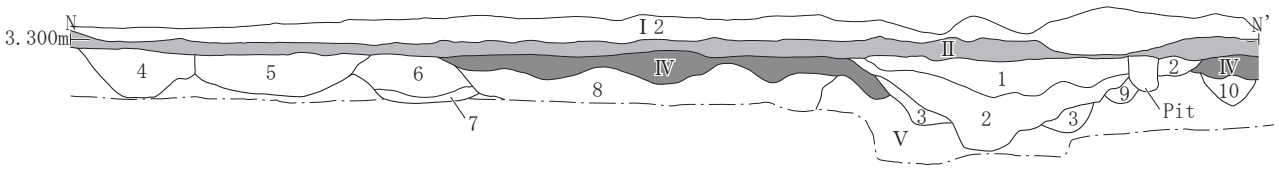
【変遷】重複関係から２時期（Ａ期→Ｂ期）の変遷を確認した。Ａ・Ｂ両時期ともほぼ同じ位置と方向をであるが、第188次調査区と第189次調査区間では、Ｂ期はＡ期の2.4 ～ 2.6m西側にその位置を変えている。また、第188次調査で発見したＳＤ2370はＢ期と接続している。Ｂ期では、いずれも埋土中に灰白色火山灰が自然堆積していることからＳＤ2330（Ｂ）と東側近接地で調査した第175次調査区のＳＤ2004は同時に存在していることが明らかである。Ａ期についてもＳＤ2330Ａ及びＳＤ2003Ａと接続するものとみられる。

【方向】第168次調査区から第188次調査区の北側までは北で約９度西に、第188次調査区の南側から第189次調査区までは北で約５度西に、それぞれ偏している。第190次調査区から第191次調査区まではほぼ真北を示している。

【長さ】今回の調査ではＡ期で51.4m、Ｂ期では51.6m確認し、南側は調査区外へと延びている。北側に隣接する第168次調査で、北側延長部分を発見しており、それとあわ

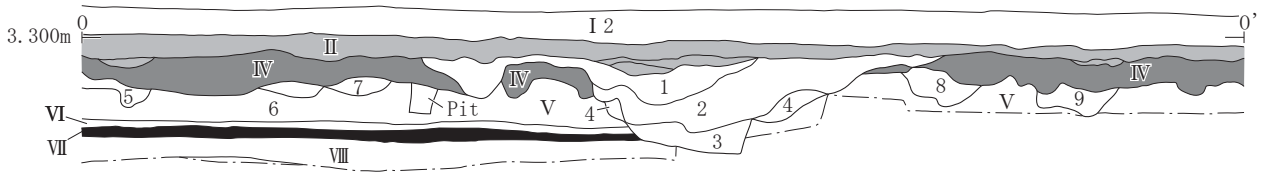


第 24 図　ＳＤ2310 溝跡　断面図（１）



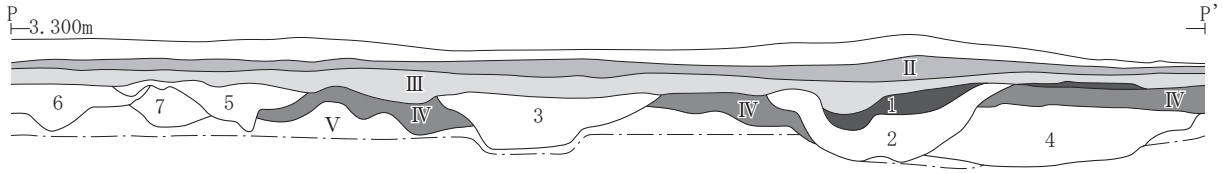
1・2:SD2310(B)　3:SD2310(A)　4:SD2333　5:SK2318　6・7:SD2332　8:SX0000　9: 小溝跡　10:SD2346

第 187 次調査区　南壁断面



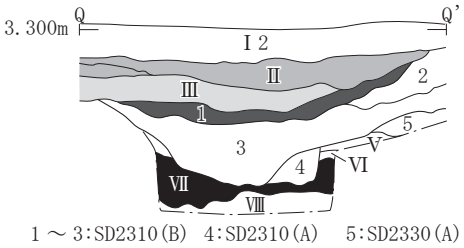
1 ～ 3:SD2310(B)　4:SD2310(A)　5: 小溝跡　6:SD2395　7:SD2396　8:SD2375　9:SD2372

第 188 次調査区　北壁断面



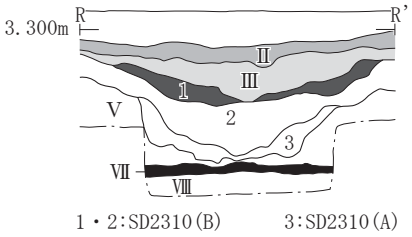
1・2:SD2310(B)　3:SD2310(A)　4:SE2311　5:SK0000　6:SK0000　7:SD2425

第 189 次調査区　南壁断面



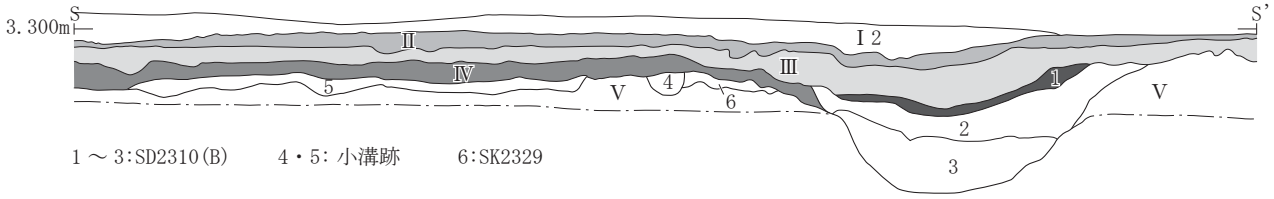
1 ～ 3:SD2310(B)　4:SD2310(A)　5:SD2330(A)

第 190 次調査区　北壁断面



1・2:SD2310(B)　3:SD2310(A)

第 191 次調査区　北壁断面



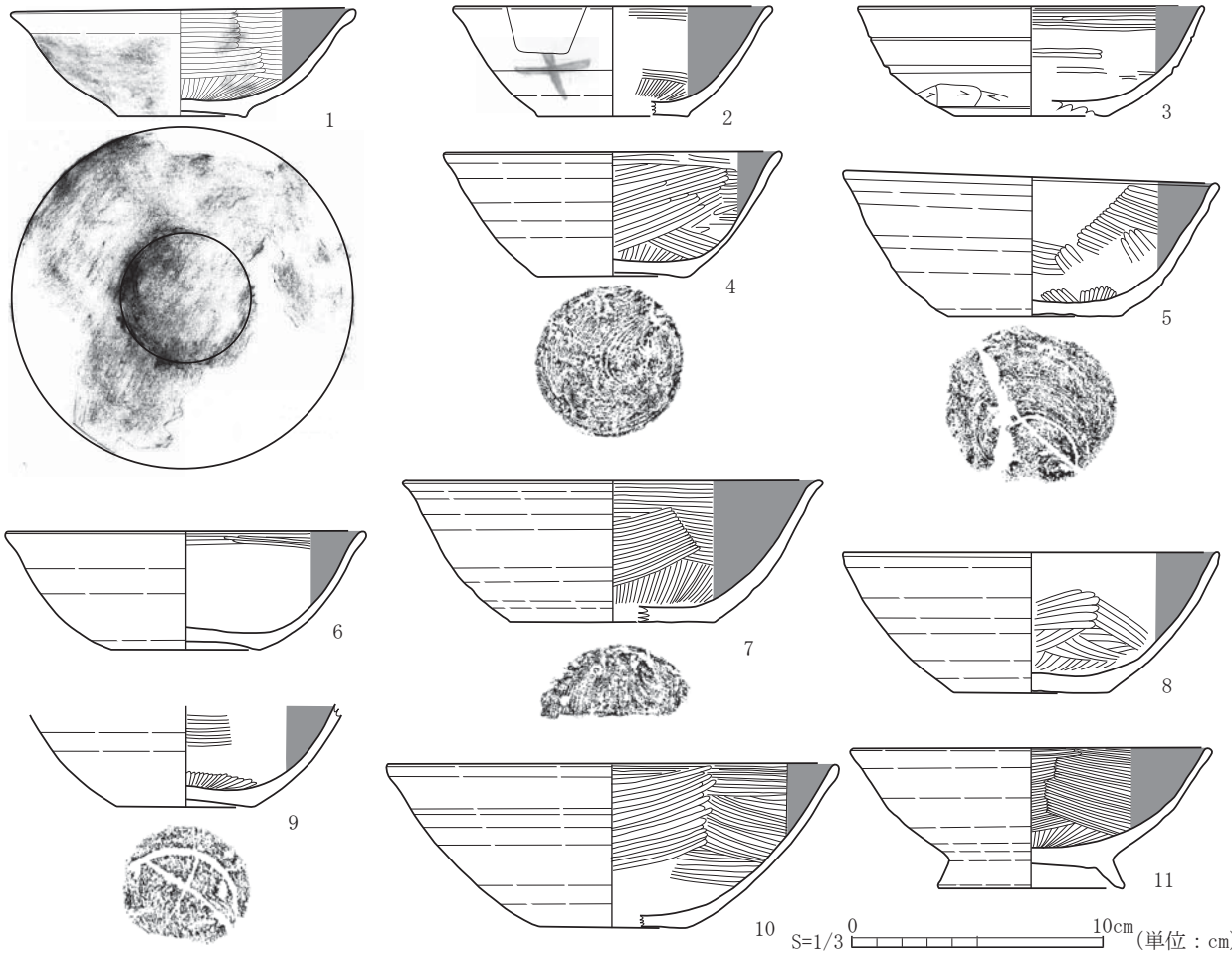
1 ～ 3:SD2310(B)　4・5: 小溝跡　6:SK2329

第 191 次調査区　南壁断面

■: 灰白色火山灰自然堆積層

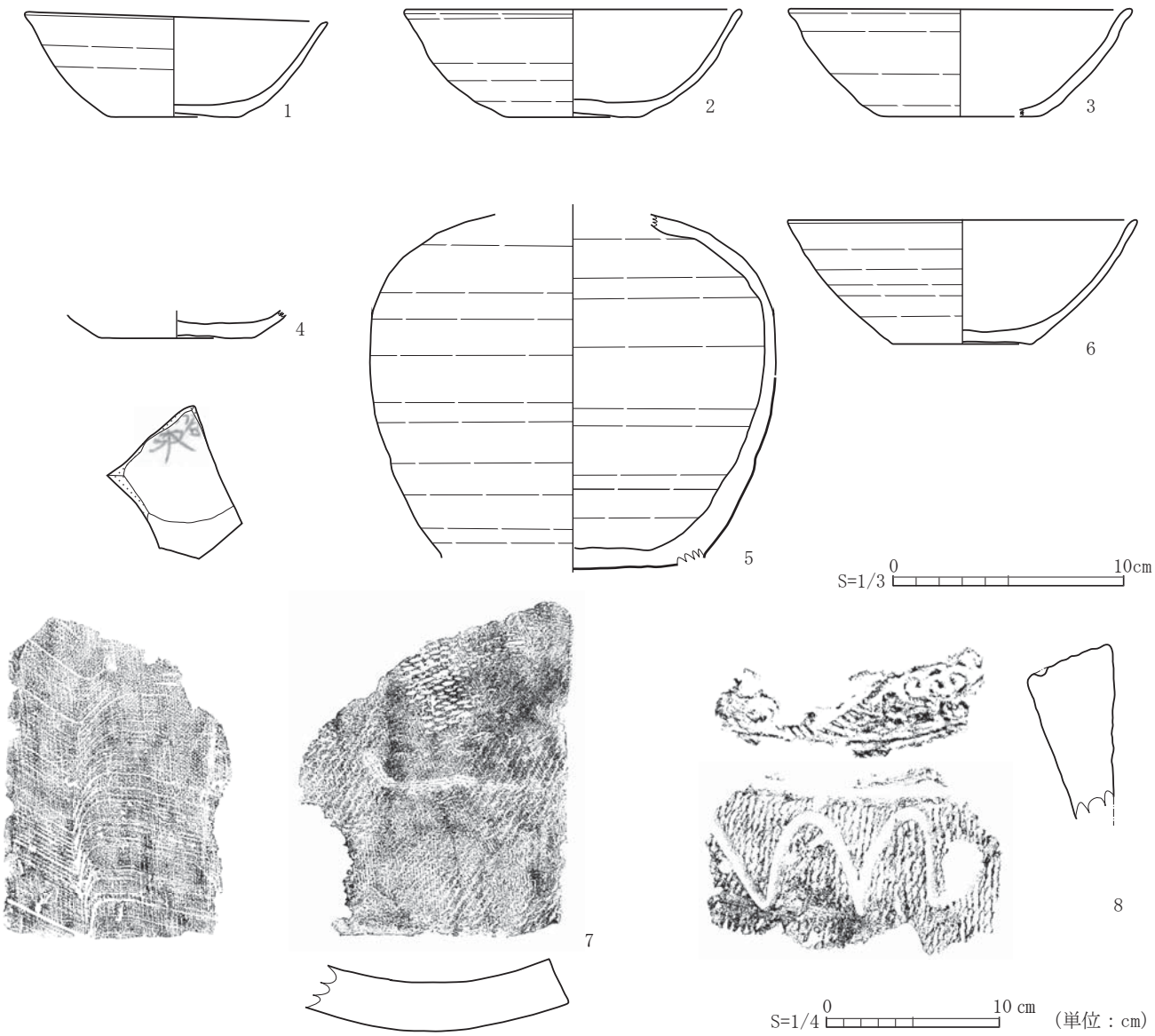
S=1/50　0　1m

第 25 図　ＳＤ2310 溝跡　断面図（２）



番号	種類	遺構層位	特徴		口径残存率	底径残存率	器高	写真図版	登録番号	備考
			外面	内面						
1	土師器坏	1層	ロクロナデ、油煙痕付着 底部：回転糸切り	ロクロナデ、黒色処理 油煙痕付着	13.8 24/24	5.1 24/24	4.3		R3	BV類
2	土師器坏	1層	ロクロナデ、墨書「十」 底部：回転糸切り	ロクロナデ ヘラミガキ→黒色処理	(12.6) 6/24	(6.0) 7/24	4.4		R1	BV類
3	土師器坏	1層	ロクロナデ→手持ちヘラ削り 底部：回転糸切り	ロクロナデ ヘラミガキ→黒色処理	(13.6) 3/24	(6.0) 8/24	4.4		R5	BⅡc類
4	土師器坏	1層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ ミガキ→黒色処理	(13.4) /24	6.1 24/24	4.95		R2	BV類
5	土師器坏	1層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ ヘラミガキ→黒色処理	(14.8) 12/24	7.0 24/24	5.5		SN188 R5	BV類
6	土師器坏	1層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ ミガキ→黒色処理	(14.2) /24	6.0 24/24	4.7		R8	BV類
7	土師器坏	1層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ ヘラミガキ→黒色処理	(16.4) 9/24	(8.2) 9/24	5.6		R1	BV類
8	土師器坏	1層	ロクロナデ 底部：回転糸切り、ヘラガキ「×」	ロクロナデ ヘラミガキ→黒色処理	(14.5) 1/24	6.15 24/24	5.6		R7	BV類
9	土師器坏	1層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ ヘラミガキ→黒色処理	—	(6.0) 18/24	—		R4	BV類
10	土師器坏	1層	ロクロナデ 底部：回転糸切り→ヘラミガキ	ロクロナデ ヘラミガキ→黒色処理	(17.9) 10/24	(6.3) 3/24	6.5		R1	BV類
11	土師器高台付坏	1層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ ヘラミガキ→黒色処理	(14.0) 2/24	(7.4) 14/24	5.6		R11	BV類

第26図　ＳＤ2310（Ｂ期）溝跡　１層　出土遺物（１）



番号	種類	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
		外面	内面						
1	須恵器 坏	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	13.1 24/24	5.6 24/24	4.35	10-3	SN189 R5	Ⅴ類
2	須恵器 坏	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	(14.5) 11/24	(5.8) 16/24	4.7	-	SN189 R2	Ⅴ類
3	須恵器 坏	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	(14.9) 4/24	(6.8) 5/24	4.7	-	SN187 R4	Ⅴ類
4	須恵器 坏	底部：手持ちヘラケズリ、墨書「□□」	ロクロナデ	—	(6.8) 4/24	—	-	SN187 R2	Ⅴ類
5	須恵器 長頸瓶	ロクロナデ	ロクロナデ	—	(11.4) 6/24	—	10-4	SN189 R6	
6	須恵系土器 坏	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	(15.0) 15/24	6.1 24/24	5.4	-	SN187 R6	Ⅴ類
		特徴		長さ	広端部幅	狭端部幅	厚さ		
7	平瓦	凸面：縄タタキ目（つぶれ気味） 凹面：糸切痕→布目→ナデ　（ⅡＢ類ａタイプ）		—	—	—	2.9	SN187 R7	
8	軒平瓦	均整唐草文（721 A or 721B）		10.0	—	—	5.0	SN191 R5	

第27図　ＳＤ2310（Ｂ期）溝跡　１層　出土遺物（２）

せるとＡ期では68.8m、Ｂ期では69.0m発見したことになる。

【重複】ＳＫ2319と重複しており、ＳＫ2319より古い。なお、Ｂ期はＳＤ2370と接続している。

Ａ期

【規模】上幅約1.6～2.4m、下幅31～81cm、深さ49～81cmである。

【壁・底面】底面は南に向かって緩やかに低くなっており、第187次調査区南壁断面と第191次調査区南壁断面で比べると、第191次調査区南壁の方が38cm低い。壁は斜めに立ち上がる。

【埋土】４層確認した。１層は灰白色火山灰を斑状に含む黄灰色粘質土で、２層は灰白色火山灰の自然堆積層である。３層は黄灰色粘質土、４層はＶ層に起因する土を斑状に少量に含む黄灰色粘質土である。

【遺物】土師器坏（ＢＶ類）・甕（Ｂ類）、須恵器坏（Ⅲ・Ｖ類）・甕・長頸瓶が出土している。

Ｂ期

【規模】上幅1.5m、下幅0.5～1.2m、深さ37～58cmである。

【壁・底面】底面は南に向かって緩やかに低くなっており、第187次調査区南壁断面と第191次調査区北壁断面で比べると、第191次調査区北壁の方が33cm低い。壁は、第189次調査区南壁断面でみると、緩やかに立ち上がっている。

【埋土】１層確認でき、Ｖ層に起因する土を斑状に多量に含む灰黄色粘質土である。

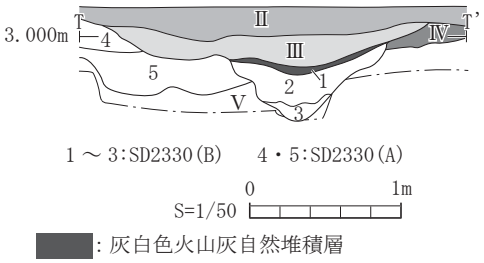
【遺物】１層から土師器坏（ＢⅡｃ類、ＢＶ類）（第26図１～10）・高台付坏（第26図11）・甕（Ｂ類）、須恵器坏（Ⅲ・Ｖ類）（第27図）・長頸瓶（第27図５）、須恵系土器坏（第27図６）、灰釉陶器碗、平瓦（第27図７）、丸瓦、軒平瓦（第27図８）が出土している。

ＳＤ2330溝跡（第22・25・28図）

【位置】第190次調査区の北東側で発見した東西方向の溝跡である。

【変遷】重複関係から２時期の変遷（Ａ→Ｂ期）を確認した。両時期ともほぼ同じ方向であるが、Ｂ期のものがＡ期に比べて約60cm南側につくられている。

【重複】Ａ期がＳＤ2310（Ｂ）と重複しており、これより古い。Ｂ期は灰白色火山灰との関係からＳＤ2310（Ｂ）と同時期と考えられる。なお、位置関係や重複関係及び灰白色火山灰との関係から、Ｂ期はＳＤ2004と、Ａ期はＳＤ2003（Ｂ）と同一の溝跡と推測される。



第 28 図　ＳＤ2330 断面図

Ａ期

【規模】長さ3.6m以上、幅2.0m以上、深さ49cmである。

【壁・底面】壁は斜めに立ち上がっており、底面はやや凹凸がある。

【埋土】２層確認でき、１層はＶ層に起因する土を斑状に微量に含む黄灰色粘質土、２層はＶ層に起因する土を斑状に多量に含む灰黄色粘質土である。

【遺物】土師器坏（ＢⅡ類）・甕（Ｂ類）、須恵器坏・甕

Ｂ期

【規模】長さ3.0m以上、幅1.1m，深さ53cmである。

【埋土】３層確認し、１層は灰白色火山灰の自然堆積層である。２層は、Ｖ層に起因する土を斑状に少量含む黄灰色粘質土、3層はＶ層に起因する土を斑状に多量に含む黄灰色粘質土である。

【遺物】土師器坏（ＢＶ類）・甕（Ａ・Ｂ類）、須恵器坏（Ⅲ類）・甕、平瓦、丸瓦が出土している。

ＳＫ2316土壙（第21・29図）

【位置】第187次調査区のほぼ中央で発見した。

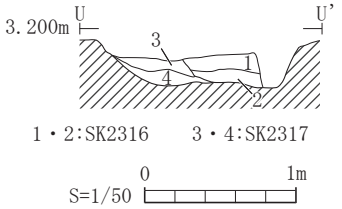
【重複】ＳＫ2317と重複しており、それより新しい。

【平面形・規模】平面形はほぼ円形で、規模は直径80cm、深さ32cmである。

【壁･底面】壁はやや急に立ち上がり､底面はほぼ平坦である。

【埋土】２層確認した。１層はＶ層に起因する土を斑状に含む黒褐色粘質土で、２層は黒褐色粘質土である。

【遺物】出土していない。



第 29 図　ＳＫ2316・2317 土壙　断面図

ＳＫ2317土壙（第21・29図）

【位置】第187次調査区のほぼ中央で発見した。

【重複】ＳＫ2317と重複しており、それより古い。

【平面形・規模】平面形はほぼ楕円形で、規模は長軸1.5m、短軸95cm、深さ32cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

【埋土】２層確認した。１層は灰白色火山灰を粒状に含む黒褐色粘質土で、２層は黒褐色粘質土である。

【遺物】出土していない。

ＳＫ2319土壙（第21図）

【位置】第187次調査区の西側で発見した。

【重複】ＳＤ2310と重複しており、それより新しい。

【平面形・規模】平面形はほぼ円形で、規模は直径55cmである。

【遺物】出土していない。

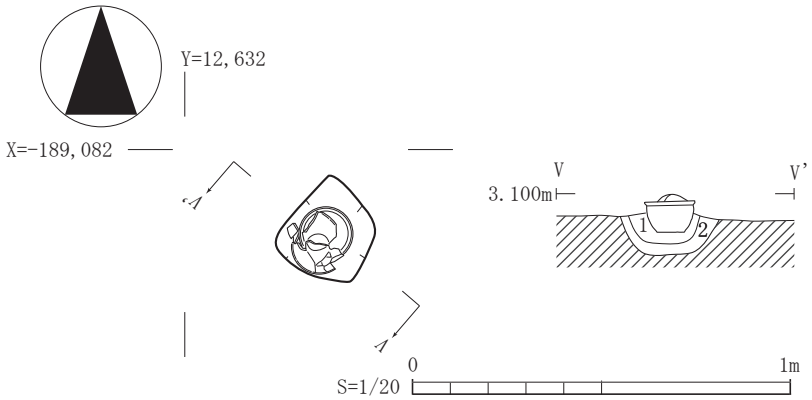
ＳＸ2312土器埋設遺構（第21・30図）

【位置】第188次調査区の北側で発見した。土師器甕を土器よりやや大きい掘方に正位で埋設し、その上に土師器坏を天地を逆さにかぶせた土器埋設遺構である。

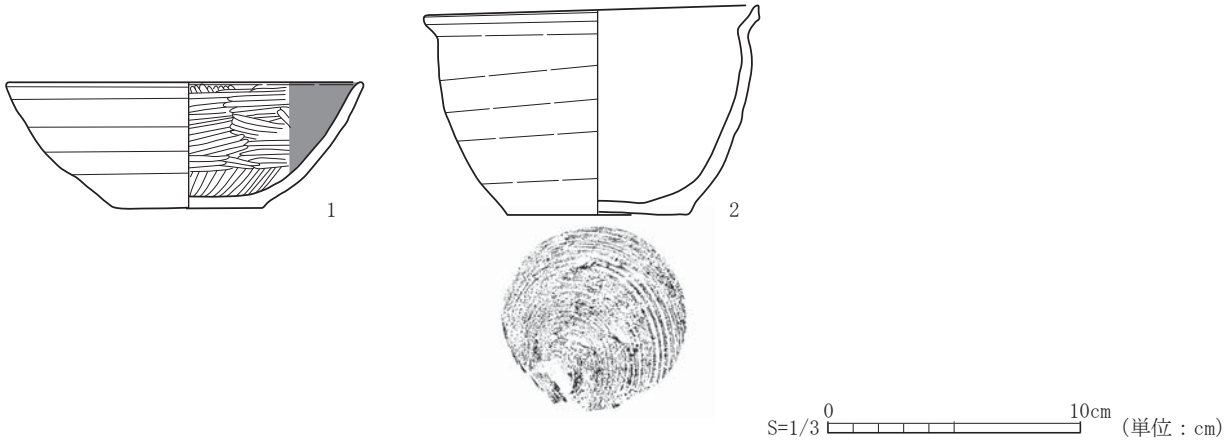
【重複】重複している遺構はない。

【掘方】平面形は不整形であり、規模は南北28cm、東西26cm、遺存している深さは10cmである。埋土は２層確認し、１層は炭化物層、２層はＶ層に起因する土を斑状に含む黒褐色粘質土である。

【遺物】土師器坏（Ｂ類）（第



第30図　ＳＸ2312土器埋設遺構　平面図・断面図



番号	種類	特徴		口径残存率	底径残存率	器高	写真図版	登録番号	備考
		外面	内面						
1	土師器坏	ロクロナデ 底部：摩滅	ロクロナデ ヘラミガキ→黒色処理	(13.9) 22/24	5.9 24/24	5.0		R3	B類
2	土師器甕	ロクロナデ、ナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	(13.2) 23/24	7.2 24/24	8.1		R2	B類

第 31 図　ＳＸ2312 土器埋設遺構　出土遺物

31図１）・甕（Ｂ類）（第31図２）が出土している。

ＳＤ2423（第22・32図）

【位置】第189次調査区の東側で発見した。

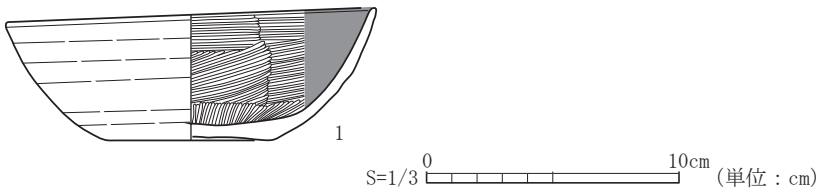
【重複】ＳＡ2309及びＳＤ2310（Ａ）と重複しており、ＳＡ2309より古く、ＳＤ2310（Ａ）より新しい。

【平面形】南北に長い溝跡である。東西の幅は北側ほど広く、南側ほど狭くなっている。

【規模】南北5.3m以上、東西0.７～1.6m、深さ27㎝である。

【埋土】１層確認し、Ｖ層に起因する土を斑状に少量含む黒褐色粘質土である。

【遺物】土師器坏（ＢⅡｃ・ＢＶ類）・甕（Ｂ類）が出土している。



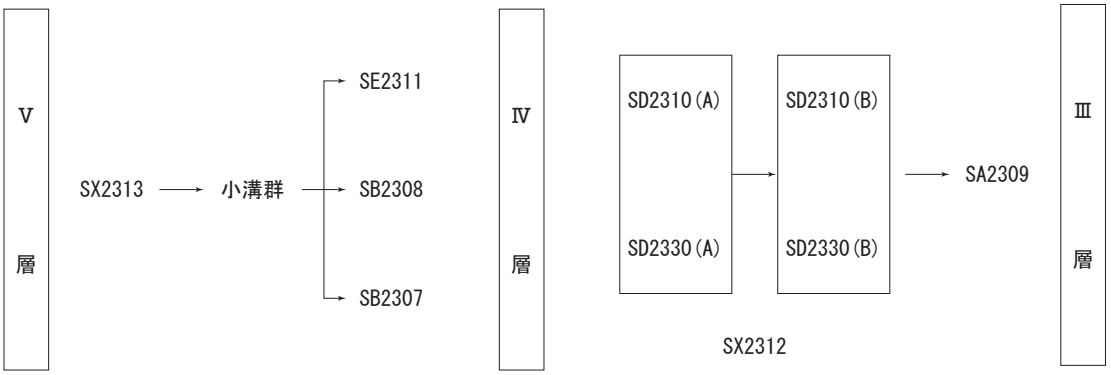
番号	種類	層位	特徴		口径残存率	底径残存率	器高	写真図版	登録番号	備考
			外面	内面						
1	土師器坏	1層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ ヘラミガキ→黒色処理	(14.5) 18/24	6.7 24//24	5.0		R1	BV類

第 32 図　ＳＤ2423　出土遺物

３　まとめ

今回の調査では、方格地割のうち西７道路の西側の区画にあたる山王四区内で、５件の個人住宅に伴う発掘調査を行い、Ｖ層上面とⅣ層上面で遺構を発見した。本調査で発見した主要遺構の変遷を、検出面や

遺構の重複関係から整理すると第33図のとおりになる。ここでは、はじめに各遺構検出面での年代について述べた後、今回の調査と過去に近接地で行った第142次調査及び第168・170～176次調査の成果とあわせて、当該区画の様相について簡単にまとめる。



第 33 図　遺構変遷模式図

（１）Ⅴ層上面発見遺構

Ⅴ層上面の主要遺構としてＳＡ2309、ＳＤ2310・2330、ＳＸ2312がある。年代については、はじめに灰白色火山灰との関係がわかるＳＤ2310・2330の検討をし、その後そのほかの遺構の年代について述べる。

ＳＤ2310・2330については、灰白色火山灰がＳＤ2310Ｂ及びＳＤ2330Ｂの最上層に自然堆積していることから、10世紀前葉頃にはほぼ埋没しており、その後掘りなおされることなく溝としての機能を終えていたと推測される。出土遺物のうち坏については、灰白色火山灰の下層から、土師器坏（ＢⅡｃ類、ＢⅤ類）、須恵器坏（Ⅲ・Ⅴ類）のほか須恵系土器坏が少量出土している。須恵系土器坏で法量がわかるものは１点あり、底径/口径比は0.4である。灰白色火山灰降下前後の10世紀前葉頃に位置づけられている高崎遺跡第11次調査ＳＸ1080土器捨て場跡出土の須恵系土器坏にも同じ法量のものが含まれていることから、ＳＤ2310Ｂの須恵系土器も同じ頃の年代が考えられる。なお、ＳＤ2310Ａについては、すべて破片資料であり、点数も少ないことから、ＳＤ2310Ｂ以前とだけにとどめておきたい。

ＳＸ2312については、土師器坏・甕が出土しており、いずれもＢ類である。土師器坏の内面については、底部ヘラミガキの方向は放射状である。外面については、底部が磨滅しているため、切り離し技法や再調整の有無が不明である。底径／口径比は0.42である。近似した底径／口径比を示す土師器坏は天長９年（832）以降さほど隔たらない９世紀前半代に位置付けられる多賀城跡ＳＥ2101Ｂ井戸跡第Ⅲ層出土土器の中に少数ながらみられ、これより新しい９世紀後半頃に位置付けられる多賀城跡鴻の池第10層出土土器では主体的に存在する。このことから、ＳＸ2312については、天長９年（832）を上限としつつ、９世紀後半頃の年代を想定しておきたい。

ＳＡ2310については、重複関係からＳＤ2310Ｂより新しいことから、10世紀前葉以降である。

（２）Ⅳ層上面発見遺構

Ⅳ層上面では主な遺構として、ＳＢ2307・2308、ＳＥ2311、ＳＸ2313がある。

このうちＳＸ2313からは、土師器甕（Ａ類）が出土している。器高12.4㎝、体部～口縁部の厚さが3.8

～5.4㎜と薄手の小型甕で、底部に木葉痕が認められ、体部と口縁部の境に段は認められない。同様の土師器甕は８世紀中頃に位置付けられる宮城県教育委員会で調査した山王遺跡ＳＤ677のほか、延暦９年（790）よりも古い市川橋遺跡ＳＤ1351（Ａ）や延暦９年（790）から延暦24年（805）の間に位置づけられる市川橋遺跡ＳＤ1351（Ｃ）で認められる。このことからＳＸ2313出土土器は８世紀中頃から９世紀前葉頃と考えられる。

ＳＥ2311出土土器のうち坏類は、井戸枠内の１層から土師器坏（ＢＶ類）、掘方から須恵器坏（Ⅲ・Ⅴ類）が出土している。器形がわかるものでは土師器坏の底径/口径比が0.52、須恵器坏の底径/口径比が0.5である。いずれも９世紀代をとおして認められる。また。須恵系土器は出土していないことや、灰白色火山灰の下層にあることから、10世紀までは降らないと考えられ、ＳＥ2311井戸跡出土土器は９世紀代としておきたい。

（３）西７・南１区画の様相について

今回調査した第187～191次調査は、多賀城南面に整備された道路網のうちの西７道路跡の西側に位置し、地割では南２西８区に該当する。過去の調査から道路跡は、３時期の変遷（Ａ→Ｃ期）があり、灰白色火山灰との関係からＡ期が10世紀前葉以前、Ｂ・Ｃ期は10世紀前葉以降と考えられる。

今回の調査では、西７道路跡の西側約30～37ｍ西側で南北方向のＳＤ2310を確認した。灰白色火山灰が降下する10世紀前葉には廃絶していたとみられることから、西７道路跡のＡ期と同時に存在していたと推測される。また、西７道路跡との位置関係から地割を南北に約1/3町区画する溝跡の可能性が考えられ、さらにＳＤ2310と接続する東西方向のＳＤ2330も同様に地割を区画するものと推定される。また、ＳＤ2310は２時期の変遷（Ａ→Ｂ期）があり、第188次調査区と第189次調査区間の南北約17ｍにわたってＢ期はＡ期より2.4～2.6ｍ西側に位置を変えてつくられている。区画内の様子については、ＳＸ2312土器埋設遺構が確認されるほかは、不明な点が多いが、こうしたＳＤ2310の変遷は区画内の土地利用の変化を反映しているものとみられる。

最後に、ＳＤ2310・2330がつくられる以前の様相について触れる。

最も古い遺構としてＳＸ2313土器埋設遺構がある。また、北側の第54次調査区でも８世紀中頃のＳＫ1201を確認している。具体的な性格などは不明であるが、８世紀から９世紀前葉頃の遺構が点的に散在する様子がうかがわれる。次に土師器のＢ類が出現する８世紀後葉以降になると小溝群がつくられることから、畑の耕作域として当該地が土地利用されていた可能性が考えられる。その後、ＳＢ2307・2308の掘立柱建物跡やＳＥ2311井戸跡がつくられる。掘立柱建物跡や井戸跡が廃絶した後に、Ⅳ層が堆積することから、一時的に土地利用がなされなくなった可能性が考えられる。

参考文献

多賀城市教育委員会『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業にかかる発掘調査報告書Ⅱ－』多賀城市文化財調査報告書第70集　2003

多賀城市教育委員会『山王遺跡－第51・54・57次調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第81集　2006

多賀城市教育委員会『多賀城市内の遺跡２－平成28年度ほか発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第132集　2017

宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991』1992

宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1992』1991

宮城県文化財調査報告書第174集『山王遺跡Ⅴ』1997

「山王遺跡」『平成26年度　宮城県遺跡調査成果発表会　発表要旨』2015

調査区と多賀城跡（南西から）

調査区と多賀城跡（南から）

写真図版 1

第187 ～ 191次調査区遺構発見状況全景（真上から）

写真図版２

第187次調査区遺構発見状況全景（真上から）

第188次調査区遺構発見状況全景（真上から）

写真図版３

第189次調査区遺構発見状況全景（真上から）

第190次調査区遺構発見状況全景（真上から）

写真図版４

山王遺跡第187調査区完掘状況（北西から）

山王遺跡第187調査区　ＳＢ2307掘立柱建物跡（北西から）

写真図版５

第187調査区　SD2310溝跡（北から）

第188調査区完掘状況全景（北西から）

写真図版６

第188次調査区 SD2310溝跡（北から）

第188次調査区 SX2312土器埋設遺構（南東から）

写真図版７

第188次調査区 SX2313土器埋設遺構（南東から）

第188次調査区 SX2313土器埋設遺構掘方半裁状況（東から）

写真図版８

第189次調査区遺構発見状況全景（北西から）

第189次調査区 SD2310溝跡（北から）

写真図版９

第189次調査区 SE2311井戸跡（北東から）

第190次調査区遺構発見状況全景（北西から）

写真図版10

第190次調査区 SD2310溝跡（北から）

第191次調査区遺構発見状況全景（北西から）

写真図版11

第191次調査区 SD2310溝跡（北から）

第191次調査区 SD2310溝跡調査区南壁断面（北から）

写真図版12

1 SD2310(B)溝跡　土師器坏（第188次 R5）

2 SD2310(B)溝跡　土師器坏（第189次R3）

3 SD2310（B）溝跡　土師器坏（第189次 R5）

4 SD2310(B)溝跡　須恵器長頸瓶（第191 R3）

5 SD2310（B）溝跡　出土遺物

6 Ⅱ層　土師器高台付坏（SN187 R16）

写真図版13

1 SX2312土器埋設遺構 土師器坏（第188次 R3）

2 SX2312土器埋設遺構 土師器甕（第188次 R2）

3 SX2312土器埋設遺構出土遺物（第188次）

4 SX2313土器埋設遺構 土師器甕（第188次 R1）

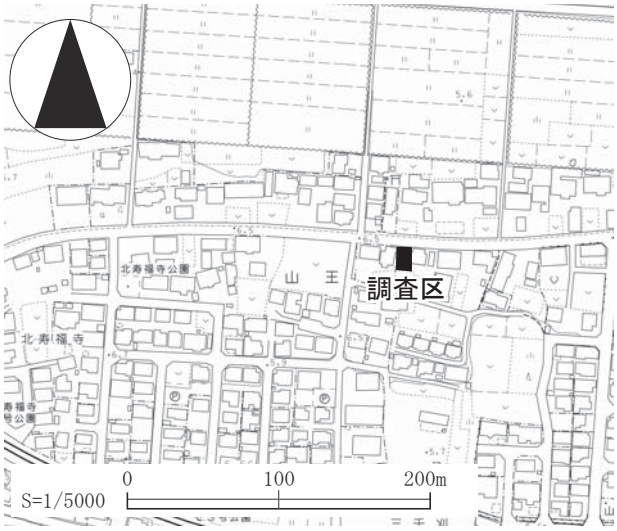
5 SX2423　土師器坏（SN189 R1）

写真図版14

Ⅵ　山王遺跡第195次調査

１　調査に至る経緯と経過及び調査成果

本件は、山王字北寿福寺地内における個人住宅建設に伴う本発掘調査である。平成 29 年 11 月 21 日に、地権者より当該地での個人住宅建築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、住宅部の基礎工事として直径 20㎝の柱状改良杭を深さ 7.5 ｍまで打ち込むことから、遺跡への影響が懸念された。このため､地権者と遺跡保存のための協議を行ったが、建物を支えるための地耐力が十分に得られないとの理由から、当初計画の基礎工法で施工することとなった。12 月 7 日、地権者より調査に関する依頼書及び承諾書の提出を受け、12 月 11 日より現地調査を開始した。まず重機で掘削を開始し、12 日より作業員による遺構の発見作業に着手した。その結果、時期不明の溝跡 5 条と、近世以降の溝跡 1 条を発見した。図面作成・写真撮影を行った後、12 月 18 日重機による埋め戻しをもって、現地調査の一切を終了した。



第１図　調査区位置図

調査状況（北東から）

２　調査成果

（１）層序（第２図）

今回の調査で確認した層序は以下のとおりである。

Ⅰ　層：現代の盛土層で、厚さは 50cm である。

Ⅱ　層：オリーブ黄色土であり、厚さは 50cm である。近世の遺構検出面である。

Ⅲ　層 : 黒褐色粘土であり、厚さは 15 ｃｍである。

Ⅳ 1 層 : 灰オリーブ色土であり、厚さは 30cm である。

Ⅳ 2 層：にぶい黄橙色細砂である。

（２）発見した遺構と遺物

ＳＤ 2455 溝跡（第２図）

【位置・形態】調査区南部で確認した溝跡である。

【重複】他の遺構との重複はない。

【方向・規模】幅は 66cm、検出面からの深さは 24cm である。西で北に 10 度偏している。

【埋土】埋土は黄灰色土であり、斑状の黄褐色土を微量に含む。

【遺物】出土していない。

ＳＤ 2456 溝跡（第２図）

【位置・形態】調査区中央部南寄りで確認した溝跡である。

【重複】ＳＤ 2457 と重複しており、これより古い。

【方向・規模】最大幅約 1.6 ｍであり、検出面からの深さは約 45cm である。西で北に約 10 度偏している。

【埋土】埋土は２層に分けられる。１層は黄灰色土であり、締まりが弱く、酸化鉄を含む。２層は灰色粘土である。斑状の黄褐色土を少量含む。

【遺物】近世の染付磁器（手塩皿か）が１点出土している。

ＳＤ 2457 溝跡（第２図）
【位置・形態】調査区中央やや北寄りで確認した溝跡である。
【重複】ＳＤ 2456 と重複しており、これより新しい。
【方向・規模】最大幅約 1.3 ｍであり、検出面からの深さは約 45cm である。西で北に約８度偏している。
【埋土】埋土は３層に分けられる。１層は黄灰色土であり、締まりが弱く、微量の酸化鉄を含む。
【遺物】出土していない。

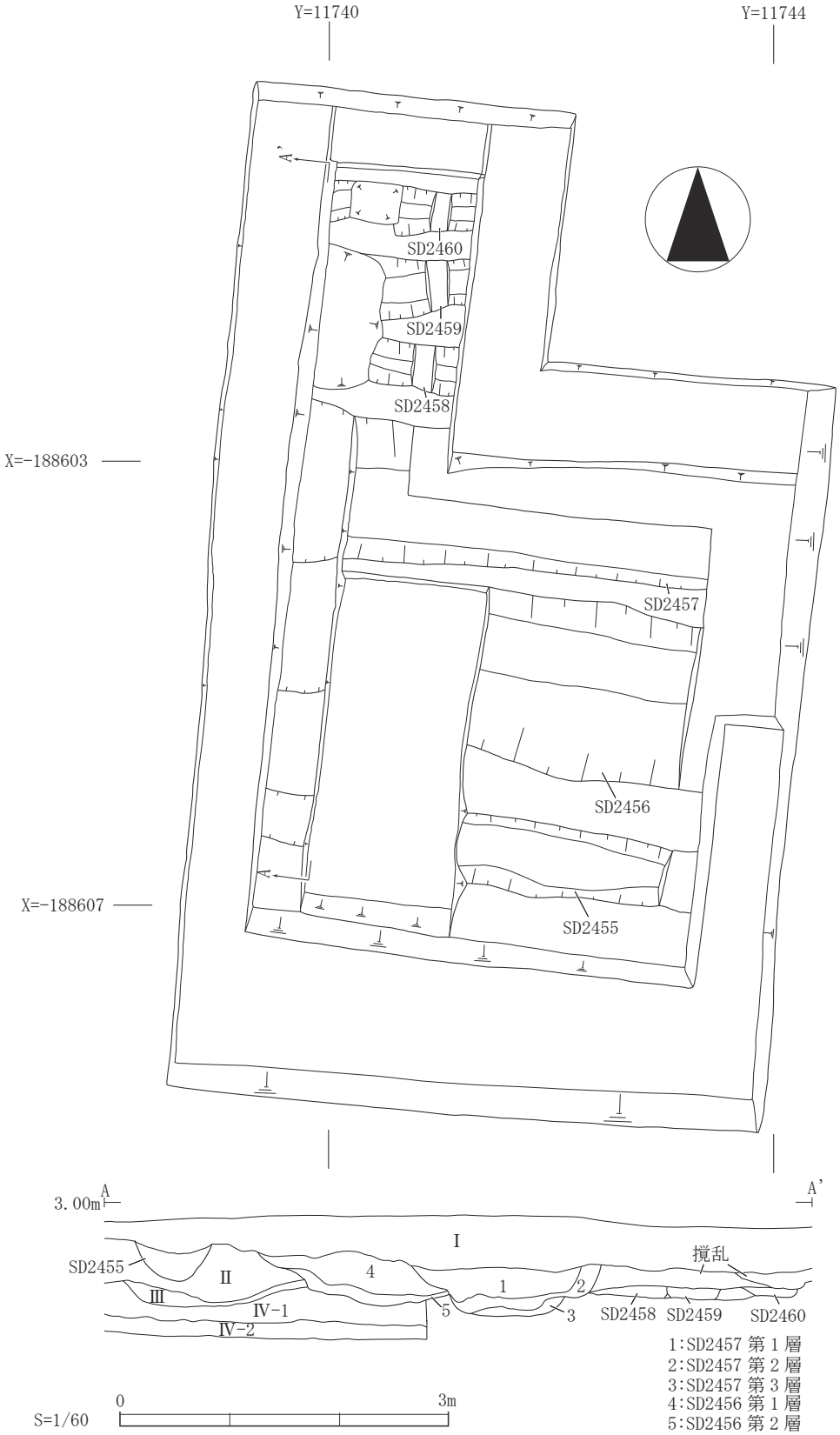
ＳＤ 2458 溝跡（第２図）
【位置・形態】調査区北部で確認した溝跡である。
【重複】ＳＤ 2459 と重複しており、これより古い。
【方向・規模】最大幅約 45cm であり、検出面からの深さは約 10cm である。西で北に約 11 度偏している。
【埋土】埋土は黄灰色土であり、斑状の黄褐色土を微量含む。
【遺物】出土していない。

ＳＤ 2459 溝跡（第２図）
【位置・形態】調査区北部で確認した溝跡である。
【重複】ＳＤ 2458 と重複しており、これより新しい。
【方向・規模】最大幅 54 ｃｍであり、検出面からの深さは約６cm である。西で南に約８度偏している。
【埋土】埋土は黄灰色土であり、斑状の黄褐色土を微量に含む。
【遺物】出土していない。

ＳＤ 2460 溝跡（第２図）
【位置・形態】調査区北端で確認した溝跡である。
【重複】他の遺構との重複はない。
【方向・規模】最大幅約 50㎝であり、検出面からの深さは約８㎝である。西で南に約５度偏している。
【埋土】埋土は灰色土であり、斑状の黄褐色土を少量含む。
【遺物】出土していない。

３　まとめ

今回の調査では、Ⅱ層上面で時期不明の溝跡５条、近世以降の溝跡１条を確認した。



第２図　遺構平面図・断面図

Ⅱ層上面発見遺構（南から）

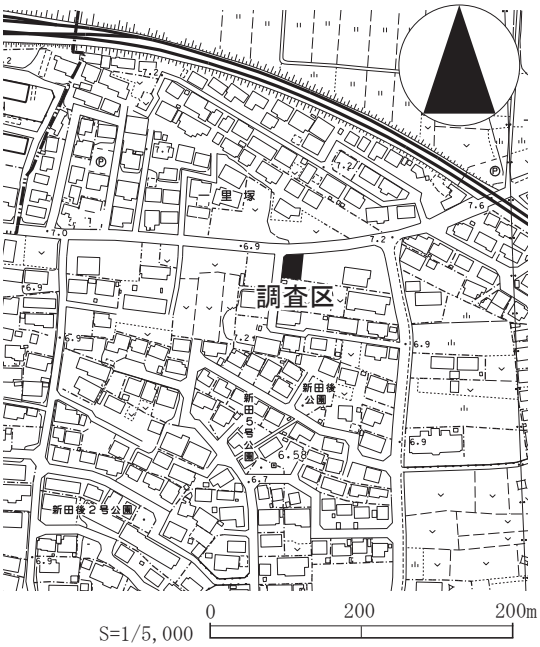
Ⅱ層上面発見遺構完掘状況（南から）

Ⅶ　新田遺跡第117次調査

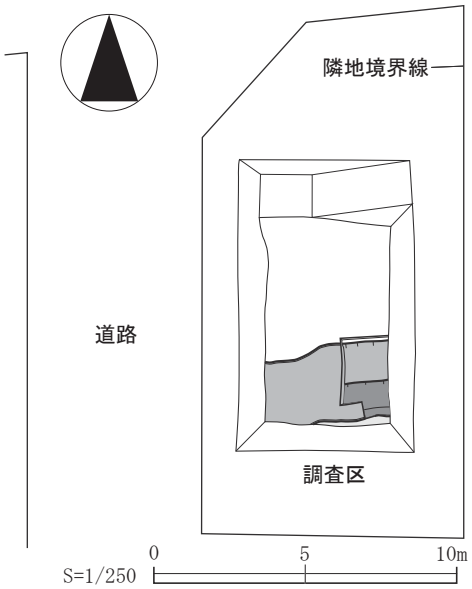
１　調査に至る経緯と経過

本件は、新田字後地内における個人住宅新築工事に伴う本発掘調査である。平成28年12月28日に、地権者より新田遺跡の北東部に位置する当該地での個人住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、住宅新築の基礎として住宅部の基礎工事として直径60ｃｍ、長さ4.5ｍのパイルを28本打ち込むことから、遺跡への影響が懸念された。このため、基礎工法の変更を協議したが、そのほかの工法では建物を支えるための地耐力が十分に得られないとの理由により、当初計画の基礎工法で施工するとの結論に至った。平成29年２月24日に地権者より調査に関する依頼書及び承諾書の提出を受け、２月28日より現地調査に着手した。

重機での表土掘削終了後、３月１日より遺構の発見作業に入った。その結果、表土より90㎝の深さにおけるⅡ層上面で、調査区を東西に縦断するＳＤ2172を確認した。３月６日に測量基準点の設置を行い、翌７日から遺構の精査と並行して図面作成を行った。その後Ⅱ層の除去を行い、Ⅲ層上面でＳＸ2175、ＳＤ2173を確認した。また、下層のⅣ層で本調査区で最も古い時期にあたるＳＤ2175を確認した。３月８日に調査区全景の写真撮影と補足調査及び現場の撤収作業を行い、10日には重機による埋め戻しを完了し、現地調査の一切を終了した。



第１図　調査区位置図



第２図　調査区配置図

２　調査成果

（１）層序（第２図）

今回の調査で確認した層序は以下のとおりである。

Ⅰ１層：現代の盛土層で、厚さは60㎝である。

Ⅰ２層：灰色土の旧表土で、厚さは30㎝である。

Ⅱ　層：灰色細砂土で、厚さ20㎝である。均質できめ細かく、しまりがある。中世の無釉陶器が出土した。この上面で中世の遺構検出面となっている。

Ⅲ　層：全体が均質なオリーブ黄色砂質土である。厚さは1.2ｍある。この上面で中世の遺構検出面となっている。

Ⅳ　層：黒色の粘土層で、厚さ20㎝以上である。

（２）発見遺構と遺物

今回の調査では、Ⅱ層上面およびⅢ層上面で東西方向に延びる溝を発見した。

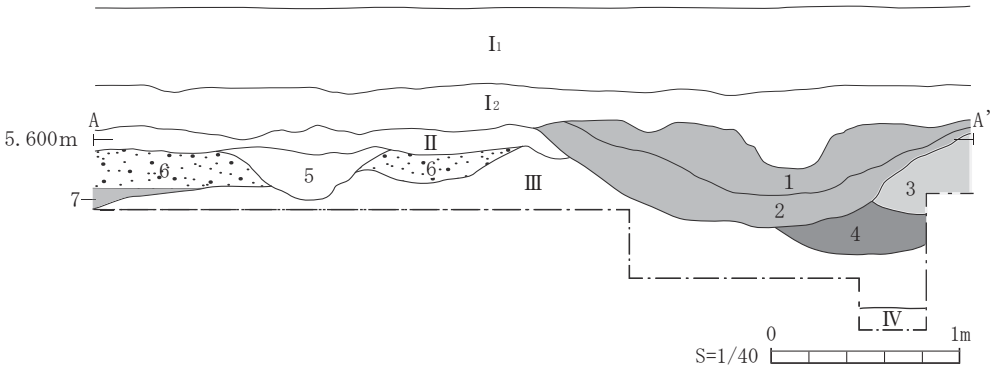
〔Ⅲ層上面発見遺構〕

ＳＤ2174溝跡（第３・４・５図）

【位置・形態】調査区北側で確認した東西方向の溝跡である。南半分を確認した。

【重複】ＳＸ2175と重複しており、これより古い。

第３図　Ⅲ層上面検出遺構



1. SD2172C の上層で、自然堆積層である。
2. SD2172C の下層で、炭化物及び木材を含む粘土層である。中世無釉陶器出土遺構。
3. SD2172B で、粗砂が堆積する。
4. SD2172A で、褐灰色粘土と砂の互層である。
5. SD2173 で、灰色粘質土である。青磁片出土遺構。
6. SX2175 で、灰色砂質土である。北側ほど粗砂の堆積になる。中世無釉陶器出土遺構。
7. SD2174B で、褐灰色粗砂である。

第４図　調査区東壁断面図

【方向･規模】調査区北部を東西方向に延びる溝跡で、２時期の変遷（Ａ→Ｂ期）がある。溝の東側で、北東に向かって緩やかに曲がる。溝の北辺はトレンチ外にあり、全容は不明である。確認できる部分での規模は東西で 3.7 m以上、上端はＡ期が約 70㎝以上、Ｂ期は 1.7 m以上である。深さは、溝全体を覆うＳＸ 2175 の上面からＡ期が１m、Ｂ期が 70㎝である。Ａ期の壁は最深部から緩やかに立ち上がり、残存する南辺付近では約 45 度の角度で立ち上がる。また、溝の東側底面には激しい起伏がある。Ｂ期の壁はなだらかな傾斜となっている

【埋土】Ａ・Ｂ期ともに褐灰色の粗砂で、底面には褐灰色粘土が堆積する。

【遺物】Ａ期からは出土していない。Ｂ期から中世の無釉陶器と青磁碗の破片が出土している。

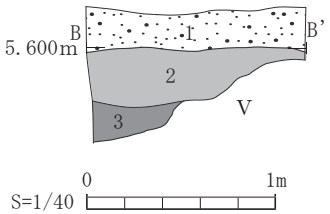
ＳＸ 2175（第３・４・５図）

【位置・形態】調査区北側で確認した流路状の遺構である。南半分を発見した。

【重複】ＳＤ 2174・ＳＤ 2173 と重複し、ＳＤ 2174 より新しく、ＳＤ 2173 より古い。

【方向・規模】調査区北半を東西に延びる。北辺はトレンチ外にあり、全容は不明である。規模は幅４m以上、最深部で 40㎝である。東で北に約３度偏している。

【埋土】灰色砂質土である。



1. SX2175 で、褐灰色粗砂である。
2. SD2174B で、褐灰色粗砂である。下層部分には褐灰色粘土が堆積する。
3. SD2174A で、褐灰色粗砂である。下層部分には褐灰色粘土が堆積する。

第５図　SD2174 断面図

【遺物】中世の無釉陶器が出土している。

ＳＤ 2173 溝跡（第３・４・５図）

【位置・形態】調査区北側で発見した東西方向の溝跡である。

【重複】ＳＸ 2175 と重複し、これよりも新しい。

【方向・規模】方向は東で北に３度偏している。規模は長さ 4.1 m以上、上幅は 1.4 m、深さは 35㎝である。

【埋土】灰色粘質土である。

第６図　Ⅱ層上面検出遺構

【遺物】中世の青磁碗の破片が出土している。

〔Ⅱ層上面発見遺構〕

ＳＤ 2172 溝跡（第４・６図）

【位置・形態】調査区南側で発見した東西方向の溝跡である。

【重複】重複している遺構は無い。

【方向・規模】調査区南部をおおよそ東西にのびている。埋土及び壁の立ち上がりの状況から、３時期の変遷（Ａ→Ｃ期）を確認した。方向はＣ期の上端部で測ると、東で北に５度偏している。規模は長さ４ｍ以上、上幅が 2.3 ｍ～ 2.6 ｍで、深さは 75㎝である。Ａ期およびＢ期についてはトレンチ断面での観察に限られるが、長さはＡ・Ｂ期で 1.6 ｍ以上、残存する幅でＡ期が 1.2 ｍ以上、Ｂ期で 70㎝以上である。

【埋土】Ａ期は褐灰色粘土と砂の互層で、炭化物を含んでいる。Ｂ期は粗砂である。Ｃ期は２層に細分され、上層が灰色細砂、下層は褐灰色粘質土からなる自然堆積層で、底部には炭化物や木材片が認められる。

【遺物】Ａ・Ｂ期からは出土していない。Ｃ期下層より中世の無釉陶器が出土している。

３　まとめ

今回の調査は調査面積に制約があることから、深い遺構については部分的な掘削にとどまった。遺物の出土量が少ないことから、近隣で実施された第 69 次調査（平成 23 年度実施）および第 105 次調査（平成 27 年度実施）の成果と比較しながら、遺構の年代について述べる。

まず本調査地の西側に近接する第 69 次調査では、14 世紀後半頃に堆積したとされている暗灰黄色土（Ⅳ層）及びにぶい黄褐色土（Ⅲ層）に覆われる東西方向のＳＤ 1993・1994（Ａ・Ｂ）の溝跡を発見している。調査区の制限上、これらの全容は明らかではないが、上幅はＳＤ 1993 が 1.6 ｍ以上、ＳＤ 1994 Ｂが 2.5 ｍ以上と大規模なものであり、ともに調査区外にのびている。それら遺構の年代については、Ⅲ・Ⅳ層との関係及び出土した無釉陶器の年代より、12 ～ 14 世紀頃のものと推測している 。

また本調査区の南西近接地で実施された第 105 次調査では , にぶい黄褐色粘質土（Ⅲ層）に覆われる灰黄褐色粘質土（Ⅳ層）上面で、ＳＤ 2115（Ａ～Ｃ）及びＳＤ 1993（Ａ）・1994（Ａ・Ｂ）溝跡を発見している。確認調査のため埋土の掘削は行っていないが、遺構および埋土の検討より第 69 次調査で確認されたＳＤ 1993･1994（Ａ・Ｂ）との共通性が見られることから、一連の溝跡である可能性を指摘している。

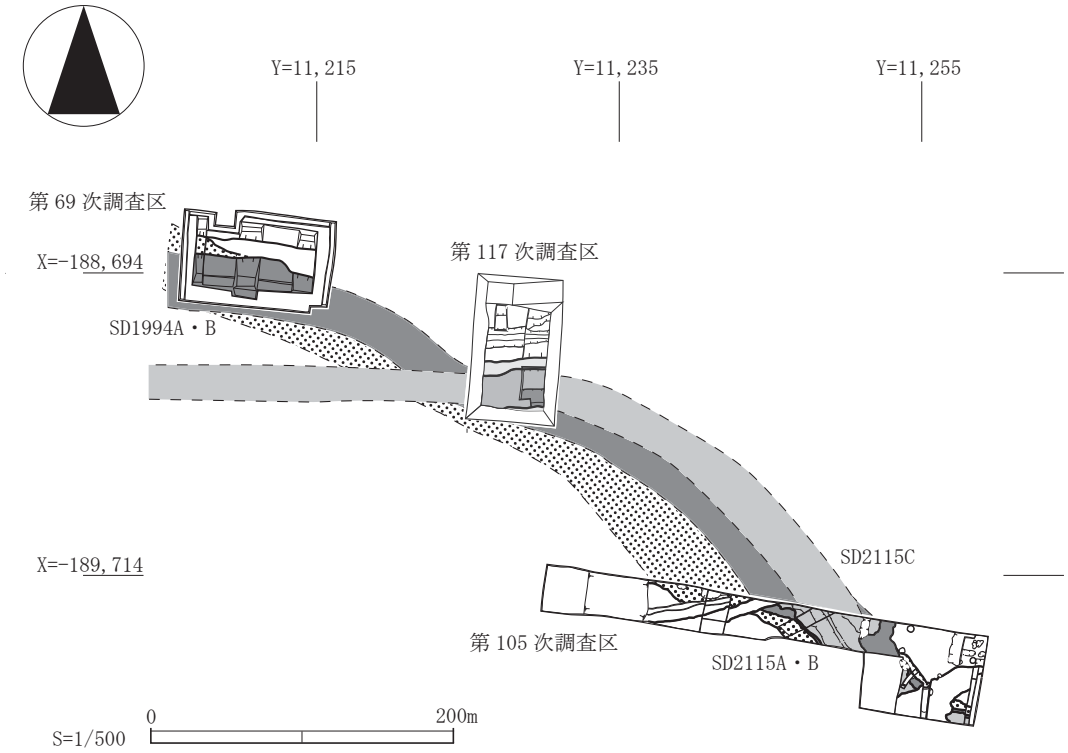
本調査では調査区北側のⅢ層上面でＳＤ 2174（Ａ～Ｂ）溝跡、南側のⅡ層上面でＳＤ 2172（Ａ～Ｃ）溝跡を確認している。特にⅡ層上面で発見したＳＤ 2172（Ａ～Ｃ）は、第 105 次調査で発見したＳＤ 1993･1994（Ａ・Ｂ）溝跡の推定線上に位置し、また３時期の変遷がある点も共通することから、一連の溝跡の可能性が高いと考えられる。

次に基本層位の堆積状況および土質を比較すると、本調査のⅢ層（基盤層）は第 69 次調査のⅤ～Ⅷ層（基盤層）、第 105 次調査のⅣ層に対応し、同様に本調査のⅡ層については第 69 次調査のⅢ層・Ⅳ層に対応するものと考えられる。遺構検出面がいずれの調査でも基盤層上面もしくは、基盤層の直上の層位である点が共通する。第 69 次調査におけるⅢ・Ⅳ層は層序関係と無釉陶器の年代より、12 ～ 14 世紀頃のものと推測されることから、本調査で確認した遺構についても、これらの年代が与えられるものと考えられる。

参考文献

多賀城市文化財調査報告書第 127 集『多賀城市内の遺跡２－平成 27 年度ほか発掘調査報告書－』2016

多賀城市文化財調査報告書第 108 集『多賀城市内の遺跡２－平成 23 年度発掘調査報告書－』2012



第７図　第 69・105・117 次調査区合成図

調査区全景（南西から）

ＳＤ2172（Ａ～Ｃ期）断面（西から）

Ⅷ　新田遺跡第120次調査

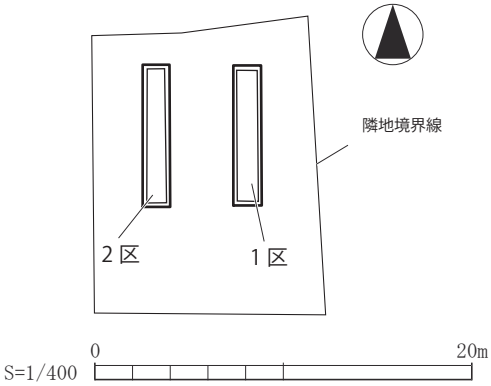
１　調査に至る経緯と経過及び調査成果

本件は、新田字堀西地内における個人住宅新築に伴う埋蔵文化財発掘調査である。平成29年4月28日に地権者から当該区における個人住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、住宅の基礎工事の際に現況より20cmの盛土を行った後、直径14㎝、深さ7ｍのパイルを22本打ち込むパイル工法を採用する内容であったことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため工法変更により遺構の保存が図れないか協議を行ったが、それ以外の工法では建物を支えるための地耐力が十分に得られないとの理由から、提出された計画の基礎工法で施工することとなった。その後、５月30日に地権者から調査に関する依頼書と承諾書の提出を受けて、発掘調査の実施に至ったものである。

第１図　調査区位置図

調査は平成29年６月27日から着手した。調査区東側に１区、西側に２区の２つのトレンチを設定し、遺構が発見された場合など必要に応じて各トレンチを拡張する方法をとった。

はじめに１区の調査に着手した。重機を使用して表土を除去したところ、表土である現代の盛土層及び耕作土は現地表面から約80㎝の深さまで及んでおり、その下層でⅡ層（暗青灰色粘質土層）を確認した。その後、さらに現地表から1.8ｍの深さまで掘削を行ったが、Ⅱ層が厚く堆積する状況であり、遺構や遺物を発見することはできなかった。写真撮影及び調査位置の記録を行った後、重機を使用して調査区を埋め戻し、１区の調査を終了した。続いて２区の調査に着手したが、ほぼ１区と同様の堆積状況が確認され、遺構や遺物も発見されなかった。写真撮影及び調査位置の記録を行ったのち、重機を使用して調査区を埋め戻し、同日中に現地調査の一切を終了した。



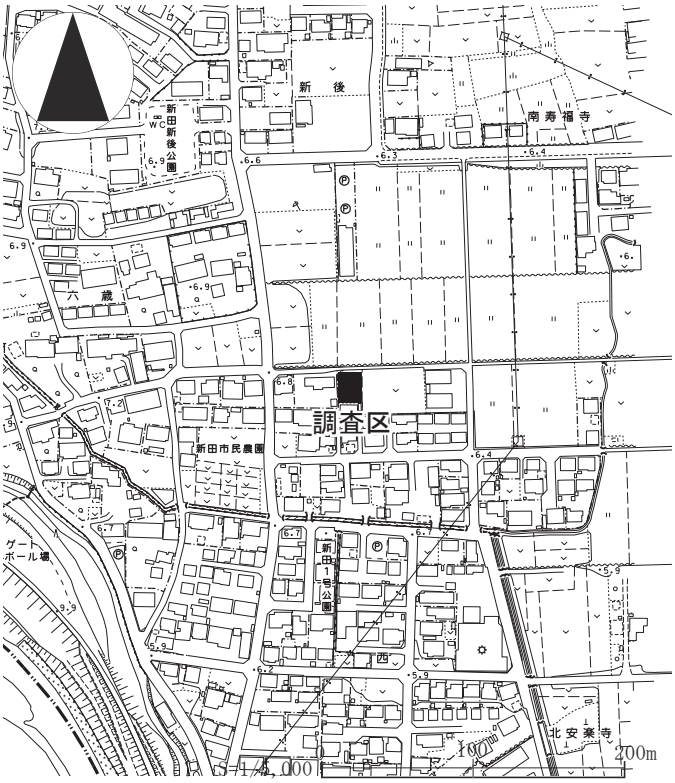
第２図　調査区平面図

１区調査状況（北から）

Ⅸ　新田遺跡第121次調査

１　調査に至る経緯と経過

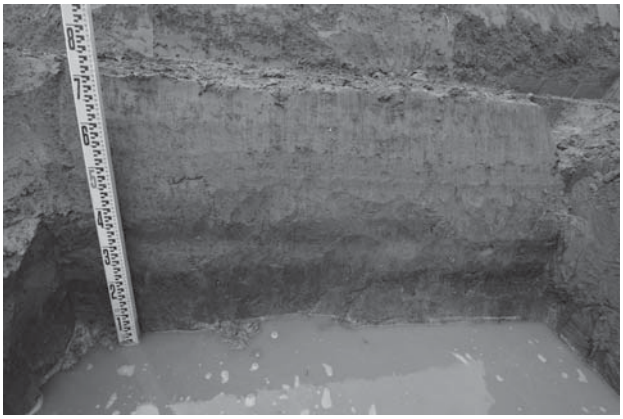
本件は、新田字北地内における事務所兼個人住宅新築に伴う本発掘調査である。平成29年９月１日、地権者より当該事業と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、住宅の基礎工事の際に、宅地に10㎝の盛土を施したのち、深さ6.０～7.５ｍの杭状改良を44本を打ち込む内容であった。周辺では当該区の西側で平成16年度に第27次調査を実施しており、現地表から約１ｍ下で中世の掘立柱建物跡や井戸跡等を発見していることから、遺跡への影響が懸念された。このため、工法変更によって遺跡を保存する協議を行ったが、提出された基礎工法以外では十分な地盤強度を得られないことから、本発掘調査を実施することになった。９月29日、地権者から発掘調査に関する依頼・承諾の提出を受け、10月12日より現地調査を開始した。



第１図　調査区位置図

はじめに、重機による住宅建築部分の表土除去から取りかかった。しかし、遺構や遺物は発見できず、現地表から２ｍ下で厚さ湿地での自然堆積層とみられる黒褐色粘質土を確認したのみであったことから、第27次調査で発見した中世の遺構面は存在しないと判断した。10月18日に埋戻しを完了し、すべての調査を終了した。

調査区全景（北東から）



調査区南壁　土層堆積状況（北から）

X　西沢遺跡第28次調査

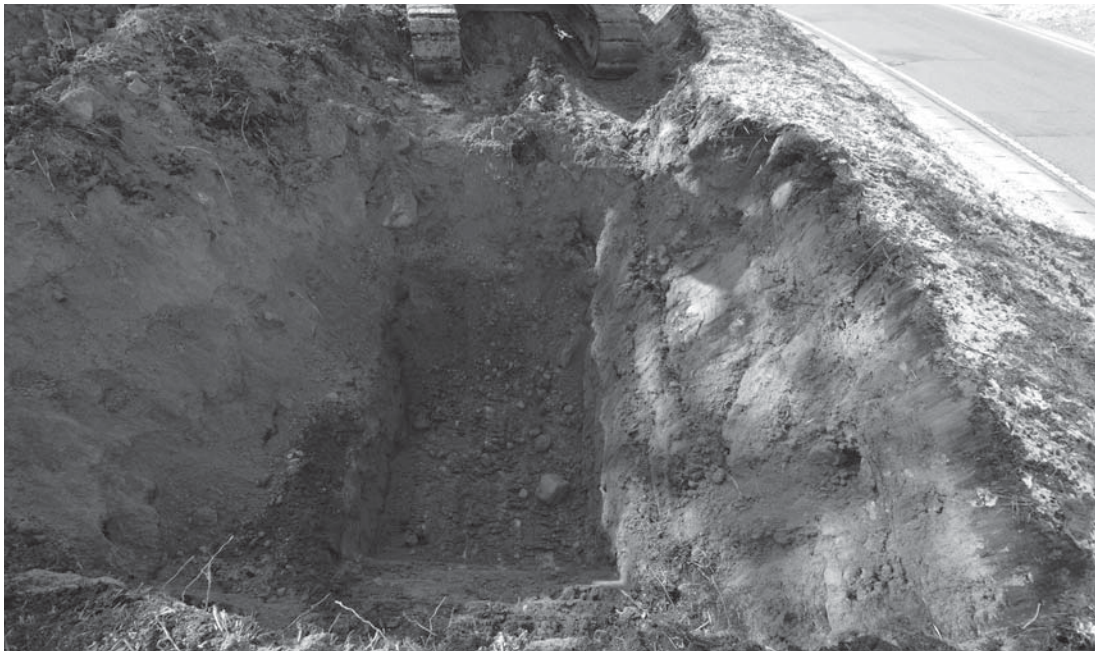
1　調査に至る経緯と経過

本件は、市川字伊保石地内における個人住宅新築に伴う本発掘調査である。平成28年10月９日、地権者より当該事業と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、住宅建築基礎工事の際に直径60㎝、深さ2.5mの柱状改良を35箇所行うために、現地表から2.8m掘削し、また隣地との境に擁壁を設置する際に、幅1.4m、現地表から深さ2.4m範囲を掘削する内容であった。当該地の西側隣接地では平成６年に第３次調査を行っており、その際現地表から0.3～1.0mの深さで遺構を発見していることから、遺跡への影響が懸念された。

第１図　調査区位置図

このため、工法変更によって遺跡を保存する協議を行ったが、提出された基礎工法以外では十分な地盤強度を得られないことから、本発掘調査を実施することになった。平成29年１月19日、地権者から発掘調査に関する依頼・承諾の提出を受け、平成29年１月31日より現地調査を開始した。

はじめに、重機による住宅建築部分の表土除去から取りかかり、現地表から2.4mまで掘削したが、遺構や遺物は発見できなかったことから、当該地は谷状の地形に位置すると推測される。掘削開始当日のうちに埋戻しを行い、すべての調査を終了した。



調査区全景（北から）

XI　西沢遺跡第29次調査

１　調査に至る経緯と経過及び発見した遺構

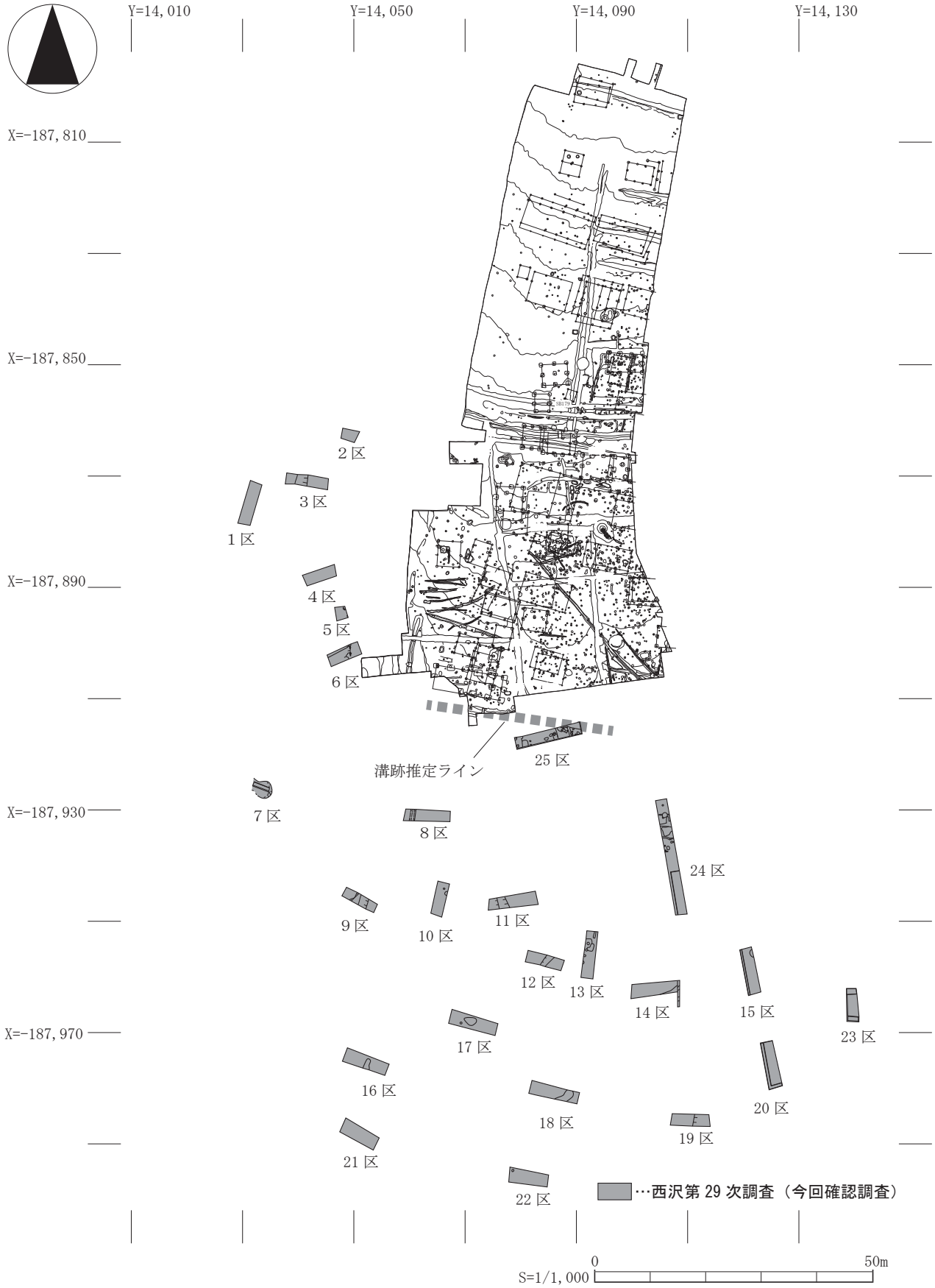
本件は、浮島字西沢地内における宅地造成に伴う確認調査である。平成28年３月10日、事業計画者より当該事業と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、面積11,107㎡の敷地に最大1.7ｍの切土と最大8.8ｍの盛土を施し、29区画の宅地及び道路を造成する内容であった。当該地は平成６年度に北側隣接地において第２次調査を実施しており、現地表から約30㎝の深さで古代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、多数の掘立柱建物跡からなる中世の屋敷跡など多くの遺構を発見していることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。また、計画面積が11,107㎡と広範囲に及んでいることや遺構状況を把握するため、確認調査を実施することとなった（註）。

平成29年１月24日事業計画者から発掘調査に関する依頼と１月19日～29日にかけて当該地区の各地権者から発掘調査に関する承諾の提出を受け、１月30日より現地調査を開始した。はじめに、重機によって表土除去から取りかかるとともに、雑木林で重機が進入できない範囲は人力で掘削を行った。

１月31日から遺構発見作業を行ったところ、25区で第２次調査で発見した中世の溝跡の延長を発見した。しかし、７区で発見した落ち込みは防空壕の跡とみられ、またそのほかの調査区で発見した遺構は全て近世以降のものであったことから、25区を除き近世以降に大きく地形の改変があったことがうかがわれた。２月24日に空中撮影を行ったのち、３月11日に埋戻しを完了し、すべての調査を終了した。

第１図　調査区位置図

（註）本発掘調査は第30次調査として多賀城市文化財調査報告書第139集に収録している。



第２図　第 29 次調査区と第２次調査区　平面図

調査区全景（真上から）

調査区全景（北東から多賀城跡を望む）

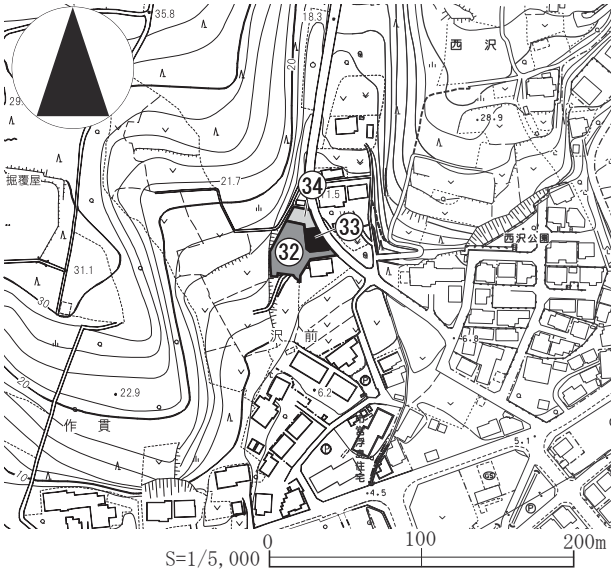
Ⅻ　西沢遺跡第32～34次調査

１　調査に至る経緯と経過

本件は、浮島字沢前地内における互いに隣接する宅地造成（第32次調査）と個人住宅新築（第33・34次調査）に伴う確認調査である。平成29年７月21日～平成29年９月１日にかけて、各地権者より当該事業と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。宅地造成計画では、幅４ｍ、長さ約38ｍの位置指定道路のほか切土を伴う幅約５ｍ、延長26ｍの擁壁を設置するものであった。個人住宅新築の基礎工事の際には、南側の１件（第33次調査）では直径14㎝、長さ3.5～4.5ｍの杭鋼管を31本打ち込むもので、北側の１件（第34次調査）では0.83～2.03ｍの表層改良を施す内容であった。当該地では遺構検出面までの深さが不明であったが、道路付設及び鋼管杭打設などによって、埋蔵文化財への影響が懸念された。

このため、工法変更によって遺跡を保存する協議を行ったが、宅地造成については当初計画以外では事業が進められないこと、住宅建設においては提出された基礎工法以外では十分な地盤強度を得られないことから、確認調査を実施することになった。９月12日～14日に各地権者から発掘調査に関する依頼・承諾の提出を受け、９月21日より現地調査を開始した。

はじめに、重機による住宅建築部分の表土除去から取りかかった。しかし第33・34次調査区や第32次調査区４区では現地表から1.6～2.0ｍまで掘り下げたが、遺構や遺物は発見できず、第32次調査区の１～３区では西の丘陵部から東に向かって谷に向かって落ち込む様子が確認できた。また西側の丘陵部分も現代の削平によって大きく地形が改変されており、遺構は発見できなかった。以上のことから、掘削開始当日のうちに埋戻しを行い、すべての調査を終了した。

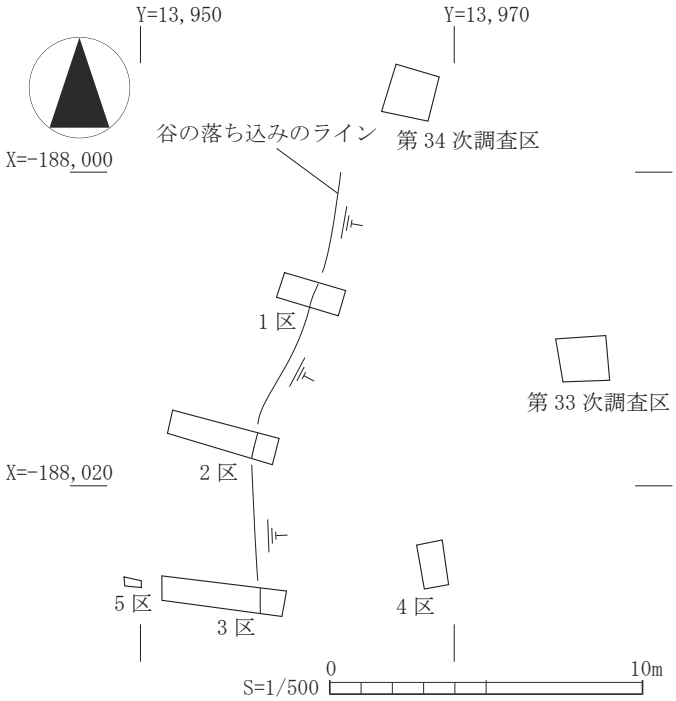


※○囲いの数字は調査次数

第１図　調査区位置図

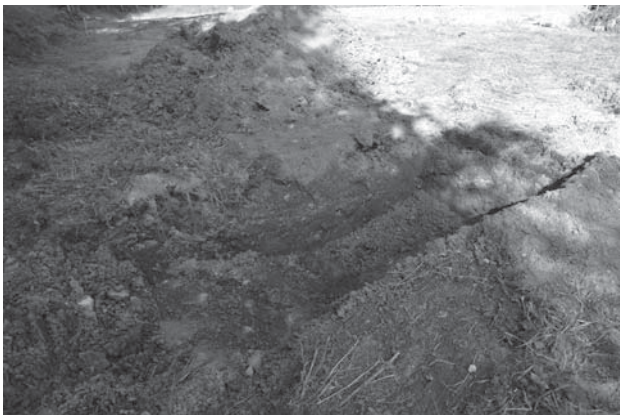
調査次数	かかわり協議書提出年月日	発掘調査の依頼及び承諾書提出年月日
第32次調査	平成29年7月21日	平成29年9月14日
第33次調査	平成29年8月18日	平成29年9月12日
第34次調査	平成29年9月1日	平成29年9月12日

表１　各調査区ごとの協議書等提出年月日



第２図　調査区配置図

第32次４区（北東から）



第32次１区（南西から）

第32次２区（東から）

第32次３区（東から）

第32次５区（北から）

第33次（南西から）

第34次（南東から）

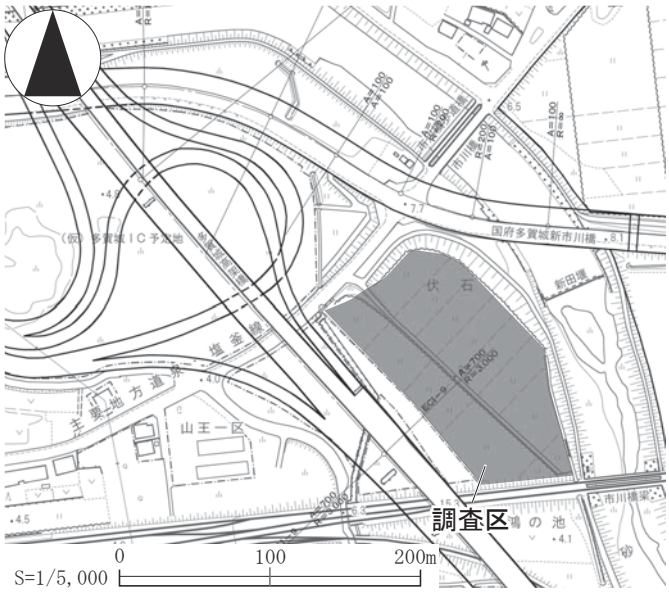
XIII　市川橋遺跡第95次調査

１　調査に至る経緯と経過

本件は、市川字伏石地内における宅地造成工事に伴う試掘・確認調査である。平成29年２月７日、開発事業者より当該区における宅地造成工事計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、２m前後の盛土を行ったのち、幅５～６mの道路及び防災用調整池を構築する。

本地区では、昭和56･57年度に第１・２次調査を、平成４年度に第10次調査を実施しており、各調査区で奈良・平安時代の遺構を確認し、特に多賀城南面に施工された道路網のうち西７道路跡及び北２道路跡を発見していることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。

このため、本発掘調査にかかる費用及び期間を積算するための確認調査を実施することで協議を進め、平成29年９月20日に発掘調査の依頼書と承諾書の提出を受け、10月２日より現地発掘調査を開始した。



第１図　調査区位置図

まず、西３道路及び北２道路と開発範囲における遺構分布を確認する目的から、事業地内に幅約２mのトレンチを７箇所（Ｔ１～Ｔ７）を設定し、南側から掘削を開始した（第２図）。

Ｔ１では竪穴住居跡及び灰白色火山灰を多量に含む土壙、Ｔ２で小溝群、Ｔ３で掘立柱建物跡及び西３道路西側溝・北２道路北側溝の可能性がある溝跡、Ｔ４で蛇行する水路状の溝跡、Ｔ５で土壙・溝跡、Ｔ６で溝跡、Ｔ７で複数の竪穴住居跡を確認する等、各トレンチで遺構密度が極めて高い状況が確認された。このため、平面の精査及び一部深掘りによる下層の状況確認を行ったのち、平面図の作成を行った。

11月21日、調査区の埋め戻しを行い、現地調査の一切を終了した。

２　調査成果

各トレンチでいずれも現地表面から30～50cm程度掘り下げた黄褐色土層の上面で確認した。以下、主な遺構を記載する。

Ｔ１発見遺構（第３図）

ＳＩ 3562 竪穴住居跡

【位置・形態】調査区北半部で発見した。南西隅のみの発見であり、全体の形状は不明である。

【重複】南端で土壙と重複しており、これより新しい。

【方向・規模】南辺でみると東で北に23度偏している。全体の規模は不明である。

ＳＩ 3563 竪穴住居跡

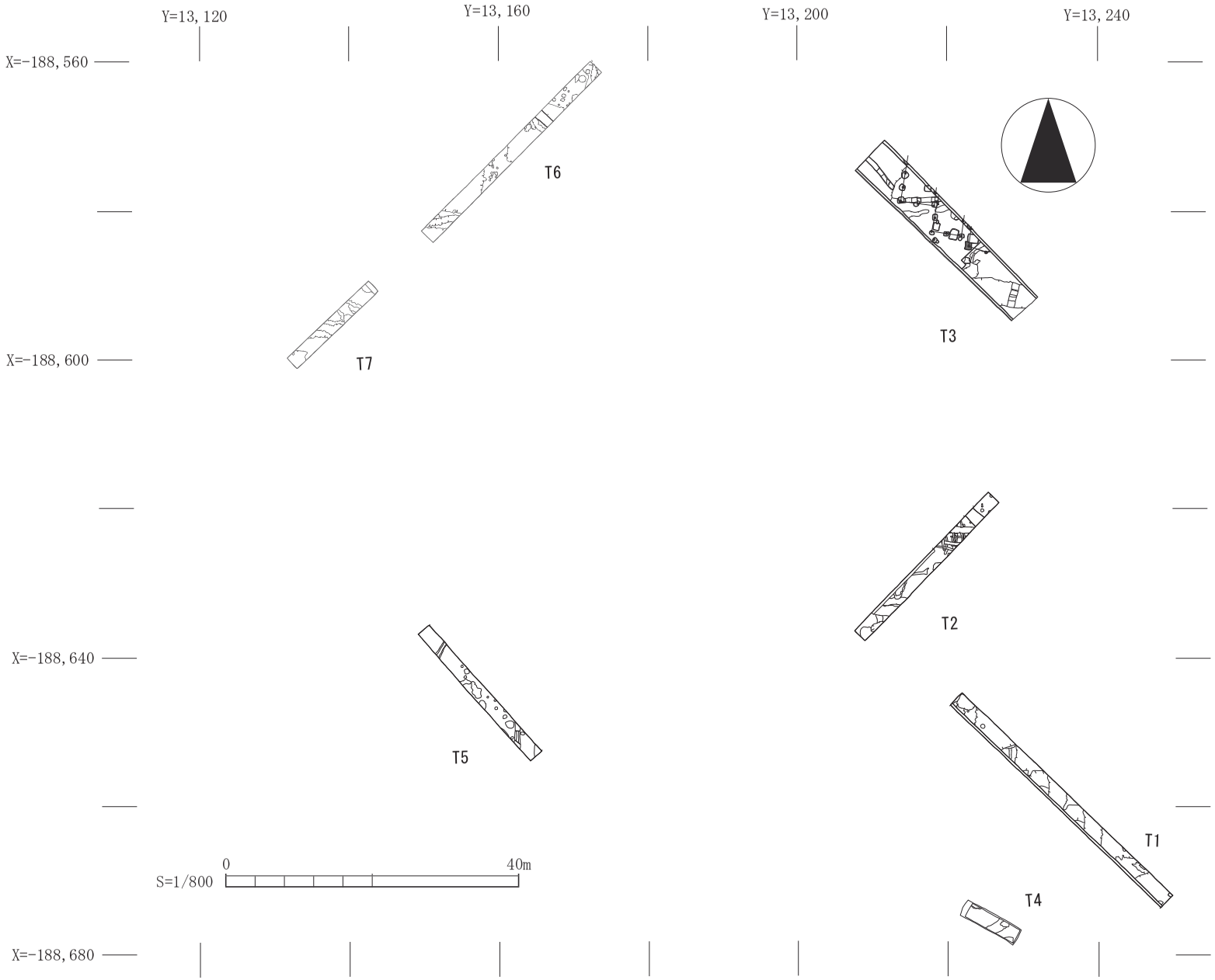
【位置・形態】調査区中央部で発見した。南西隅のみの発見であり、全体の形状は不明である。

【重複】類似する竪穴状遺構と重複しており、複数回の建替えが行われた可能性がある。

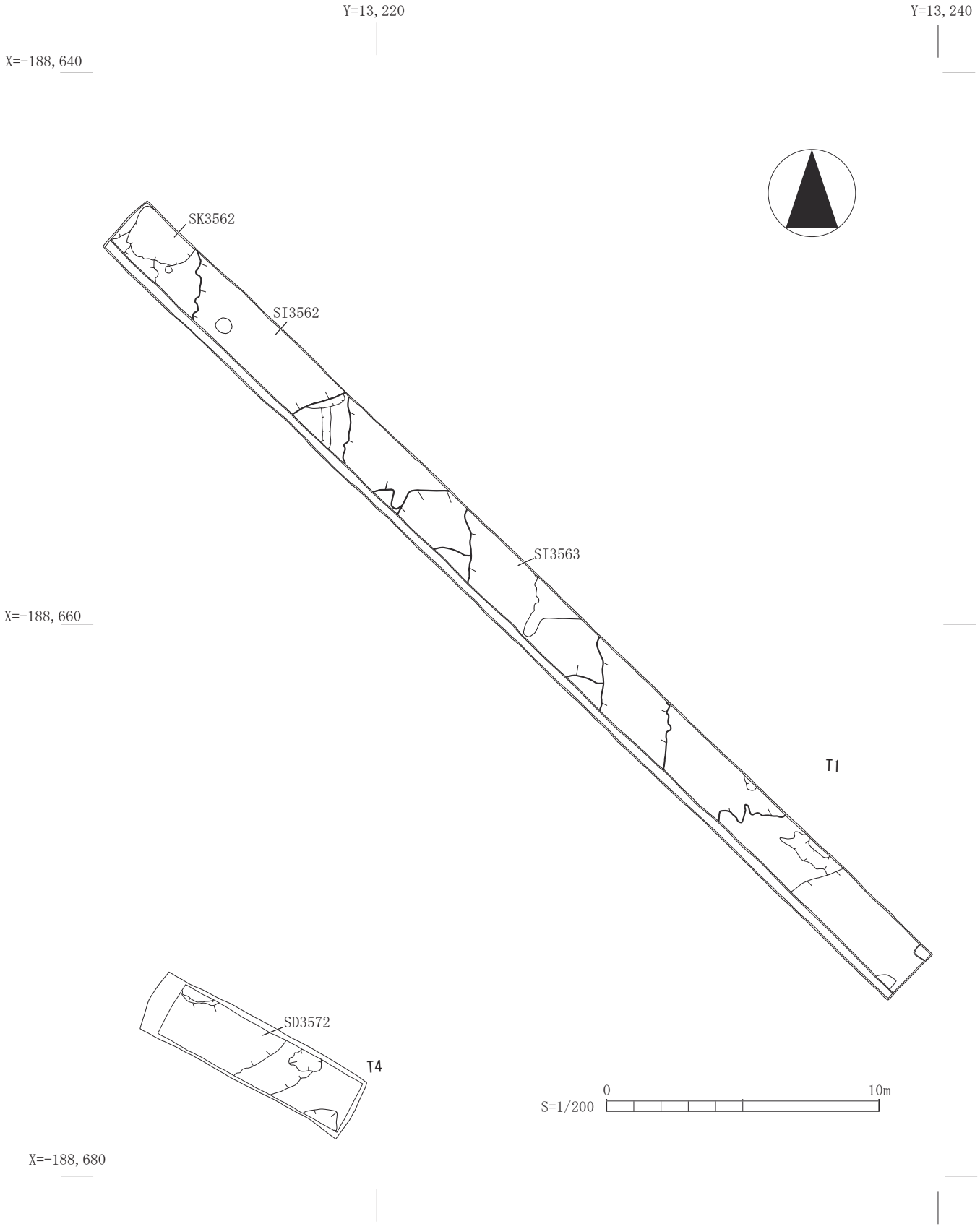
【方向・規模】南辺で東で南に約９度偏する。全体の規模は不明である。

ＳＫ 3564 土壙

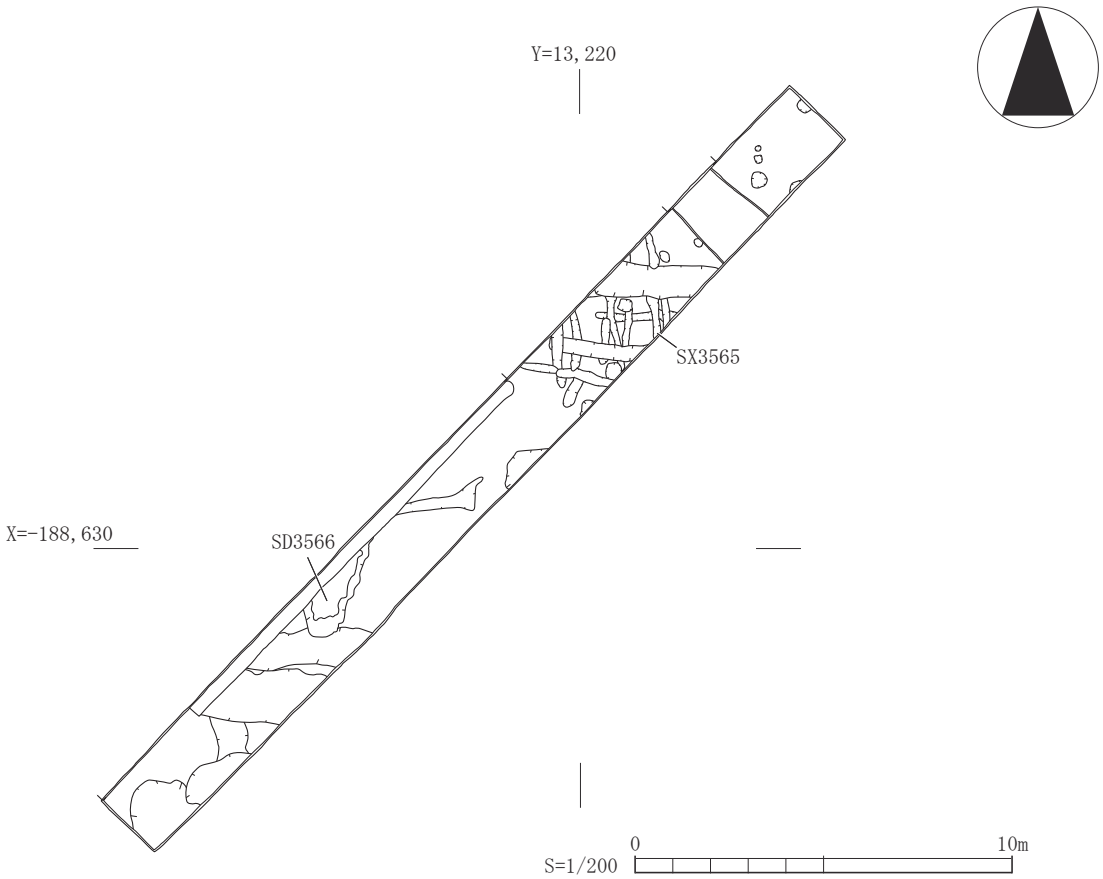
【位置・形態】調査区北端で発見した土壙である。検出面で確認した土層は人為埋土と見られ、平面形状は整円形


Y=13, 120
Y=13, 160
Y=13, 200
Y=13, 240
X=-188, 560
X=-188, 600
X=-188, 640
X=-188, 680
T1
T2
T3
T4
T5
T6
T7
0
40m
S=1/800

第２図　調査区配置図


Y=13,220
Y=13,240
X=-188,640
SK3562
SI3562
SI3563
X=-188,660
T1
SD3572
T4
0
10m
S=1/200
X=-188,680

第３図　Ｔ１・Ｔ４平面図



第４図　Ｔ２平面図

である。井戸跡の可能性がある。

【埋土】埋土は褐灰色土であり、ブロック状の灰白色火山灰を多量に含む。

【重複】土壙２基と重複しており、これより新しい。

【規模】発見した最大長は 2.5 mである。

Ｔ２発見遺構（第４図）

ＳＸ 3565 小溝群

【位置・形態】調査区北半で確認した小溝群である。

【重複】東西方向と南北方向の小溝がそれぞれ複数回構築されている。

【埋土】埋土は灰黄褐色土である。

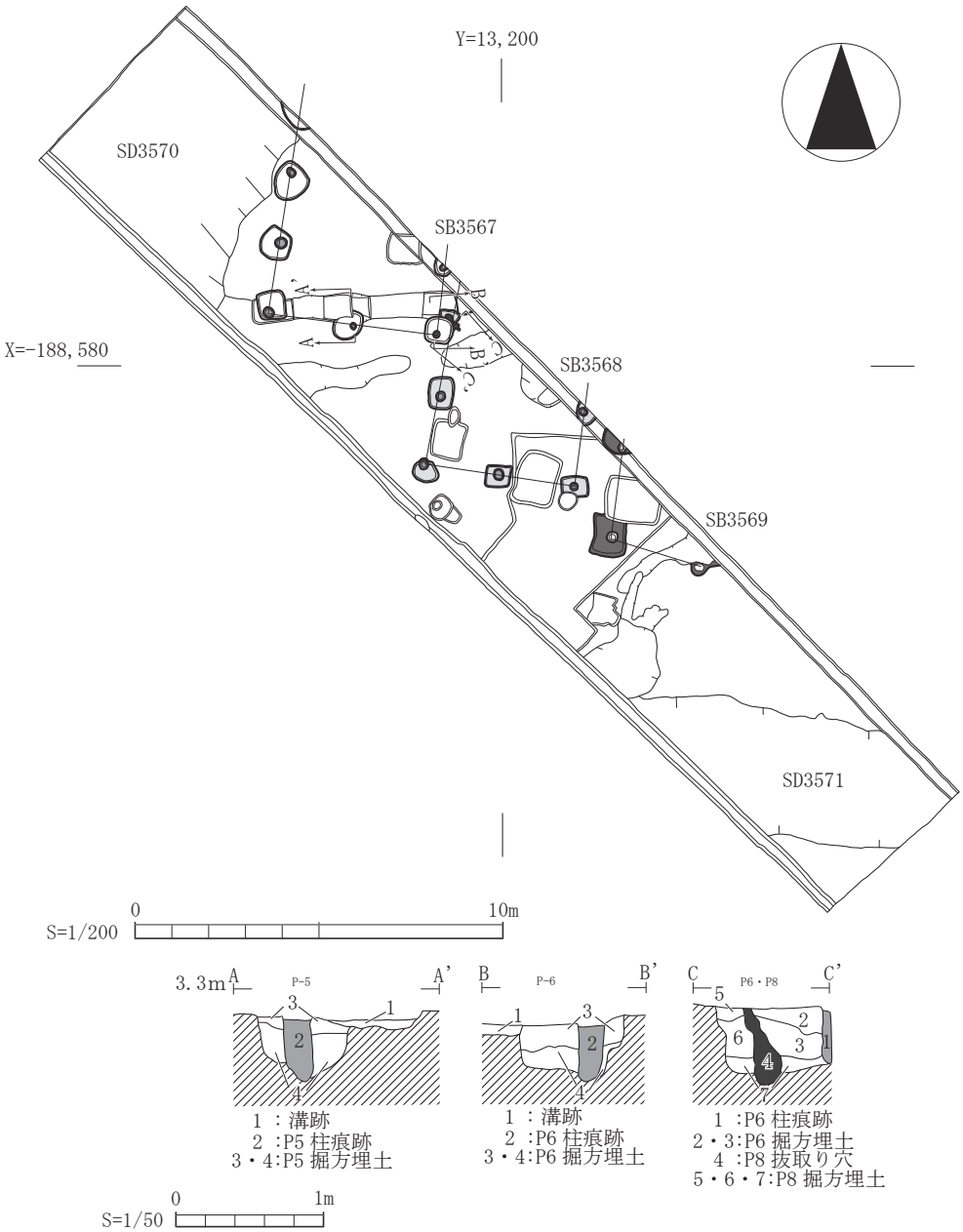
ＳＤ 3566 溝跡

【位置・形態】調査区中央やや南寄りの壁際で確認した溝跡である。

【重複】溝跡と重複しており、これより新しい。

【方向・規模】方向は北で約９度東に偏している。規模は幅 1.6 m以上である。

【埋土】平面で２層確認できる。第１層は黒色粘質土であり、第２層は褐灰色土である。



第５図　Ｔ３平面図

【重複】溝跡より古く、SB3568 より新しい。

【方向・規模】西側柱筋で測ると、北で東に 10 度偏する。

【掘方・柱痕跡】方形と楕円形の掘方が存在する。掘方規模は 0.7 ～ 1.07 mである。６基の柱穴で柱痕跡を確認している。

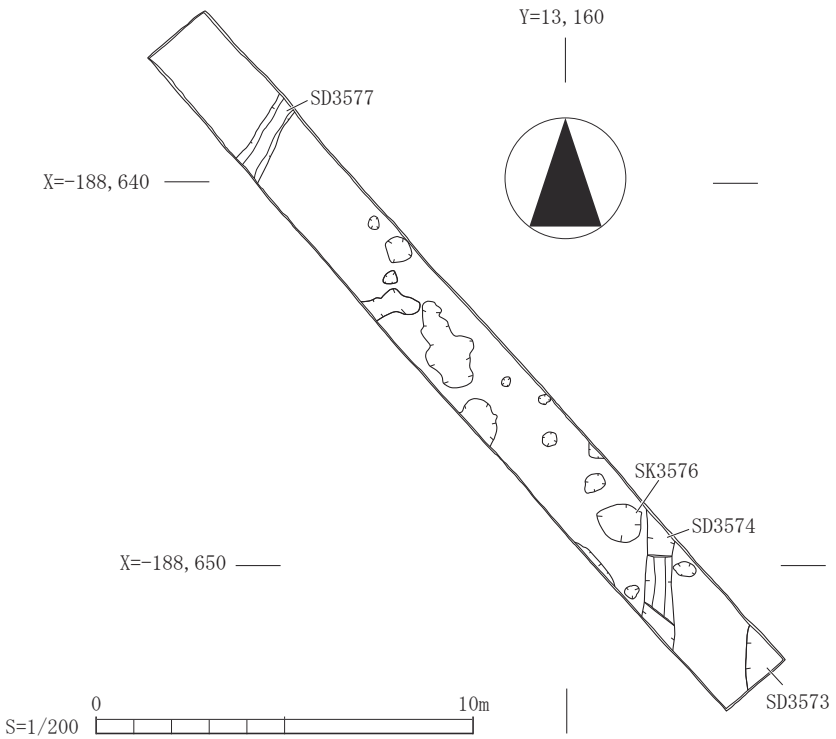
【埋土】Ｐ６で見ると掘方埋土は２層に分けられる。上層は褐灰色土であり、直径３～５cm 程度の黄褐色土粒を微量含む。下層は灰黄褐色土であり、直径８mm ～ 1 cm 程度の黄褐色土粒を多量に含む。柱痕跡は黒褐色粘質土である。

ＳＢ 3568 掘立柱建物跡

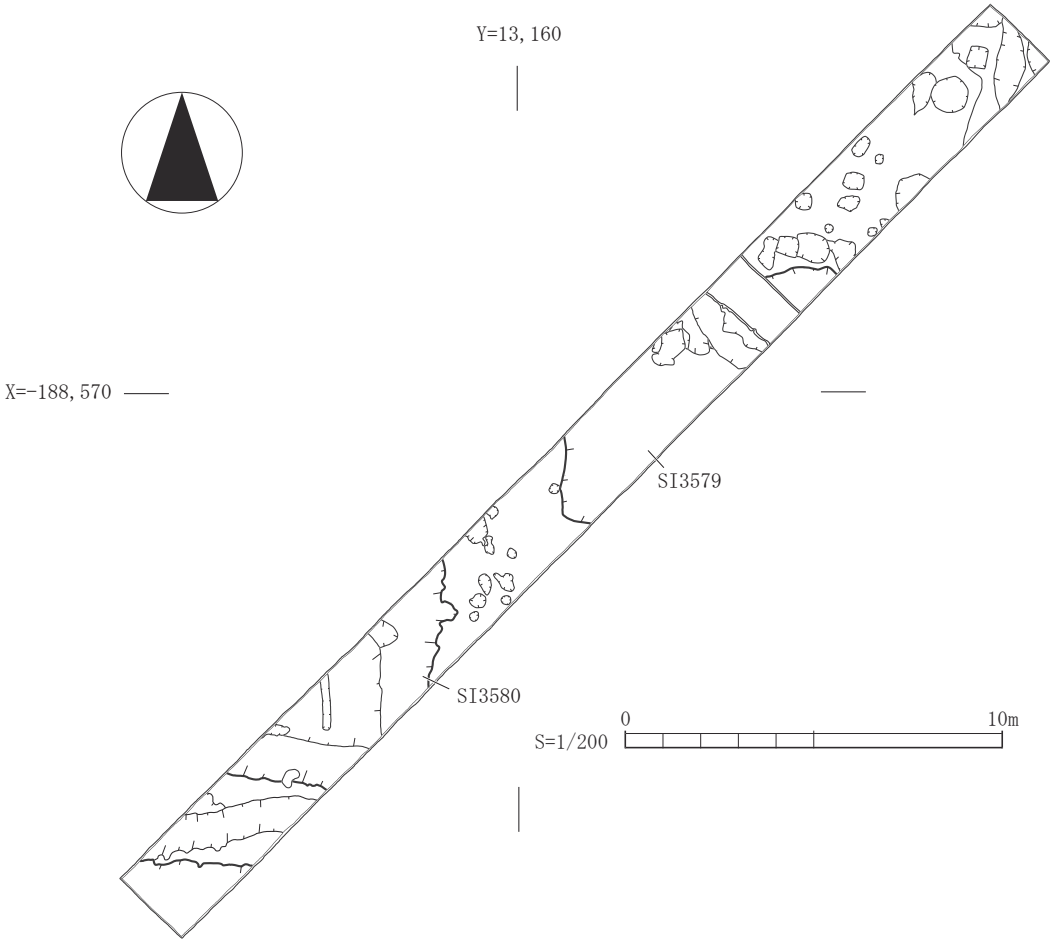
【位置・形態】調査区中央部で発見した。南北３間以上東西２間の南北棟である。

【重複】SB3567 及び溝跡と重複しており、これらより古い。

【方向・規模】西側柱筋で測ると、北で東に 11 度偏する。



第６図　Ｔ５平面図



第７図　Ｔ６平面図

【掘方・柱痕跡】方形と楕円形の掘方が存在する。掘方直径は 60cm ～ 82cm である。５基の柱穴で柱痕跡を確認している。SB3567 と重複する柱穴では抜取り穴が認められる。
【埋土】Ｐ８で見ると掘方埋土は３層に分けられる。１層は灰黄褐色土であり、直径３～４mm 程度の黄褐色土粒を微量含む。２層は黄褐色土であり、直径８mm ～ 1 cm 程度の褐灰色土を微量含む。３層は黄色粘質土であり、直径 1 cm 程度の暗灰黄土粒を少量含む。抜取り穴はにぶい黄褐色土であり、直径３～５mm 程度の黄褐色土粒を微量含む。

ＳＢ 3569 掘立柱建物跡
【位置・形態】調査区中央やや南寄りで発見した。全体の規模は不明であるが、掘立柱建物南西隅部と見られる。掘方直径は最大 1.1 mである。３基の柱穴で柱痕跡を確認している。
【重複】ピットや溝跡と重複しており、これらより古い。
【方向・規模】西側柱筋で測ると北で東に８度偏する。
【掘方・柱痕跡】３基の柱穴で柱痕跡を確認している。掘方直径は最大 110cm である。

ＳＤ 3570 溝跡
【位置・形態】調査区北端で発見した大溝跡である。西３道路東側溝の可能性が高い。
【重複】最上層の埋土が SB3567 を覆っている。
【方向・規模】平面で 4.8 mを発見している。北で東に 25 度偏する。
【埋土】褐灰色土である。

ＳＤ 3571 溝跡
【位置・形態】調査区南端で発見した大溝跡である。北２道路北側溝の可能性が高い。
【重複】土壙と重複しており、これより古い。
【方向・規模】東で約８度南に偏する。
【埋土】褐灰色土である。

Ｔ４発見遺構（第３図）
ＳＤ 3572 溝跡
【位置・形態】調査区北西から南東に延びる溝跡である。調査区北西から南東にかけて大きく湾曲する。
【重複】他の遺構との重複は無い。
【方向・規模】最大幅約４mを確認している。
【埋土】平面で２層を確認している。１層は黒色粘質土であり、２層はにぶい黄褐色粘質土である。

Ｔ５発見遺構（第６図）
ＳＤ 3573 溝跡
【位置・形態】調査区南東隅で発見した。南に落ちる溝跡である。
【重複】他の遺構との重複は無い。
【埋土】黒褐色土である。

ＳＤ 3574 溝跡
【位置・形態】調査区南半部で発見した、南北に延びる溝跡である。
【重複】他の遺構との重複は無い。
【方向・規模】幅約 68cm であり、ほぼ真北方向に延びる。

ＳＤ 3577 溝跡
【位置・形態】調査区北端付近で発見した溝跡である。
【重複】他の遺構との重複は無い。
【方向・規模】幅約 68cm であり、北で東に 32 度偏する。
【埋土】黒褐色土である。

ＳＫ 3576 土壙
【位置・形態】調査区中央やや南寄りで発見した。平面形態は楕円形である。
【重複】他の遺構との重複は無い。
【規模】平面での最大径は 1.17 mである。
【埋土】褐灰色土である。

Ｔ６発見遺構（第７図）
ＳＩ 3579 竪穴住居跡
【位置・形態】調査区中央部で発見した。住居北西半と見られる。
【重複】溝跡、土壙等と重複しており、これより古い。
【埋土】褐灰色土である。

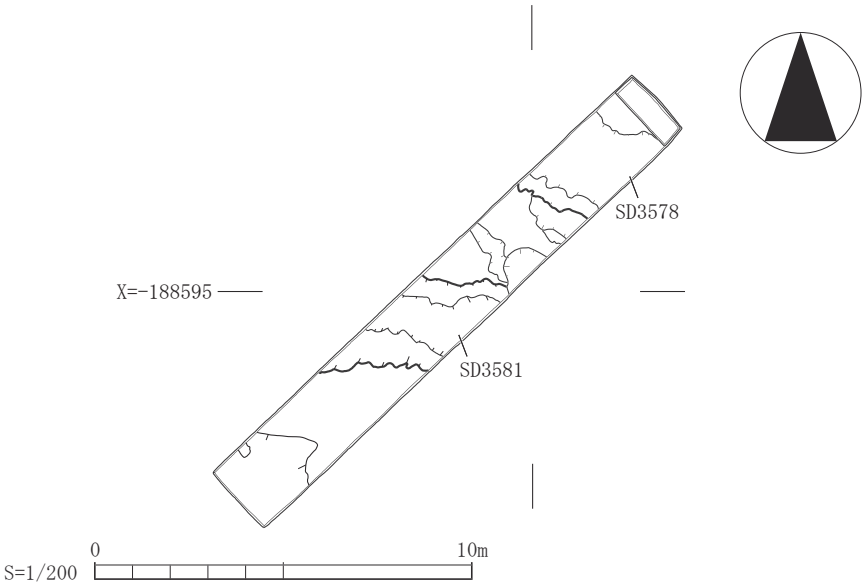
ＳＩ 3580 竪穴住居跡
【位置・形態】調査区南西部で発見した。住居南東隅と見られる。
【重複】溝跡、土壙等と重複しており、これより古い。
【埋土】褐灰色土である。

Ｔ７発見遺構（第８図）
ＳＤ 3578 溝跡
【位置・形態】調査区東半部で発見した溝跡である。
【重複】他の遺構との重複は無い。
【方向・規模】東で南に約 10 度偏する。
【埋土】平面で２層確認した。１層は黒褐色粘質土であり、２層は褐灰色土である。

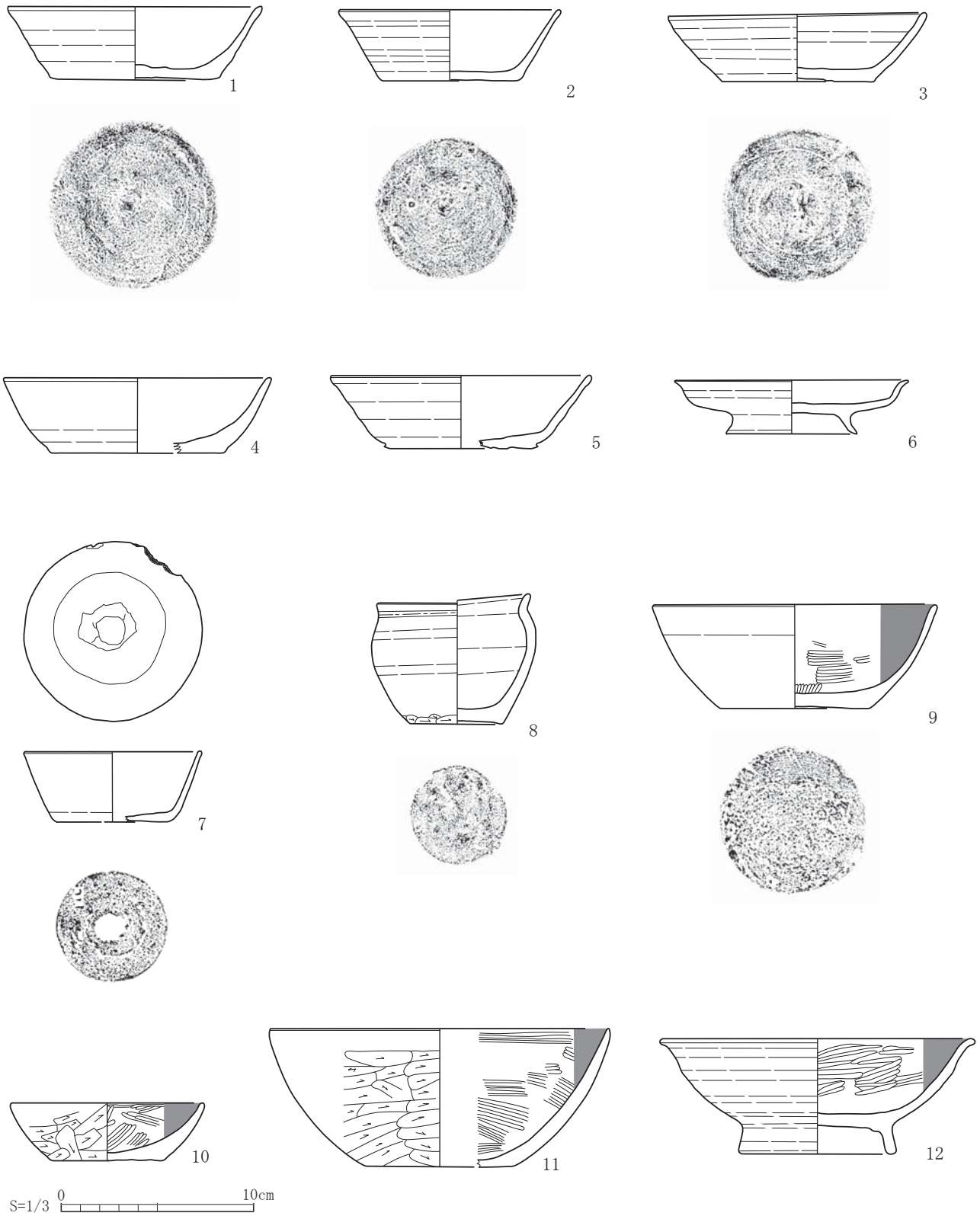
３　まとめ

各トレンチで極めて遺構密度が高い状況を確認した。遺構の種別は竪穴住居跡、掘立柱建物跡、道路側溝跡、小溝群などである。出土遺物には一部 18 世紀以降の陶器が含まれるものの、大半が古代のものであり、奈良・平安時代の遺構が中心と見られる。Ｔ３で発見した SB3567 は、掘方埋土に灰白色火山灰を含んでおり、10 世紀前葉以降のものと考えられる。

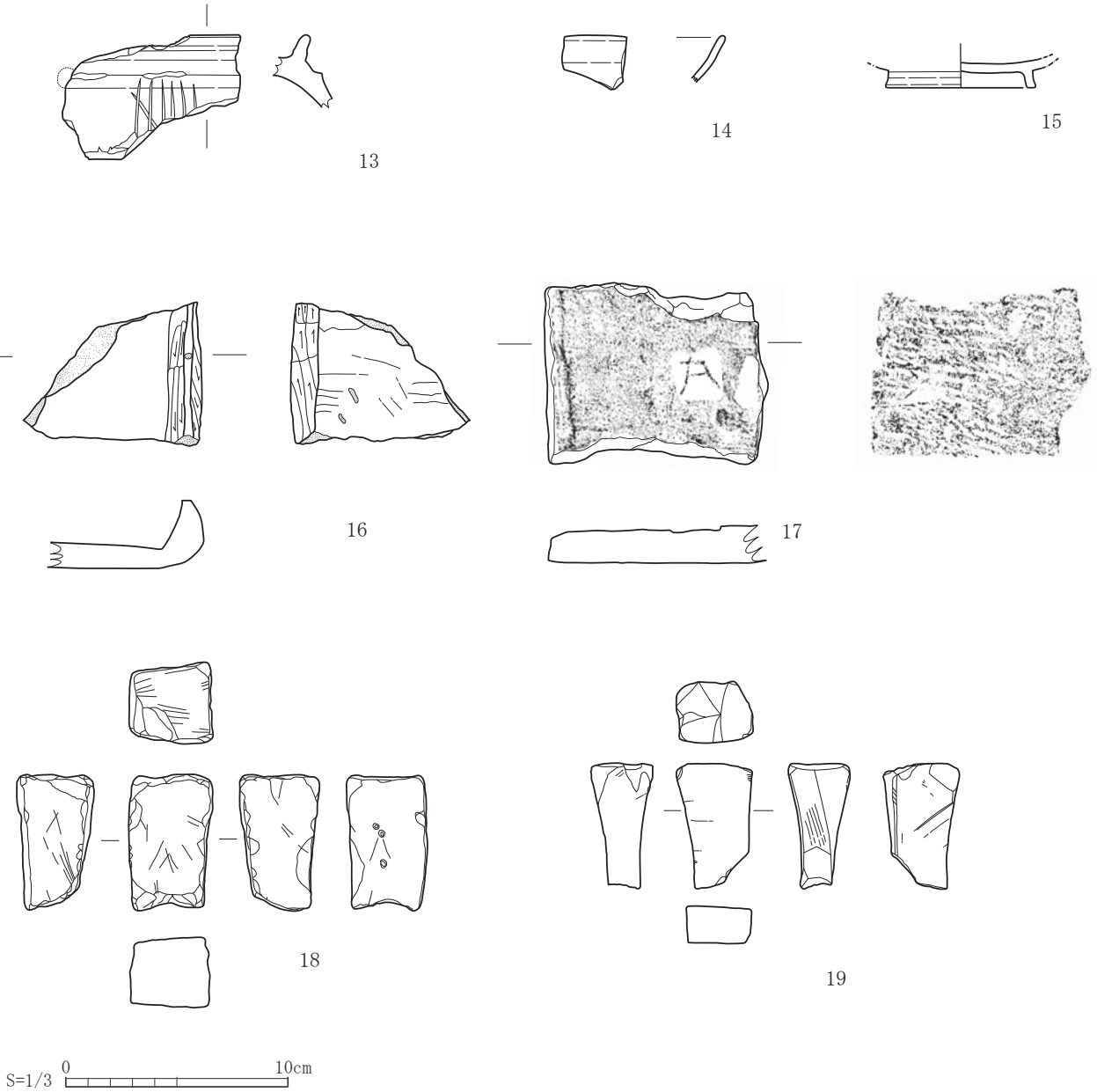
奈良時代の土器が一定量含まれる一方、灰白色火山灰を含む建物跡が確認されており、奈良時代から平安時代前半を通して継続的な土地利用がなされた可能性が考えられる。特筆すべきな遺物として、緑釉･灰釉陶器や円面硯･風字硯が出土している。これらの遺物は全て表土及び堆積層から出土しているため、詳細は本調査を期したいが、古代多賀城と密接に関わる施設が存在した可能性が高い。



第８図　Ｔ７平面図



第９図　各層出土遺物１



第 10 図　各層出土遺物２

番号	種類	遺構 層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	須恵器 坏	1T LⅠ	ロクロナデ→ナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(13.2) 11/24	8.6 24/24	3.8	1	R1	Ⅲ類
2	須恵器 坏	6T K面	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	(11.4) /24	7.2 24/24	3.7		R29	Ⅴ類
3	須恵器 坏	7T K面	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(13.4・12.6) 19/24	7.9 24/24	3.5		R30	Ⅲ類
4	須恵器 坏	5T LⅡ	ロクロナデ→ナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(13.9) 4/24	(8.9) 7/24	3.9		R6	Ⅲ類
5	須恵器 坏	1T K面	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(13.45) 5/24	(8.0) 9/24	3.8		R10	Ⅲ類
6	須恵器 高台付皿	3T K面	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(11.9) 4/24	6.8 24/24	2.8	3	R15	
7	須恵器 坏	1T LⅡ	ロクロナデ 底部：穿孔	ロクロナデ	(9.1) 22/24	5.8 24/24	3.65	2	R9	
8	土師器 甕	1T K面	ロクロナデ、ヘラケズリ 底部：ヘラケズリ	ロクロナデ	7.7 24/24	(4.8) 23/24	6.5	4	R11	
9	土師器 坏	3T LⅡ	ヘラミガキ 底部：回転糸切り	ヘラミガキ→黒色処理	(14.6) 21/24	7.6 24/24	5.4		R19	BⅤ類
10	土師器 坏	1T K面	手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	(10.0) 16/24	(6.0) 18//24	5.0		R12	BⅡ類
11	土師器 坏	5T LⅠ	ロクロナデ 底部：不明	ヘラミガキ→黒色処理	(17.6) 3/24	(7.6) 4/24	7.2		R5	
12	土師器 高台付坏	5T LⅡ	ロクロナデ 底部：回転ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	(16.1) 11/24	8.2	6.0		R23	
13	円面硯	2T LⅠ	ロクロナデ	ロクロナデ	(9.4) 1/24	—	—		R3	
14	灰釉陶器 碗	2T LⅠ	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	—		R4	
15	緑釉陶器 碗？	5T K面	高台貼つけ→ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	— 0/24	(6.6) 14/24	1.3	6,7	R28	
					最大長	最大幅	最大厚			
16	風字硯	3T K面	全面ケズリ	墨痕、摩耗痕、光沢あり	7.8	1.5	3.1	5	R14	
					残存長	残存幅	最大厚			
17	平瓦	6T K面	凹面『丸』刻印	ヘラケズリ、叩き目のつぶれ	6.8	9.2	1.5		R7	
					最大長	最大幅	最大厚			
18	砥石	3T K面			6.1	3.5	3.6		R22	
19	砥石	6T K面		上部も使用	5.65	3.4	1.7		R8	

第 11 図　出土遺物観察表

Ｔ１遺構確認状況（北西から）

Ｔ２遺構確認状況（北東から）

Ｔ３掘立柱建物発見状況（南西から）

Ｔ４遺構確認状況（北西から）

Ｔ４遺構確認状況（南東から）

Ｔ５遺構確認状況（北西から）

Ｔ６遺構確認状況（南西から）

Ｔ１遺構確認状況（北東から）

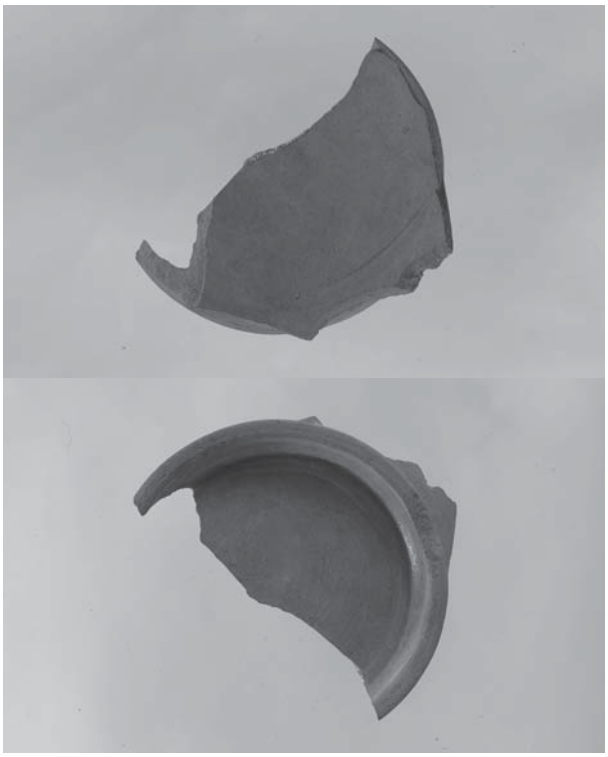
１　Ｔ１　１層　須恵器坏（R1）

２　Ｔ１　２層　須恵器坏（R9）

３　Ｔ３　検出面　須恵器高台付坏（R15）

４　Ｔ１　検出面　土師器甕（R11）

５　Ｔ５　検出面　風字硯（R28）



６　Ｔ５　検出面　緑釉陶器碗（R28）

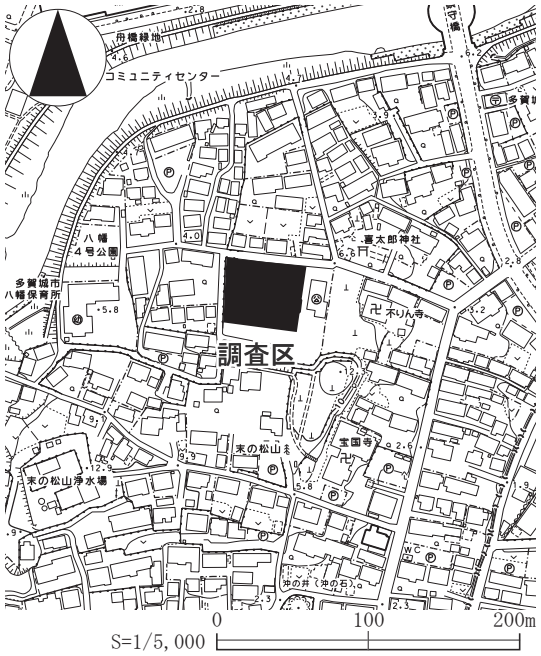
出土遺物

XⅣ　八幡館跡第８次調査

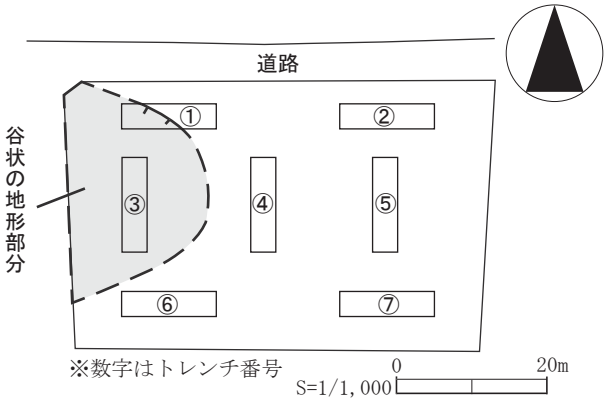
１．調査に至る経緯と経過

本件は、八幡二丁目地内における宅地造成に伴う確認調査である。計画では、1,979㎡の敷地に東側一部では現地表から８㎝の切土を行うこと、また造成地内に幅 5.5 m、長さ約 58 mの道路を敷設し、その道路の地下に幅 0.8 ～ 2.0 m、深さ 1.2 ～ 1.6 mの掘削を伴う給排水雨水管が埋設する内容であったことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。計画地は八幡館遺跡の範囲にあたり、開発面積が広く、道路用地が含まれることから、宮城県教育委員会の指示に基づき確認調査を実施することとなった。平成 29 年６月７日に開発業者より調査に関する依頼書及び承諾書の提出を受け、６月 13 日に現地調査を開始した。

７月６日、道路の計画範囲を中心に８か所の調査区を設定し、重機による掘削を行った。その結果、最も西側の調査区①と③で谷状の地形に落ち込む状況を確認したほかは、全ての調査区において現代の切土工事によって地形が大きく改変されている様子がうかがえ、遺構や遺物を発見することはできなかった。そのため、写真撮影や測量など記録作業の終了後に埋戻しに着手し、翌日の７月７日の埋戻し完了をもって現地発掘調査の一切を終了した。



第１図　調査区位置図



第２図　調査区配置図

調査区③（東より）

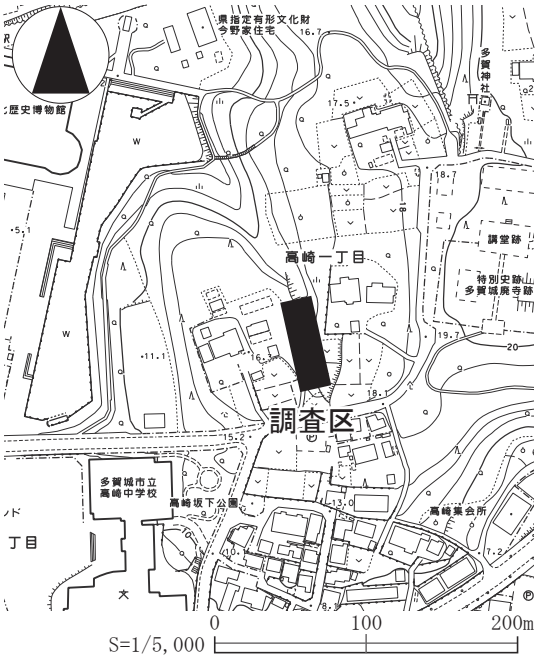
調査区⑦（東より）

XV　高崎遺跡第110次調査

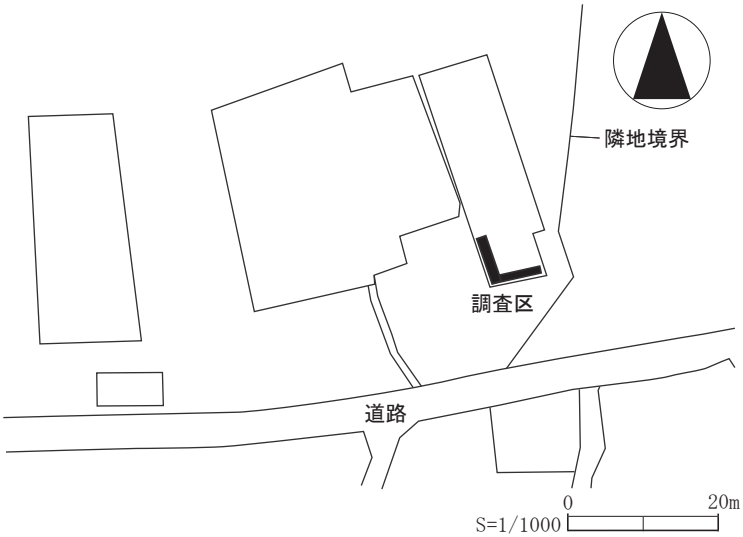
1　調査に至る経緯と経過

本件は、高崎一丁目地内における太陽光発電設備工事に伴う確認調査である。計画では、当該地で厚さ 30㎝の覆土整備を行い、その上に 10 ～ 60㎝の盛土を施して太陽光発電設備を設置するものである。計画地が高崎遺跡の範囲に含まれることから、遺跡への影響が懸念された。そのため、遺跡保存のための協議を行ったが、当初計画での施工との結論に至ったため、確認調査を実施することとなった。平成 29 年７月４日に地権者より調査に関する依頼書及び承諾書の提出を受け、７月６日に現地調査を開始した。

７月６日、計画地の南西角にＬ字状のトレンチを設定して精査を行った。調査区周辺の現況は、既に部分的に基盤層である地山が露出しており、トレンチ設定区画でも 10㎝の深さで地山層を発見した。しかし、地山層の上面には重機による削平の痕跡があり、遺構を発見することはできなかった。そのため、記録作業の終了後に埋戻しを行い、着手日の当日をもって調査の一切を終了した。



第１図　調査区位置図



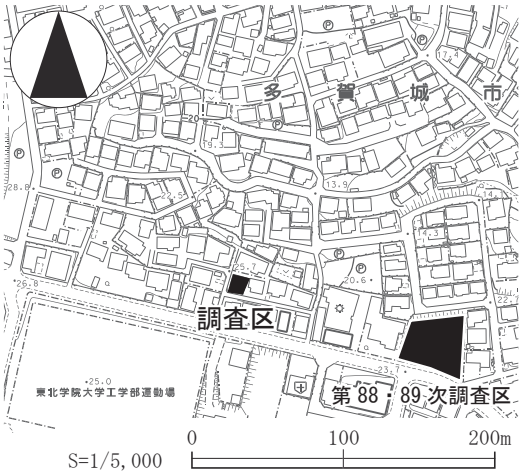
第２図　調査区配置図

調査区全景（東から）

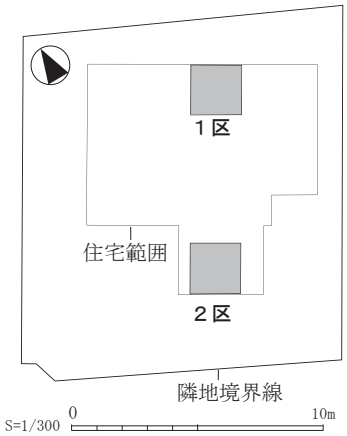
XVI　高崎遺跡第111次調査

１　調査に至る経緯と経過

本件は、多賀城市留ヶ谷一丁目地内の個人住宅新築に伴う本発掘調査である。平成 29 年８月 24 日に地権者から当該地における個人住宅新築と埋蔵文化財との関わりについての協議書が提出された。計画では、住宅部の基礎工事として長さ 2.0 m、直径 50㎝の杭状改良を 32 本打ち込む内容であった。当該区周辺では、これまでも開発行為に伴う調査によって遺構が発見されていることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。その後平成 29 年９月 29 日、地権者より発掘調査の依頼書及び承諾書の提出を受けて、10 月 11 日に開始した。重機によって建物基礎部分の北側を１区、南側を２区として表土を除去した。その結果、現地表面から１区では約 1.9 m、２区では約 1.8 mまで掘り下げたが、遺構は発見されなかった。その後、写真撮影及び調査区の平面図を作成した。同日、調査区の埋め戻しを行い全ての現地発掘調査を終了した。



第１図　調査区位置図

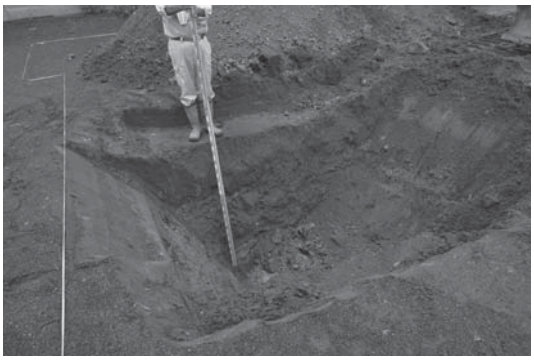


第２図　調査区配置図

２　調査成果

遺構は発見されなかったが、現代の盛土の中から煉瓦が出土した。煉瓦は２種類あり、ＮＫＫ及びＳＫ３５と刻印された耐火煉瓦とみられる浅黄褐色を呈するものと、刻印が確認できず表面が縮緬状で明赤褐色を呈するものと２種類ある。前者の大きさは長さ 22.3㎝、幅 10.9㎝、厚さ 5.8㎝である。後者は欠損しているため長さが不明であるが、幅 9.9㎝、厚さ 5.6㎝である。

この煉瓦について考えるうえで参考になるのが、当該地から約 130 m離れた東側にある第 89・90 次調査で発見した、多賀城海軍工廠に関連すると見られるＳＸ 1735 地下施設の存在である。このうち前者の煉瓦は、第 89・90 次調査では確認されておらず、また耐火煉瓦とみられることをあわせて考えると、ＳＸ 1735 より新しい煉瓦の可能性が高い。一方、後者の煉瓦はＳＸ 1735 の構築材として使用されたものと法量と色調及び表面が縮緬状であることが共通している。このことから、詳細は不明であるが、当該地区にもＳＸ 1735 と同じ頃の施設が存在した可能性が指摘できよう（註）。



１区掘削状況（北西から）

３　まとめ

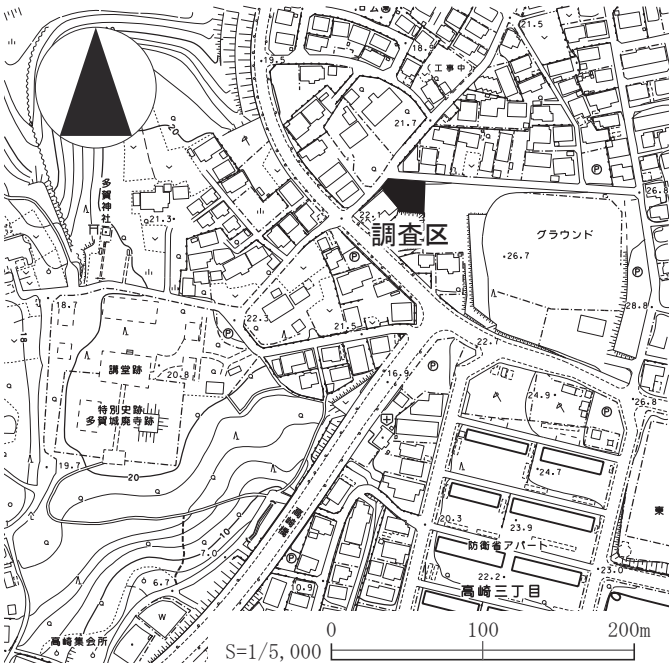
（１）遺構は発見されなかったが, 盛土中からレンガが出土した。
（２）煉瓦は、多賀城海軍工廠に関連すると見られる地下施設の構築材として使用されたものと法量・色調や質感が類似している。当該区はすでに失われているものの、多賀城海軍工廠と関連のある施設が存在していた可能性が指摘できる。

（註）工事担当する業者からの話によると、今回の個人住宅建築に先立ち、既設の住宅の取り壊しを行ったところ地中に煉瓦でできた建物基礎とみられるものがあったが、住宅撤去の際に破砕し撤去したとのことであった。

XⅦ　高崎遺跡第112次調査

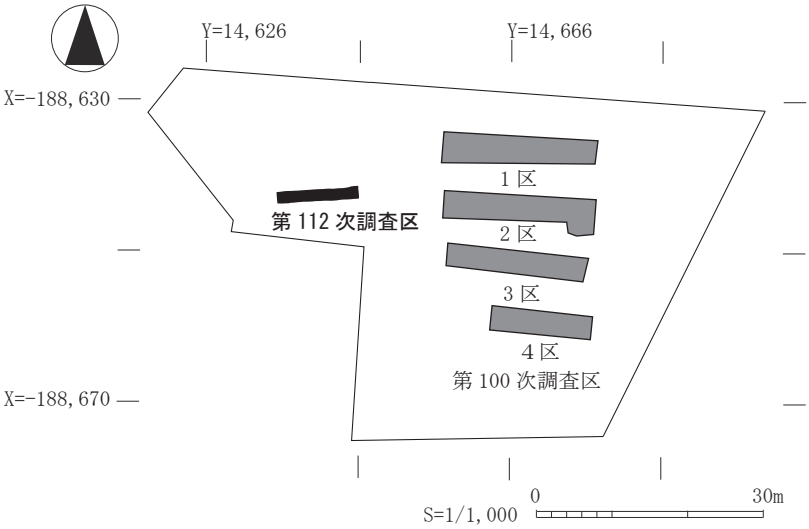
１　調査に至る経緯と経過

本件は、多賀城市高崎一丁目地内の保育所新築工事に伴う確認調査である。平成29年10月３日地権者より、当該地における保育所新築計画と埋蔵文化財とのかかわりについての協議書が提出された。計画では、998．57㎡の敷地に現地表面から最大1.0ｍの切土と最大0.71ｍの盛土工事を施工し、深さ0.5～0.8ｍまで基礎工事を行うものであった。当該区周辺では、東側隣接地で平成26年度に第100次調査を行っており、現地表から約1.2ｍの深さで古代の竪穴住居跡と中世以降の井戸跡等を発見している。今回の工事計画内容では掘削深度が遺構検出面まで達しないとみられたが、面積が広大であったことから、遺跡の状況を確認するための確認調査を行うこととなった。10月20日地権者より発掘調査の依頼書及び承諾書の提出を受けて、30日から発掘調査を実施することになった。



第１図　調査区位置図

はじめに重機を使って対象地内の掘削を行ったところ、溝跡・土壙を発見した。ただし現代の削平により、遺構の残存状況は良好ではなかった。遺構の発見作業を行った後、深さ等を調べるため遺構の一部を掘り下げた。11月２日に測量を行って基準点を移動し、平面図を作成した。同日、発見した各遺構の土層注記を行うとともに、発掘器材を撤収してた。６日には調査区の埋め戻しを行って、現地発掘調査を完了した。



第２図　調査区配置図

２　調査成果

（１）層序

Ⅰ層：現代の盛土である。

Ⅱ層：黄褐色土（地山）が遺構検出面となっている。

（２）発見した遺構と遺物（第２図）

調査の結果、溝跡や土壙および柱穴を発見した。遺構から遺物は出土していない。

ＳＤ 1811

【位置】調査区東半部で発見した東西方向の溝跡である。

【方向・規模】方向は東で北に約19度偏している。溝の両端は現代の攪乱によって壊されている。規模は長さは

約 80㎝、上幅 20 ～ 43㎝である。
【埋土】オリーブ褐色の粘土である。

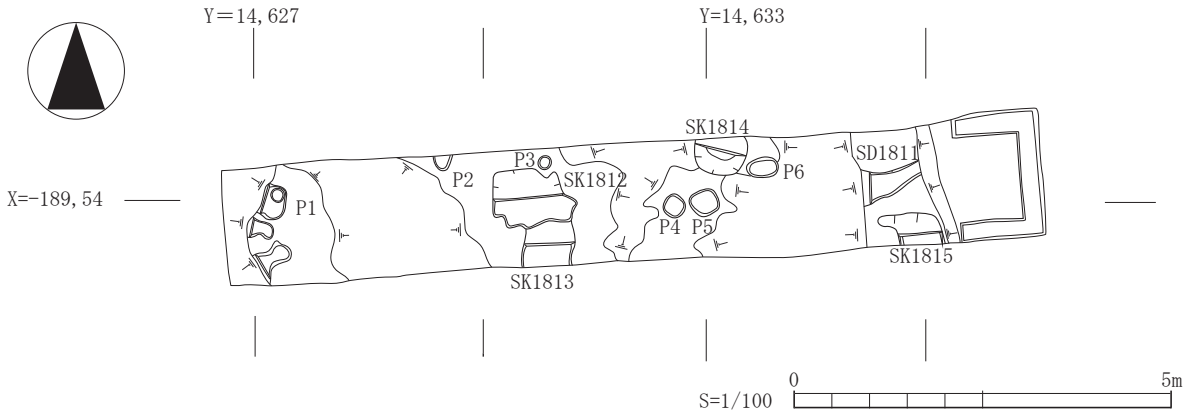
ＳＫ 1812
【位置・形態】調査区のほぼ中央で発見した。平面形は不整形である。
【重複】ＳＫ 1813 と重複し、これより新しい。
【規模】規模は長辺 1.1 m、短辺 70㎝である。
【埋土】黄褐色土である。

ＳＫ 1813 土壙
【位置・形態】調査区のほぼ中央で発見した。遺構の南側は調査区外にのびている。
【重複】ＳＫ 1812 と重複し、これより古い。
【規模】規模は南北 67㎝以上、東西 65 mである。
【埋土】黄褐色粘土である。

ＳＫ 1814
【位置・形態】調査区東半部で発見した。調査区外にのびているが、平面形は楕円形と見られる。
【規模】長辺 70㎝、短辺 50㎝以上である
【埋土】オリーブ褐色土である。

ＳＫ 1815
【位置・形態】調査区東半部で発見した。平面形は南側が調査区外に延びているが、平面形は方形と見られる。
【規模】長辺 80㎝、短辺 40㎝以上である。
【埋土】オリーブ褐色の粘質土である。

柱穴
調査区の中央部から西半部にかけて６基（Ｐ１～６）の柱穴を発見し、内１個（Ｐ１）に柱痕跡を確認した。建物跡として機能するものは確認できなかった。平面形は方形・円形・楕円形と一様ではない。規模は長辺 0.19 m ～ 0.45 m、短辺 0.17 m～ 0.38 m、Ｐ１で確認した柱痕跡は径 0.2 mの円形である。埋土は褐色粘土、黄褐色土である。柱痕跡は褐色土である。



第３図　遺構配置図

３　まとめ

（１）今回の調査では、溝跡１条、土壙４基、柱穴６基発見した。

（２）発見された遺構の年代については、出土遺物がなく不明であるが、これまでの周辺の調査成果を参考にすると、概ね古代から中世の範疇に収まると見られる。

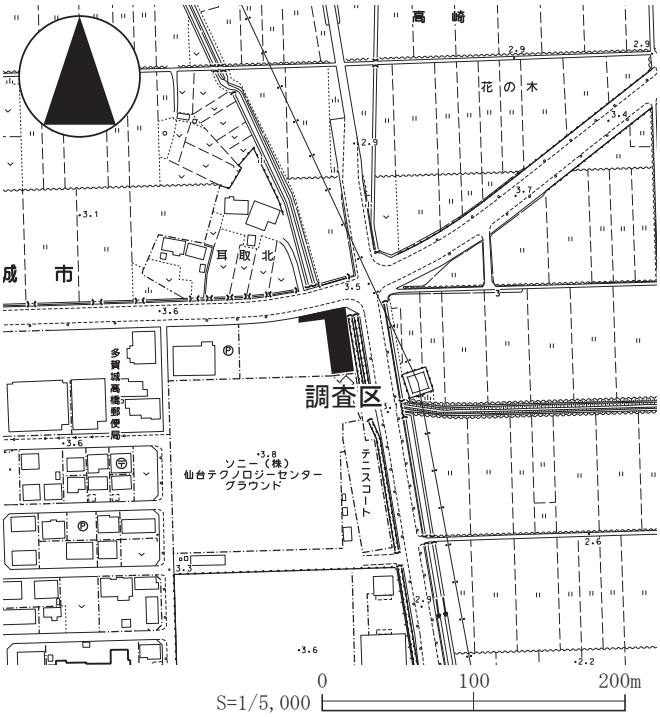
調査区全景（東から）

XⅧ　大日北遺跡第５次調査

１　調査に至る経緯と経過

本件は、高橋四丁目地内における就労支援事業施設新築に伴う本発掘調査である。平成29年７月11日、地権者より当該事業と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、面積約700㎡の敷地に10㎝の盛土を施したのち、建物の基礎敷設部で47㎝の掘削を行うほか、エレベーターピット部分では深さ1.35ｍの掘削を行う内容であった。

周辺では当該区の西側で平成23年に第４次調査を実施しており、現地表から約2.2ｍ下で水田跡を発見している。今回の工事計画内容では、掘削深度が遺構面に達するものではなかったが、面積が約700㎡と広範囲に及んでいることや、遺跡の広がりが不明であったことから、確認調査を実施することになった。７月27日、地権者から発掘調査に関する依頼書と承諾書の提出を受け、８月７日より現地調査を開始した。



第１図　調査区位置図

はじめに、重機による建物部分の表土除去から取りかかった。しかし、遺構や遺物は発見できず、現地表から2.8ｍ下まで掘削したが、湿地での自然堆積層とみられる黒褐色粘質土を確認したのみであったことから、遺構は存在しないと判断した。10月18日に埋戻しを完了し、すべての調査を終了した。

調査区南壁　土層堆積状況（北から）

調査区全景（南東から）

XIX　志引遺跡第６次調査

１　調査に至る経緯と経過

本件は、東田中二丁目地内における個人住宅新築に伴う本発掘調査である。平成29年９月26日、地権者より当該事業と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、住宅の基礎工事の際に深さ2.5ｍの杭状改良を60本を打ち込むことから、遺跡への影響が懸念された。このため、工法変更によって遺跡を保存する協議を行ったが、提出された基礎工法以外では十分な地盤強度を得られないことから、本発掘調査を実施することになった。11月28日、地権者から発掘調査に関する依頼・承諾の提出を受け、12月６日より現地調査を開始した。

第１図　調査区位置図

はじめに、重機による住宅建築部分の表土（Ⅰ層）除去から取りかかった。調査対象地となる建物建築計画範囲の南側から掘削したところ、現表土下1.０～1.5ｍ下で基盤層となる岩盤を確認したが、現代の掘削が及んでおり、遺構や遺物は発見できなかった。その後北側を掘削したところ、現地表から約80㎝下で溝跡等を確認し、あわせて調査区南側では、現代の攪乱によって地形が改変されていることを確認した。７日より作業員を動員し、遺構検出面の精査を行ったところＳＩ15・16竪穴住居跡、ＳＤ17溝跡等を確認した。調査途中までは、ＳＤ17溝跡が最も新しいと考えられたが、詳しく検討したところＳＤ17溝跡よりＳＩ15竪穴住居跡が新しいとが判明した。15日に調査区全景と竪穴住居跡の写真撮影を行い、18日にすべての図面作成を終えた。20日にすべての調査区を埋戻すとともに、すべての調査を終了した。

２　調査成果

（１）層序

今回の調査で確認した層序は、以下のとおりである。

Ⅰ層：現代の盛土層及び耕作土で、厚さは約80㎝である。

Ⅱ層：褐色粘質土～岩盤で基盤層である。この上面で古代の遺構検出面である。

（２）発見遺構と遺物

ＳＩ15竪穴住居跡（第２～５図）

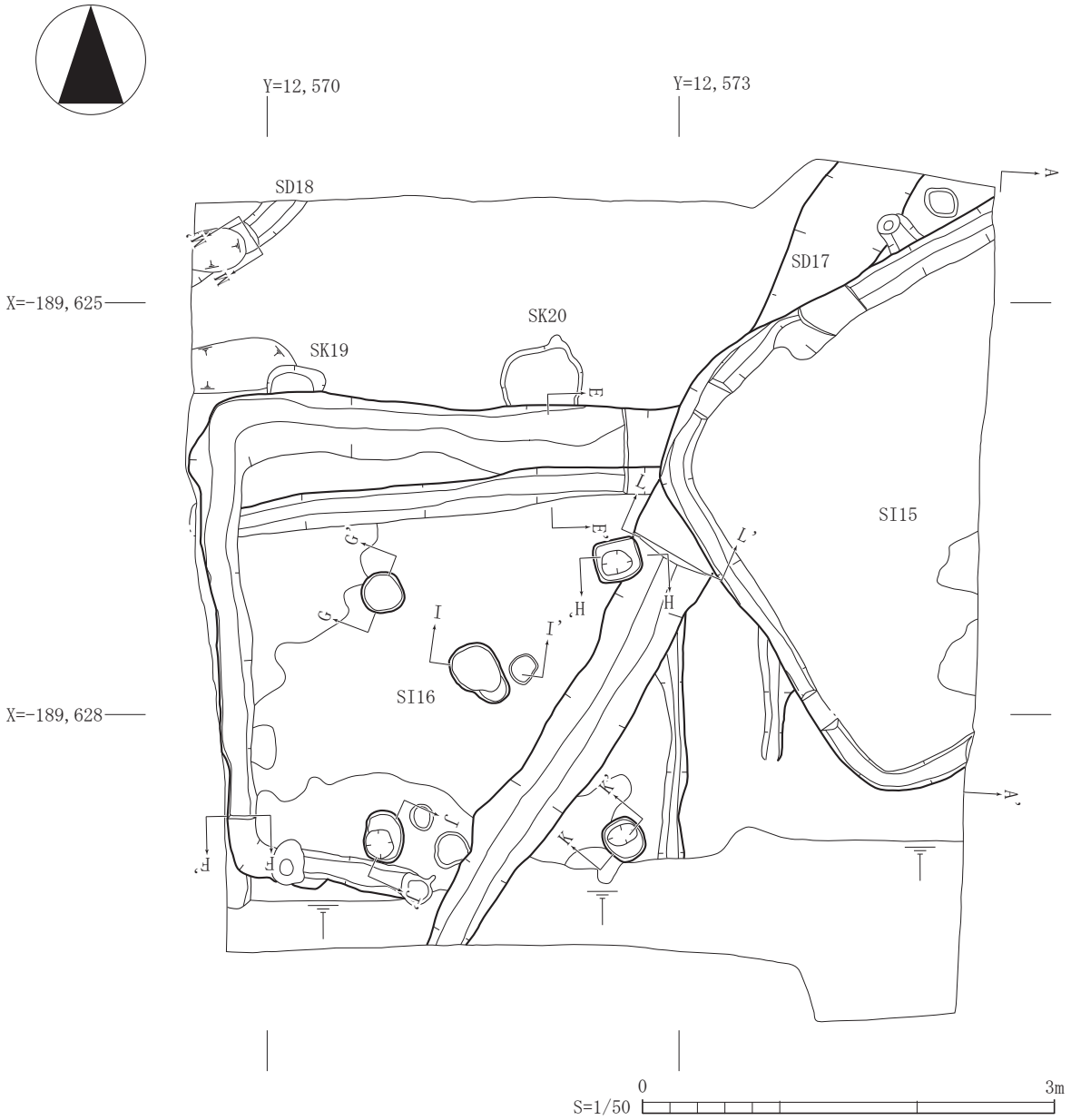
【位置】調査区の東側で発見した方形と推測される竪穴住居跡である。

【重複】ＳＩ16及びＳＤ17と重複しており、これらより新しい。

【変遷】ほぼ同位置で３時期の変遷（Ａ期→Ｃ期）を確認した。

Ａ期

【遺存状態】Ｂ・Ｃ期に大きく壊され、北壁の周溝のみ発見した。



第２図　調査区平面図

【方向】北側の周溝でみると、東で北に18度偏している。

【規模】東西で2.1m以上である。

【周溝】北西壁側南西壁側の一部を確認した。規模は上幅24㎝、下幅16㎝、深さ15㎝である。底面での比高はない。

【床面】貼床は確認できなかった。Ｂ・Ｃ期構築の際に壊されて残らなかった可能性もある。

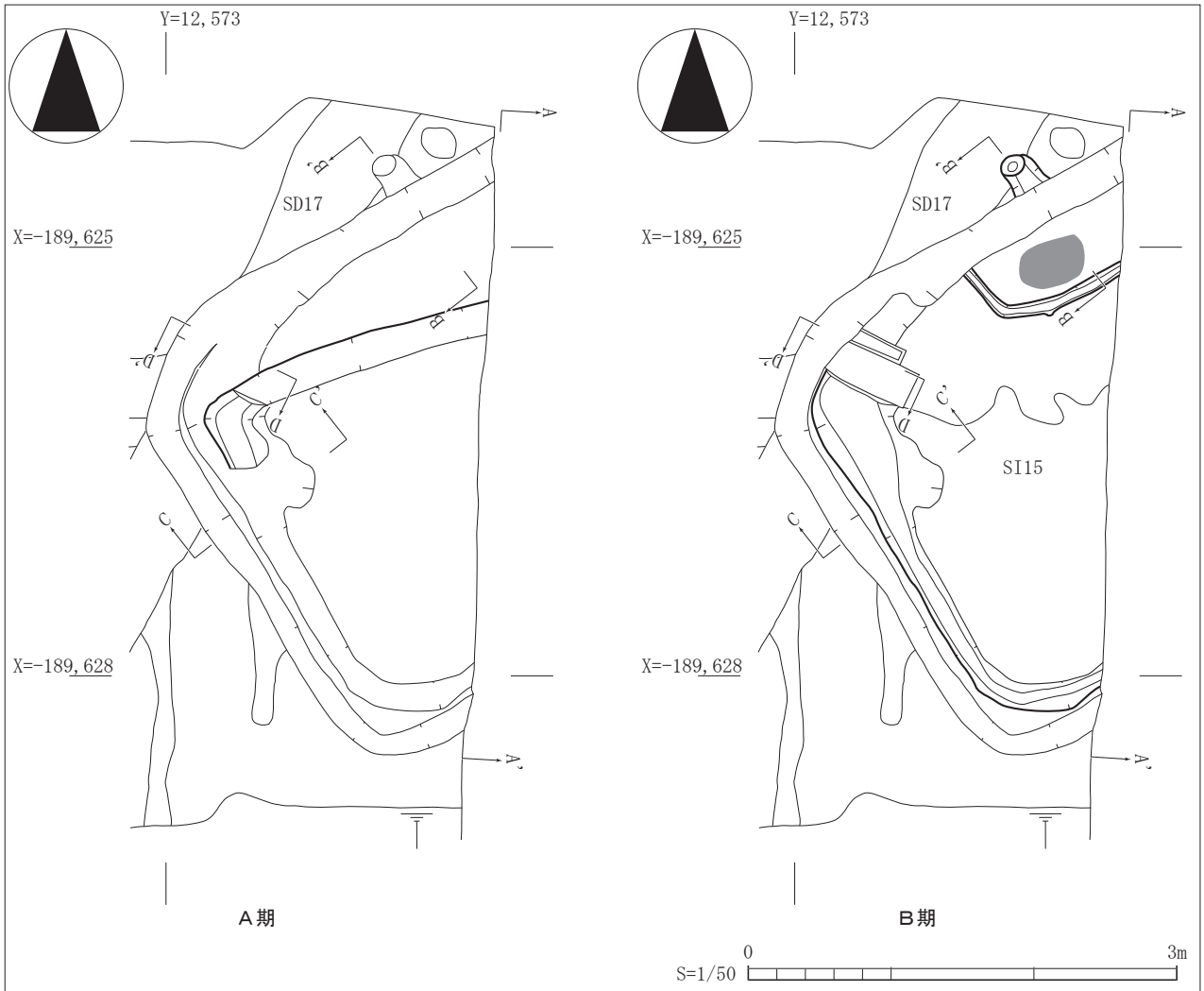
【遺物】周溝から土師器甕（Ａ類）が出土している。

Ｂ期

【遺存状態】Ｃ期に壊され、周溝とカマドのみ発見した。

【方向】南西側の周溝でみると、北で西に30度偏している。

【規模】南北3.0m以上、東西2.8m以上である。



第３図　ＳＩ15（Ａ・Ｂ期）竪穴住居跡　平面図

【周溝】Ｃ期に壊されている箇所を除けばすべての壁面で確認した。特に竪穴住居の西側角付近では、Ｃ期構築の際に周溝も壊されているとみられ、本来の平面形をとどめていないものとみられる。規模は上幅16～25㎝、下幅６～13㎝、深さ９㎝である。底面での比高は無い。

【床面】住居北側をⅡ層を斑状に含む明褐色粘質土で貼床としている。厚さは最大８㎝である。

【カマド】住居北側で付設され、煙道と煙出しのＰｉｔ及び燃焼部を発見した。カマドの構築土などはＣ期によって壊され確認できなかった。煙道は長さ28㎝、幅24㎝、深さ８㎝、煙出しのＰｉｔは、直径10㎝、深さ25㎝である。煙道の埋土は褐色粘質土、煙出しのＰｉｔの埋土は暗褐色粘質土である。また、カマドに付随すると推測される燃焼部を方形に囲む幅７～10㎝、深さ３㎝の小溝を確認した。小溝の埋土は焼土を含む褐色粘質土である。

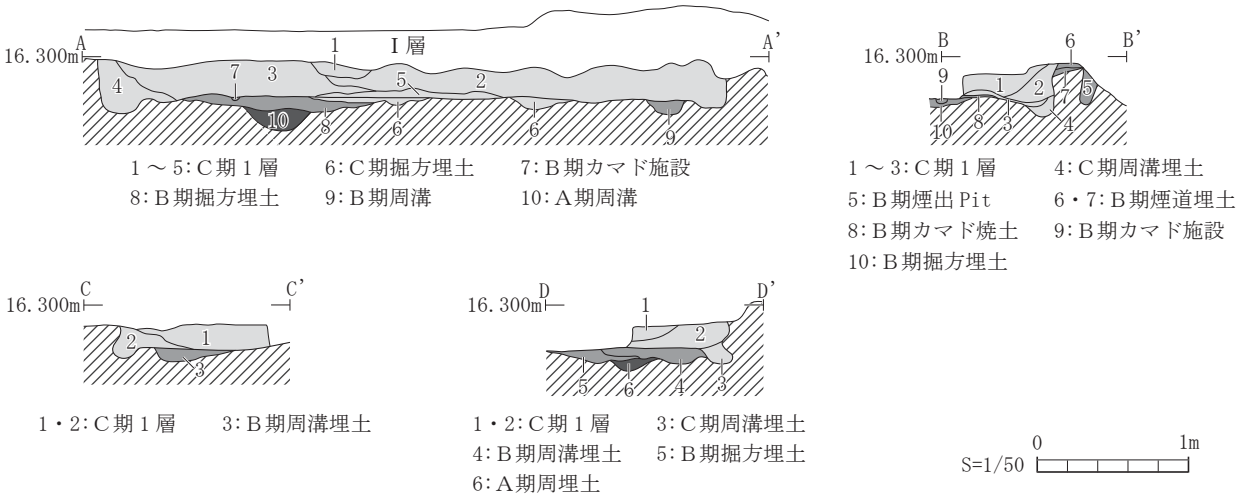
【遺物】出土していない。

Ｃ期

【遺存状態】やや南側が現代の造成工事により削平されているが、遺存状態は良好である。また、竪穴住居跡の東側が調査区外にのびている。

【規模】南北3.5ｍ、東西3.1ｍ以上である。

【埋土】４層確認でき、１層はⅡ層を斑状に多量に含む黄灰色褐色粘質土、２層は黄灰色粘質土、３層は



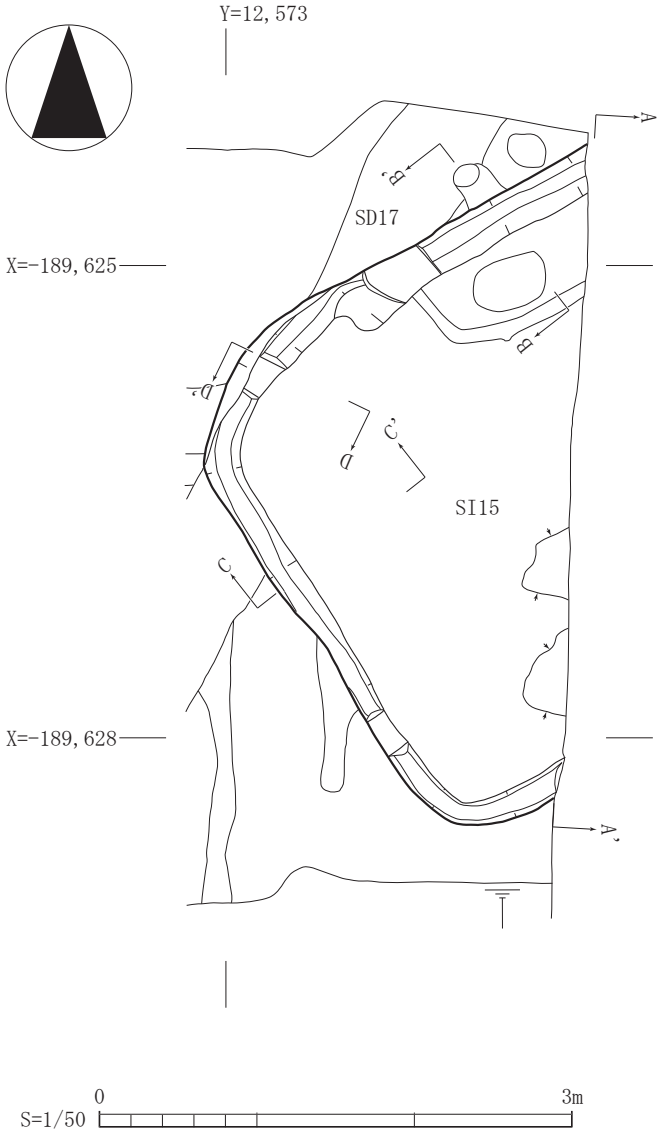
第４図　ＳＩ15竪穴住居跡断面図

にぶい黄褐色粘質土である。

【床面】南側の一部を除き、Ⅱ層に起因する土を斑状に多く含む褐色粘質土で貼床としており、厚さは５～８㎝である。

【壁】周溝から壁面上部までほぼ垂直に立ち上がっているが、一部周溝の底面から床面の高さまで、５～７㎝オーバーハングしている箇所もある。壁高は最も遺存している箇所で42㎝である。

【遺物】１層から土師器坏（Ａ類）・甕（Ａ類）、周溝から土師器甕（Ａ類）が、貼床から土師器甕が出土している。



ＳＩ16竪穴住居跡（第２・７図）

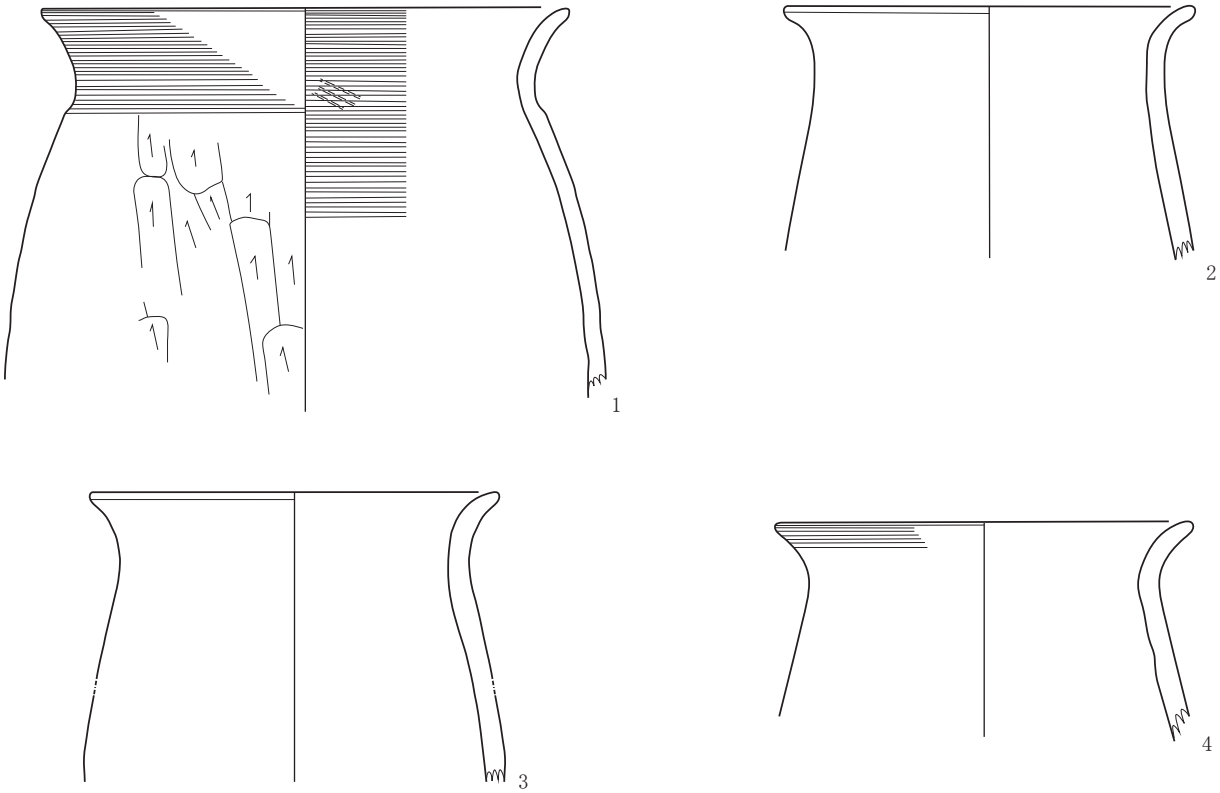
【位置】調査区の西側で発見した方形と推測される竪穴住居跡である。

【重複】ＳＩ15とＳＤ17、ＳＫ19・20と重複しており、ＳＩ15及びＳＤ17より古く、ＳＫ19・20より新しい。

【変遷】ほぼ同位置で２時期の変遷（Ａ期→Ｂ期）を確認した。

【床面】Ａ・Ｂ期ともにⅡ層を斑状に含む明褐色粘質土で貼床としている。

【柱穴】床面上で主柱穴とみられる柱穴を５基（Ｐ１～５）確認した。A・Ｂ期いずれに属するものかは、不明である。平面形に比べて



S=1/3 0 10cm (単位：cm)

番号	種類	遺構層位	特徴		口径残存率	底径残存率	器高	登録番号	備考
			外面	内面					
1	土師器甕	１層	ヘラケズリ→ヨコナデ（口縁部）	ヘラナデ	(20.8) 8/24	—	—	R1	A類
2	土師器甕	周溝	摩滅	摩滅	(16.25) 6/24	—	—	R2	A類
3	土師器甕	周溝	摩滅	摩滅	(16.25) 6/24	—	—	R3	A類
4	土師器甕	周溝	摩滅	摩滅	(16.25) 6/24	—	—	R4	A類

第６図　ＳＩ15 竪穴住居跡　出土遺物

やや東寄りに方形に４基配置され、そのほぼ中央に１基確認できる。四隅となる柱穴の間隔は南北1.８～1.9m、東西1.７～1.8mである。対角線でみると2.５～2.6mである。掘方の平面形は楕円形もしくは方形であり、規模はＰ２でみると、一辺30cm、深さ28cmである。掘方埋土は、Ⅱ層に起因する土を斑状に多く含む黄褐色粘質土である。全ての柱穴で柱抜き取り穴を確認し、埋土はⅡ層に起因する土を斑状に含む黄灰色粘質土である。

Ａ期

【遺存状態】Ｂ期に壊され、また現代の削平によって大部分が壊されており、周溝のみ発見した。

【方向】東側の周溝でみると、ほぼ真北を示している。

【規模】南北2.9m以上、東西3.1m以上である。

【周溝】北側と東側で確認した。規模は上幅９～27cm、下幅４～13cm、深さ15cmである。底面での比高は無い。

【遺物】出土していない。

Ｂ期

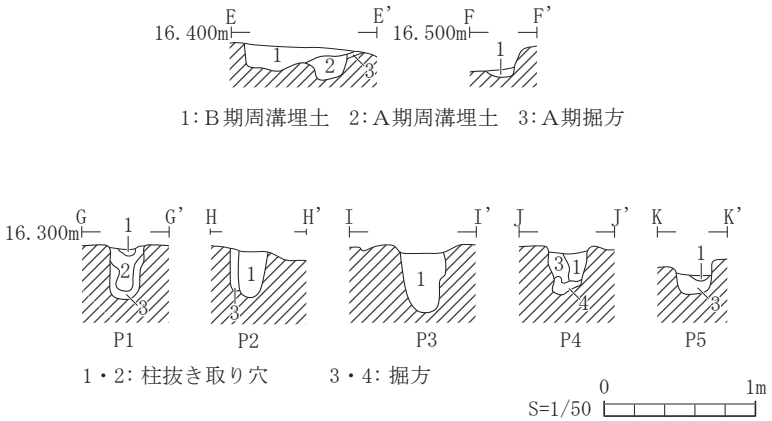
【遺存状態】現代の削平によって大部分が壊されており、周溝のみ発見した。

【方向】西側の周溝でみると、北で西に約２度偏している。

【規模】南北2.9ｍ以上、東西3.1ｍ以上である。

【周溝】全ての壁面で確認したが、南側の一部は現代の削平により失われている。規模は上幅19 ～ 48㎝、下幅10 ～ 26㎝、深さ18㎝である。底面での比高は無い。

【遺物】周溝から土師器甕（Ａ類）、須恵器坏が出土している。



第７図　ＳＩ16 竪穴住居跡　断面図

ＳＤ17溝跡（第２・８図）

【位置･形態】調査区のほぼ中央を北東から南西方向に延びる溝跡である。

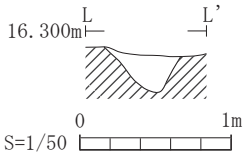
【重複】ＳＩ15･16と重複しており、ＳＩ16より新しく、ＳＩ15より古い。

【方向・規模】方向は、西側は北で東に約30度偏しており、規模は、長さ6.5ｍ以上、上幅50 ～ 66㎝、深さ32㎝である。

【埋土】Ⅱ層に起因する土を粒状に含む褐色粘質土である。

【底面】底面での比高は無い。

【遺物】土師器坏（Ａ類）が出土している。



第８図　ＳＤ17 溝跡　断面図

ＳＤ18溝跡（第２・９図）

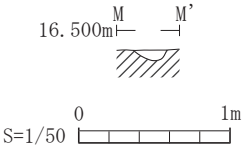
【位置・形態】調査区の北西角で発見した東西方向に延びる小溝跡である。

【重複】重複している遺構はない。

【方向･規模】方向は、東で北に34度偏しており、規模は長さ89㎝以上、上幅24㎝、深さ７㎝である。

【埋土】Ⅱ層に起因する土を粒状に含む褐色粘質土である。

【遺物】出土していない。



第９図　ＳＤ18 溝跡　断面図

ＳＫ19土壙（第２図）

【位置】調査区の北側で発見した。

【重複】ＳＩ16と重複しており、これより古い。

【平面形・規模】平面形は不整形で、規模は東西45㎝、南北20㎝以上である。

【遺物】出土していない。

ＳＫ20土壙（第２図）

【位置】調査区の北側で発見した。

【重複】ＳＩ16と重複しており、これより古い。

【平面形・規模】平面形は不整形で、規模は東西59㎝、南北50㎝以上である。

【遺物】出土していない。

３　まとめ

今回の調査では、竪穴住居跡３軒と溝跡２条、土壙２基を発見した。ここでは、出土遺物から年代を検討するとともに、これまでの調査成果とあわせて、遺跡の性格について考えてみたい。

（１）遺構の年代

ＳＩ15からは、１層から土師器坏（Ａ類）・甕（Ａ類）、周溝から土師器甕（Ａ類）が出土している。土師器のＢ類は出土していない。図化できたものは、土師器甕の４点で、このうち器面の調整が判別できるのが１点（第６図１）ある。

第６図１の土師器甕についてみると、口縁部は短く外反し、頸部に弱い段がめぐっているのが認められる。最大径は、体部中ほどと推測される。体部外面には縦方向のヘラケズリがなされたのち、口縁部から頸部にかけてヨコナデが施されており、口縁部のヨコナデ調整と体部のヘラケズリ調整の境は明瞭である。

第６図２～４については、口縁部が外反しており、頸部にめぐる段は認められない。最大径は体部中ほどから下部にあると推測される。

こうした土師器甕の特徴のうち、特に頸部にめぐる段は、住社式から栗囲式にみられるが、今回出土したものは段が弱く、新しい要素と考えられる。出土した遺物が少なく年代を探る手がかりが限られるものの、以上のことから７世紀代でも新しい頃と推定しておきたい。

一方、ＳＩ15よりも古いＳＩ16やＳＤ17から出土している土師器もすべてＡ類であるが、すべて破片であるため、年代の上限を知る手掛かりに乏しい。このことから、ＳＩ15・16及びＳＤ17溝跡の年代については、ＳＩ15とほぼ同じおおよそ７世紀代とだけにとどめておきたい。

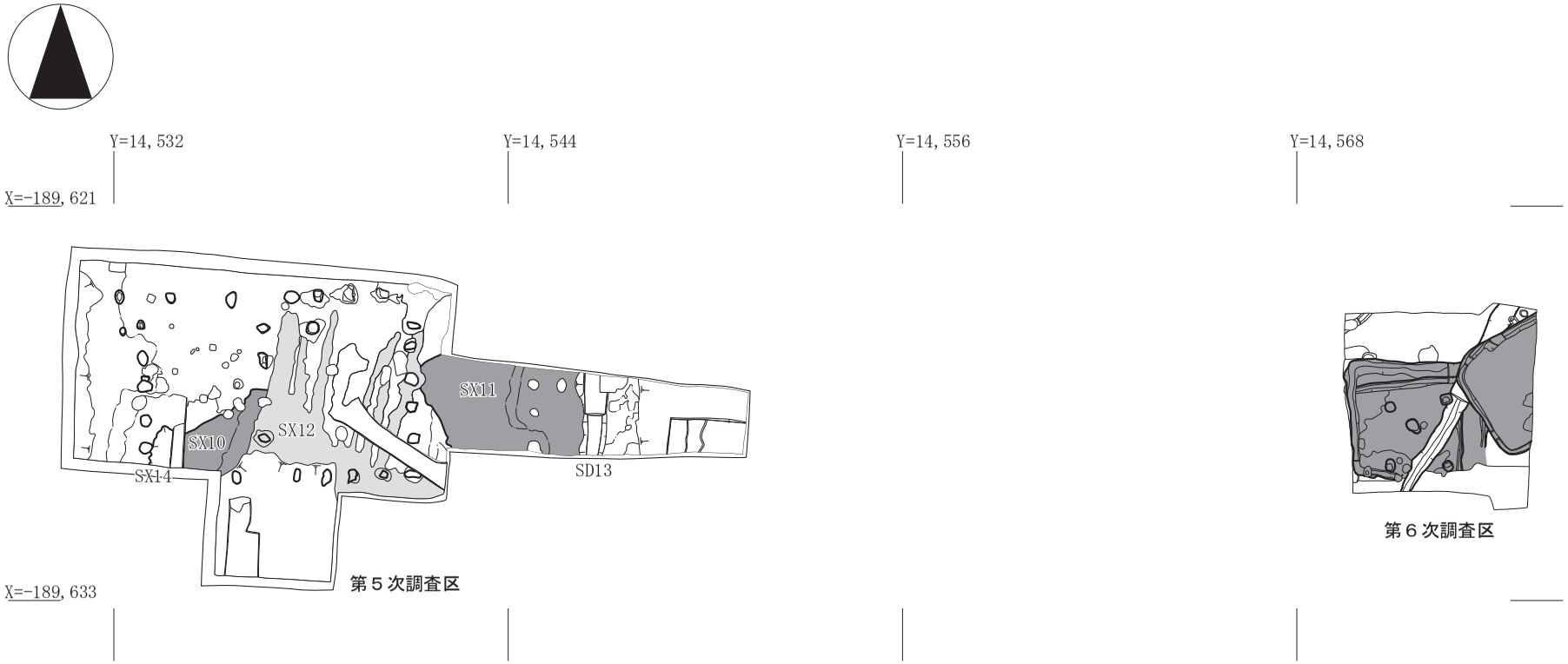
（２）本遺跡における古代の様相について

本遺跡ではこれまで６回の調査が行われており、本調査区の西側隣接地で実施した第５次調査では、竪穴住居跡の可能性がある遺構を発見しているほか、全ての遺構を覆うⅡ層から７世紀中頃に位置づけられる平城京分類坏Ｈが出土していることから、その頃の遺構の存在を示唆すると考えられた（第10図）。

今回の調査で、７世紀代とみられる竪穴住居跡を発見したことで、これまで明らかではなかった志引遺跡がその頃の集落跡であることが判明した。今後の調査では、その広がりや変遷など詳しい状況を把握する必要があろう。

参考文献

多賀城市文化財調査報告書第132集『多賀城市内の遺跡２－平成28年度ほか発掘調査報告書－』2017



第 10 図　第５・６次調査区平面図

S=1/200　0　10m

調査区全景（北東から）

SI15(C)竪穴住居跡（北西から）

写真図版１

SI15(B)竪穴住居跡 カマド部分（北西から）

SD17溝跡（北東から）

写真図版２

市川橋遺跡―第94次調査出土の漆紙文書

例　言

一、本報告は平成二十八年度に実施した市川橋遺跡第九十四次調査出土の漆紙文書についての報告である。

二、第九十四次調査の本報告は、『多賀城市文化財調査報告書第一三二集　多賀城市内の遺跡2－平成二十八年度ほか発掘調査報告書－』（多賀城市教育委員会　二〇一七年）に掲載されている。

三、漆紙文書の検討・分析にあたっては、次の方々の協力を得た。記して謝意を表するものである（敬称略）。
宮城県多賀城跡調査研究所　吉野　武
東北歴史博物館　芳賀　文絵

四、本書の執筆は第一章と第二章を畠山未津留、第三章を鈴木琢郎氏（東北大学大学院文学研究科日本史研究室助教）が行った。

目　次

第一章　市川橋遺跡の位置と地理的環境　二
第二章　第九十四次調査の概要と漆紙文書出土遺構について　二
第三章　漆紙文書の内容　五
1、形状・状態　五
2、釈文　七
3、文書の内容　七
4、界線の検討と文書様式　八

市川橋遺跡第十七号漆紙文書

第一章　市川橋遺跡の位置と地理的環境

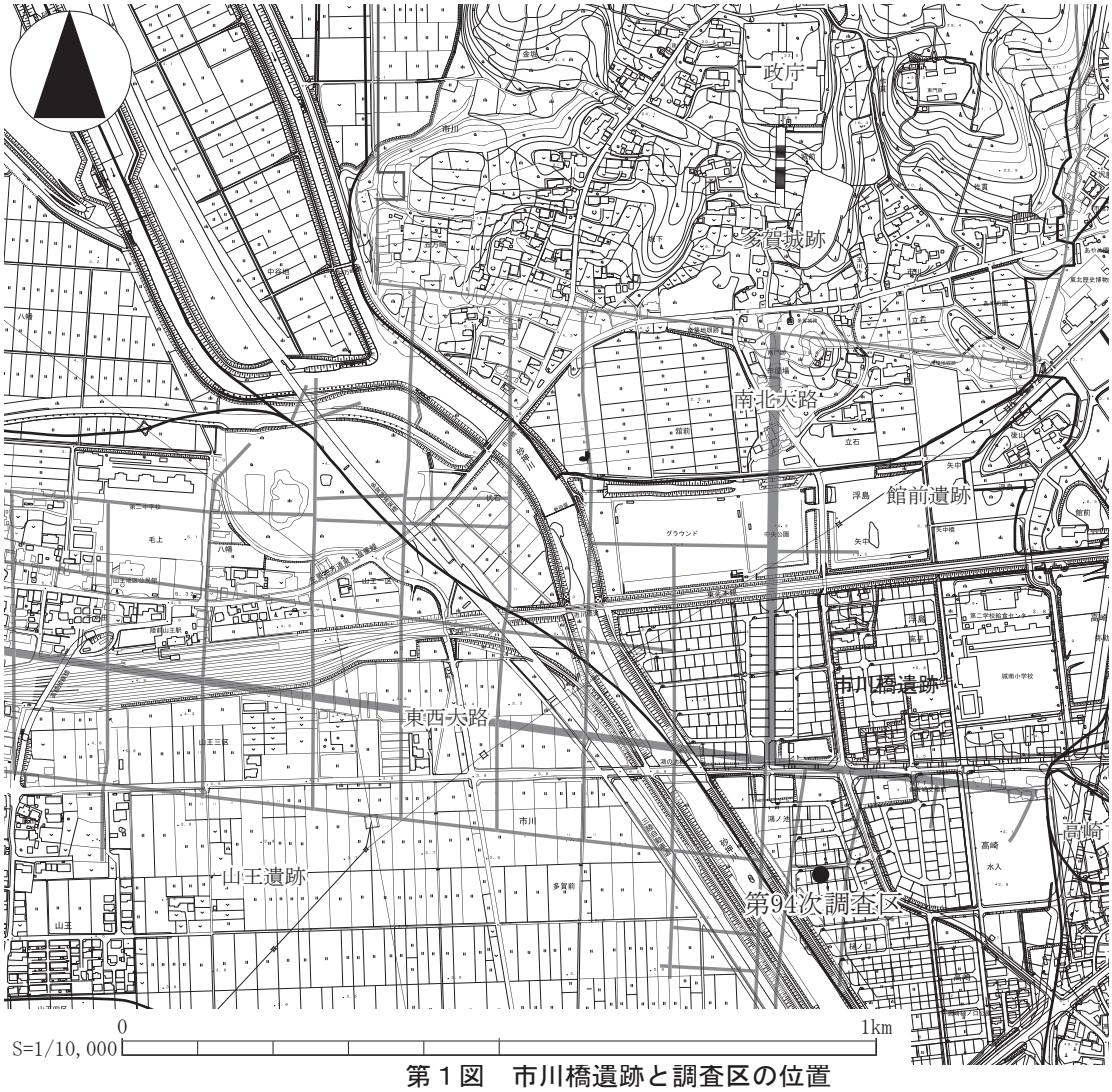
本遺跡は宮城県仙台市の中心部から北東に約十〇㎞、多賀城市北西部に位置する。利府町の丘陵地帯を水源とする砂押川が多賀城市の北西から南東にかけて貫流しており、本市の地形はこれによって東西に大きく二分される。

砂押川の左岸にあたる東半分は、松島丘陵とそこから南に向い派生する標高四〇ｍから一〇〇ｍの低丘陵となっている。一方、右岸にあたる西半部は宮城野海岸平野と呼ばれる広大な沖積平野が広がる。本遺跡はこの沖積平野の東端部にあり、丘陵部と接している。標高は、二から三ｍ程であり、およそ平坦な地形となっている。

本遺跡の範囲内は、これまでの発掘調査により、砂押川の旧流路、及びこの河川により形成された微高地や後背湿地の存在が確認されている。

第二章　第九十四次調査の概要と漆紙文書出土遺構について

市川橋遺跡第九十四次調査、及び第十七号漆紙文書の出土遺構については、既に報告書を刊行していることから、ここでは調査の概略と漆紙文書が出土した南１道路跡（ＳＸ三五六一）について記すこととする。第九十四次調査は城南二丁目地内における個人住宅新築工事に伴う発掘調査である。本調査地は砂押川の左岸より約５０



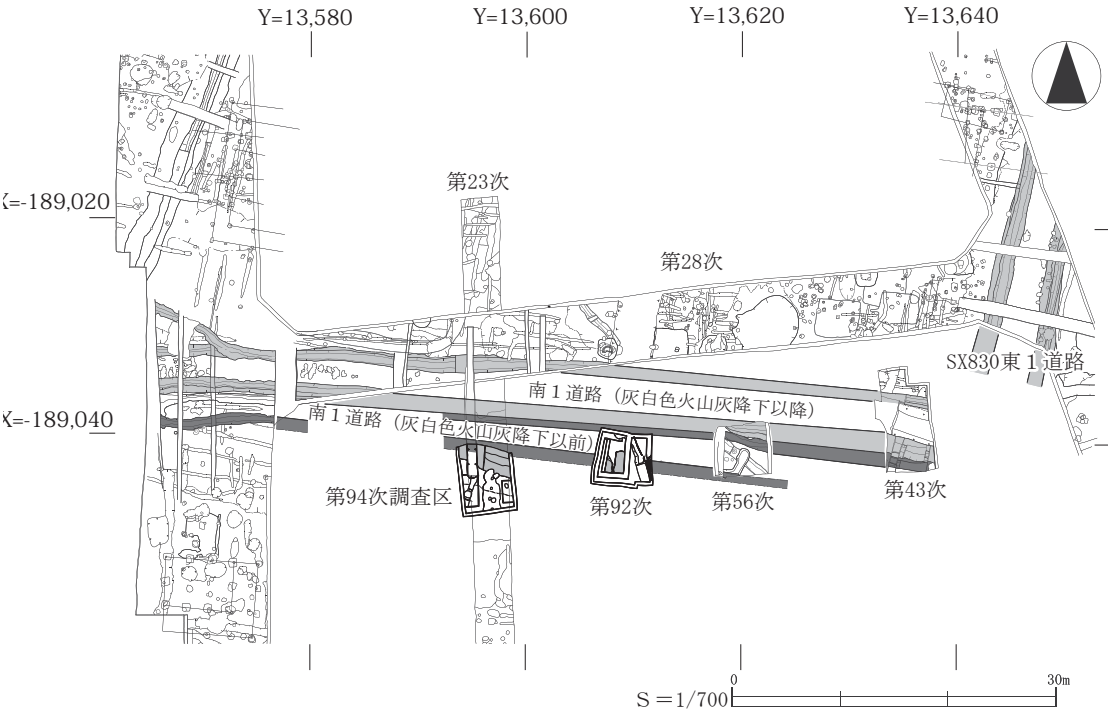
第１図　市川橋遺跡と調査区の位置

mの住宅地内に位置している。多賀城南面に広がる方格地割上でみると、調査地点は南２東１区（東西大路の南、東０道路の東）内にあたり、その北辺は南１道路によって区画されている〔第１図〕。本調査では、この南１道路を発見し、その南側溝から漆紙文書が付着した須恵器坏が出土した。

これらの方格地割は段階的に整備されたことが判明しており、現在ではその形成時期をⅠ～Ⅳ期（八世紀後葉～九世紀中・後葉）の変遷に区分している（１）。調査地点はそのうちのⅡ期にあたる９世紀初頭から中葉にかけて整備された区画である。この時期には基幹道路である東西大路を中軸線として、それに平行する北１道路と南１道路が整備され、さらに南北方向の小路によって約一町四方の方格地割が施工されている。このⅡ期からⅢ期（九世紀中～後葉）にかけて、方格地割は東西大路を中心に拡大してゆく。

次に第九四次調査の概要である。調査ではⅢ・Ⅳ層の上面で遺構を確認し、Ⅲ層上面で南１道路（ＳＸ三五六一）の南側溝（ＳＤ三五五七）を発見した〔第３図〕。南１道路はこれまでの調査で灰白色火山灰の降下以前のＡ～Ｃ期と、火山灰の降下以降に道路が北へ４～５ｍ移動したＤ・Ｅ期の、併せて５時期の変遷から成ることが分かっている〔第２図〕（２）。本調査区は第二十三次調査地点（平成９～１０年）と重複しており、その際にＡ～Ｄ期の道路側溝を確認している。今回確認した道路側溝はそのうちのＣ期のものである。また上面で遺構を確認したⅢ層は調査地周辺の調査でも確認される河川堆積層（３）で、九世紀中葉から後半の間の堆積と捉えられている。

調査区北側で発見した南側溝（ＳＤ三五五七）は、東西方向に延びており、路面は調査区外にある。東端、西端ともに溝の深さは約４０㎝で底面の傾きはない。埋土は４層に区分でき、第１層はオリーブ黒色粘質土、第２層が灰白色火山灰の自然堆積層、第３層が炭化物を多く含む黒褐色粘質土、最下層の第４層が緑黒色粘質土である〔第４図〕。調査区内に排水用の側溝を掘削する際に、第４層の底面から土器類がまとまって出土している。第十七号文書が付着した須恵器もその中に含まれていた。



第２図　南１道路模式図

側溝の年代については、遺構を検出した第Ⅲ層の形成時期が土器の年代観より９世紀中葉から後半の間と考えられることから、それよりも新しい時期に造られ、灰白色火山灰が降下する１０世紀前葉頃にはほぼ埋没していたと考えられる。

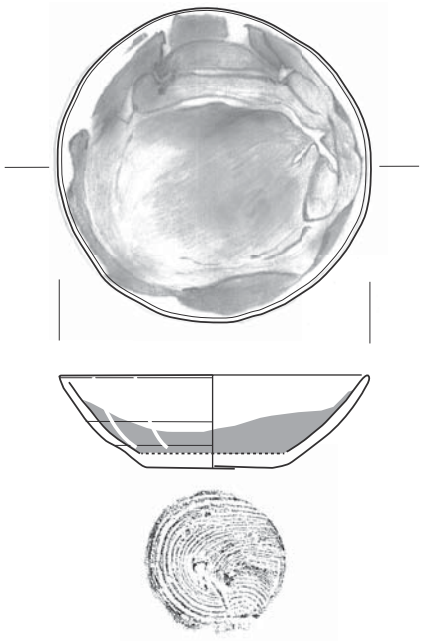
三、漆紙文書が付着した須恵器について

坏の底部は回転糸切りで、再調整されない〔第５図〕。胎土は灰白色で、黒色と白色の礫粒をわずかに含んでいる。外面には体部と底部の境にわずかなくびれがあり、体部上半はわずかに内湾する。底径／口径比が〇．四七、器高／口径比が〇．三一であり、口径に対して底径が小さい特徴がある。

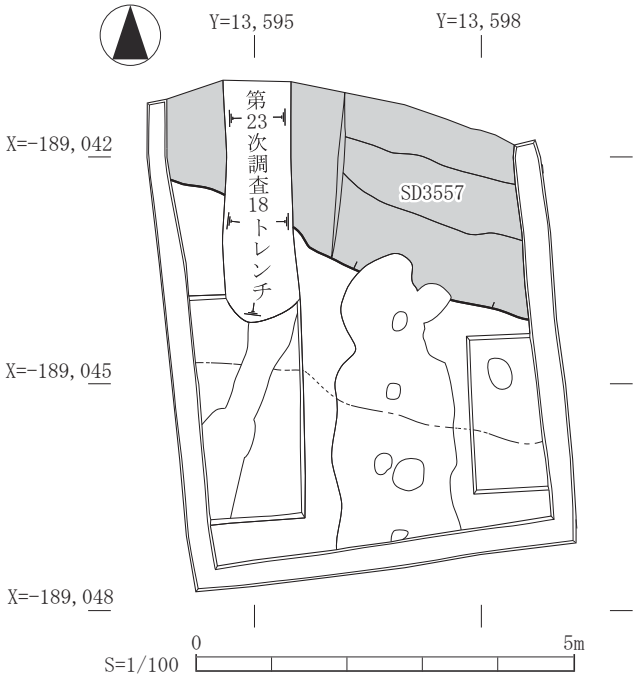
この須恵器杯は、奈良・平安時代の土器分類のＶ類に分類される（４）。本調査と同じ市川橋遺跡で発見されたＳＸ一三五一でのＶ類の出土比率を見ると、延暦９年～延暦２４年（８０５年）の間で４％、延暦２４年～９世紀中葉で１３％と、時代が新しくなるに従ってＶ類の割合が増加する傾向が指摘されている（５）。本調査で発見された須恵器は、灰白色火山灰の自然堆積層に覆われる溝から発見され、また出土遺物に須恵系土器を含まないことなどから、９世紀後半に使用され、溝に廃棄されたものと推定される。

註

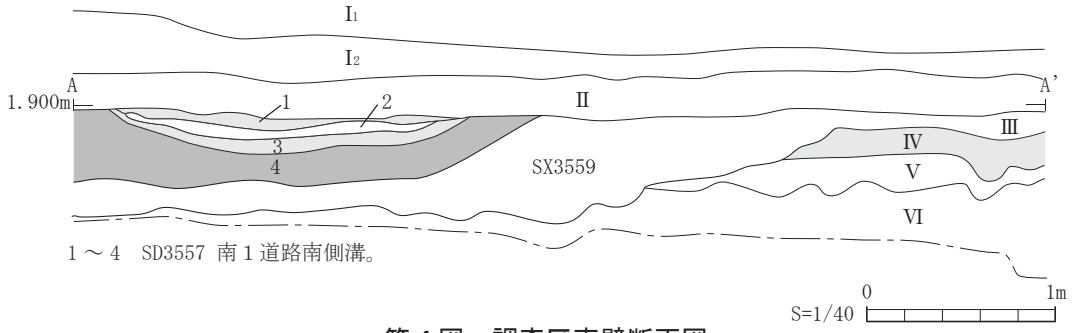
（１）鈴木孝行「多賀城外の方格地割」第３２回古代城柵官衙遺跡検討会資料集　２００４



第５図　漆紙文書付着土器



第３図　Ⅲ層上面SD3557溝跡南１道路南側溝検出状況



１～４　SD3557 南１道路南側溝。

第４図　調査区東壁断面図

（2）多賀城市文化財調査報告書第８７集『多賀城市内の遺跡２－平成１８年度発掘調査報告書－』（多賀城市教育委員会　二〇〇七年）

（3）多賀城市文化財調査報告書第１３２集『多賀城市内の遺跡２－平成２８年度ほか発掘調査報告書－』（多賀城市教育委員会　二〇一七年）

（4）『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ－』（多賀城市教育委員会　二〇〇三年）

（5）同右。

第三章　漆紙文書の内容

1、形状・状態

本漆紙は須恵器坏（V類）に付着した状態で出土した。須恵器坏の径は約12㎝である。漆紙はこれに収まる円形の形状である。大きさは料紙の天地・袖奥で計測すると、ともに約11㎝である。紙の重なり等は確認できない〔図1参照〕。

漆紙オモテ面の漆付着は確認できない。但し、中心部分で直接に漆液と接している部分については漆の染みだしが顕著である。辺縁部の漆の染みだしは確認できない。漆面は漆により須恵器と固着しており観察することはでない。残存状況は非常に良好である。

墨痕は赤外線カメラで確認でき、辺縁部の一部は肉眼でも確認できる〔図2・3参照〕。おそらく中央部の墨痕は漆が染み出していることにより辺縁部よりも確認が困難になっているものと思われる。以上の墨痕残像状況から、墨痕が確認できない個所は風化・劣化等により墨痕が欠失したものではなく、もともと文字が記されていなかったものと判断できる。

墨痕はオモテ面で七行五十四文字と、縦六本、横三本の墨界線が確認できる〔図4参照〕。横界線の間隔は、第一横界線と第二横界線の間が27㎜、第二横界線と第三横界線の間が15㎜である。縦界線はおのおの約16㎜間隔で引かれている。オモテ面からの赤外線カメラでの観察で左文字は確認できない。但し漆紙の残存状況が非常に良好なことを考慮すると、赤外線カメラを使用しても漆膜に阻まれて漆面の文字まで確認できない可能性がある。漆面の墨痕の確認は今後の課題である。

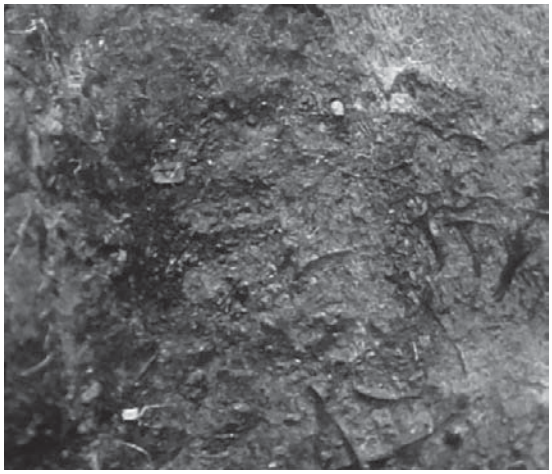


図２　墨痕の拡大図
（1行目「自」部分）

図１　可視光線写真

図３　赤外線全体写真

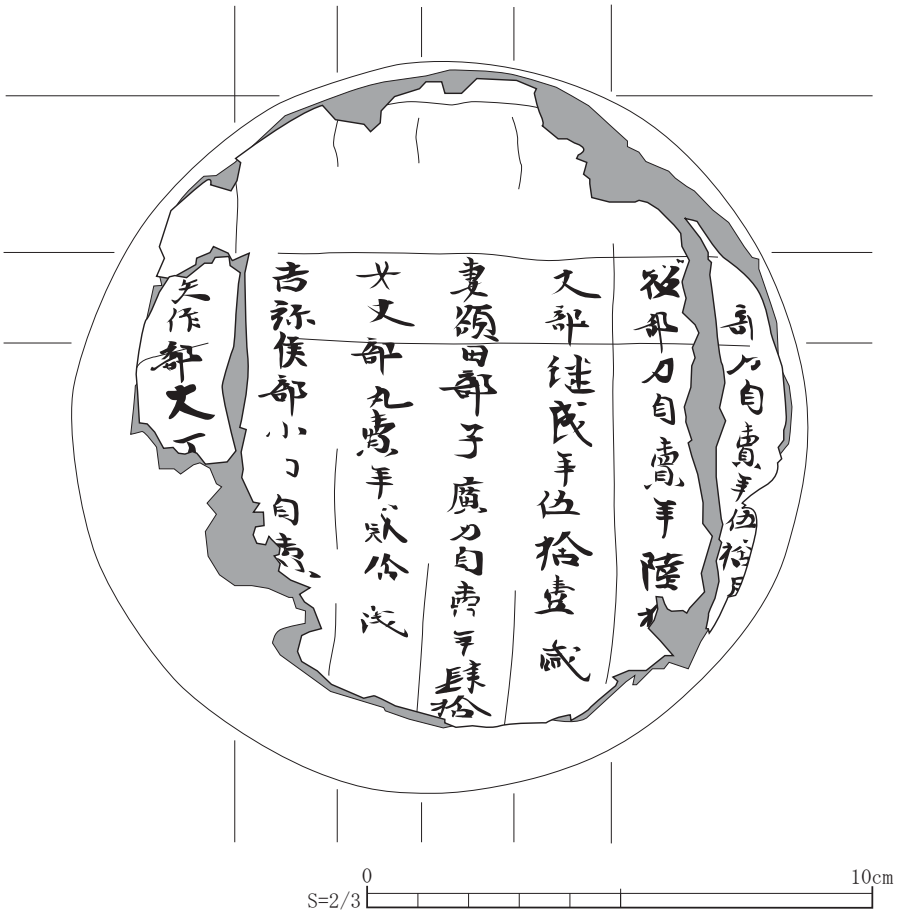


図４　土器実測図
（グレーの部分は漆塊）

2、釈文

□部刀自売年伍拾□（捌カ）
後部刀自売年陸拾□
丈部継成年伍拾壹歳
妻額田部子廣刀自売年肆拾□
女丈部丸売年貳拾歳
吉弥侯部小刀自売□
矢作部大万□

3、文書の内容

人名が列記された歴名様文書である。確認できる記載内容は、①続柄、②人名、③年齢の三つであり、縦横それぞれの墨界線に揃えて整然と記される。記載内容の①続柄は第四行と第五行のみで確認できる。この点については後述する。②人名は全てで確認できる。③年齢は第六行と第七行で確認できないが、これは漆紙の欠損による。

このような歴名記載を有する公文としては、戸籍と計帳（歴名・手実）、及び戸口損益帳などが想定される。本漆紙文書もこの何れかの公文であり、この歴名記載の断簡であると考えられる。

なお、戸籍や計帳の歴名記載には上記の①から③の記載に加え、「正丁」「中男」「小女」「緑子」「耆老」といった年齢区分記載があり、また計帳には「右頬黒子」といった身体特徴記載があるのが一般的である。

正倉院文書中の計帳歴名（1）における人名記載は山背国愛宕郡雲下里計帳のように「妻錦部飯手売年陸拾壱歳老妻右頬黒子」〔後掲図5参照〕と、①続柄・②人名・③年齢と切れ目なく年齢区分記載・身体特徴を記すか、「妻江沼臣族姉女年伍拾陸　正女」と、③年齢の下に一部程の空白を設けて年齢区分記載を行う（2）。いずれにせよ横界線で改めて書き出しを揃えずに連続して記している。

一方、年齢までは連続して記載するものの、横界線により改めて書き出しを揃えるものとして戸籍や計帳手実、そして陸奥国戸口損益帳が挙げられる（3）。

本漆紙文書では第三行と第五行の「歳」の直下に墨痕が確認できないことから、年齢記載と年齢区分記載は連続せず、戸籍・計帳手実・戸口損益帳のように、横界線に書出しを揃えているものと推察される。

但し、山王遺跡多賀城市調査分出土の第三号漆紙文書（以下、多賀城市調査分については「市第〇号漆紙文書」、宮城県調査分ついては「県第〇号漆紙文書」とする）は戸籍等とは明らかに異なる公文様式であり、計帳歴名と酷似するものでありながら、年齢区分記載が年齢記載に連続せず改めて横界線に書き出しを揃えたものとなっている（4）。よって人名記載の在り方から本漆紙文書の性格を特定することはできない。

さて、本漆紙文書には七名分の記載がある。この内、□部刀自売（第一行）・後（5）部刀自売（第二行）・額田部子広刀自売（第四行）・丈部丸売（第五行）・吉弥侯部小刀自売（第六行）の五名は女性であり、第三行の丈部継成は男性

である。第七行の「矢作部大万」は続く文字が欠損しており断定はできないが、「万呂」（麻呂・麿＝マロ）であった可能性を示唆しておく。

この全七名の記載の内、第三行から第五行までの三名は血縁親族関係にある。すなわち、第三行の丈部継成の妻が額田部子広刀自売であり、この間に生まれた子が父の姓を冠する丈部丸売である。丈部継成が五十五歳、額田部子広刀自売が四十歳代であり、子の丸売が二十歳であるから、年齢上も問題はない。

以上の七名の戸主との関係は不明である。また、上記三名の他の血縁親族関係も多くの姓が混在しており不明である。なお、この多様の姓が混在した記載となっていることは本漆紙文書の特徴であり、本漆紙文書の性格を特定する一つの要素となりうるものである。

一般的に同一戸内に複数の姓が存在することは決して珍しいことではない。しかし、本漆紙文書のようにこれほど多様な姓が含まれ、また一行毎に姓が異なるものは、戸を構成する戸口の歴名記載としては異例である。このような例は管見の限り、戸口損益帳や計帳歴名における別項記載でのみ確認できる。すなわち、別項記載は去年度計帳歴名から死欠・転出したもの、及び本年度計帳から新たに戸口となった出生・転入した者を個別に記したものであるから、複数姓が混在することは大いに有り得る。戸口損益帳も同様である。

【史料】山背国愛宕郡出雲郷雲上里計帳（戸主出雲臣大嶋戸の別項記載部分・横界線は略）

（総計記載・戸口歴名記載は略）

戸主正六位下出雲臣大嶋戸別項

出雲臣常人年参歳　死神亀二年七月

刑部伊夜志売年陸拾参歳　老女　死神亀二年十月

神直近志侶年拾壱歳　小子　死

婢酒津売年拾参歳　死　右二人神亀三年三月

右の史料は山背国愛宕郡出雲郷雲上里計帳の内、出雲臣大嶋の戸の別項記載である。本計帳は神亀三年のものであるから、ここに記された死欠の四名は神亀二年計帳作成の後に死亡したもので、神亀三年計帳の戸口歴名には記されていない。このように別項記載であれば多種の姓が混在する歴名記載はなされうる。但し、確認される計帳歴名の別項記載では続柄記載は確認されていないから、この点については注意を要する。

最後に記載内容から知りうる本漆紙文書の年代についてふれておく。第六行に「吉弥侯部」が確認できることから、本漆紙文書の年代は天平宝字二年（七五八）を上限とする。周知のように藤原仲麻呂政権下の避諱策として『続日本紀』天平宝字元年（七五七）三月乙亥条に「乙亥。勅、自今以後、改二藤原部姓一為二久須波良部一、君子部為二吉美侯部一」とあり、「君子部」姓は「吉美侯部」と改められる。この後、天平宝字二年（七五八）八月に藤原朝臣仲麻呂の姓に「恵美」の二字を加え「恵美家印」の使用が始まるとともに、この「美」を避けて「弥」を用い「吉弥侯部」が用いられるようになる（6）。なお、本漆紙文書が付着した須恵器坏の年代観がおおよそ九世紀後半であるからこれが下限となる。

4、界線の検討と文書様式

公文に施される界線の内、縦界線は一行の幅を定めるために引かれ、戸籍・計帳に限らず広く公文・典籍等で用いられる。一方の横界線は主として記載項目の書き出しに高さの変化をつけ、各項目に階層差をつけるために施される(7)。よって横界線の形式はそのまま公文の様式を規定する。

本漆紙文書では計三本の横界線が確認されている〔図4及び釈文参照〕。この内、用途が明確なのは第二横界線である。第一横界線から約27㎜下部に引かれて、歴名記載の書出しはこれに揃えている。他用途については残存部分からは確認できない。

第一横界線は縦界線がこれよりも上部まで伸びないことから天界である。なお縦界線の書き出し（筆の入り）痕跡を確認しており、これは天界よりも下位にある。よって天界と縦界線は接続していない。一般的に戸籍・計帳の類では「戸主〇〇戸」と、冒頭の戸主名標記の書出し揃えに用いられる。本漆紙文書では第一横界線を基準に書き出される記述を確認できないことから断定はできないものの、一般的な用法として戸主名標記等の書出し揃えに用いられたものと推定しておく。

第三横界線は歴名記載を横断している。この界線の用途は残存部分から確認できない。

なお、本漆紙文書は文書料紙の比較的上部部分が残存したものと判断されるから、この下に第四以下の横界線が存在する可能性がある。特に前述のように、本漆紙文書の歴名記載では年齢区分記載が年齢記載に連続しないことから、年齢区分記載の書出し揃えに用いられた横界線が存在した可能性が極めて高い。

以上が本漆紙文書の横界線の観察結果である。これを踏まえて、本漆紙文書の公文様式として可能性があるものについて、以下に逐一比較検討をしていく。

①計帳歴名

内容の検討から、本漆紙文書の公文様式と最も可能性が高いものとして計帳歴名（別項記載部分）、または戸口損益帳を挙げた。そこでまずはこの両文書の横界線の様式を確認していく。

山背国愛宕郡出雲郷雲上里・雲下里計帳は京進された計帳歴名とされており、様式としては最も整ったものと評される(8)。天界・地界を含め、計五本の横界線が確認できる(9)。各横界線の用途は次の如くである〔図5参照〕。

第一横界線　冒頭戸主名標記部分と戸口歴名・別項記載の冒頭戸主記載

第二横界線　昨年度分・本年度分の総計部分と戸口の歴名記載（戸主を除く）

第三横界線　昨年度計帳以後の移動、本年度総計の内訳（不課口・課口の総計）、輸調銭の記載、別項記載の注記

第四横界線　不課口の男女内訳記載、課口の不輸・輸の内訳記載

第五横界線　地界

第一・二横界線の用途については本漆紙文書と同様である。規格も類似している。但し第三横界線については同様の用途であったとは考えられない。すなわち、計帳歴名では第三横界線と第四横界線は一体のものとして総計記載の各項目の書出し揃えに用いられる。しかし、本漆紙文書では第三横界線の直下に第四横界線を確認できないから、計帳歴名と同様の総計記載（昨年度・本年度）を有していないことになる。

戸主少初位上出雲臣広足戸
去年帳定良口弐拾伍人 男七 女十八
帳後新附漆人 緑子一 丁女二 小女四
今年計帳定見良大小口参拾弐人 男八 女廿四
不課口弐拾漆人 旧十九 新八
男参人 資人一 緑子一 耆老一
女弐拾肆人 妻一 丁女十五 少女七 耆女一
課口伍人
見不輸弐人 少丁
見輸参人 正丁
輸調銭弐拾漆文
戸主少初位上出雲臣広足年陸拾玖歳耆老右頬黒子
妻錦部飯手売年陸拾壱歳老妻右頬黒子
男出雲臣真床年参拾肆歳正丁和銅五年逃出雲国
（中　略）
戸主少初位上出雲臣広足戸別項
大石主寸百嶋年参歳緑子
（六　名　分　略）
右七人割来附余戸郷戸主宍人荒海戸口

図５　山背国愛宕郡雲下里計帳歴名模式図

戸主江沼臣族忍人戸計帳手実
合今年計帳定見良賤大小口参拾玖人 男廿三 女十五
不課口弐拾陸人
男拾人 小子七 緑児三
女拾陸人
奴壱人
課口拾弐人
中男参人
見輸玖人
半輸陸人 兵士一 侍三 逃一 郷長一
全輸参人
輸調絁弐返壱丈伍尺
庸綿参屯
戸主江沼臣族忍人年肆拾肆　正丁郷長　右頬痣
母江沼臣族宇須弥売年陸拾参　老女　額黒子
（後　略）

図６　越前国江沼郡山背郷計帳歴名模式図

なお、京進されず越前国内で使用・保管・廃棄されたと思われる越前国江沼郡山背郷計帳では若干の相違がある。すなわち、戸口歴名記載の書出し揃に用いられた横界線の直下の横界線は一本のみであり、一見すると本漆紙文書と類似する。しかし、越前国江沼郡山背郷計帳でも総計部分の記載様式は雲上里・雲下里と同じく三階層に分かれており（但し去年分の記載はない）、この内の最上層にあたる本年度総計の記載が戸口歴名記載の書出し揃の横界線とは別に、更にその上に一本の横界線を引いて書出しを揃えている。

よって結果的に総計記載の次の階層（不課口・課口の各総計）の記載項目は戸口歴名記載と同じ横界線を、その次の階層（不課口・課口の内訳）の記載は戸口歴名記載を揃えた横界線の直下に引かれた横界線を基準に書き出しを揃えたのである。また戸主名標記記載も別途一段高い横界線（天界）を用いたことから、戸口歴名記載は第四横界線を基準として書出しを揃えている。このような形式は本漆紙文書とは横界線の本数が明らかに異なる。

②計帳手実

右京計帳手実（10）は各戸が提出した手実を連貼して京職で保管したものである。横界線の様式と用途は京進された計帳歴名とほぼ同じく第二横界線の直下に連続して第三・四横界線が引かれている。これは計帳歴名と同様の総計記載を有しているからである。

一方、近江国志何郡古市郷計帳手実（11）〔図7参照〕は総計記載を有さず、故に歴名記載を横断する横界線は存在しない（12）。なお、この計帳手実は神亀元年と二年、天平元年から六年と同十四年の計九年分の断簡が伝わっている。この内、神亀年間分の二断簡と天平年間分の七断簡では、それぞれ横界線の様式はほぼ共通している（13）。図7ではこの内、横界線の顕著な神亀二年と天平三年のものの模式図を掲載した。

神亀二年（界線は押界）

戸主大友但波史族広麻呂年卅七　正丁　藤原卿資人
母大友漢人若子売年六十九　著女
男大友但波史族羈人年五　小子
（後略）

天平三年（界線は墨界）

戸主大友但波史族吉備麻呂年卅二　正丁　健児
妻上主主諸足女年卅一　丁妻
（中略）
妻大友寸主族宿奈居女年卅九　丁女
男大田史君足年廿二　正丁
（後略）

図7　近江国志何郡計帳手実模式図

神亀二年断簡における横界線（押界）は計四本で、その用途は次の如くである。

第一横界線　冒頭戸主名標記
第二横界線　戸口の歴名記載
第三横界線　年齢区分記載
第四横界線　その他の注記

続いて天平三年断簡における横界線は計六本で、その用途は次の如くで

ある。

第一横界線　冒頭戸主名標記
第二横界線　一部戸口の続柄記載
第三横界線　戸口の歴名記載
第四横界線　年齢区分記載
第五横界線　その他の注記
第六横界線　地界

これらの例では歴名記載を横断する横界線は確認されない。これはこの計帳手実が歴名記載で用いる横界線しか設けられていないからである。右京計帳手実と決定的に異なるのは総計記載の有無ということになる。

右京計帳手実と近江国志何郡古市郷計帳手実とで用いられた用紙は、平川南(14)が指摘するように預め界線が引かれた官製のものを各戸に配布して使用されたものと思われる。右京の場合は、畿内諸国と同様に京進(正しくは太政官への提出)することを前提として、各戸作成段階の手実にも戸毎の総計記載が当初から求められていたと思われるのに対し、歴名を京進しない畿外(近江国)ではあくまで戸口歴名記載のみが求められたためであろう。

いずれにせよ、基本的に総計記載を記さない計帳手実の横界線の様式では歴名記載部分を横断する横界線は引かれないのであるから、本漆紙文書とは様式が異なる。

③戸口損益帳(陸奥国戸口損益帳)

内容検討により本漆紙文書の様式の可能の一つとして挙げた戸口損益帳の横界線の様式について検討する〔図8参照〕。陸奥国戸口損益帳の横界線は計四本で、その用途は次の如くである(15)。

第一横界線　歴名記載
第二横界線　年齢区分
第三横界線　損益事由の記載
第四横界線　地界

歴名記載の様式は計帳と異なり、戸主と戸口の間で階層差を設けずに一律に天界に書出しを揃えている。また歴名記載を横断する横界線も確認できない。よって内容の上で本漆紙文書との親近性が推測された戸口損益帳であるが、公文の横界線の様式の上では本漆紙文書とは異なる。

④八世紀の戸籍

八世紀の戸籍として代表的な御濃国戸籍・西海道戸籍・下総国戸籍と比較する〔図9参照〕。美濃国戸籍(16)は計四本の横界線により全体を三段で構成(一行に三名を記す)する。総計記載等を有さないから、人名を横断する横界線は存在しない。

戸主占部加弖石年卌四　正丁大　宝二年籍戸主占部古弖弥戸戸主子今為戸主
寄大伴部忍年九　小子大　宝二年籍後移出里内戸主大伴部意弥戸戸主為甥
（中　略）
忍姉麻刀年十四　小女　上件三人忍従移住
（後　略）

図8　陸奥国戸口損益帳模式図

御野国味蜂間郡春部里戸籍

上政戸主六人部牛麻呂戸口廿一
下々戸主牛麻呂年五十八 正丁
妾子米知年廿七 正丁
（後略）

正丁四 兵士一
嫡子広年廿四 兵士
戸主弟伎弥年五十五 正丁
少丁二 小子三
并十 正女三
少女二 小女三
次結年十九 少丁
嫡子安麻呂年十三 小子
緑女一 并十一

筑前国嶋郡川辺里戸籍

戸主卜部乃母曽年肆拾玖歳
母葛野部伊志売年漆拾肆歳
妻卜部甫西豆売年肆拾漆歳
男卜部久漏麻呂年拾玖歳
（中略）

正丁
耆女
丁女
小丁
嫡子
課戸

凡口壱拾陸

口壱拾弐不課
口二小子
口一緑児
口二丁女
口一次女
口一小女
口一緑女
口一耆女
口二正丁
口少丁

口肆課
受田弐町弐段陸拾歩

下総国葛飾郡大島郷戸籍

戸主孔王部長年弐拾弐歳
姉孔王部古伎売年肆拾弐歳
（中略）

正丁
課戸

合口玖

口漆不課
口弐課
口六丁女
口一小女
口二正丁

図９　八世紀の戸籍

西海道戸籍（筑前国・豊前国・豊後国）(17)の横界線は計四本で、その用途は次の如くである。

第一横界線　歴名記載（戸主を含む）
第二横界線　年齢区分と総計記載図の課・不課の総計
第三横界線（押界）その他の注記
第四横界線　地界

歴名記載に階層差を設けず、かつこれを横断する横界線もない。総計記載の様式は計帳歴名とは全くことなっており、年齢区分の書出し揃に用いる第二横界線は共用するものの、この記載のために引かれた横界線はない。

下総国戸籍の横界線は計七本で、その用途は次の如くである。

第一横界線　戸主名標記
第二横界線　戸口の歴名記載
第三横界線　総計記載図の合計
第四横界線　年齢区分と総計記載図の不課口・課口の総計
第五横界線　その他の注記
第六横界線　総計記載図の不課口・課口の内訳
第七横界線　地界

第一・二横界線の用途は本漆紙文書と同様であり、第三横界線が歴名記載を横断するものの、第二横界線の直下にはなく七～八文字目と大分下部を横断する。よって本漆紙文書の様式とは別のものと判断される。

以上の検討により、本漆紙文書は八世紀段階の戸籍とは様式の異なる公文であると位置づけることができる。

⑤十世紀段階の戸籍

本漆紙文書のおおよその年代が九世紀後半代ということもあり、現存する十世紀の戸籍と比較することも必要である。ここでは時期的により近接する延喜二年（九〇二）阿波国板野郡田上郷戸籍(18)と比較する。横界線は計八本であり、用途は以下の如くである〔図10参照〕(19)。

第一横界線　戸口歴名記載冒頭の戸主名記載
第二横界線　散戸主名（前籍の戸主名）・新戸主名（本籍の戸主名）記載と歴名記載
第三横界線　損益事由（「死」「割去」「割来」）
第四横界線　損益者歴名記載の上段
第五横界線　損益記載の注記
第六横界線　損益者歴名記載の下段、年齢区分と総計記載図の合計
第七横界線　総計記載図の不課口・課口の総計
第八横界線　地界

ここでは歴名記載を横断する横界線が確認できる。しかしながら、計帳歴名と同様に第三横界線の直下（約一～二文字目）に第三横界線が引かれている。これら歴名記載を横断する横界線は、歴名記載以前になされる損益に関する記載に使用される。なお、この戸口の損益記載では人名表記を横断する横界線は確認できないので、いずれにせよ本漆紙文書は十世紀段階の戸籍とは異なる様式であると判断できる。

以上、正倉院文書等で確認できる籍帳史料と比較した結果、本漆紙文書と様式が合致するものは確認できなかった。しかし、次に検討する山王遺跡出土の市第三号漆紙文書は確認しうる限りにおいて、本漆紙文書の横界線の様式と全く同じである〔図11・12参照〕(20)。

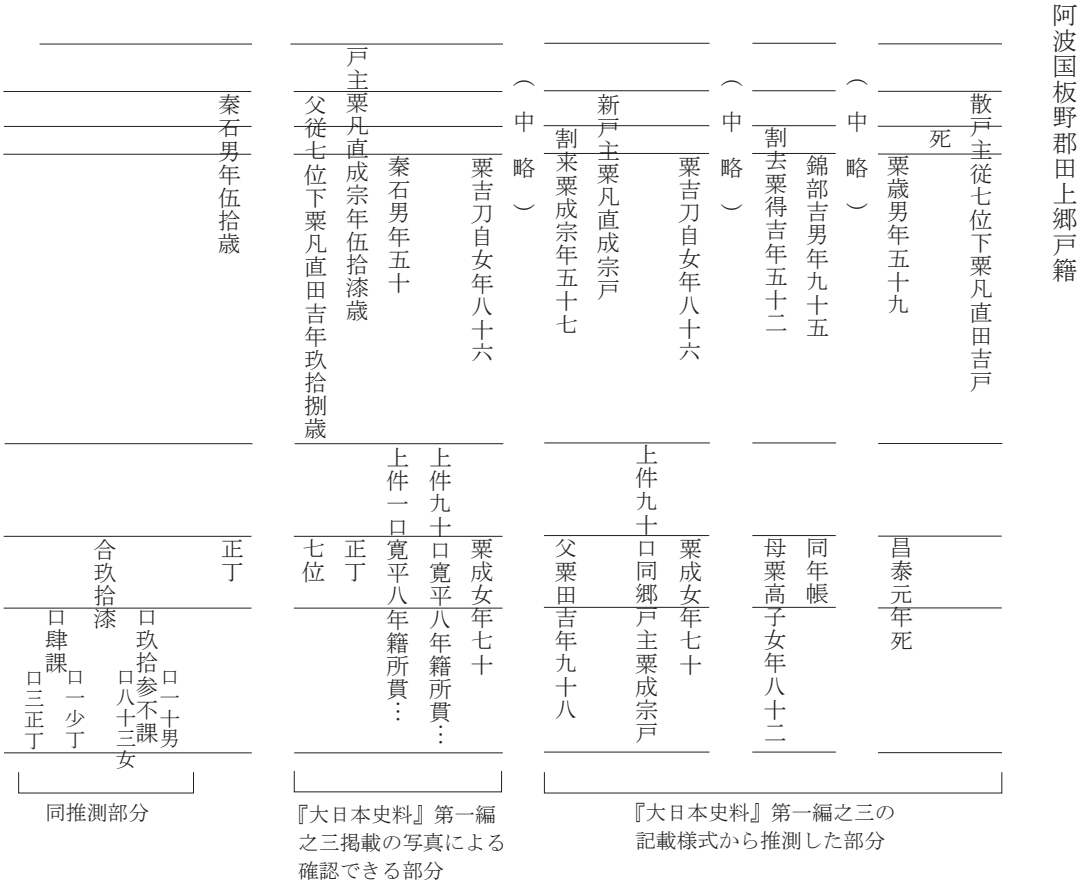


図１０　阿波国板野郡田上郷戸籍模式図

山王遺跡市第三号漆紙文書の横界線は計四本確認されている。地界は漆紙の残存状況より確認できていない。各横界線の用途は次の如くである。

第一横界線　戸主名記載か（21）
第二横界線　戸口歴名記載
第三横界線　総計記載か
第四横界線　年齢区分

本漆紙文書で確認される第一から第三までの横界線の内、第一・二は同じ用途であり、また第三横界線も本漆紙文書と同じく歴名記載の役二文字目付近を横断する。

山王遺跡市第三号漆紙文書の第三横界線の用途については報文に明記されていない。しかし、以下の理由により第五・六行目に記される総計記載に用いられたものと考える。

第五行目は「□…□口壹拾不課　口肆男〈一耆老　二緑児　一小子〉口陸女」、第六行目は「口□課見半輸〈□正丁〉」と復元されている。この記載の仕方は「口肆男」と〔人数単位（口）＋数値＋区分〕である。第五行では「口壹拾不課」と不課口の合計が十一名であることが記され、続いて不課口の男女別内訳が記される。女性の不課口は「口陸女」と六名であることが明記されるが、その内訳部分の墨痕は確認できない。公文料紙は「口陸女」以下の部分も広く残存しているから、女性の不課口の内訳は墨痕劣化により確認できないのであり、決して次行（第六行目）に記載されていたのではない。

以上を踏まえると、第六行目は不課口の記載に続く課口の記載であったと判断される。この時、課口の記載の仕方は〔人数単位（口）＋数値＋「課」〕であったはずである。これに続く「見半輸〈□正丁〉」は課口の内訳となる。周囲の墨痕の確認状況から見て、この下部に記載が続くとは考え難いことか

図１１　多賀城市第三号漆紙文書実測図

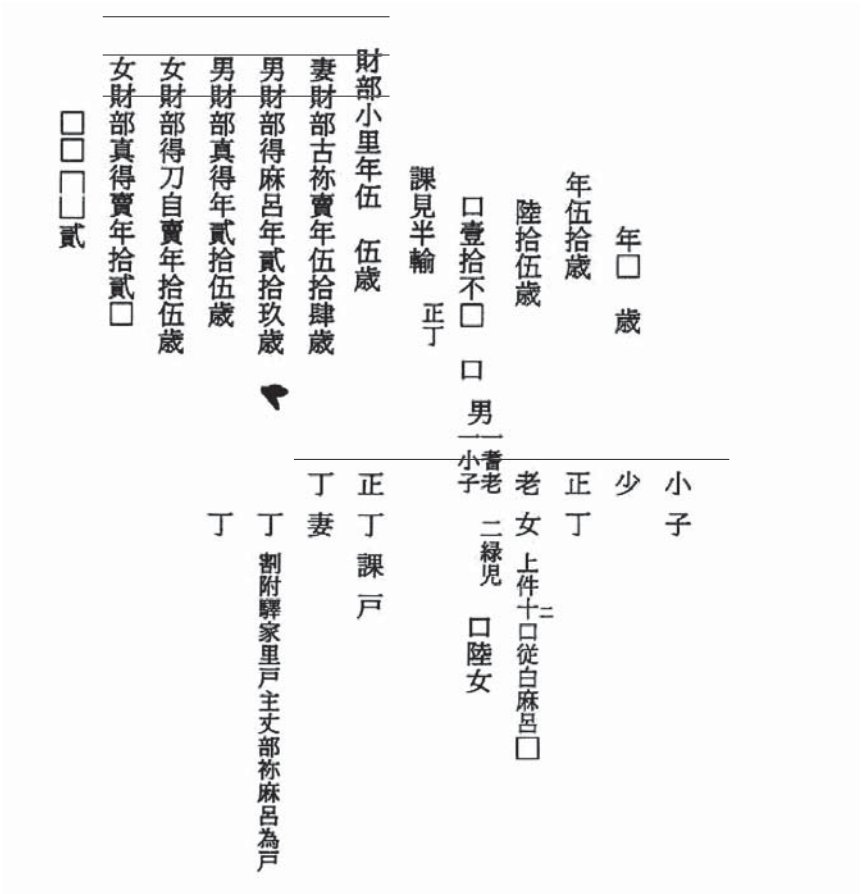


図１２　多賀城市第三号漆紙文書模式図

ら課口は見半輸の正丁のみであり、文字の配置から判断して正丁数を記す数字は一文字であろう。すなわち、課口の総数を記す数字もこれと同じ一文字となるから、課口の総計部分は〔「口」＋数字一文字＋「課」〕となり、「課」の上部には二文字のみが復元される。実測図に示された文字配りから「課」の上部に二文字を配すると、第六行目の書出しは第三横界線に揃えたものとなる。

第五行目の冒頭について報文(22)では、不課口と課口の総計が記されていたと推測しつつも、第七行目以降の財部小里の戸の記載の開始位置の問題から、第五行目冒頭にこの戸主名標記があった可能性を考慮して解釈を保留している。しかし、以下に述べるように財部小里の戸の記載は第七行目から始まることから、第五行目は不課口と課口の総計が記されていたと見て大過ないであろう。「口壱拾」がこの戸の合計数であるから、この上部には合計を意味する文言が復元されるべきである。ここに復元される文言の推定は困難であるが、約三から四文字ほどで第三横界線に書き出しを揃えていたと見ておきたい。

以上により、山王遺跡市第三号漆紙文書の第三横界線は総計記載の頭揃えに用いられたものと考える。このような形式を持つ計帳に山王遺跡県第六号B紙漆紙文書（表面）がある。山王遺跡県六号漆紙文書には界線が確認されないが、総計記載を二行に集約して記され、前行には不課口分、後行には課口分が記される。市第三号漆紙文書と同様である。

この二つの計帳の性格については次のように考えられる。第一に、正倉院に伝来する計帳歴名と異なり冒頭にあるべき戸主名標記記載がなく、歴名記載冒頭の戸主名標記の末尾に「課戸」(23)と記して冒頭標記に代えている。第二に、これと関わって、計帳全体の記載順が正倉院に伝来する計帳歴名の様式〔冒頭標記→総計記載（去年度・本年度）→歴名記載→別項記載〕とは異なり、〔歴名記載→別項目記載→総計略記（本年度のみ）〕となっている。第三に市第三号漆紙文書には「割附駅家里戸主丈部祢麻呂為戸」と戸口の転出に関する追記がある。これらの点から、渡辺晃宏氏は市第三号漆紙文書を翌年度の計帳歴名作成のために作成された歴名部分に重点をおいた写しであるとする(24)。

市第三号漆紙文書が、果たして計帳歴名の写しなのか、それとも計帳歴名原本なのかの判断はここでは下さない。但し、次年度計帳歴名作成に用いられた資料であることに代わりはない。本漆紙文書はこの山王遺跡市第三号漆紙文書、及び山王遺跡県第六号B漆紙文書と同様の様式の公文であり、おそらくその性格も同質であったと考えられる。

山王遺跡市第三号漆紙文書は「駅家里」の記載から、郡里制（七〇一～七一四年）または郷里制（七一五～七四〇年）のものであり、山王遺跡県六号B漆紙文書は「黄子」の記載から、養老律令制下（天平宝字元年・七五七年以降）のもので、ともに八世紀段階のものである。本漆紙文書の年代は上限が天平宝字二年（七五八）、下限が九世紀後半（須恵器坏の年代観）である。仮に下限に引きつけた年代観を与えた場合、計帳歴名作成に関して、ほぼ同様な手続きが八世紀から九世紀を通じて行われていたこととなる。

註

(2)神亀三年山背国愛宕郡出雲郷雲上里計帳（正集巻第十一・十二。『大日本古文書』巻一、三三三～三五二・三八〇頁）、同雲下里計帳（正集巻第十二。『大日本古文書』巻一、三五三～三八〇頁）、天平五年山背国愛宕

郡某郷計帳（続修巻第十・十一・十二、続々修第二十八帙巻第八裏・第三十五帙巻第五裏。『大日本古文書』巻一、五〇五～五四九頁）、天平七年国郡郷里不詳計帳（山背国綴喜郡大住郷か。所謂隼人計帳。続修巻第十三。『大日本古文書』巻一、六四一～六五一頁）、天平十二年越前国江沼郡山背郷計帳（続々修第四十四帙巻第四裏。『大日本古文書』巻二、二七三～二八〇頁）。なお、正倉院文書の写真版については既刊分の『正倉院古文書影印集成』（八木書店）で確認している。以下同。

（2）越前国江沼郡山背郷計帳歴名では身体特徴記載は連続せず、横界線により改めて書き出しを揃えている。

（3）戸籍では現在確認されている八世紀初頭から十一世紀初頭までの戸籍において、年齢記載に続けずに、その下位に引かれた横界線を基準に頭揃をして年齢区分の記載がされている。計帳手実は、右京計帳の場合、基本的に横界線を基準に頭揃をして年齢区分が記されるが、近江国志何郡古市郷計帳の場合は、一部において明確な横界線等の基準を設けず、空白を設けて凡その頭揃をして記されるものもある。

（4）多賀城市文化財調査報告書第三十九集『山王遺跡―第十七次調査―出土の漆紙文書』（多賀城市教育委員会、一九九五年）、同四十五集『山王遺跡Ⅰ』（同、一九九七年）。

（5）第二行の一文字目は墨痕があまり鮮明ではないが、編は行人編と思われること、また旁の下部が「夂」と読めることから、「後」と判断した。後部姓は『続日本紀』宝亀七年（七七六）五月庚子条に「正六位上後部石嶋等六人賜姓出水連」、『同』延暦八年（七八九）五月庚午条に「信濃国筑摩郡人外少初位下後部牛養」、『日本後紀』延暦十八年（七九九）十二月甲戌条に「信濃国人外従六位下卦婁真老、後部黒足（中略）己等先高麗人也。小治田飛鳥二朝庭時節、帰化来朝。、自レ尓以還、累世平民、未レ改二本号一」など散見する。宝亀七年に後部石嶋等の六人が賜姓された「出水連」について『新撰姓氏録』「左京諸蕃下」には「出水連、出レ自二高麗国人後部能鼓兄一也」とあり、『日本後紀』延暦一八年十二月甲戌条にもあるように、高句麗に由来する姓である。新古典文学大系『続日本紀』五（岩波書店、一九九八年）の宝亀七年五月庚子条の補注では、後部姓を高句麗の五部の一つである「後部」に由来するとする。憶測ではあるが、正史で確認できる後部姓の例は信濃国に多く、おそらく信濃国には後部姓が多く分布していたと推測される。信濃国から陸奥国への柵戸移配の記事は確認できない（出羽国にはある）ものの、柵戸移配等の政治的理由により陸奥国に後部姓が移植されたのではないだろうか。

（6）新古典文学大系『続日本紀』三（岩波書店、一九九二年）の天平宝字元年三月乙亥条の補注。

（7）杉本一樹「律令制公文書の基礎的観察」（『日本古代文書の研究』吉川弘文館、二〇〇一年、初出は一九九三年）。

（8）杉本一樹「「計帳歴名」の京進について」（『日本古代文書の研究』吉川弘文館、二〇〇一年、初出は一九八五年）は、計帳の京進は畿内が目録（大帳）と歴名、畿外が目録（大帳）のみとする。

（9）横界線は『正倉院古文書影印集成　一』（八木書店、一九八八年）に掲載の写真と、巻末の解説による。なお、正倉院文書として伝来した籍帳類の横界線についても同書による。

（10）正倉院文書、正集巻第九。『大日本古文書』巻一、四八一～五〇一頁。

（11）正倉院文書、続修巻第九、続々修第四六帙巻第四・第四七帙巻第

四。『大日本古文書』巻一、三二九～三三〇・三三一～三三二・三八七～三八九・三九一～三九二・四四〇～四四一・四五〇・五〇四～五〇五・六二一～六二二頁、巻二、三二六～三二九頁。

(12) 平川南「地方官衙における文書の作成・保存・廃棄　―近江国計帳・出土計帳―」(『漆紙文書の研究』吉川弘文館、一九八九年)。

(13) 同右。

(14) 同右。

(15) 岸俊男「いわゆる「陸奥国戸籍」の残簡」(『日本古代籍帳の研究』塙書房、一九七三年、初出は一九五六年)。

(16) 正倉院文書、正集巻第二二～二六、続修巻第二～五、続々修第二三帙巻第五・第三二帙巻第五。『大日本古文書』巻一、一～五六・九六頁。

(17) 正倉院文書、正集巻第三八～四三、続修巻第六～八、続々修第二八帙巻第九裏・第三五帙巻第六・同裏。『大日本古文書』巻一、九七～一一八頁。

(18)「成就妙法蓮華経王瑜伽観智儀軌」巻一紙背文書、『大日本史料』第一編之三、一二一～一五八頁。

(19)『大日本史料』第一編之三に掲載された写真版により確認したが、戸籍全体にわたる写真版は掲載されていないことより、活字翻刻されている部分の記載様式を参考に復元した。写真掲載部分における活字翻刻部分のレイアウトは、戸籍の記載様式に準拠していることを確認したので、おおよそ参考に耐えうるものと判断した。

(20) 註（4）前掲報文。

(21) 市第三号漆紙文書に関する報文(註4前掲)では、第七行目の「財部小里」は戸主にあたり、その上部の欠損個所に「戸主」が復元され、他行よりも一段高い位置から書き出されていたとする。

(22) 註（4）前掲報文。

(23) 歴名記載冒頭の戸主名記載に「課戸」と記して標記するものとしては、大宝二年の西海道戸籍、養老五年下総戸籍がある。すなわち、「課戸」として冒頭標記を行う様式は戸籍を準用したものと推察される。

(24) 渡辺晃宏「籍帳制」(平川南等編『文字と古代日本一　文字と支配』、吉川弘文館、二〇〇四年)。

報 告 書 抄 録

ふ り が な	たがじょうしないのいせき２
書 名	多賀城市内の遺跡２
副 書 名	平成29年度ほか発掘調査報告書 山王遺跡 新田遺跡 西沢遺跡 市川橋遺跡 高崎遺跡 大日北遺跡 志引遺跡
シ リ ー ズ 名	多賀城市文化財調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第138集
編 著 者 名	武田健市、村松稔、石川俊英、熊谷満、畠山未津留、小原駿平
編 集 機 関	多賀城市埋蔵文化財調査センター
所 在 地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27－１ TEL：022-368-0134
発 行 年 月 日	西暦２０１８年３月２７日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
西沢遺跡（にしざわいせき） （第28次）	宮城県多賀城市市川字伊保石27番7（みやぎけんたがじょうしいちかわあざいほいしばん）	042099	18017	38度 18分 29秒	140度 59分 37秒	20170131	4㎡	個人住宅 新 築
西沢遺跡（にしざわいせき） （第29次）	宮城県多賀城市浮島字西沢90番地1他（みやぎけんたがじょうしうきしまあざにしざわばんち ほか）	042099	18017	38度 18分 23秒	140度 59分 39秒	20170130 ～ 20170311	370㎡	宅地造成
山王遺跡（さんのういせき） （第180次）	宮城県多賀城市南宮字町42番2、42番3（みやぎけんたがじょうしなんぐうあざまちばん ばん）	042099	18013	38度 18分 2秒	140度 58分 38秒	20170306 ～ 20170325	22㎡	集合住宅 建 設
新田遺跡（にいだいせき） （第117次）	宮城県多賀城市新田字後11番13（みやぎけんたがじょうしにいだあざうしろばん）	042099	18012	38度 18分 0秒	140度 57分 42秒	20170228 ～ 20170310	30㎡	個人住宅 新 築
山王遺跡（さんのういせき） （第182次）	宮城県多賀城市山王字山王四区168番3（みやぎけんたがじょうしさんのうあざさんのうくばん）	042099	18013	38度 17分 46秒	140度 58分 39秒	20170412 ～ 20170419	40㎡	建売住宅 建 設
山王遺跡（さんのういせき） （第183次）	宮城県多賀城市山王字山王一区11番9の一部（みやぎけんたがじょうしさんのうあざさんのうくばんいちぶ）	042099	18013	38度 18分 1秒	140度 58分 53秒	20170414 ～ 20170517	48㎡	個人住宅 新 築
山王遺跡（さんのういせき） （第184次）	宮城県多賀城市山王字山王一区11番14の一部（みやぎけんたがじょうしさんのうあざさんのうくばんいちぶ）	042099	18013	38度 18分 1秒	140度 58分 54秒	20170414 ～ 20170517	60㎡	個人住宅 新 築
山王遺跡（さんのういせき） （第185次）	宮城県多賀城市山王字山王一区11番2の一部（みやぎけんたがじょうしさんのうあざさんのうくばんいちぶ）	042099	18013	38度 18分 0秒	140度 58分 54秒	20170414 ～ 20170517	65㎡	個人住宅 新 築
山王遺跡（さんのういせき） （第187次）	宮城県多賀城市山王字山王四区89番8（区画№9）（みやぎけんたがじょうしさんのうあざさんのうくばん）	042099	18013	38度 17分 48秒	140度 58分 40秒	20170516 ～ 20170804	58㎡	個人住宅 新 築
山王遺跡（さんのういせき） （第188次）	宮城県多賀城市山王字山王四区89番7（区画№10）（みやぎけんたがじょうしさんのうあざさんのうくばん）	042099	18013	38度 17分 48秒	140度 58分 40秒	20170516 ～ 20170804	66㎡	個人住宅 新 築
山王遺跡（さんのういせき） （第189次）	宮城県多賀城市山王字山王四区89番6（区画№11）（みやぎけんたがじょうしさんのうあざさんのうくばん）	042099	18013	38度 17分 47秒	140度 58分 40秒	20170516 ～ 20170804	59㎡	個人住宅 新 築

山王遺跡 （第190次）	宮城県多賀城市山王字山王四区89番5（区画№12）	042099	18013	38度 17分 47秒	140度 58分 40秒	20170516 ～ 20170804	47㎡	個人住宅 新　築
山王遺跡 （第191次）	宮城県多賀城市山王字山王四区89番4（区画№13）	042099	18013	38度 17分 46秒	140度 58分 40秒	20170516 ～ 20170804	66㎡	個人住宅 新　築
山王遺跡 （第192次）	宮城県多賀城市山王字山王一区11番15	042099	18013	38度 18分 0秒	140度 58分 55秒	20170512 ～ 20170605	68㎡	個人住宅 新　築
山王遺跡 （第195次）	宮城県多賀城市山王字北寿福寺72番1の一部	042099	18013	38度 18分 3秒	140度 58分 3秒	20171211 ～ 20171214	52㎡	個人住宅 新　築
市川橋遺跡 （第95次）	宮城県多賀城市市川字伏石地内	042099	18008	38度 18分 3秒	140度 59分 3秒	20171004 ～ 20171121	460㎡	宅地造成
八幡館跡 （第8次）	宮城県多賀城市八幡2丁目225番1、225番5、226番4、661	042099	18021	38度 17分 19秒	141度 0分 11秒	20170613 ～ 20170614	210㎡	宅地造成
新田遺跡 （第120次）	宮城県多賀城市新田字堀西20番13	042099	18012	38度 17分 28秒	140度 57分 51秒	20170627	73㎡	個人住宅 新　築
新田遺跡 （第121次）	宮城県多賀城市新田字北155番3、156番2	042100	18012	38度 17分 46秒	140度 57分 44秒	20171012 ～ 20171018	66㎡	事務所兼 個人住宅 新　築
高崎遺跡 （第110次）	宮城県多賀城市高崎1丁目53番、59番1、59番2、66番1	042101	18018	38度 17分 55秒	140度 59分 48秒	20170706	9㎡	個人住宅 新　築
高崎遺跡 （第111次）	宮城県多賀城市留ヶ谷1丁目114番5	042102	18018	38度 17分 58秒	141度 0分 13秒	20171011	12㎡	個人住宅 新　築
高崎遺跡 （第112次）	宮城県多賀城市高崎1丁目14番1	042103	18018	38度 18分 2秒	141度 0分 1秒	20171030 ～ 20171106	16㎡	保育園 新　築
大日北遺跡 （第5次）	宮城県多賀城市高橋4丁目1番1	042104		38度 17分 26秒	140度 59分 5秒	20170807	9㎡	就労支援事業施設建設
西沢遺跡 （第32次）	宮城県多賀城市浮島字沢前24番1の一部、26番1の一部、27番2の一部	042105	18017	38度 13分 23秒	140度 59分 35秒	20170901	36㎡	宅地造成
西沢遺跡 （第33次）	宮城県多賀城市浮島字沢前26番1、27番1の各一部	042106	18017	38度 18分 22秒	140度 59分 35秒	20170901	9㎡	個人住宅 新　築
西沢遺跡 （第34次）	宮城県多賀城市浮島字沢前26番1、27番1の各一部	042107	18017	38度 18分 23秒	140度 59分 35秒	20170901	9㎡	個人住宅 新　築
志引遺跡 （第6次）	宮城県多賀城市東田中2丁目410番3、410番4の一部	042108	18020	38度 17分 30秒	141度 0分 0秒	20171206 ～ 20171220	36㎡	個人住宅 新　築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西沢遺跡 （第28次）	集落				
西沢遺跡 （第29次）	集落	中世	溝跡		
山王遺跡 （第180次）	集落・都市	古墳、古代、中世	土壙		
新田遺跡 （第117次）	集落・屋敷	古墳、古代、中世	溝跡		
山王遺跡 （第182次）	集落・都市	古墳、古代、中世	溝跡	土師器、須恵器	

山王遺跡 （第183次）	集落・都市	古墳、古代、中世	掘立柱建物跡	土師器、須恵器	北１道路跡を発見した。
山王遺跡 （第184次）	集落・都市	古墳、古代、中世	溝跡、土壙	土師器、須恵器	北１道路跡を発見した。
山王遺跡 （第185次）	集落・都市	古墳、古代、中世	北１道路跡、河川跡	土師器、須恵器	北１道路跡を発見した。
山王遺跡 （第187次）	集落・都市	古墳、古代、中世	区画溝、掘立柱建物跡	土師器、須恵器	区画溝を発見した。
山王遺跡 （第188次）	集落・都市	古墳、古代、中世	区画溝、土器埋設遺構	土師器、須恵器	区画溝のほか土器埋設遺構を発見した。
山王遺跡 （第189次）	集落・都市	古墳、古代、中世	区画溝、井戸跡	土師器、須恵器、須恵系土器	区画溝を発見した。また井戸跡を発見し、井戸側材に箱を転用している。
山王遺跡 （第190次）	集落・都市	古墳、古代、中世	区画溝	土師器、須恵器	区画溝を発見した。
山王遺跡 （第191次）	集落・都市	古墳、古代、中世	区画溝、掘立柱建物跡	土師器、須恵器	区画溝を発見した。
山王遺跡 （第192次）	集落・都市	古墳、古代、中世	北１道路跡、竪穴住居跡	土師器、須恵器、須恵系土器	北１道路跡を発見した。
山王遺跡 （第195次）	集落・都市	古墳、古代、中世	溝跡	磁器	
市川橋遺跡 （第95次）	集落・都市	古墳、古代、中世	竪穴住居跡		
八幡館跡 （第8次）	集落・城館				
新田遺跡 （第120次）	集落・屋敷	古墳、古代、中世			
新田遺跡 （第121次）	集落・屋敷	古墳、古代、中世			
高崎遺跡 （第110次）	集落				
高崎遺跡 （第111次）	集落			煉瓦	
高崎遺跡 （第112次）	集落		土壙	土師器、須恵器	
大日北遺跡 （第5次）	水田・墓				
西沢遺跡 （第32次）	集落				
西沢遺跡 （第33次）	集落				
西沢遺跡 （第34次）	集落				
志引遺跡 （第6次）	集落・城館				

要約	西沢遺跡第28次調査では、遺構や遺物は発見できなかった。
	西沢遺跡第29次調査では、中世の溝跡を発見した。
	山王遺跡第180次調査では、古代の土壙を発見した。
	新田遺跡第117次調査では、中世の溝跡を発見した。
	山王遺跡第182次調査では、古代の溝跡などを発見した。
	山王遺跡第183次調査では、平安時代の掘立柱建物跡を発見した。
	山王遺跡第184次調査では、奈良時代の溝跡と平安時代の土壙を発見した。
	山王遺跡第185次調査では、平安時代の北１道路跡と掘立柱建物跡を発見したほか、下層から木材が多量に出土した。
	山王遺跡第187次調査では、10世紀前葉以前の区画溝と掘立柱建物跡を発見した。
	山王遺跡第188次調査では、10世紀前葉以前の区画溝と土器埋設遺構を発見した。
	山王遺跡第189次調査では、10世紀前葉以前の区画溝と井戸枠に箱を転用した井戸跡を発見した。
	山王遺跡第190次調査では、10世紀前葉以前の区画溝を発見した。
	山王遺跡第191次調査では、10世紀前葉以前の区画溝と掘立柱建物跡を発見した。
	山王遺跡第192次調査では、平安時代の北１道路跡と竪穴住居跡跡を発見した。
	山王遺跡第195次調査では、近世以降の溝跡と時期不明の溝跡を発見した。
	市川橋遺跡第95次調査では、中世の溝跡を発見した。
	八幡館跡第8次調査では、遺構や遺物は発見できなかった。
	新田遺跡第120次調査では、遺構や遺物は発見できなかった。
	新田遺跡第121次調査では、遺構や遺物は発見できなかった。
	高崎遺跡第110次調査では、遺構や遺物は発見できなかった。
	高崎遺跡第111次調査では、遺構は発見できなかったが、第89・90次調査で発見したＳＸ地下施設跡で使われた煉瓦と同種のものが出土した。
	高崎遺跡第112次調査では、古代とみられる土壙などを発見した。
	大日北遺跡第5次調査では、遺構や遺物は発見できなかった。
	西沢遺跡第32次調査では、遺構は発見できなかった。
	西沢遺跡第33次調査では、遺構は発見できなかった。
	西沢遺跡第34次調査では、遺構は発見できなかった。
	志引遺跡第6次調査では、７世紀代とみられる竪穴住居跡を発見した。

多賀城市文化財調査報告書第 138 集
多賀城市内の遺跡２
－平成 29 年度ほか発掘調査報告書－

平成 30 年 3 月 27 日　発行

編集　多賀城市埋蔵文化財調査センター
多賀城市中央二丁目 27 番 1 号
電話　（０２２）３６８-０１３４
発行　多賀城市教育委員会
多賀城市中央二丁目1番1号
電話　（０２２）３６８－１１４１
印刷　凸版印刷株式会社
仙台市泉区明通三丁目 30 番
電話　（０２２）３７７-５２１１